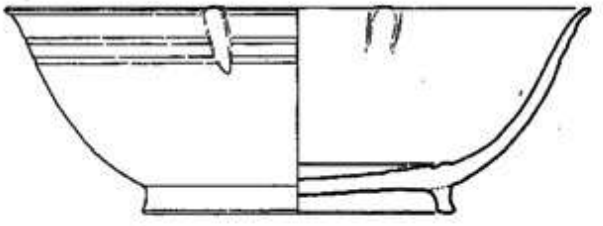
太宰府市の文化財　第40集

筑前国分寺跡　II

-国分寺外郭施設の調査-



川１次SE005出土緑釉陶器椀

1999

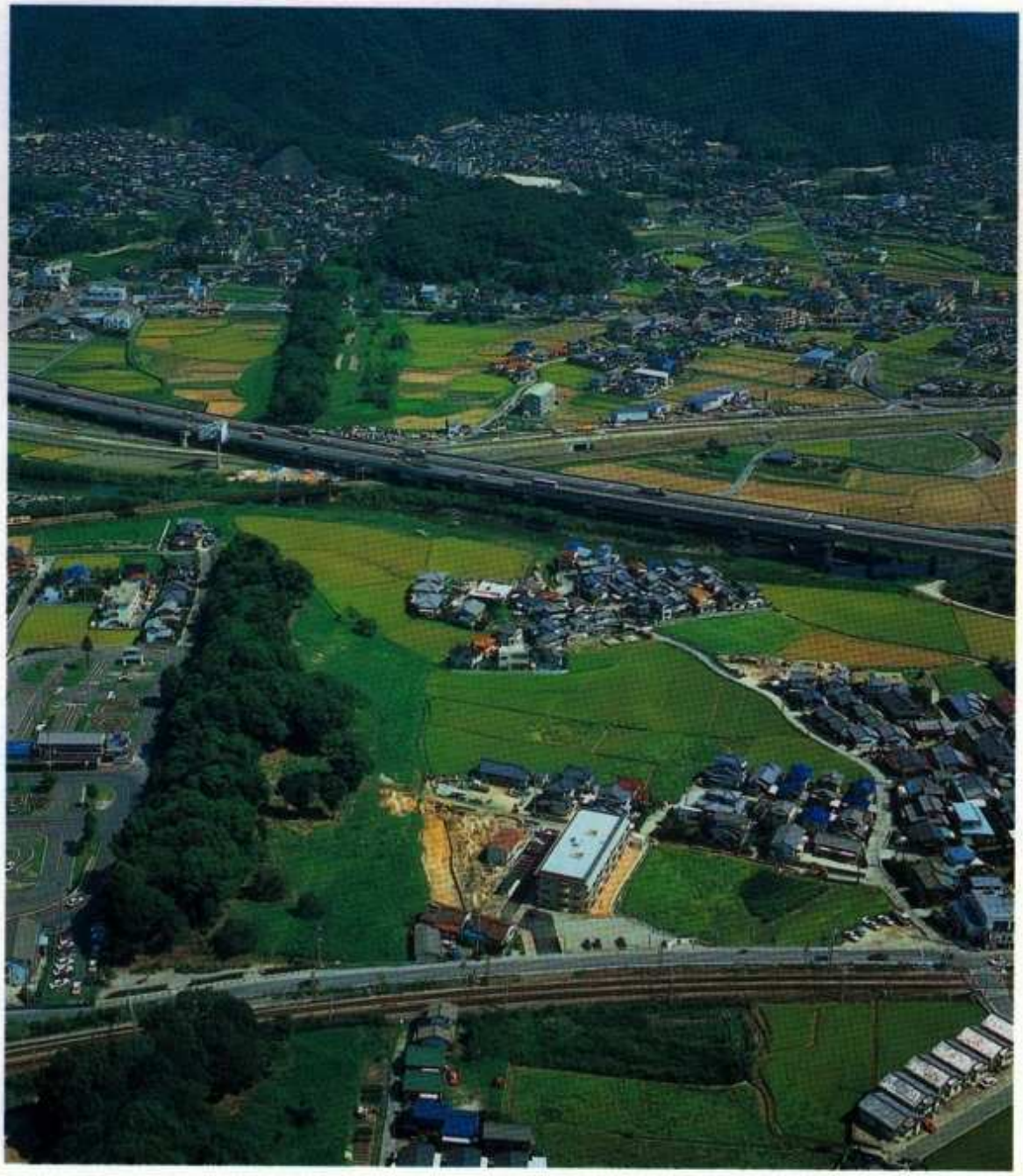
太宰府市教育委員会

筑前国分寺跡　II

-国分寺外郭施設の調査-

1999

太宰府市教育委員会



筑前国分寺・筑前国分尼寺の環境
（水城西門付近からの遠景）
【上方中央部分：筑前国分尼寺跡・上方右：筑前国分寺跡】

序

本書は、平成３年度から平成９年度までに発掘調査を行いました筑前国分寺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。筑前国分寺は、天平十三年二月の詔によって全国六十ヶ国に建立された寺の一つとして、古くより知られています。今回は、筑前国分寺跡を取り巻く周辺の調査を中心にまとめておりますが、寺が占地していた範囲を確定する重要な所見をはじめ、寺の変遷を考える上で貴重な成果を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対して御理解いただきました地権者の皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方に心からお礼申しあげます。

太宰府市教育委員会
教育長　長野治己

例　言

1.本書は、太宰府市教育委員会が行なった平成３年度から平成９年度までに実施した筑前国分寺跡の発掘調査報告書である。掲載する調査は、筑前国分寺跡　第21・22・23次調査および周辺地域の調査として、筑前国分尼寺跡　第14次調査、川添遺跡　第１次調査、辻遺跡　第２次調査地を加えている。

2.本書に掲載した発掘調査の原因、調査期間等の調査に関わる経緯については、各調査の報告部分に記載している。

3.本書に掲載した調査年度は、先述した年度にかけて実施してきたものであるため、調査組織ならびに調査参加者は第II章にまとめた。なお整理作業は各調査終了後随時行なってきたが、主として平成9・10年度に実施した。

4.遺構の実測は主として各調査担当者が行なった。また実測作業に際して、上村英士・生田和宏の援助を得、図の浄書は調査担当者ならびに井上由紀子が行なった。

5.遺物の実測は、調査担当者ならびに森田レイ子・井上由紀子・生田和宏・中西武尚・酒井三保子・松隈里恵子・時津裕子・黒木美幸・白水文恵が行ない、図の浄書は調査担当者ならびに井上由紀子が行なった。なお瓦整理に関して、狭川真一の協力を得た。

6.遺構の写真撮影は調査担当者および上村英士が行ない、空中写真は(有)空中写真企画が行なった。遺物の写真撮影は調査担当者ならびにフォトハウスおか（代表岡　紀久夫）が行なっている。

7.遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を指している。磁北と座標北との偏差は西偏６°30′（1992年）である。

8.出土した金属製品の処置は、下川可容子が担当した。

9.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。

10.本書の執筆は、目次及び項目末尾に記し、編集は中島恒次郎が行った。

11.出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。

12.本書に掲載した遺物の分類は、以下に記載された分類によっている。

土器　太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡 II』
　　太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡 II -窯跡篇-』

陶磁器　太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡 II』

山本信夫（1995）「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』

瓦　石松好雄・高橋章（1983）「大宰府出土瓦について（二）」『九州歴史資料館研究論集 4』

高橋章（1983）「鴻臚館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢　－下巻－』

高橋章（1995）「都府楼瓦考」『王朝の考古学』

焼塩壺　森田勉（1983）「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢　-下巻-』

石鍋　森田勉（1983）「滑石製容器　-特に石鍋を中心として-」『佛教藝術』148号

硯　横田賢次郎（1983）「福岡県内出土の硯について　-分類と編年に関する一試案-」『九州歴史資料館　研究論集 9』

権衡　吉村靖徳（1995）「権衡に関する一考察　-福岡県内出土権状製品の検討と課題-」『九州歴史資料館研究論集　20』

キセル　古泉弘（1983）『江戸を掘る』

なお森田論文については、以下の文献に再録されている。

森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会（1995）『大宰府陶磁器研究』

また、報告文中にて示される時期（大宰府XII期など）については、以下の文献を御参照いただきたい。

太宰府市教育委員会（1996）『大宰府条坊跡　IX』　Tab.1大宰府の土器型式と年代

目　次

I. はじめに ……（中島恒次郎）1

II. 調査組織 ……6

III.調査の報告
A.筑前国分寺跡の調査
1.第21-1次調査
1）調査に至る経緯……（山村信榮）9
2）層位……9
3）遺構……（山村信榮・上村英士）10
4）遺物……（山村信榮）22
5）小結……48
2.第21－2次調査
1）調査に至る経緯……（中島恒次郎）69
2）層位……69
3）遺構……69
4）遺物……（森田レイ子）72
5）小結……（中島恒次郎）86
3.第22次調査
1）調査に至る経緯……（髙橋　学）93
2）層位……93
3）遺構……93
4）遺物……96
5）小結……100
4.第23次調査
1）調査に至る経緯……（中島恒次郎）104
2）層位……104
3）遺構……106
4）遺物……（森田レイ子）107
5）小結……（中島恒次郎・森田レイ子）115
B.周辺地域の調査
1.筑前国分尼寺跡第14次調査
1）調査に至る経緯……（城戸康利）123
2）層位……123
3）遺構……123
4）遺物……126
5）小結……134
2.川添遺跡　第1次調査
1）調査に至る経緯……（中島恒次郎）139
2）層位……139
3）遺構……140
4）遺物……（森田レイ子）142
5）小結……（中島恒次郎）154
3.辻遺跡　第2次調査
1）調査に至る経緯……（中島恒次郎）157
2）層位……158
3）遺構……158
4）遺物……（森田レイ子）161
5）小結……（中島恒次郎）169
IV.転写土層の保管・展示パネル製作……（下川可容子）176
V. 調査のまとめ……（中島恒次郎）180
付編　筑前国分寺跡　第17次調査の補足……（狭川真一）189

I.はじめに

太宰府市は、福岡市のベットタウンとして、また大学の集まる場所として、歴史香る街、学問の神様「天満宮」のある街をうたい文句に各種開発事業が進み、人口も確実に増加の一途をたどっている。一方で住民の生活環境の悪化も懸念され、開発と環境保護の両面で岐路に立たされている。このような中、古くからの町が息づく「国分」地区でも山林開発や、農地の住宅化など背後にそびえる「特別史跡　大野城跡」の四王寺山との景観保護に、次第に違和感を醸し出すようになってきた。今回報告する筑前国分寺跡周辺においては、全般的に専用住宅が取り巻く環境ということもあり、筑前国分寺からの四方の眺望はまだ保存されているといってよい。しかしその外縁部にあたる県道112号線（旧国道３号線）沿線では、交通量の多さもあいまって各種第三次産業の店舗建築、および大規模な共同住宅建設など、次第に景観の破壊も進みつつある。今後の筑前国分寺跡のみならず、史跡の保存整備にあたって、十分考慮していかなければならない課題である。集客能力のみに傾倒し、本来あるべき歴史景観が破壊されるようでは、本末転倒の懸念も否めない。

これら開発に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を太宰府市で実施するようになって、数々の成

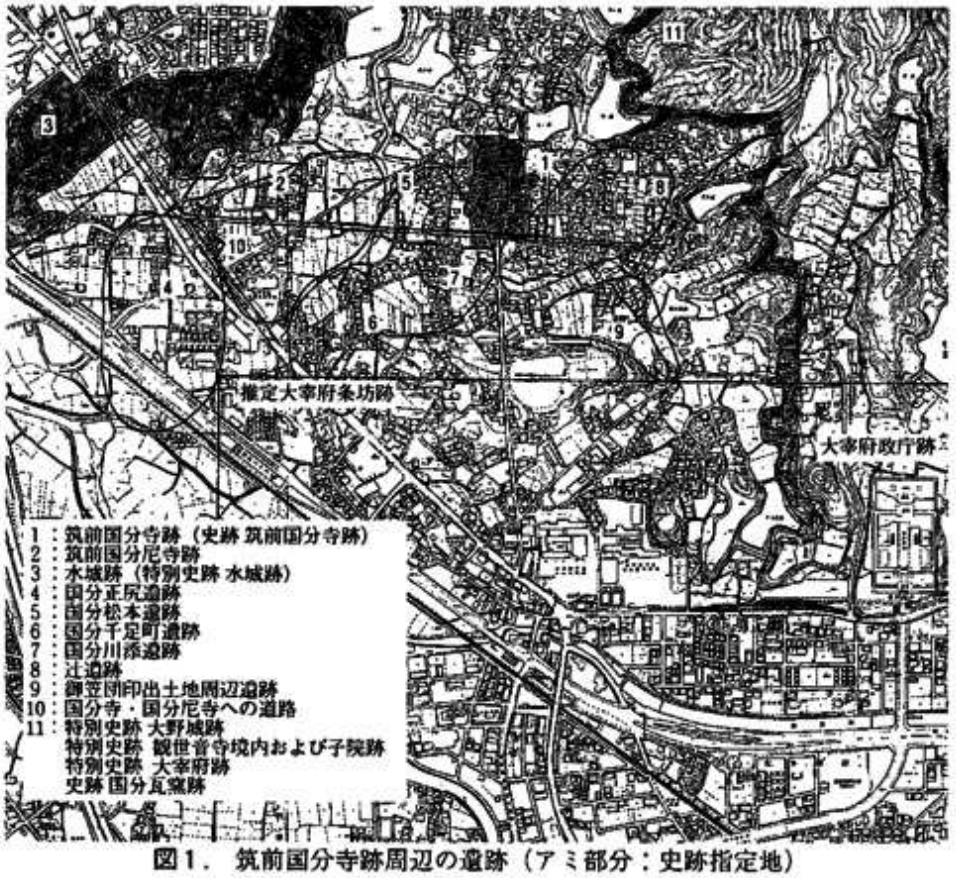


図１．筑前国分寺跡周辺の遺跡（アミ部分：史跡指定地）

果を蓄積しつつある。国分地区においても調査を実施し、筑前国分寺跡・筑前国分尼寺跡にはじまり、表1に上げた遺跡の調査がなされ、現在も進行中である。国分地区で確認された遺跡は、古くは旧石器時代からはじまる。特に弥生時代における集落および墓の検出は際だっており、弥生時代における集落構造を知る上では、貴重な遺跡が数多く点在している。その後筑前国分寺・尼寺の建立によって行なわれる開発事業の後、中世集落の実態が、大宰府条坊域に匹敵する規模ではないものの、次第に明らかになりつつある（図1・3）。

筑前国分寺跡の立地する四王寺山から南西に延びる丘陵は、自然環境上、極めて安定した丘陵にあたり、「好処」を占地したとされる国分寺造営には、適地であったと考えられる)。しかし、調査所見からみるように、礫混入の河岸段丘上に位置していることから、微視的には事前造成に困難を極めた可能性も高い。安定地盤上への立地という点では「好処」であるが、三方を丘陵および山に囲まれ、西方のみを開放する箇所であり、各所から見通せる位置としては、「好処」とは言い難い面もある。しかし、西方には水城跡があり、博多側から大宰府への進入

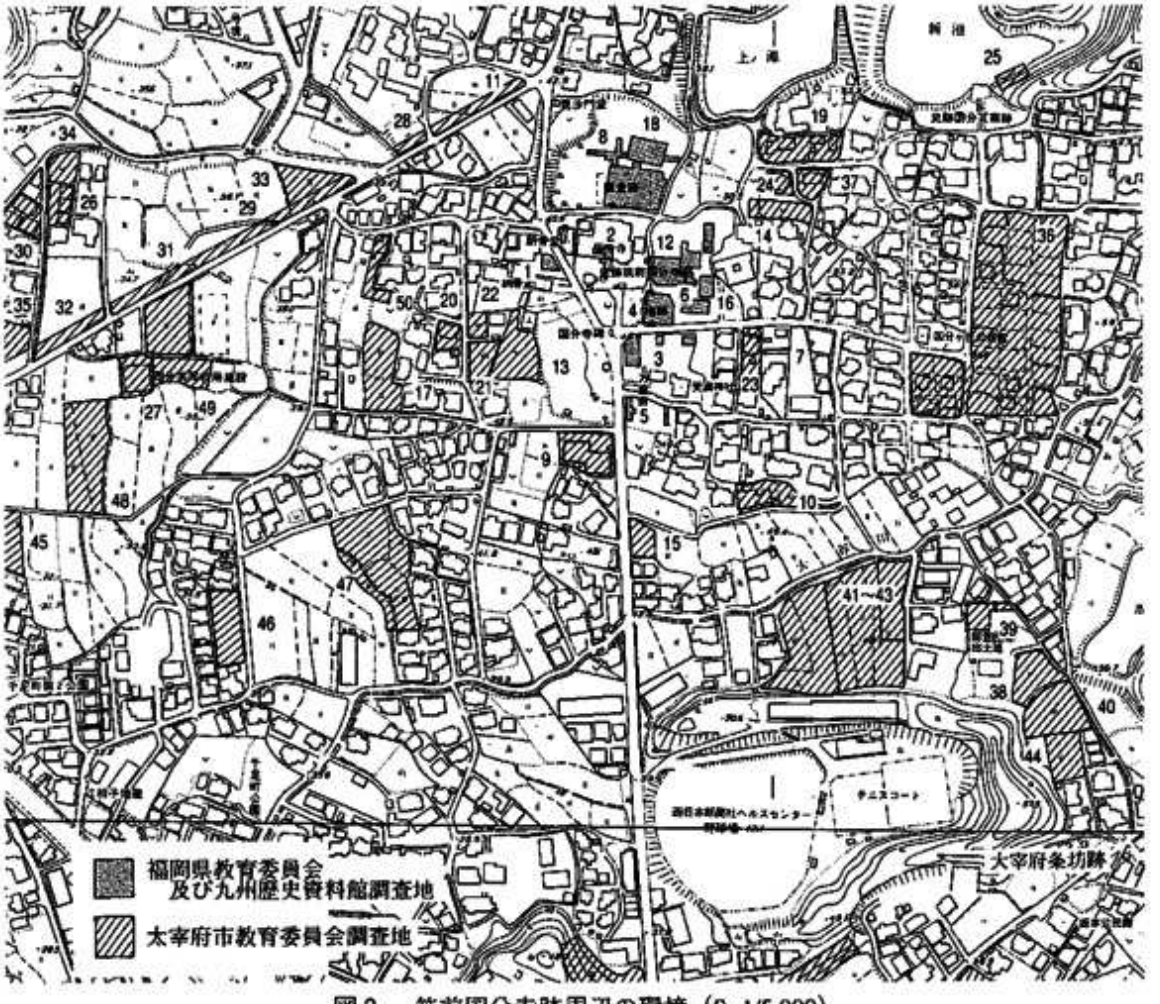


図2．筑前国分寺跡周辺の環境（S=1/5,000）

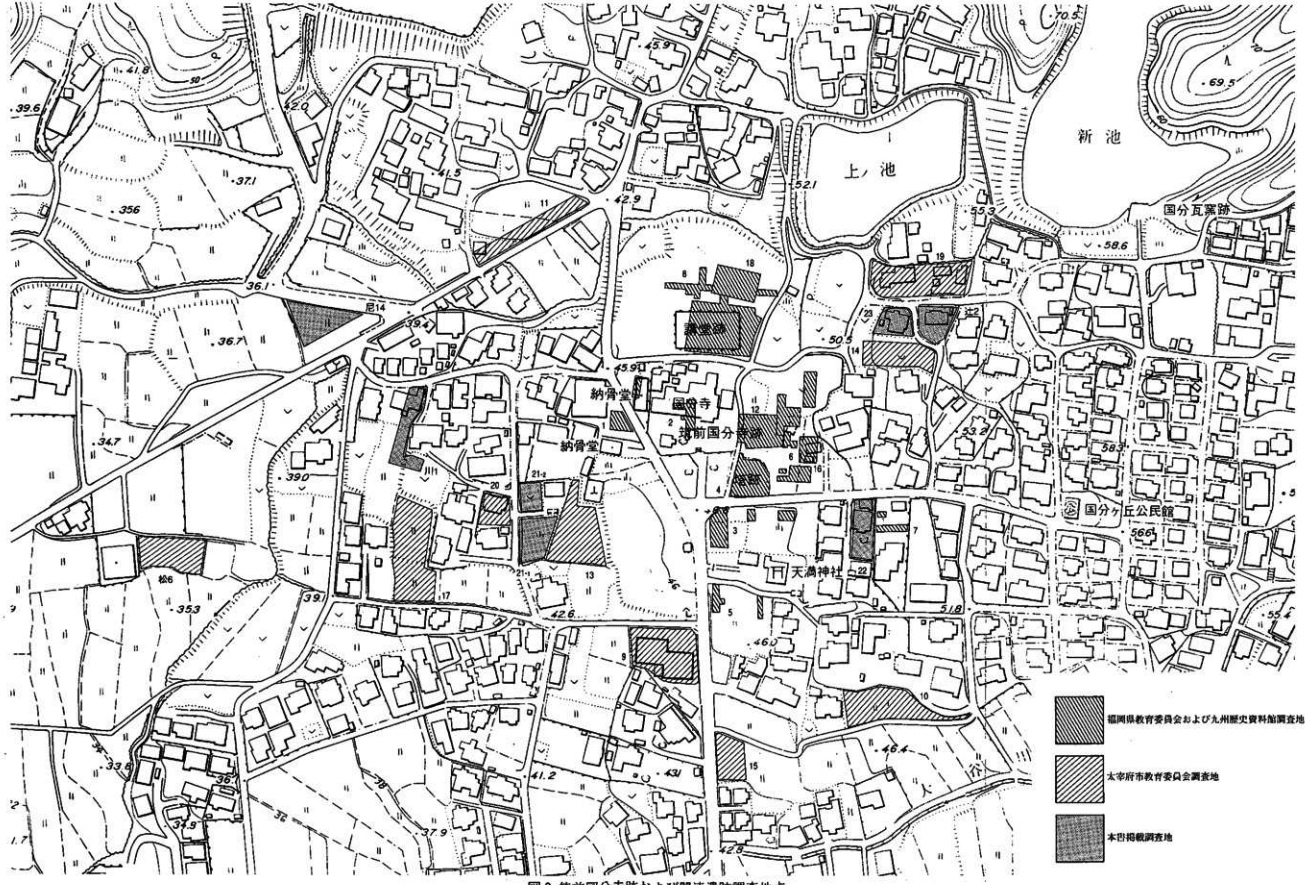


図 3.筑前国分寺跡および関連遺跡調査地点
【数字のみ：筑前国分寺跡調査次数　松：国分寺松本遺跡　辻：辻遺跡　尼：筑前国分尼寺跡】

に際しては、筑前国分寺への眺望は極めて良好な位置にあり、水城西門および東門いづれを通過しても東方に筑前国分寺を望むことになる。この点で「国華」としての、また「鎮護国家」の願いを込めた国分寺の役割を担える位置が選地されたといえる。

（中島恒次郎）

表1．周辺の調査遺跡一覧（番号は図2の番号と一致）

番号	遺跡名	調査次数	所在地	遺跡内容	掲載報告書
1	筑前国分寺跡	1	国分3丁目	西回廊（未確認）	県報告1
2	筑前国分寺跡	2	国分4丁目	金堂跡	文献1
3	筑前国分寺跡	3	国分4丁目	中門および南門確認調査	県報告2・文献1
4	筑前国分寺跡	4	国分4丁目	塔跡	県報告3
5	筑前国分寺跡	5	国分4丁目	道路側溝	県報告4
6	筑前国分寺跡	6	国分4丁目	講堂および東西廊	県報告4
7	筑前国分寺跡	7	国分4丁目	寺域東外郭施設	県報告4
8	筑前国分寺跡	8	国分4丁目	僧房確認調査（未検出）	県報告5
9	筑前国分寺跡	9	国分3丁目608-1外	掘立柱建物・井戸（平安）	市第32集
10	筑前国分寺跡	10	国分4丁目728-3外	南北溝（寺中軸線方向に一致）、土壙（平安）	市第32集
11	筑前国分寺跡	11	国分5丁目749外	南北溝・井戸・土壙（平安）	市第16集
12	筑前国分寺跡	12	国分4丁目	南回廊と金堂	県報告6
13	筑前国分寺跡	13	国分3丁目621	寺域南面築地・掘立柱建物（奈良）、掘立柱建物・井戸（中世）	市第32集
14	筑前国分寺跡	14	国分2丁目469-1	寺域東外郭施設（奈良）、南北溝（平安）	市第32集
15	筑前国分寺跡	15	国分4丁目738-1	掘立柱建物（古代補修）、東西溝・谷（平安）	市第32集
16	筑前国分寺跡	16	国分4丁目		
17	筑前国分寺跡	17	国分3丁目626	寺への東西道路側溝、井戸（平安）	市第32集
18	筑前国分寺跡	18	国分4丁目	僧房確認調査（未検出）	県報告6
19	筑前国分寺跡	19	国分3丁目663	土壙・溝（平安）	市第32集
20	筑前国分寺跡	20	国分3丁目624-1外	掘立柱建物（平安）	市第32集
21	筑前国分寺跡	21	国分3丁目622-4外	寺域南面築地および西外郭施設	本書掲載
22	筑前国分寺跡	21－2	国分3丁目622-3	寺域西外郭施設	本書掲載
23	筑前国分寺跡	22	国分4丁目702-4	寺域東外郭施設	本書掲載
24	筑前国分寺跡	23	国分4丁目662-1	寺域東外郭施設、掘立柱建物・溝（中世）	本書掲載
25	国分瓦窯跡	2	大字国分786	瓦窯（史跡保全）	市第32集
26	筑前国分尼寺跡	2	国分2丁目		市第4集
27	筑前国分尼寺跡	3	国分2丁目476-2		
28	筑前国分尼寺跡	5	国分5丁目880外	溝（平安）	市第16集
29	筑前国分尼寺跡	7	国分2丁目471-1外	溝（奈良）	市第16集
30	筑前国分尼寺跡	8	国分2丁目455-1	掘立柱建物・溝（奈良）	市第25集
31	筑前国分尼寺跡	10	国分2丁目471-1外	溝（奈良）	市第16集
32	筑前国分尼寺跡	11	国分2丁目451-1外		市第16集
33	筑前国分尼寺跡	14	国分2丁目469-1	掘立柱建物（奈良）・井戸（平安）	本書掲載
34	筑前国分尼寺跡	15	国分2丁目458		
35	筑前国分尼寺跡	16	国分2丁目450-1	溝（平安）	
36	辻遺跡	1	国分4丁目585	溝（奈良・平安後期・鎌倉）、井戸（平安）	市第33集
37	辻遺跡	2	国分4丁目670-5	南北溝（寺中軸線方向に一致）、掘立柱建物・塀（中世）	本書掲載
38	御笠川印出土地周辺遺跡	4	板本3丁目756	掘立柱建物（奈良）	
39	御笠川印出土地周辺遺跡	5	板本3丁目757-10	小穴（奈良）	
40	御笠川印出土地周辺遺跡	6	板本3丁目32	土壙（飛鳥）、土壙・木棺墓（奈良・平安）	
41	御笠川印出土地周辺遺跡	7	板本3丁目746-15外	溝・土壙（古代）	
42	御笠川印出土地周辺遺跡	9	板本3丁目746-5	掘立柱建物（古代）	
43	御笠川印出土地周辺遺跡	10	板本3丁目746-2外	竪穴住居跡（飛鳥）、溝・井戸（奈良）	
44	御笠川印出土地周辺遺跡	11	板本3丁目54-1	方形竪穴（飛鳥）	
45	千尾町遺跡	1	国分3丁目495-23外		
46	千尾町遺跡	2	国分3丁目489-2	掘立柱建物・井戸・土壙（奈良）	
47	千尾町遺跡	3	国分3丁目584-8	掘立柱建物・井戸・溝（奈良）、井戸（平安）	
48	国分松本遺跡	1	国分3丁目485外		
49	国分松本遺跡	6	国分3丁目473-2外	寺への東西道路側溝・築地塀跡	
50	川原遺跡	1	国分3丁目632-1外	井戸（平安）	本書掲載
51	大字府桑原遺跡	13	板本3丁目64-1外	墓（中世）	市第7集
52	大字府桑原遺跡	97	板本3丁目81-9外		
53	大字府桑原遺跡	190	板本2丁目173-1外	掘立柱建物群（奈良）	

※網は古代中世以降の遺構を確認　※網は未報告

掲載報告書

県報告1	九州歴史資料館（1972）『大宰府史跡 -昭和46年度発掘調査概要-』
県報告2	九州歴史資料館（1976）『九州歴史資料館年報 昭和50年度』
県報告3	福岡県教育委員会（1977）『筑前国分寺跡 -昭和51年度発掘調査概要-』
県報告4	福岡県教育委員会（1978）『筑前国分寺跡 -昭和52年度発掘調査概要-』
県報告5	福岡県教育委員会（1980）『史跡筑前国分寺跡および国分瓦窯跡』
県報告6	福岡県教育委員会（1994）『史跡 筑前国分寺跡』
文献1	藤井功・亀井明徳（1977）『西都大宰府』NHKブックス277

II.調査組織

本書に掲載した各調査は、複数年度にわたって実施しているため、以下に調査を実施した年度ごとの調査組織について記述する。なお調査担当者については、各調査報告の中に調査に至る経過というかたちで記述しているが、ここではゴチック体の活字にて記述しておく。また整理作業年度については、主として作業を実施した平成10年度の組織を記載しておく。

国分尼寺跡　第14次調査（平成3／1991年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	富田　譲
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
	技　　師	山村信榮
		中島恒次郎
		塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子（3年10月1日～）

筑前国分寺跡　第21-1次調査、第22次調査（平成8／1996年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化振興係長	大田重信（～8年6月30日）
		田中利雄（8年7月1日～）
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
	主　　事	今村江利子

調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
	技　師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

筑前国分寺跡　第21-2次調査、第23次調査（平成9／1997年度）

川添遺跡　第１次調査、辻遺跡　第２次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主　事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一（9年10月1日～）
	主任技師	狭川真一（～9年9月30日）
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
	技　師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

整理報告年度（平成10／1998年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主　事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一
	主任技師	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
	技　師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

（整理作業参加者）

安藝朋江、阿部浩子、生田和宏（現京都大学大学院）、伊藤孝子、井上由紀子、占部民子、上村英士（現筑後市教育委員会）、菊武淑子、久保喜代香、黒木美幸、小西晴代、酒井三保子、瀬戸口みな子、田崎道子、時津裕子、中西武尚、中村房子、林美知子、原野正子、藤野由貴子、武堂年子、松隈里恵子、横山美津子、吉田勝子

発掘調査ならびに整理報告にあたって、次の方々から御指導、御教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。

赤司善彦、安藤寛、稲垣圭子、内田昭人、小田富士雄、加藤允彦、栗原和彦、横田賢次郎、百瀬正恒、

III.調査報告

A.筑前国分寺跡の調査

1.21-1次調査

1．調査に至る経緯

調査地は太宰府市国分３丁目622番地の1、3、4で国指定史跡国分寺跡の指定地外、推定寺域の南西部にあたる。調査面積は351㎡。調査期間は平成8（1996）年10月5日から12月24日である。調査は山村が担当し、報告は山村と上村英士（現筑後市教育委員会）が行なっている。

今回の調査の経緯は、地権者より622番地の1、4において個人住宅の建築申請が出され、国庫補助事業として発掘本調査を実施した。また、本調査地が国分寺外郭線南西角に推定されていたため、西側の南北方向の外郭施設の有無を確認する目的で、地権者の同意を得た上で北側隣地の622番地の3にトレンチ坑（Aトレンチ）を設定した。このトレンチは翌年に再調査を実施し（国分寺跡21-2次調査）、その内容は本誌別項にて報告しているとおりである。

（山村信榮）

2．層位

調査は現況の淡灰色、灰色の耕作土の堆積層を重機で除去する作業からおこなった。掘り下げによって調査区南側では地表面下約20cmで暗い茶褐色の遺物包含層を確認した。その下には茶褐色の粘質の地盤にピットが掘り込まれている状況が見られ、一部に瓦が集積した状態で認められた。北側では耕作土直下で茶褐色地盤に遺構が見つかり、地盤が北から南に向かって緩やかに傾斜しており遺物包含層は北側では部分的に削平され残存していない状況がわかった。

遺構が乗る地盤は表面が茶褐色の粘質土で下位に白色粘質土、その下に乳白色と黄色が混じる花崗岩風化土で構成されている。表面の茶褐色の粘質土は乾燥過程ではパサパサな状態を呈し（上面一部は土壌化している）、下の乳白色系の土も同様な傾向を持つところから、茶褐色の粘質土は第3紀に属す鳥栖ローム、白色粘質土は八女粘土層の可能性が考えられる。分析作業は現段階ではおこないきっていない。第3紀層は市内の標高30～40m前後の宮ノ本丘陵、四王寺山裾などに点々と残存している。二次的な堆積に依るものなのかも知れない。本調査では縄文時代に属する石斧、剥片が出土しており、過去に歴史時代以前の遺物包含層があった可能性も考えられる。

調査終了時には調査範囲全体を埋め戻し、遺構の保護処置をおこなった。

3．遺構

調査着手前から国分寺南西の外郭に関わる遺構の検出が予想され、その状況の把握と保護に関する基礎データの採取が大きな調査の柱とされていた中で、表土、包含層除去時に南側で東西方向の幅3mの遺構が帯状に検出され、東隣地の13次調査で報告されている南辺築地が連続して存在することが濃厚となった。以下、遺構の説明は遺跡の性格を考慮して国分寺の外郭施設に関するもの、それ以外の古代の遺構、その他中世の遺構の順で報告を進めることとする。

1）外郭施設

21SX010（図5）

調査区南で検出した東西方向の幅3mの帯状の遺構。茶褐色の粘質土地盤を削りだして形成している。東端は13次調査区側に途切れなく延伸しており、西はSD023が取り巻くように穿たれ、それを西端として終息している。西端近くは北からSD004がくい込んで穿たれ、北側縁辺中央付近はSD015で画される。上部は平らに削平された様相で本来の上部形状は明確でない。残存する高さはSD015底のレベルからは約0.4mである。上部構造に関する築地に関わるような東西方向のピット列は確認されなかった。

21SD004（図6）

SX010を南北方向に北側から切り込み（南側には貫いていない）、さらに北側に約3.5m延びている溝である。縦断面形状を見ると南北両端は段状に浅くなっている。幅最大1.6m、深さ0.7m。南端の浅い部分では幅0.9m、深さ0.1m。東西方向の土層観察の所見からSD004下層はSD023上層と共有していることから、両遺構の埋没時期が重なる期間があったことが分かっている。SD015との関係は上位の土層の一部に共有関係が認められ（SD015側から扇形に広がる。）、また瓦の検出状況からも本遺構の上層とSD015とが連続していたことが指摘される。相対的に遺構は開放状態のものが自然埋没したと理解されるが、後述の推定西辺外郭施設SA020の延長上にあたることから、この遺構は初期には南辺築地と西辺外郭施設が接合するための掘り込み（布掘状遺構）であったものが、後に掘り返され、柱が抜かれたまま放置され埋没したことが想定される。出土遺物は土器も瓦も8世紀代に納まるものが出土している。

21SD015（図5）

SX010の北側縁辺中央付近にSX010に添う形で見つかった溝状遺構である。上面の幅約0.6m、深さSX010上端から深いところで0.4m。西側は底が低くなってSD004に連なり、東側は高くなってSX001に切られる。中央と東寄りに平瓦を溝の蓋のように伏せた箇所がある。溝中の東西には北に傾いて深さが0.3～0.4mに穿たれた二つの穴が見られる。遺物には8世紀を下るような物はみつかっておらずSD004の様相に近い。

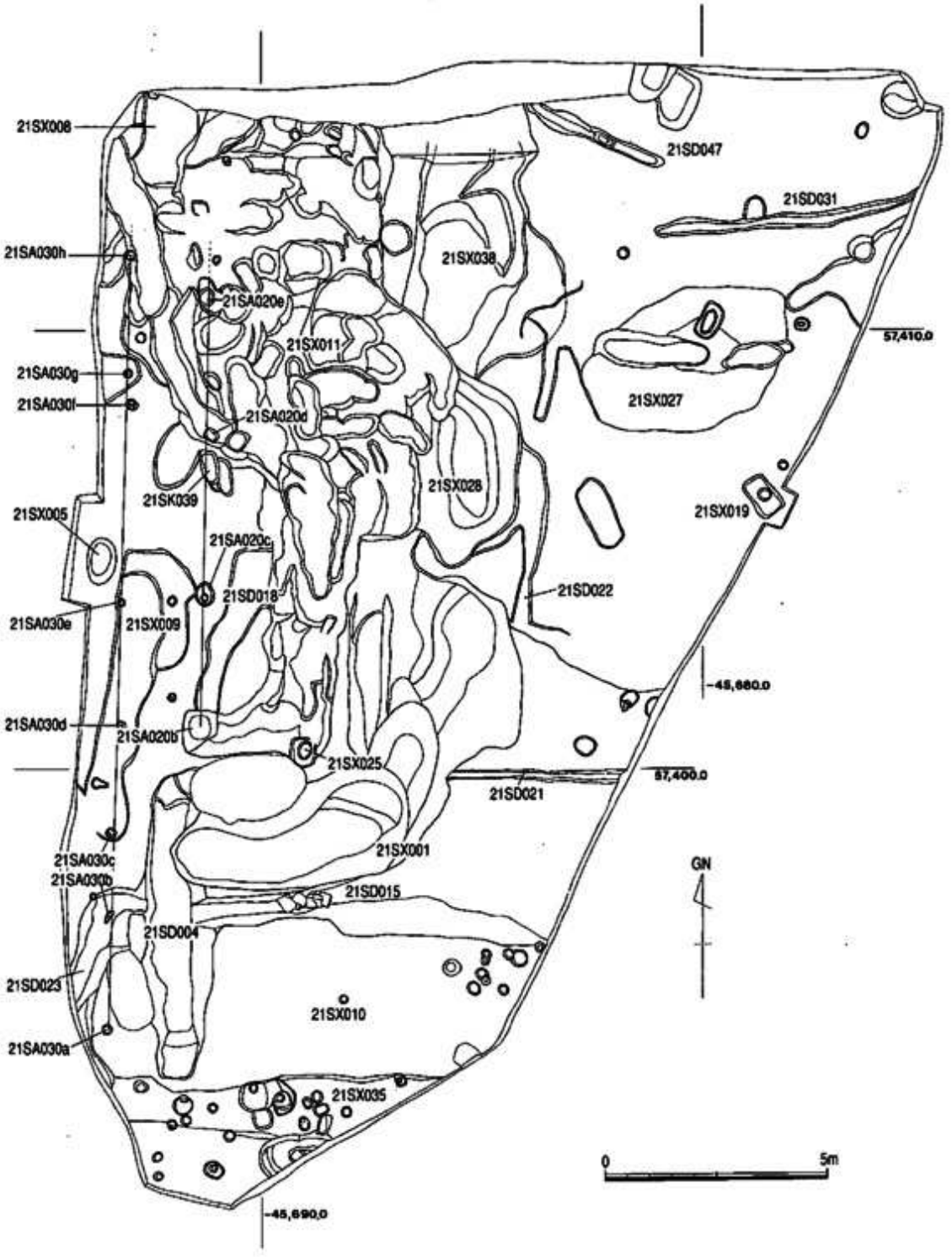


図4. 第21-1次調査遺構配置図

21SX010周辺

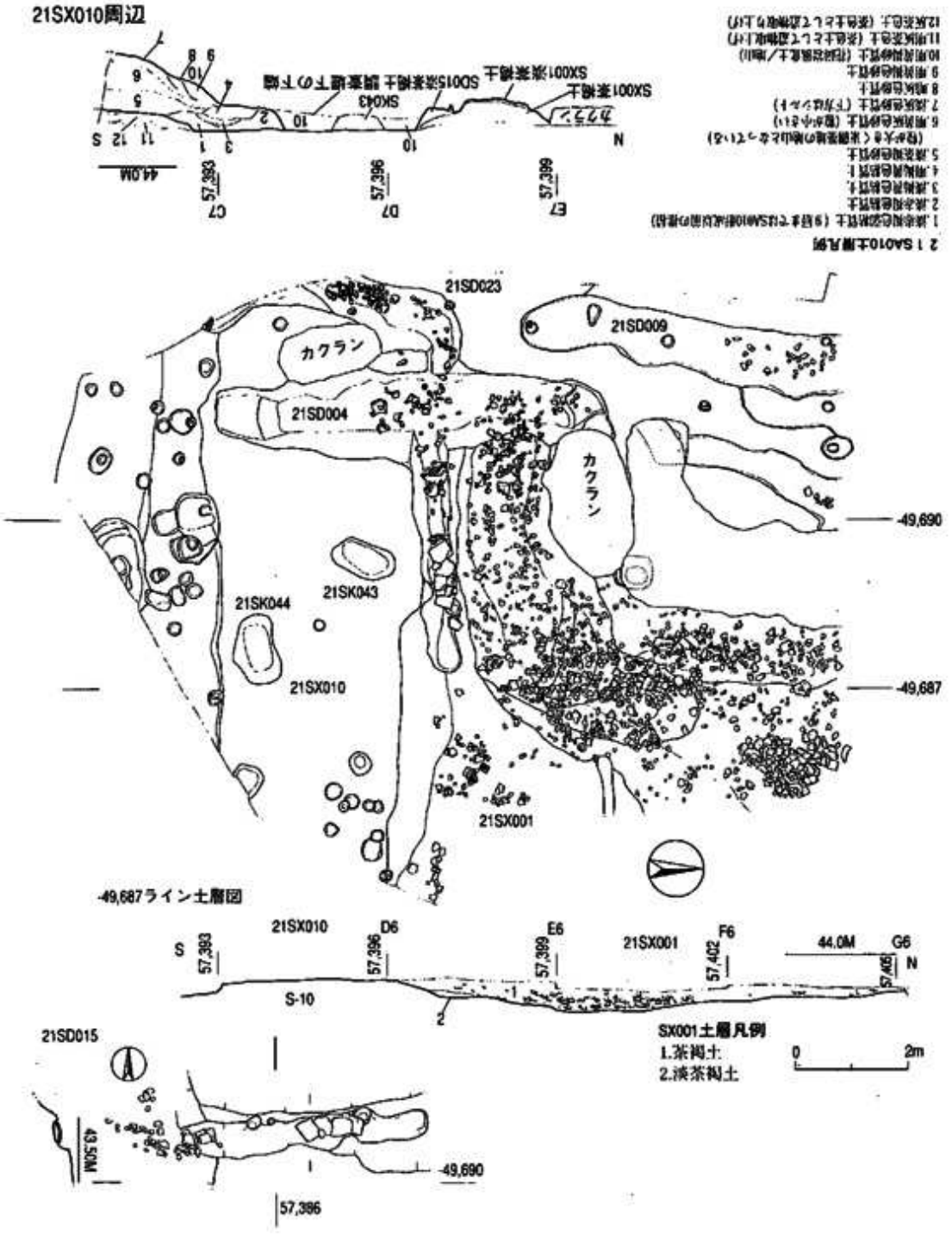


図5．21SX001・010・SD015遺構実測図（S=1/120）

2121SD023（図5）

SX010の北から西端を取り巻くように掘られた溝状遺構。幅約0.8m、深さ0.2mで、SD004につながる上層には角亜礫と瓦片が、特に南側で密集して検出された。水が流下したような砂層

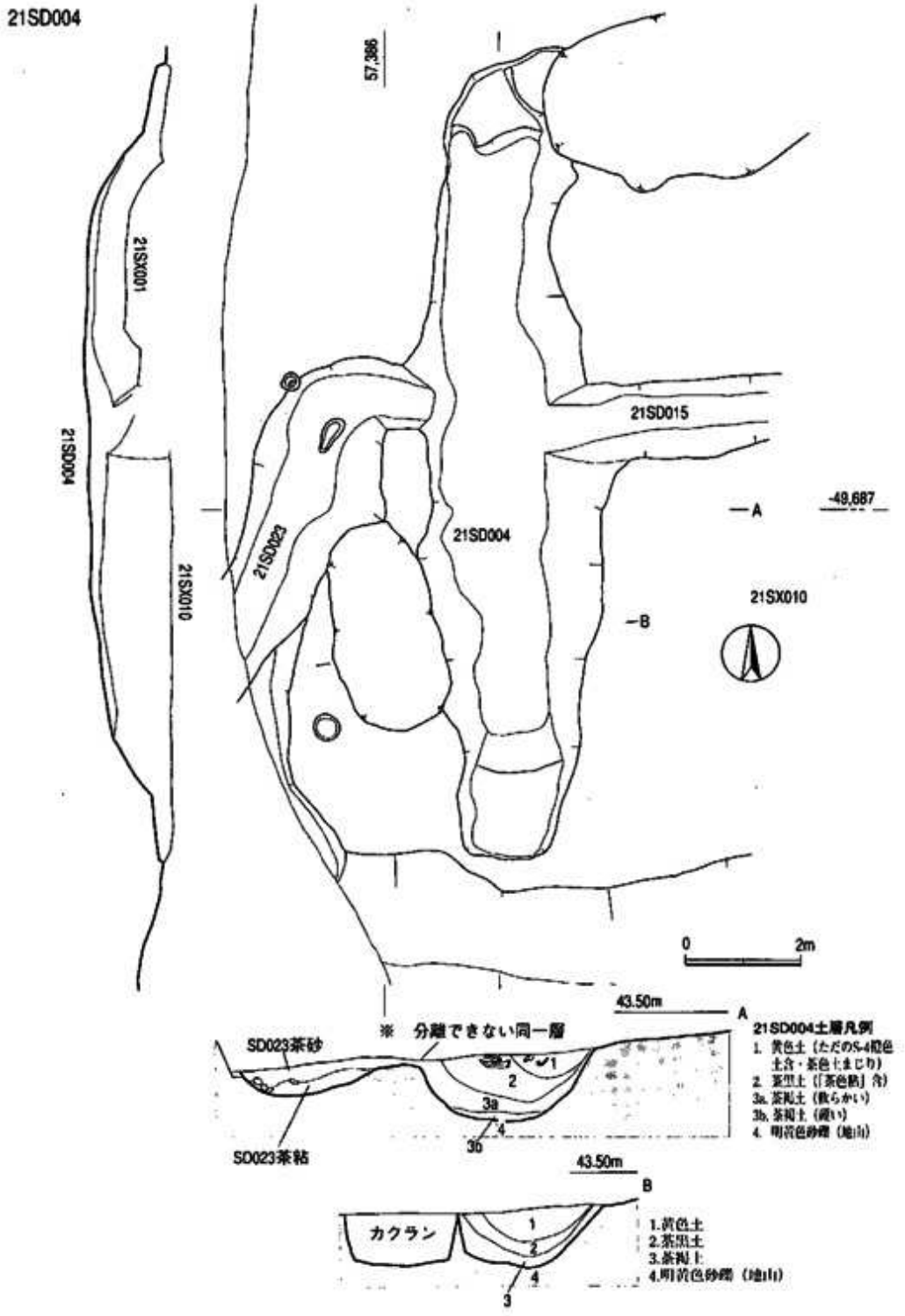
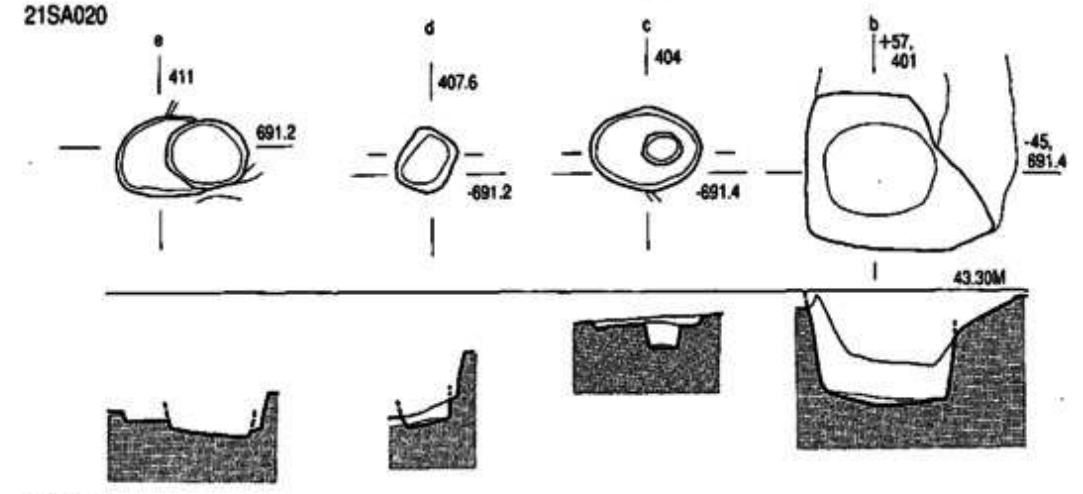


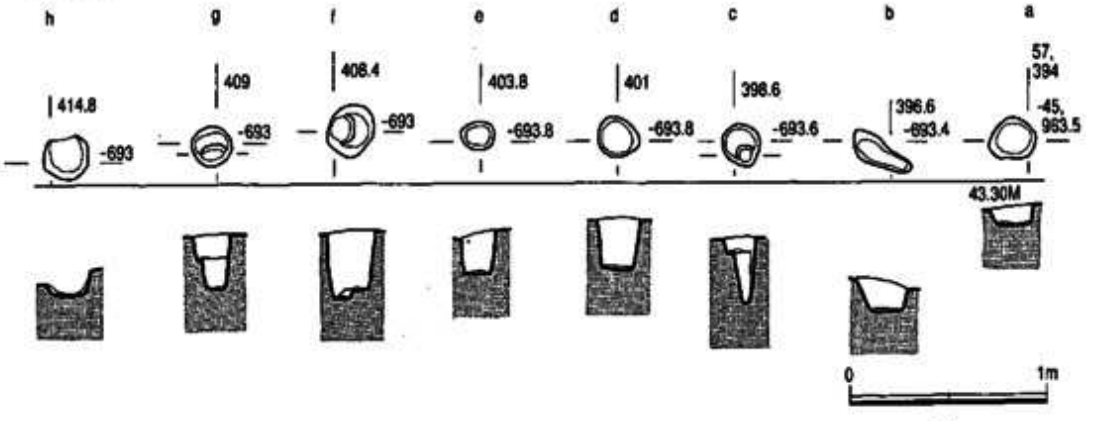
図6．21SD004遺構実測図（S=1/60）

21-1次

21SA020



21SA030



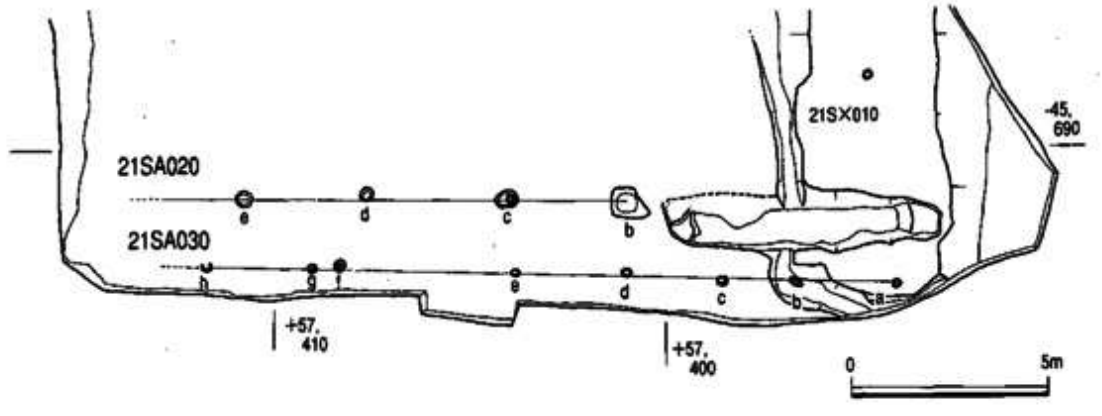


図7．21SA020・030遺構実測図（S=1/40・1/200）

の形成は見られない。

21SX001（図5）

SX010の北側にSX010の裾部やSD015に被るようにして茶褐色土が形成されており、その層中には多量の瓦片が蒔かれたように広がっていた。一部には接合しない破片同士が順に折り重

なったような状態で検出されており、恣意的に置かれた箇所もあったことが判明している。遺構の底は全体に窪み状にへこんでおり、地山を削って形成したものと考えられる。このため標高が高いSD015の東側は消失している。床面には東西方向の溝状遺構SD021があるが、この遺構の埋没はSX001の埋没と同時的に進行している。北側にはSX028、027、038などの不定形な窪みにつながっている。これらは上面の検出時点では明確な土色、土質の差異は見受けられず粗密の差はあるものの瓦片が全体的に入れられていることから、これらは有機的な関係を持った一連の遺構であると判断される。

21SX035=茶色土（図５）

SX010の南側の堆積層で、掘り下げの初期（SX035上層）は「茶色土」で遺物を取り上げている。茶色土の落ちの深さは約0.4mであり、さらにその下のSX010の基盤層自体も断面を観察すると複数の層に分けることができた。その落ちの深さは調査区南端でSX010上面から約1.1mあり、もともと旧地形がこの場所で急に南に傾斜していたことが判明した。茶色土は推定している築地の本体方向から流れ込んだ多少粘質を帯びる土で、築地の積み土であった可能性がある。

21SA020（図７）

調査区西側で約3mの間隔で検出された南北の4つの柱穴からなるピット列で、SA020b以外は後世の遺構に上面を著しく削平され、その下部のみが見られた。一番残状態がよいSA020bは平面プランが一辺約0.8mの方形を成している。この遺構では柱痕跡は確認できなかったが、SA020cでは直径約0.2mの柱痕跡が見つかっている。おのおのの心芯間の距離はbc間は3.0m、cd間は3.5m、de間は3.0mである。この柱列の振れは真北より東に1度54分である。

21SA030（図７）

SA020に添うように西約1.5mの間隔をおいて直径約0.2mの8つの穴からなる南北の小ピット列が検出された。穴の間隔は一定でなく、SA020柱穴位置にも対応していない。穴の内c,f,gでは直径約0.1mの多少先細りした杭先状の有機質の痕跡が見られた。南端の穴aはSX010上の南西角の位置に達している。これらはSA020と同様の方向性を持っており、その強い関連性が指摘される。同時期のものか前後するものかは土層関係上では判断できない。ただ、穴dはSD023埋土除去後に検出されており、この遺構に対しては埋没時期に先行して存在したことが判明している。

このSA020は国分寺講堂中軸線より約92.36mで310尺（小尺）、SA030は約320尺の位置にあり、東の外郭施設と考えられている７次調査の南北溝の位置の315尺と14次調査の掘立柱列の325尺を西に折り返した位置に近い数値であり、これを以て西側外郭施設と判断できる。上部構造に関するデータは少ないが、先のSD004の布堀状遺構の存在などからSA020については築地の芯

21-1次

柱列であったと推定しておく。SA030は時期が異なる同じ性格を持った寺地を示す外郭施設であったと想定している。

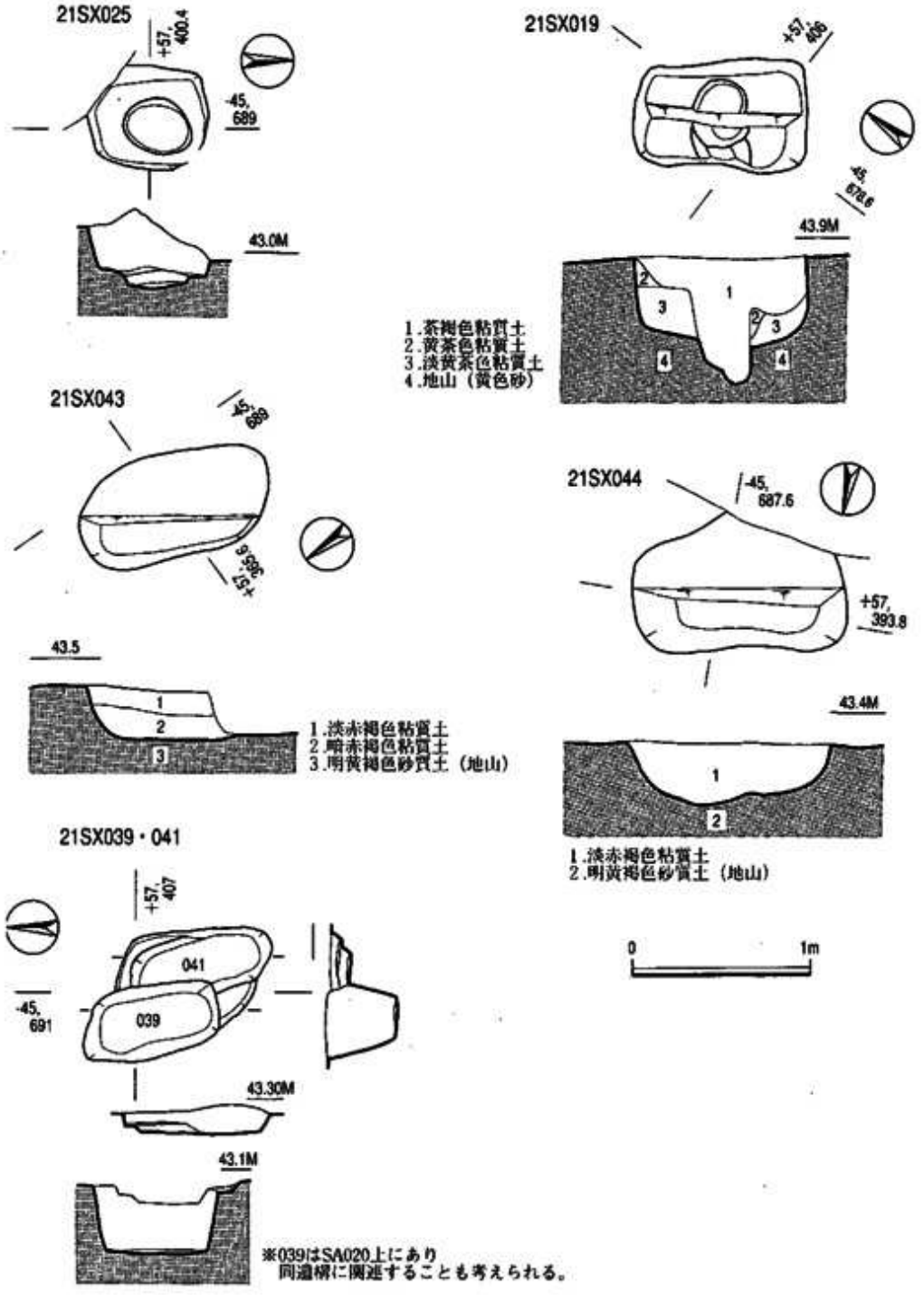


図8．21SX019・025・039・041・043・044遺構実測図（S=1/40）

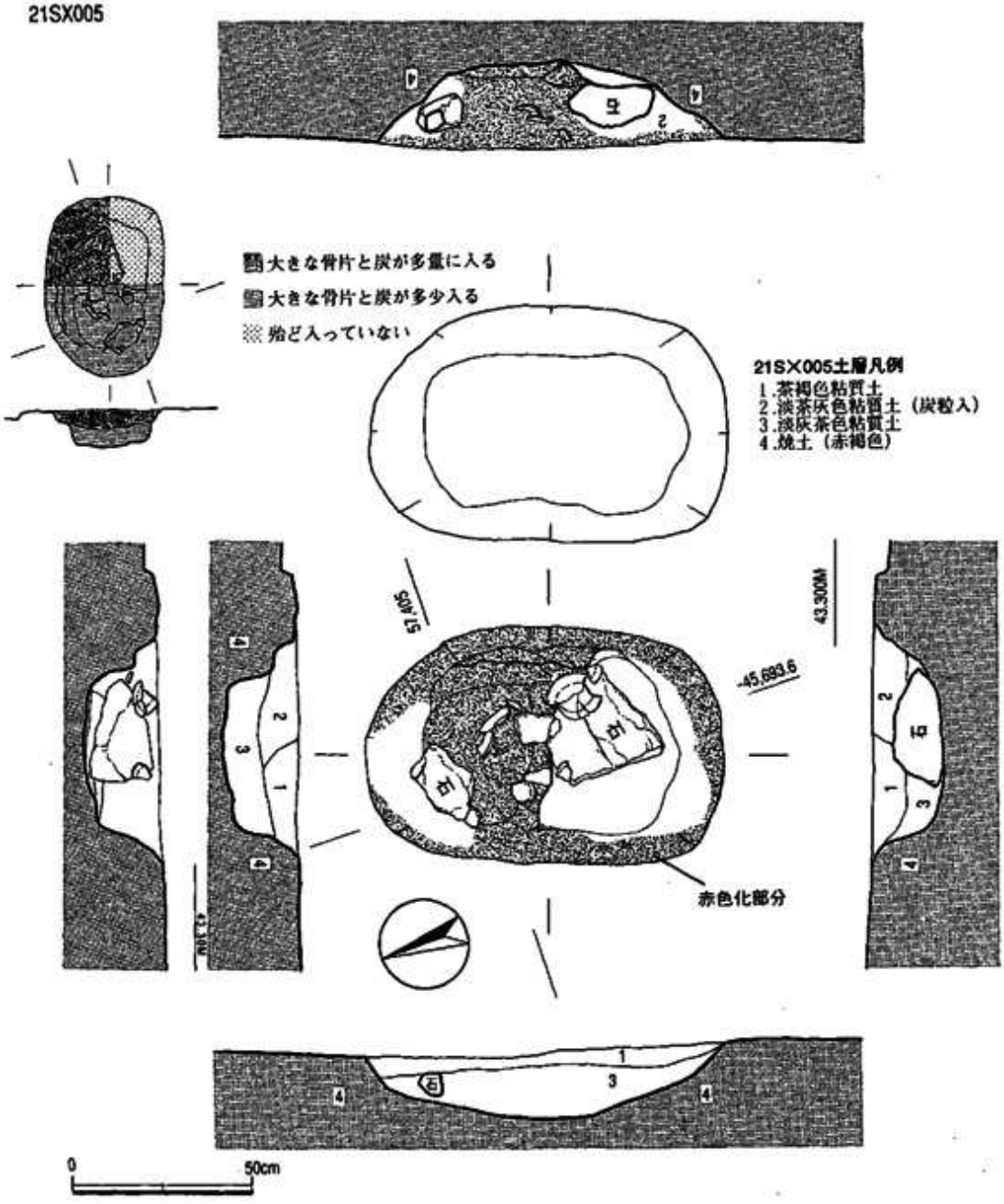
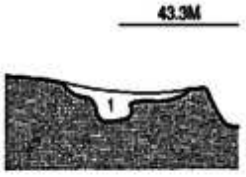
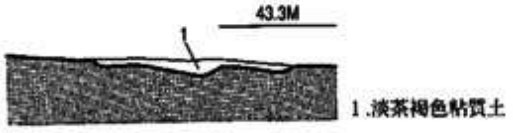


図9．21SX005遺構実測図（S=1/20）

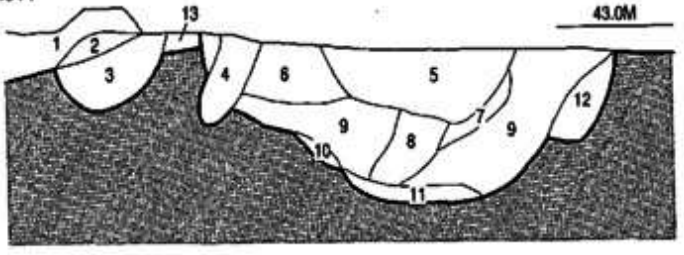
21SD008



21SX009

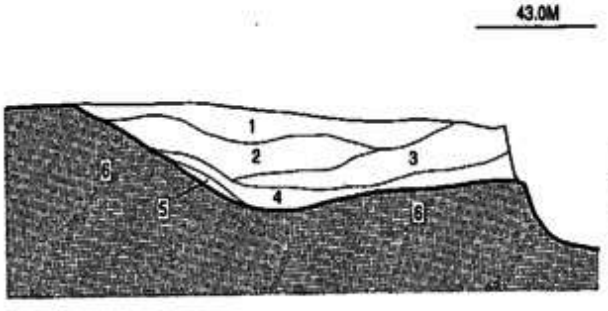


21SX011



1.明茶色粘質土（S-1茶褐土）
2.淡灰茶色粘質土（黄色ブロック混）
3.淡灰色粘質土（黄色ブロック混）
4.淡灰色粘質土（黄色ブロック混）
5.暗茶灰色粘質土（黄色土少量含む）
6.暗茶灰色粘質土（黄色土多く含む）
7.茶灰色粘質土（黄色土少量含む）
8.暗灰色粘質土
9.明茶褐色粘質土（黄色土多く含む）
10.明黄茶色粘質土（黄色土多く含む）
11.明茶灰色粘質土（黄色土多く含む）
12.明黄色粘質土
13.茶色粘質土

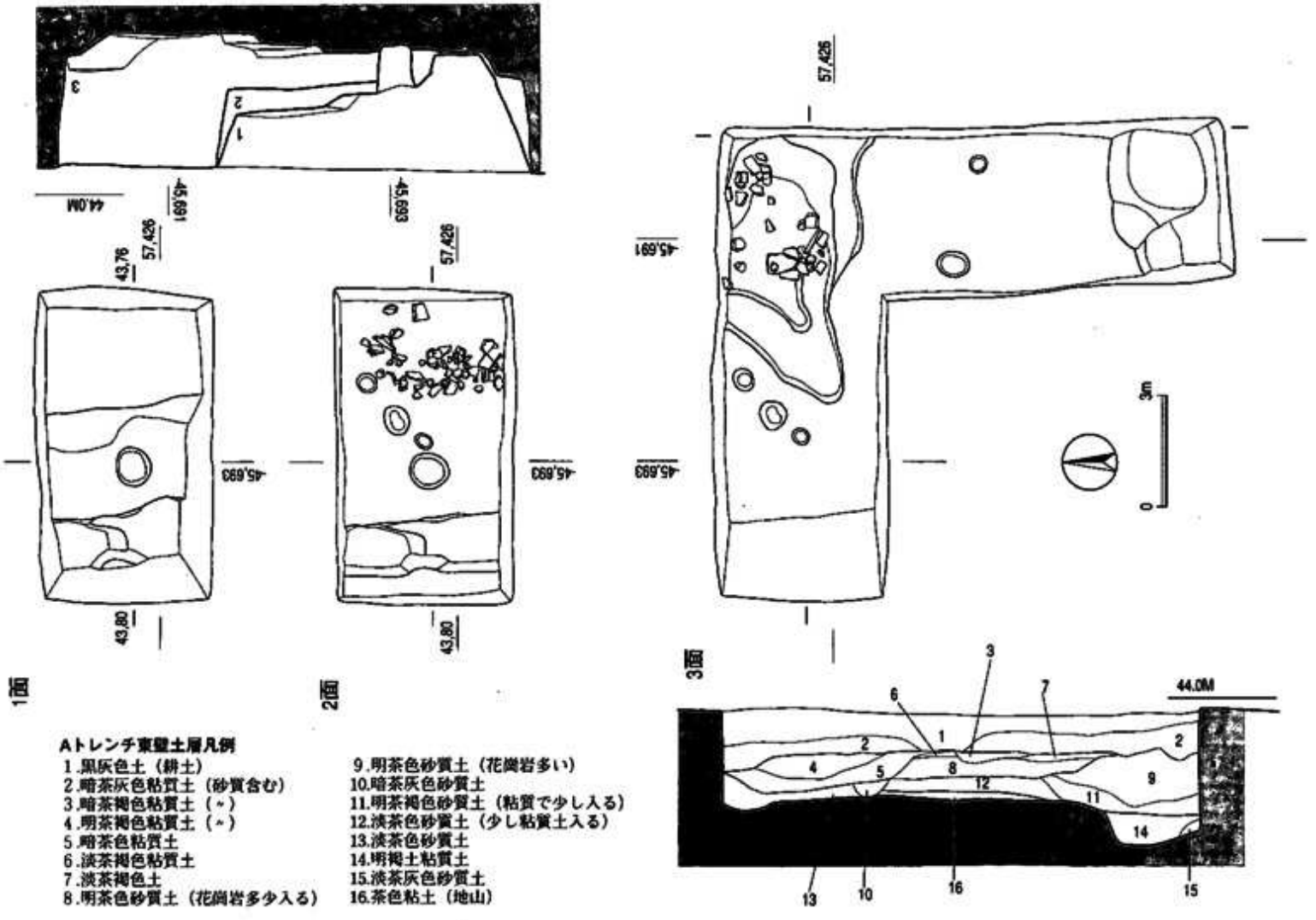
21SX028



1.淡茶色粘質土
2.暗茶色粘質土
3.淡茶褐色粘質土（砂質含む）
4.暗黄褐色粘質土
5.暗茶褐色粘質土
6.茶色粘土（地山）

0 2m

図10. 21SX008・009・011・028土層実測図（S=1/40）



Aトレンチ東壁土層凡例

1.黒灰色土（耕土）
2.暗茶灰色粘質土（砂質含む）
3.暗茶褐色粘質土（〃）
4.明茶褐色粘質土（〃）
5.暗茶色粘質土
6.淡茶褐色粘質土
7.淡茶褐色土
8.明茶色砂質土（花崗岩多少入る）
9.明茶色砂質土（花崗岩多い）
10.暗茶灰色砂質土
11.明茶褐色砂質土（粘質で少し入る）
12.淡茶色砂質土（少し粘質土入る）
13.淡茶色砂質土
14.明褐土粘質土
15.淡茶灰色砂質土
16.茶色粘土（地山）

図11. 21-1次Aトレンチ実測図（S=1/60）

2）古代以前の遺構

21SX025（図８）

10世紀前半のSX001を除去した時点で検出された遺構で、0.7×0.6mの方形の掘形を持つピットで、深さは0.5mを測り、中央は直径約0.3×0.4mの楕円形の窪みを持つ。平面形状や切り相関係からSA020となんらかの関係のある遺構の可能性もある。

21SX039・041（図８）

切り相を持つ二つの楕円形の穴であるが、SA020の延長上にあり同遺構との関係が指摘される。041が深さ0.15mと浅く、039は0.4mと深く、土層関係上は041より新しい。遺物の出土はなく時期、性格ともに不明。

21SX009（図10）

SA020、SD004の西側にある南北に長い溜まり状遺構である。上面はだいぶ削平された可能性があり、残存している深さは0.1m程度である。水流の痕跡はなく、暗い茶褐色の単一土層であった。SX030に切られる。9世紀から10世紀にかけての土師器椀cが出土しており、SX001と同時期に存在した遺構と判断される。

21SX019（図８）

G3区に一つだけ存在する1×0.6mの長方形プランを呈すピットで、直径約0.3mの柱が抜き取られた痕跡が土層で確認された。ほかに展開するピットがなく「幡」など単独の立柱施設を想定するほかない。第13次SB025桁方向中心の延長上に位置している。半分は未掘のまま埋め戻している。古代に属すと考えている。

21SX043・044（図８）

SX010上で検出した遺構で、地盤を形成する淡褐色の粘質と同質の土が堆積していることからSX010形成以前に存在した遺構と考えられる。深さは約0.3～4mを測る。

3）中世の遺構

21SX005（図９）

調査区の西側で検出した長さ1m、幅0.6m、深さ0.2m、を測る南北に長い隅丸長方形のプランの遺構で、断面形は舟底形を呈する。検出時に遺構のプラン周辺約5cmが橙色に焼けた状況が見られ、いわゆる「焼土坑」と認識された。内部の状況は花崗岩を坑底から若干浮いた状態で2個、南北に配しており、棺台とみられる。土層は大きく上下二層の群に分かれ、上層（1.2層）からは焼骨と炭が検出され、焼壁も確認している。下層（3層）では焼骨や炭化物は認められず、棺台の上層で多量の焼骨、炭化物を検出している。遺構表面が焼けて赤色化している範囲は底は二つの石の間、壁面は外周の上位0.1mほどの範囲である。完掘状況での観察では遺構底の周辺に下層の土層が押し込まれたような斑状（直径約5cm）のシミが見られた。

『筑前国分寺跡』II
21-1次

骨の出土状況から火葬後、収骨するために1度墳内をかきだして収骨後埋め戻しをしたと考えられる。焼骨は小片のみである。棺台上から箱形をなす小形鉢の土師器を出土しているが、外面が二次焼成により赤橙色に焼けており棺内に納められていたものと考えられる。それに対し土師器坏は焼けておらず、火葬後の埋め戻し時に供献されたものと考えられる。土器はいず

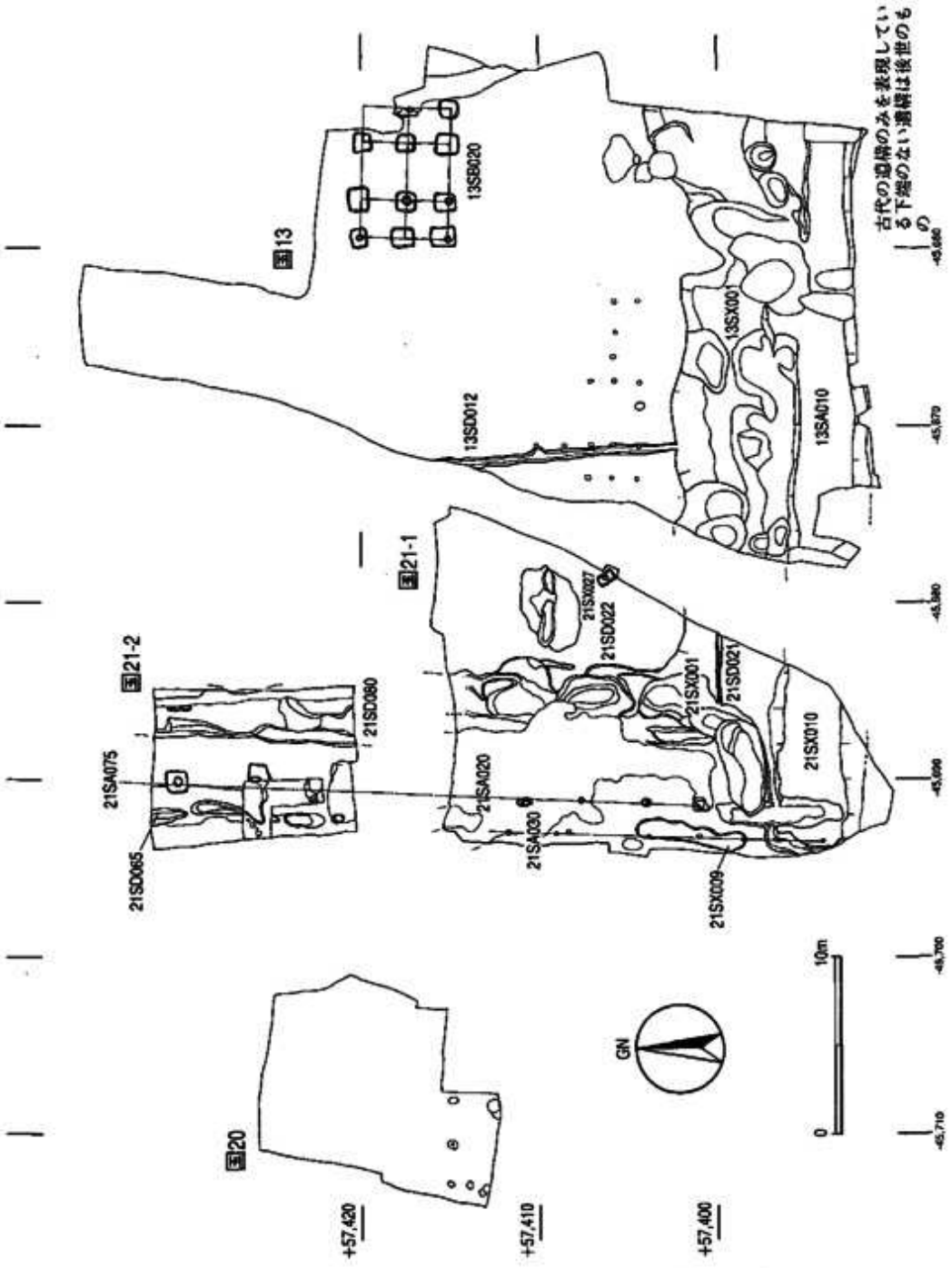


図12. 13次・21-1次・21-2次・20次遺構関係図（S=1/400）

れも棺台と考えられる石より上位で出土した。遺構底に見られる斑状のシミは下層堆積後に上から棒状のものでつつかれた痕跡と考えられる。焼成ないし収骨、埋め戻しいずれかの行為に伴って形成されたものであろう。土器の年代観から15世紀前半頃に推定される。

21SX011・008（図９）

調査区西側に南北に広がる帯状の遺構で、遺構の底の凹凸が著しく、各所で鍬先の掘削痕跡をとどめ、地盤の粘土層（推定第3紀ローム層）のレベルで掘削が進行していることから、粘土採取を目的とした採掘坑跡と見られる。出土遺物には13世紀代の龍泉窯系青磁椀片、備前（ないし常滑）の甕片など鎌倉期の遺物が出土しているが、遺構埋没の下限は唐津系の雑釉陶器椀があることから17世紀代までおとして考える必要がある。SX008は北に延伸しAトレンチ方向に溝状でつながる可能性があるが、最終的な土層観察からはSX011と連続性がある遺構と捉えている。

４）Aトレンチの遺構と土層（図11）

SA020、030の延長を確認するため調査区北隣地に東西方向のトレンチを設定した。上下2つの遺構面が確認されたが、SA020延長に達しなかったためさらに東と南方向に鍵形にトレンチの拡張をおこなった。その結果、トレンチ東側は上下面ともに南北方向の溝ないし西方向への段落ちが存在することが確認された。トレンチ西側は現況では南北道路が走る土地境となっているが、中世から古代後半の段階でも土地を画する施設が存在したことが判明した。これは8世紀の国分寺の寺域外郭線が下敷きになっているものと考えられる。トレンチ北東角では下面に不定形な窪み状遺構が見られた。この窪みのすぐ東側で翌年調査された21-2次調査では掘立柱列の方形の掘形が検出されており、落ちのラインはこれに関連するものと考えられるが、西側のプランは不定形であり、後の時期の攪乱を受けたものとも考えられる。同様の窪みは調査区南側でも検出している。（山村、上村英士）

４、出土遺物

遺物の個々の観察については文末の観察表をご参照いただきたい。ここでは遺構の性格に関する特徴的な遺物の解説に留める。

21SD004出土遺物（図13）

土器と瓦が出土している。土器には供膳具の須恵器と調理具の土師器がある。須恵器は坏とその蓋が多く、蓋には端部に「かえり」を持つ7世紀後半から8世紀初頭のもの（1.2）と端部を折り返す8世紀中頃までのもの（21.22.23）の二者がある。坏身は角高台が体部よりに付くもの、体部下半にｎカーブを持つものが主である。層の上下での顕著な時期差は認められない。坏の

身、蓋ともに1/6以下の接合しない小片が多い。瓦は丸、平瓦ともに縄目叩のみで占められる。両者の内面には布目の奥に幅3～5cmの板の痕跡が見られる。19は平瓦をカットした熨斗瓦である。小口の大半はケズリによって成形されるが、35の丸瓦には切断面には内面からの切断のための刃物の痕跡と自然の割れ面が隣り合って残っている。また、内側にヘラと小刀による二つ

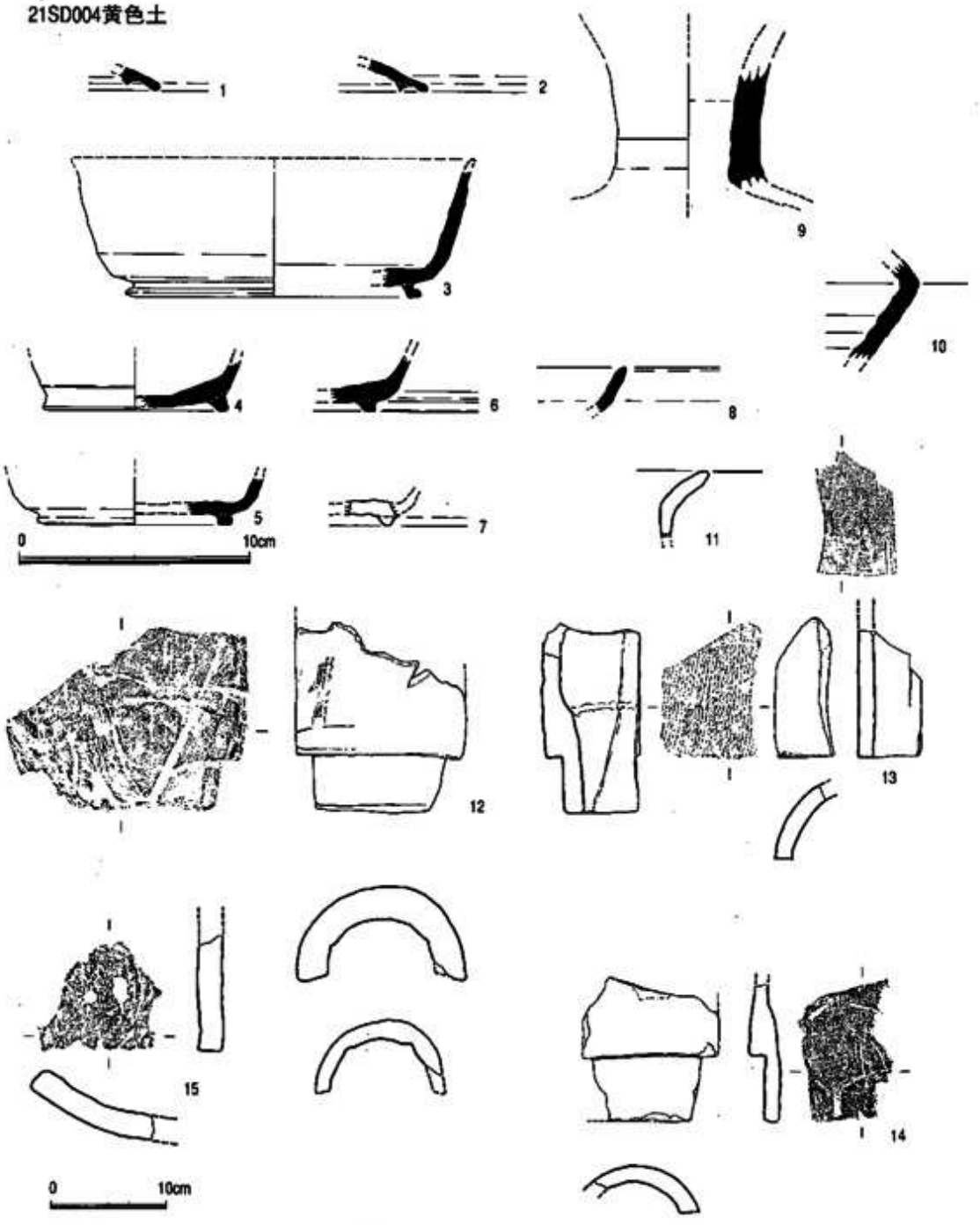
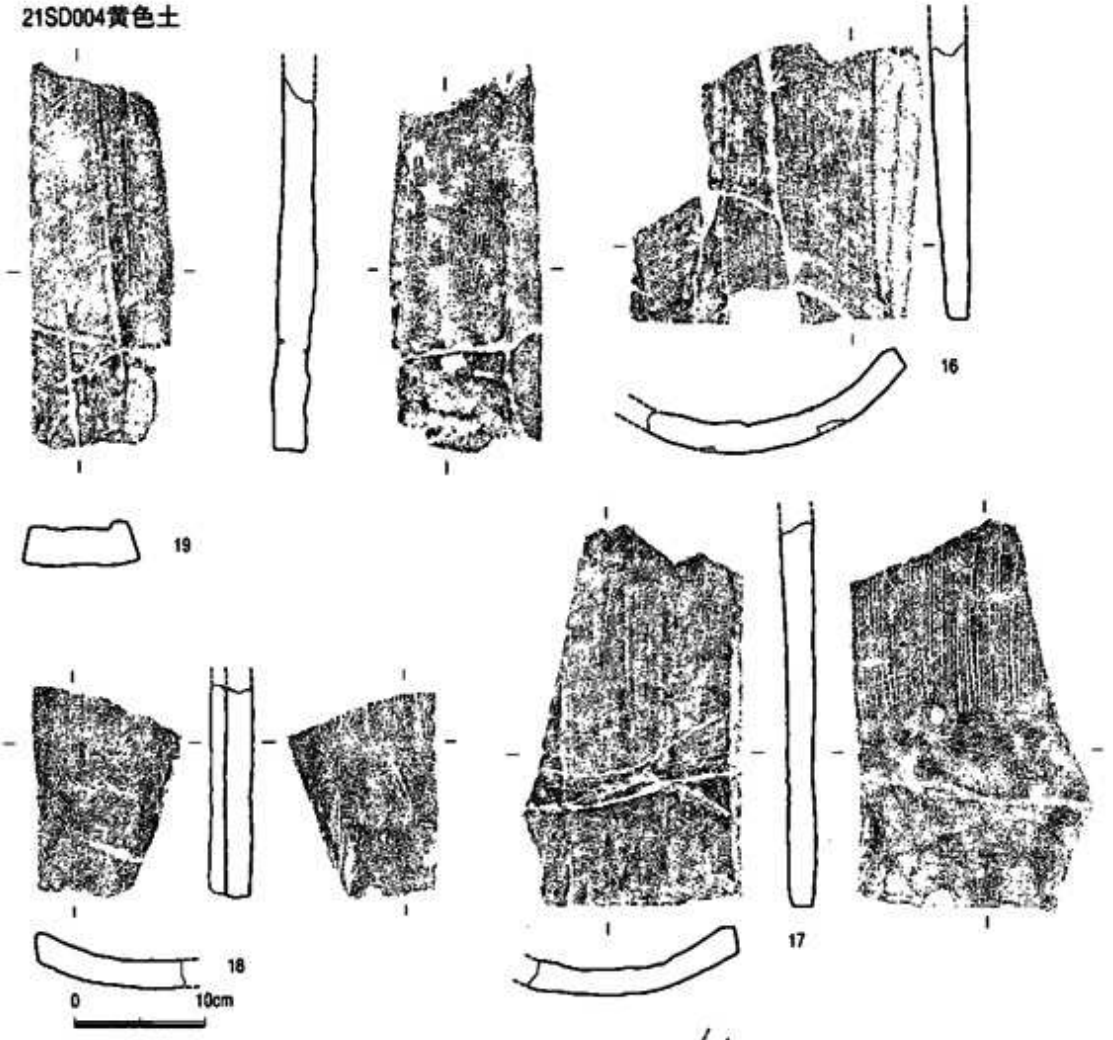


図13. 21SD004黄色土出土遺物実測図（1）（S=1/3・1/6）

『筑前国分寺跡』II
21-1次

21SD004黄色土



21SD004茶黒土

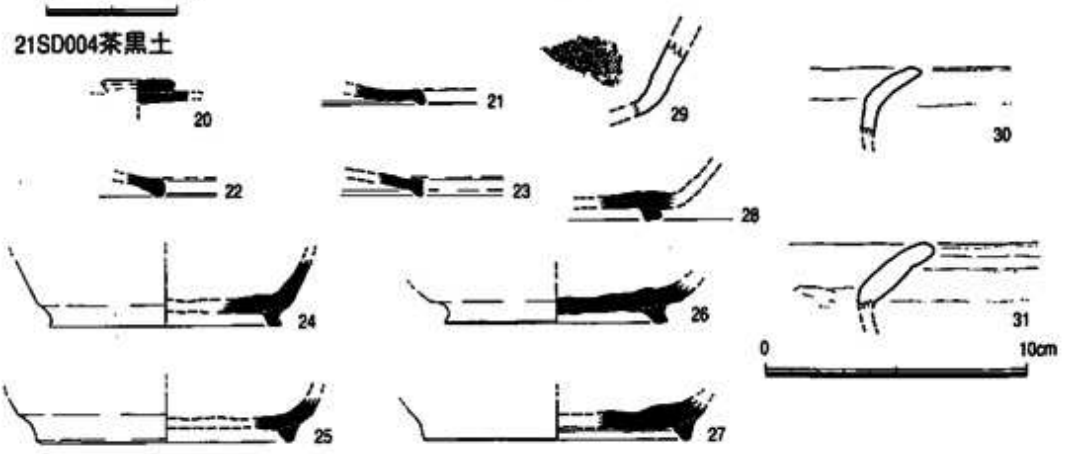


図14. 21SD004黄色土（2）・茶黒色土（1）出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

『筑前国分寺跡』II
21-1次

21SD004茶黒土

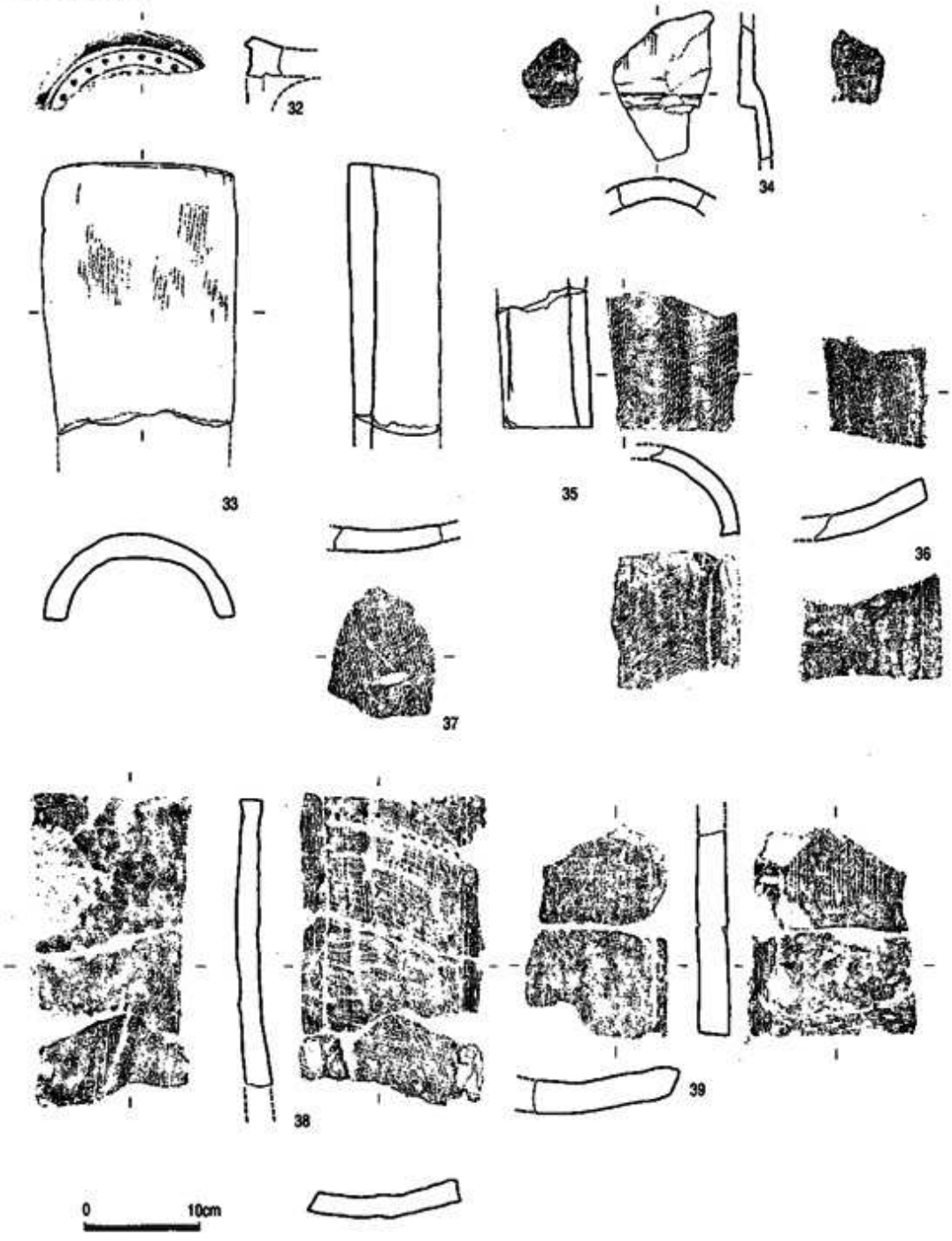


図15. 21SD004茶黒色土出土遺物実測図（2）（S=1/6）

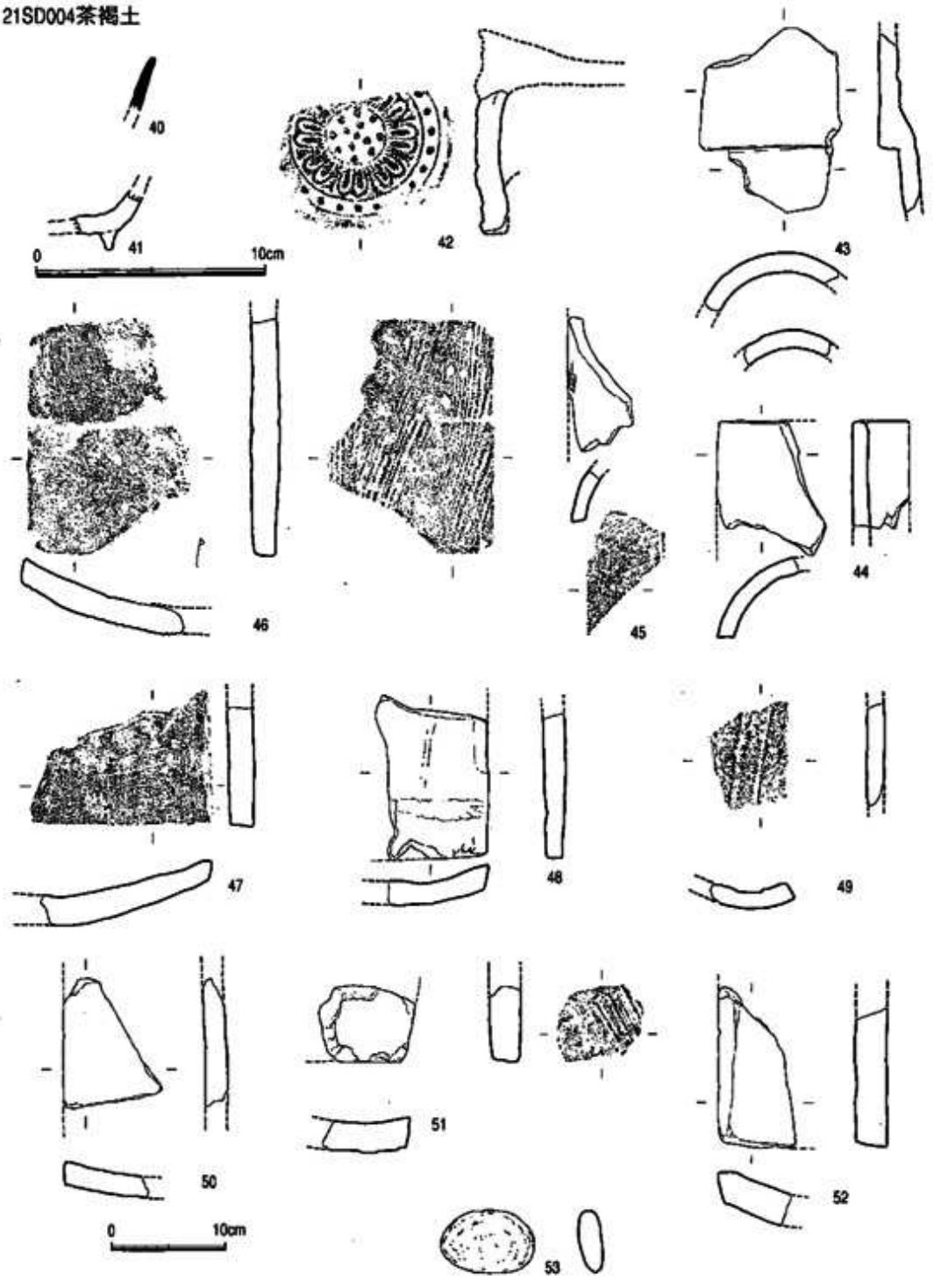


図16. 21SD004茶褐色土出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

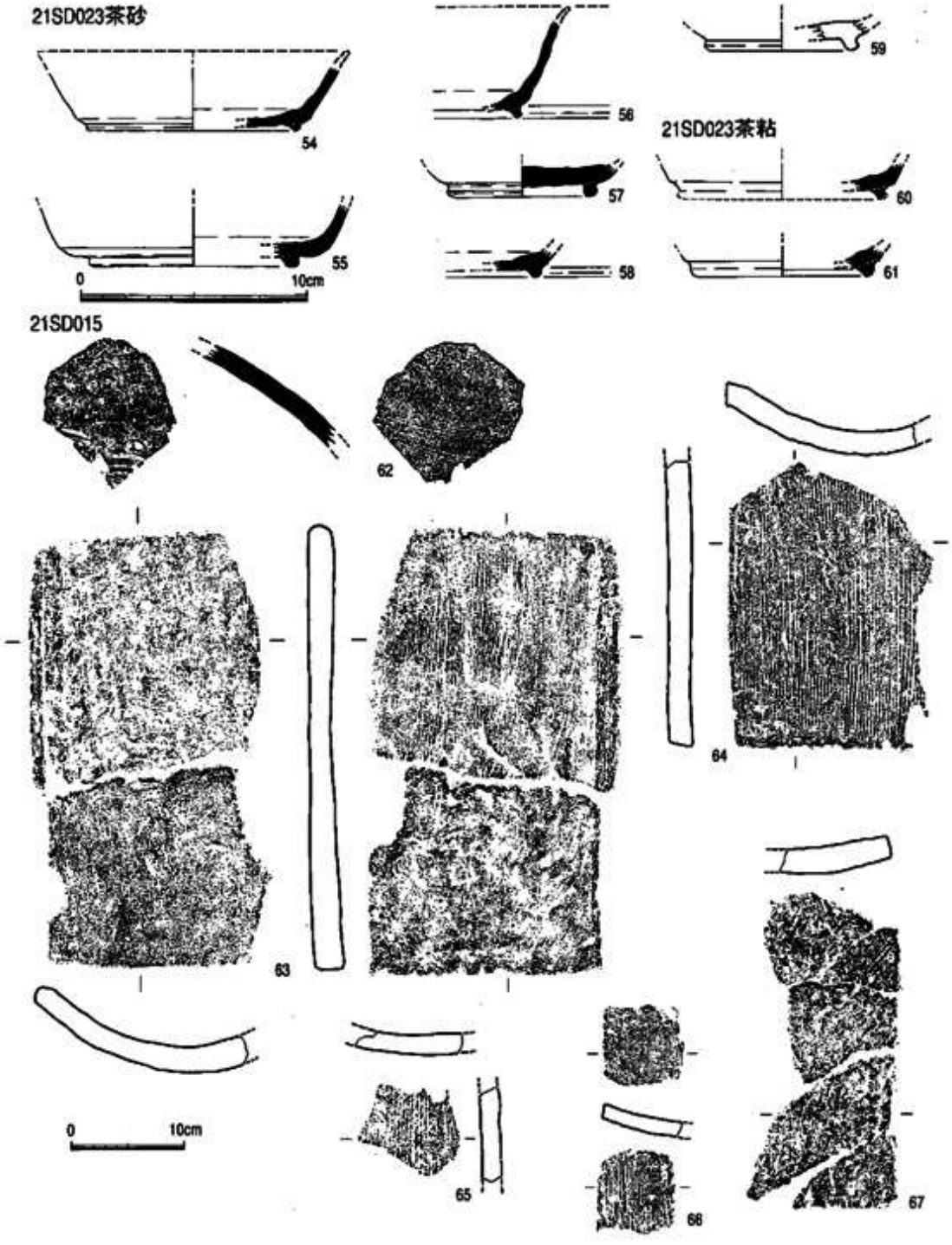


図17. 21SD023茶砂・015(1)出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

『筑前国分寺跡』II
21-1次

の分割界線が残されている。軒丸瓦は二点出土しており、42は中心に1+4+8の珠文を持ち黒色を呈する軟質焼成のものである。裏面は差し込みの痕跡がある。相対的にSX001出土のものに比べて割れ口はシャープである。

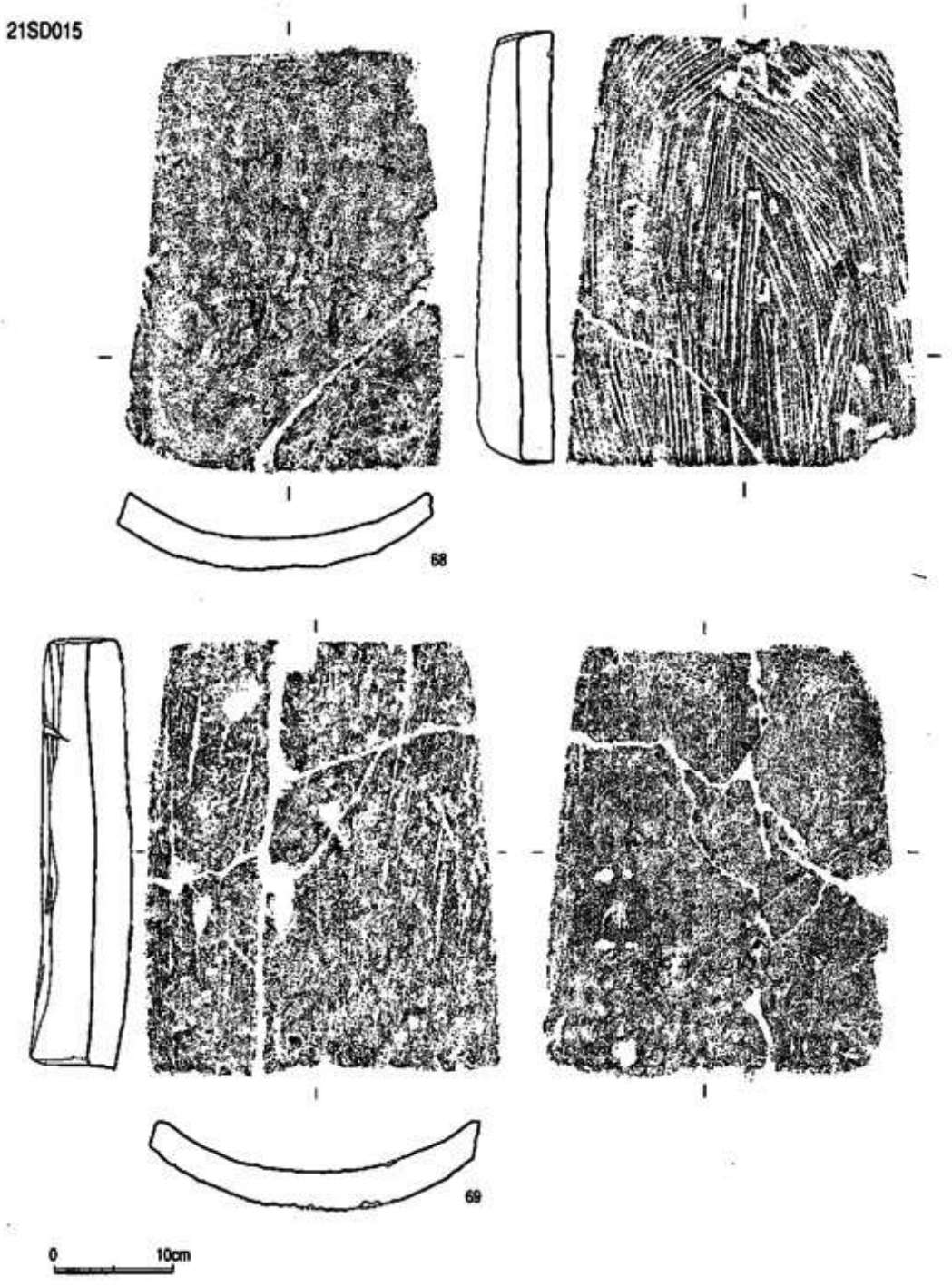


図18. 21SD015出土遺物実測図（2）（S=1/6）

『筑前国分寺跡』II
21-1次

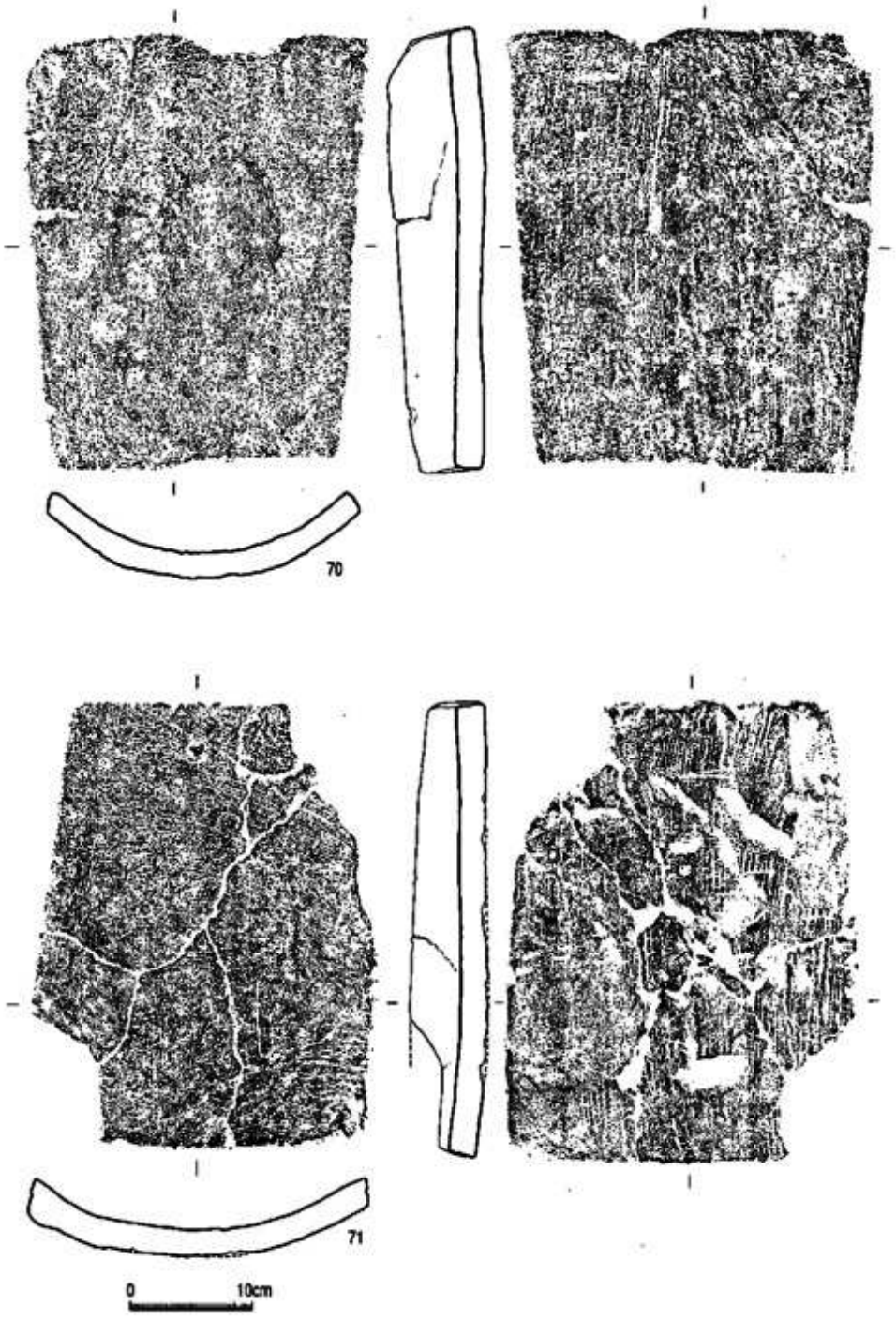


図19. 21SD015出土遺物実測図（3）（S=1/6）

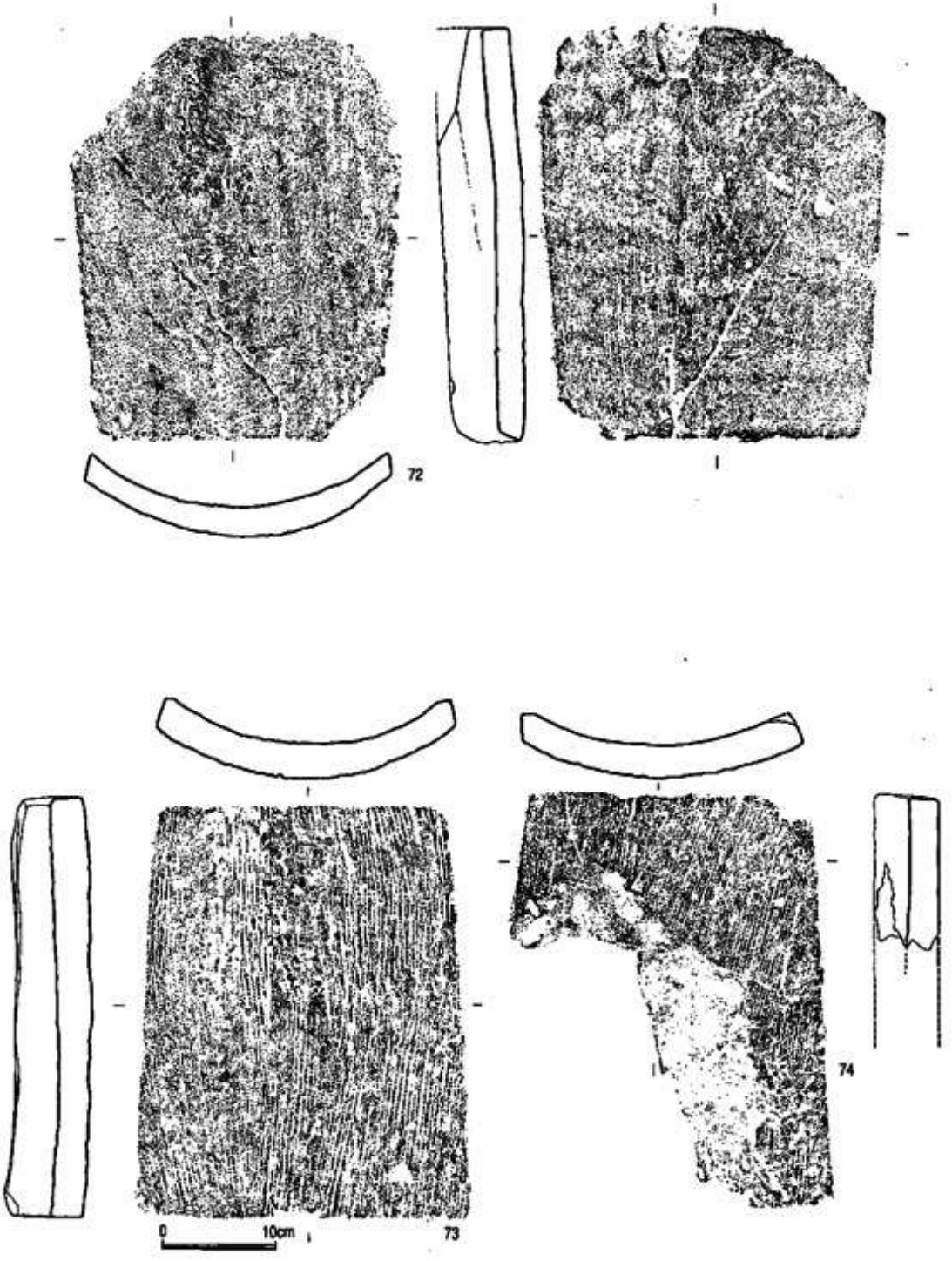


図20. 21SD015出土遺物実測図（4）（S=1/6）

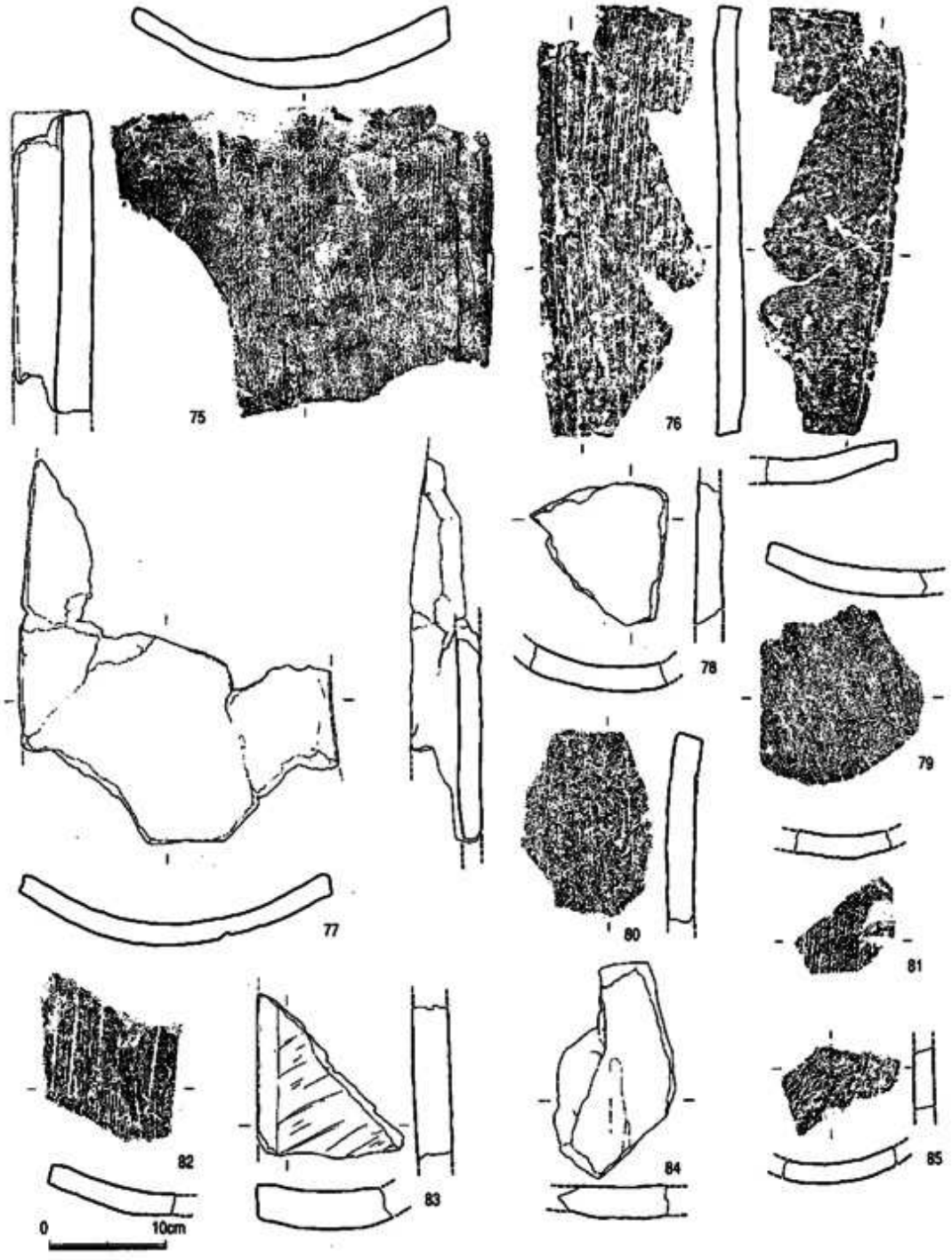


図21. 21SD015出土遺物実測図（5）（S=1/6）

『筑前国分寺跡』II
21-1次

21SD023出土遺物（図17）

須恵器坏片が多く出土している。体部下半のフォルムは直線的なものがあり（54.55.56）高台は幅が狭く華奢なものである。56は口縁が外反している。これらは8世紀中頃から後半の様相を持っている。

21SD015出土遺物（図17～21）

溝の蓋の用途で置かれていたと考えられる平瓦が残状況が比較的良い状態で出土している。長さ36cm前後、幅26cm前後、厚さ約3cmを測り、裏面には縦方向に3分割、横方向に4分割の縄目叩が施される。表面には布の痕跡の奥に縦方向（71）や横方向（69）に移動した弓切りの痕跡が確認される。

21SX001茶褐土

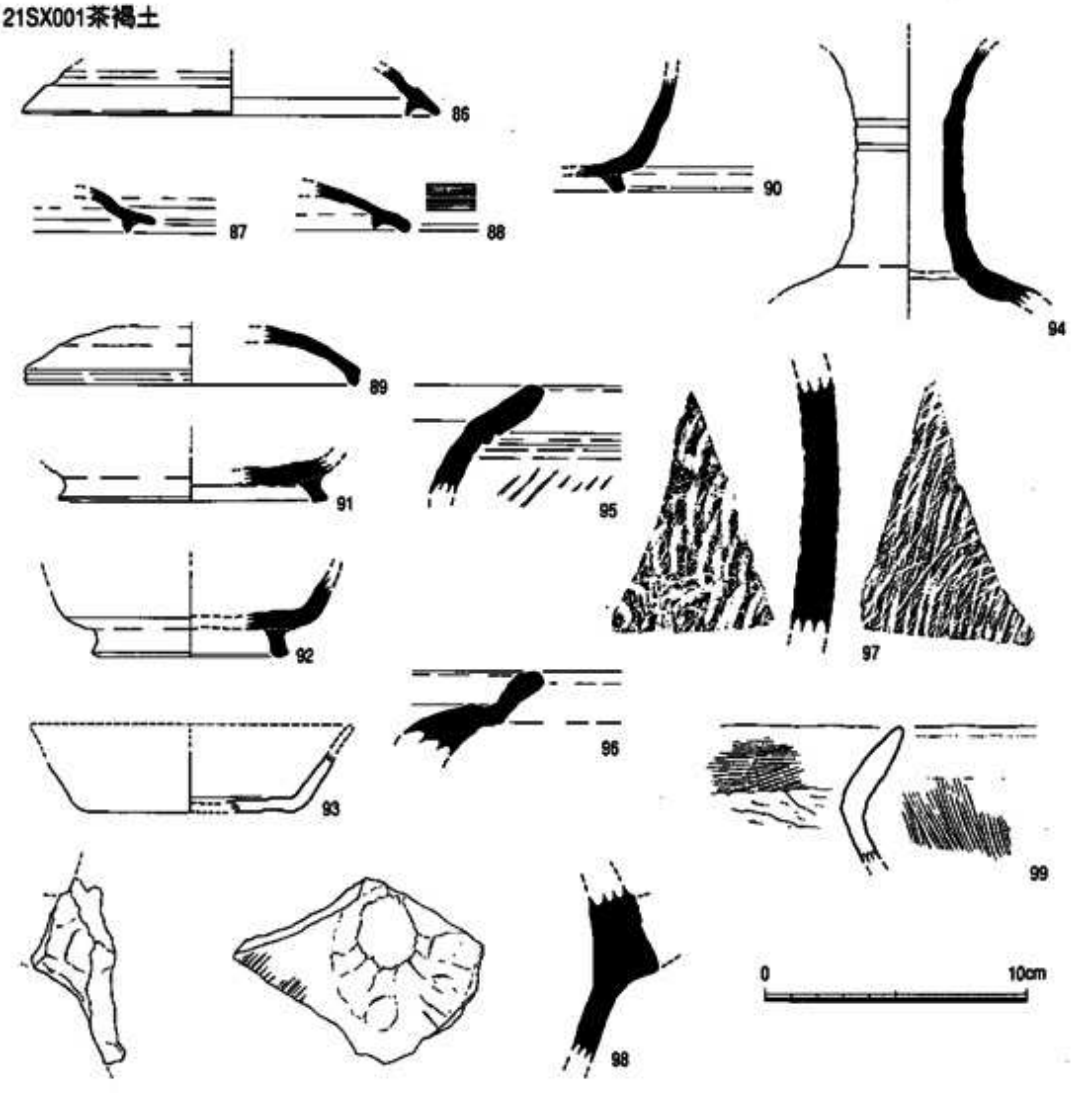


図22. 21SX001茶褐色土出土遺物実測図（1）（S=1/3）

『筑前国分寺跡』II
21-1次

21SX001茶褐土

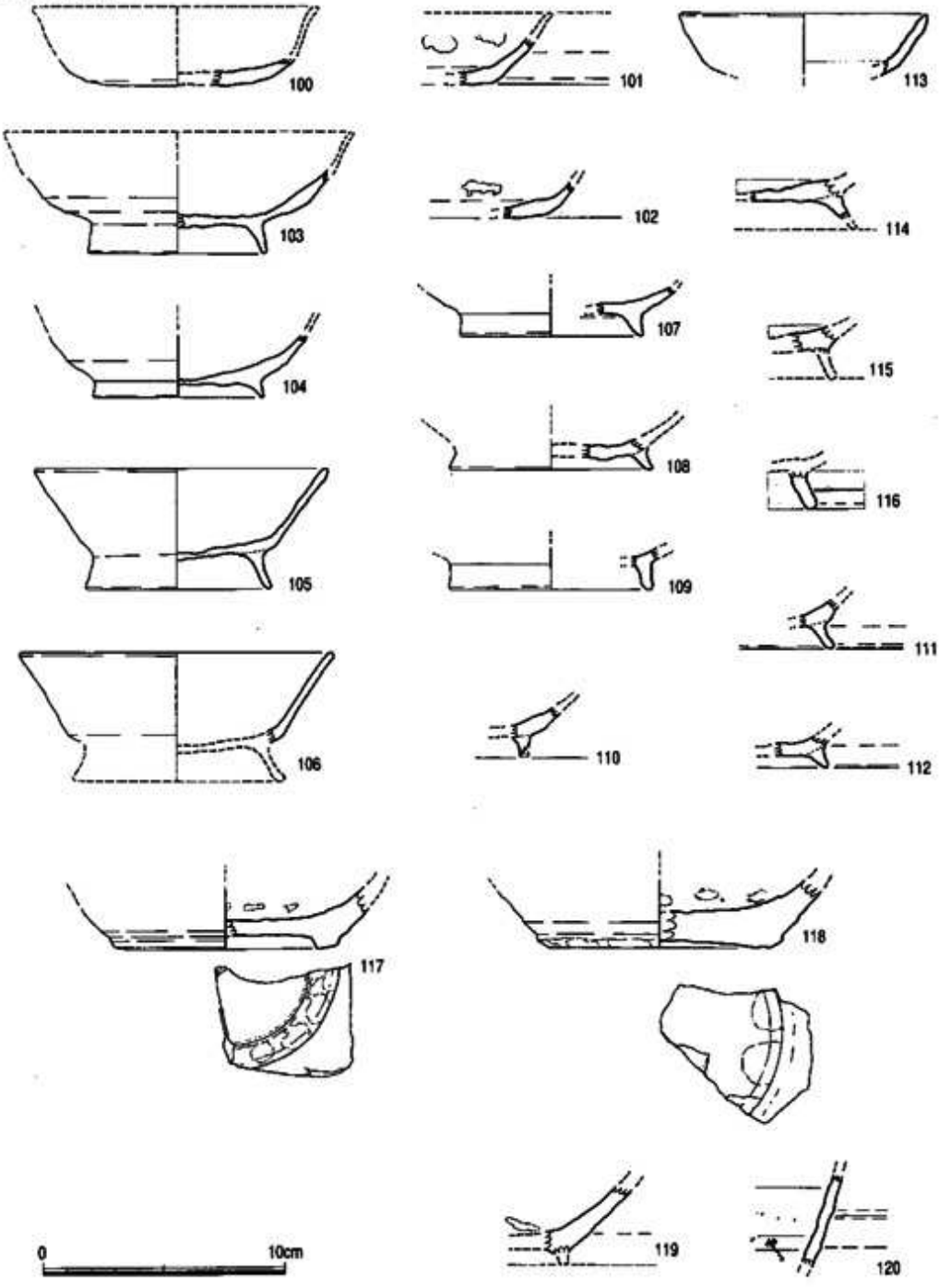


図23. 21SX001茶褐色土出土遺物実測図（2）（S=1/3）

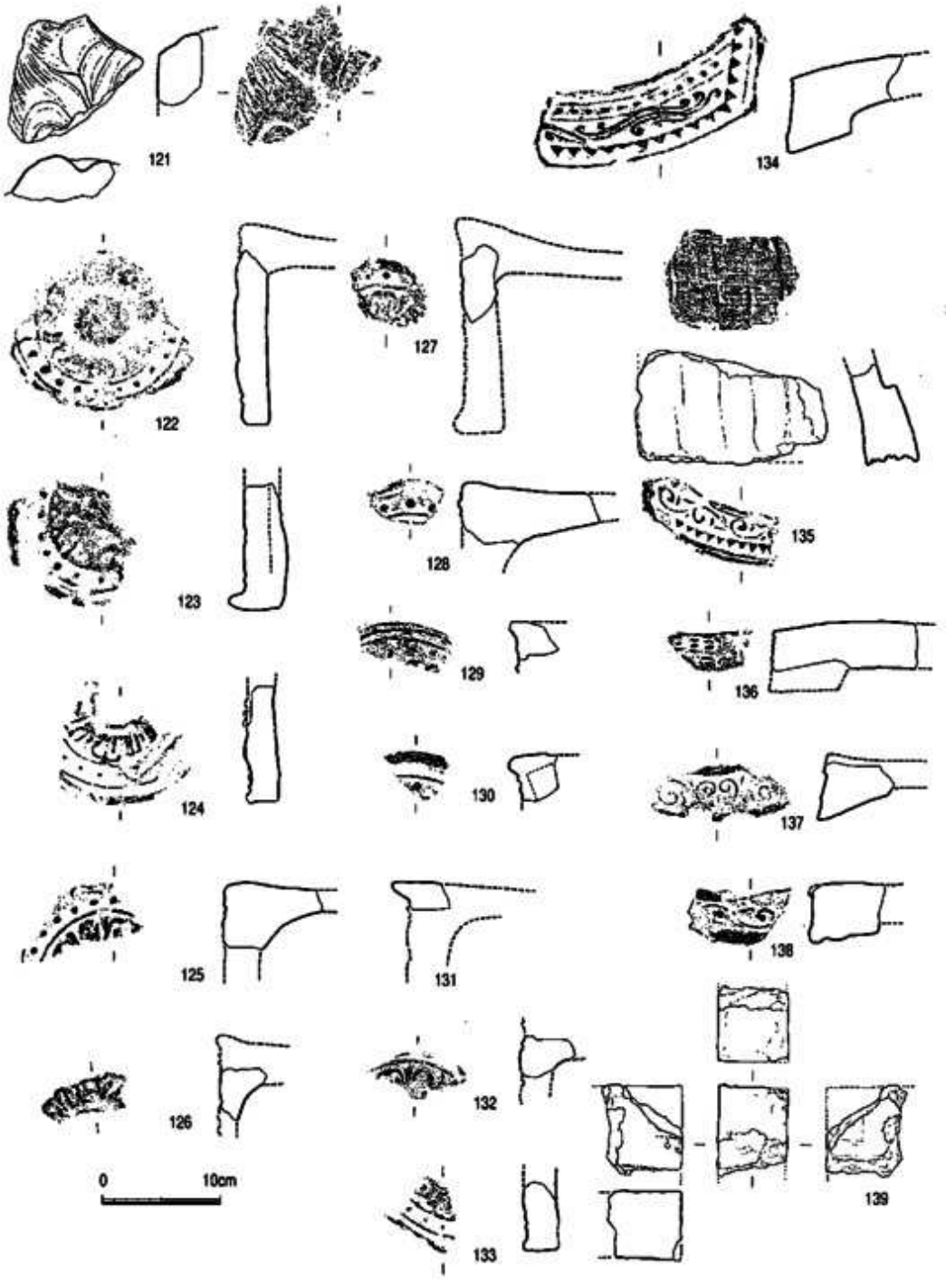


図24. 21SX001茶褐色土出土遺物実測図（3）（S=1/6）

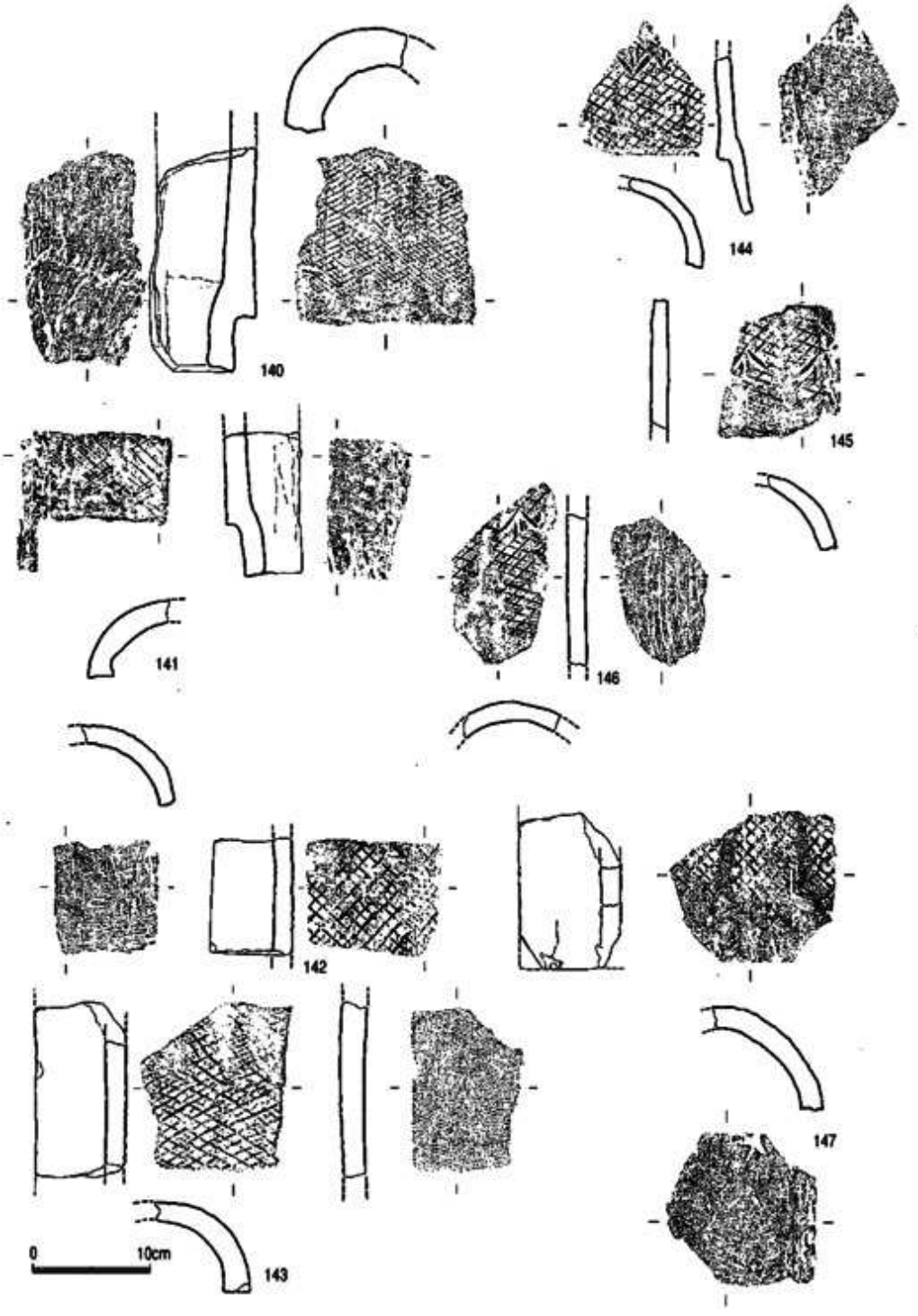


図25. 21SX001茶褐色土出土遺物実測図（4）（S=1/6）

『筑前国分寺跡』II
21-1次

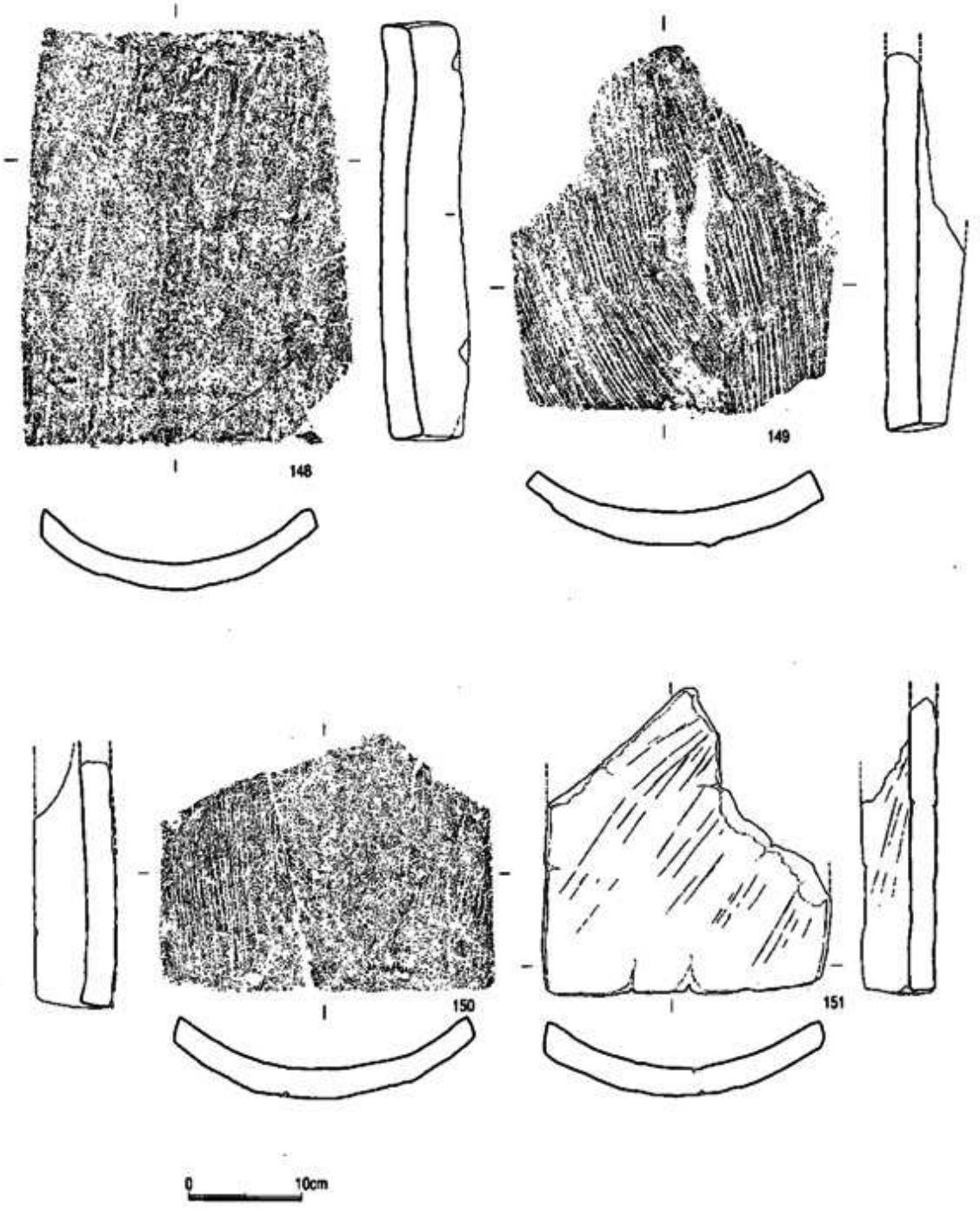


図26. 21SX001茶褐色土出土遺物実測図（5）(S=1/6)

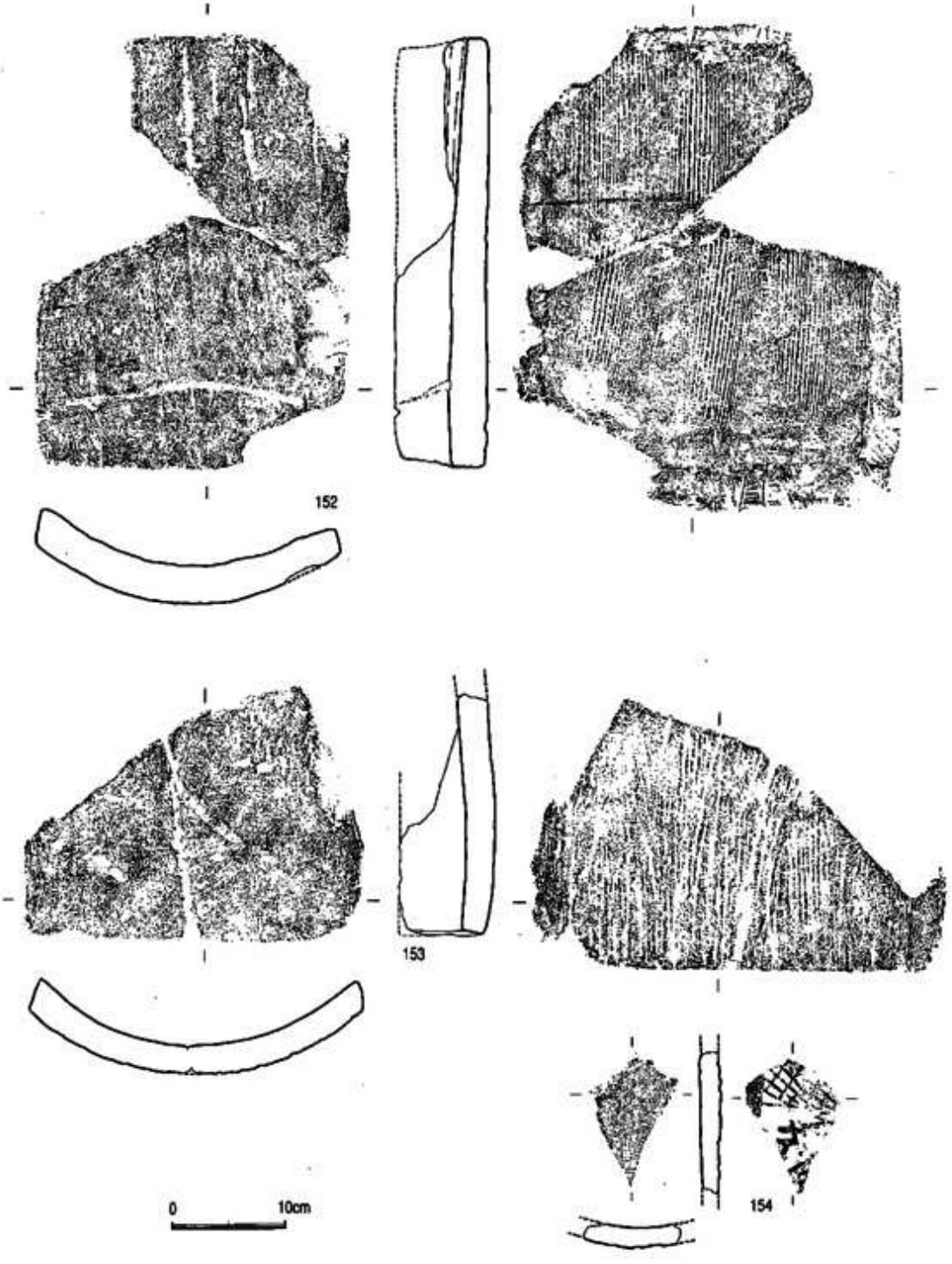


図27. 21SX001茶褐色土出土遺物実測図（6）（S=1/6）

21SX001 茶褐土

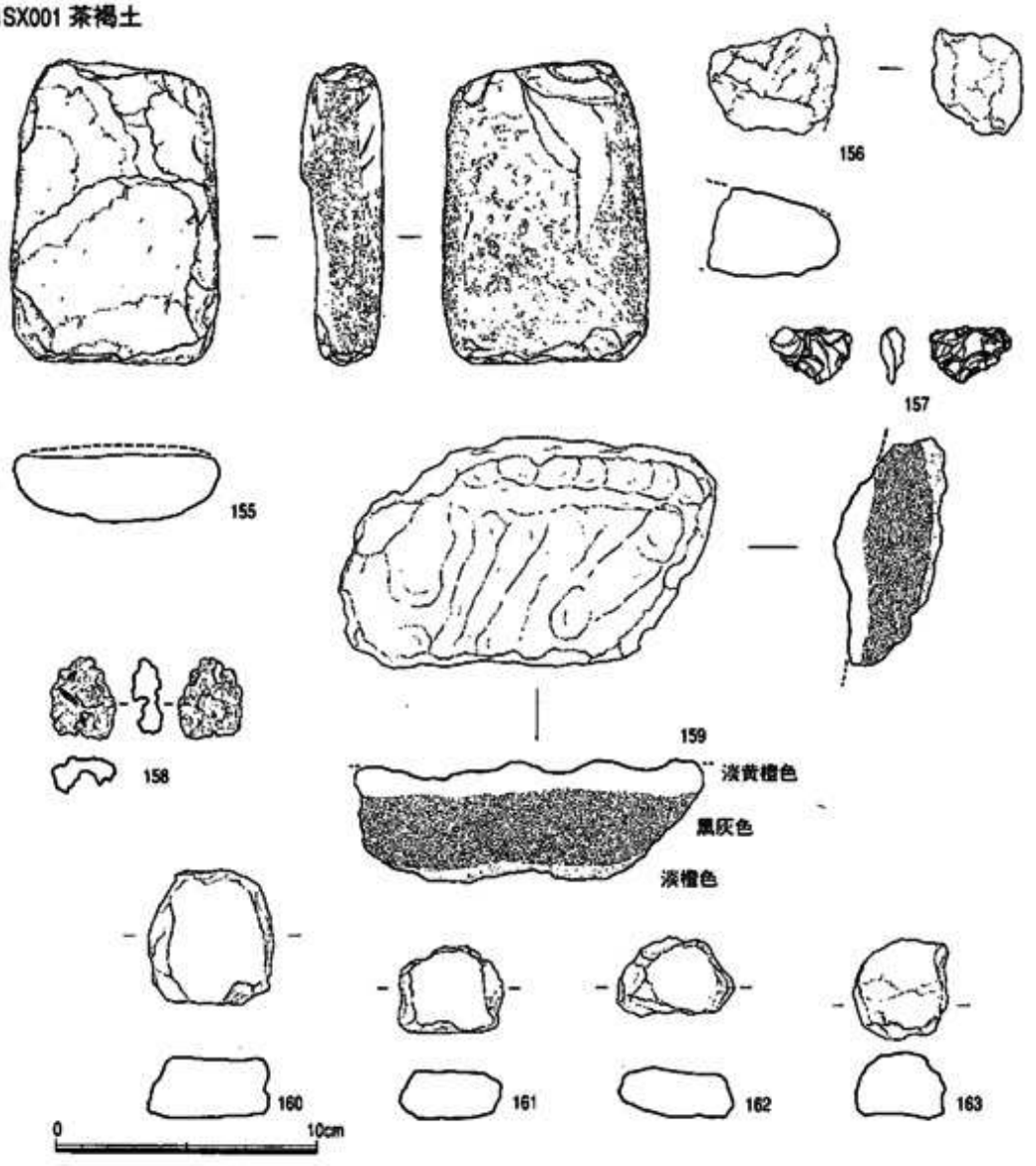


図28. 21SX001茶褐色土出土遺物実測図（7）（S=1/3）

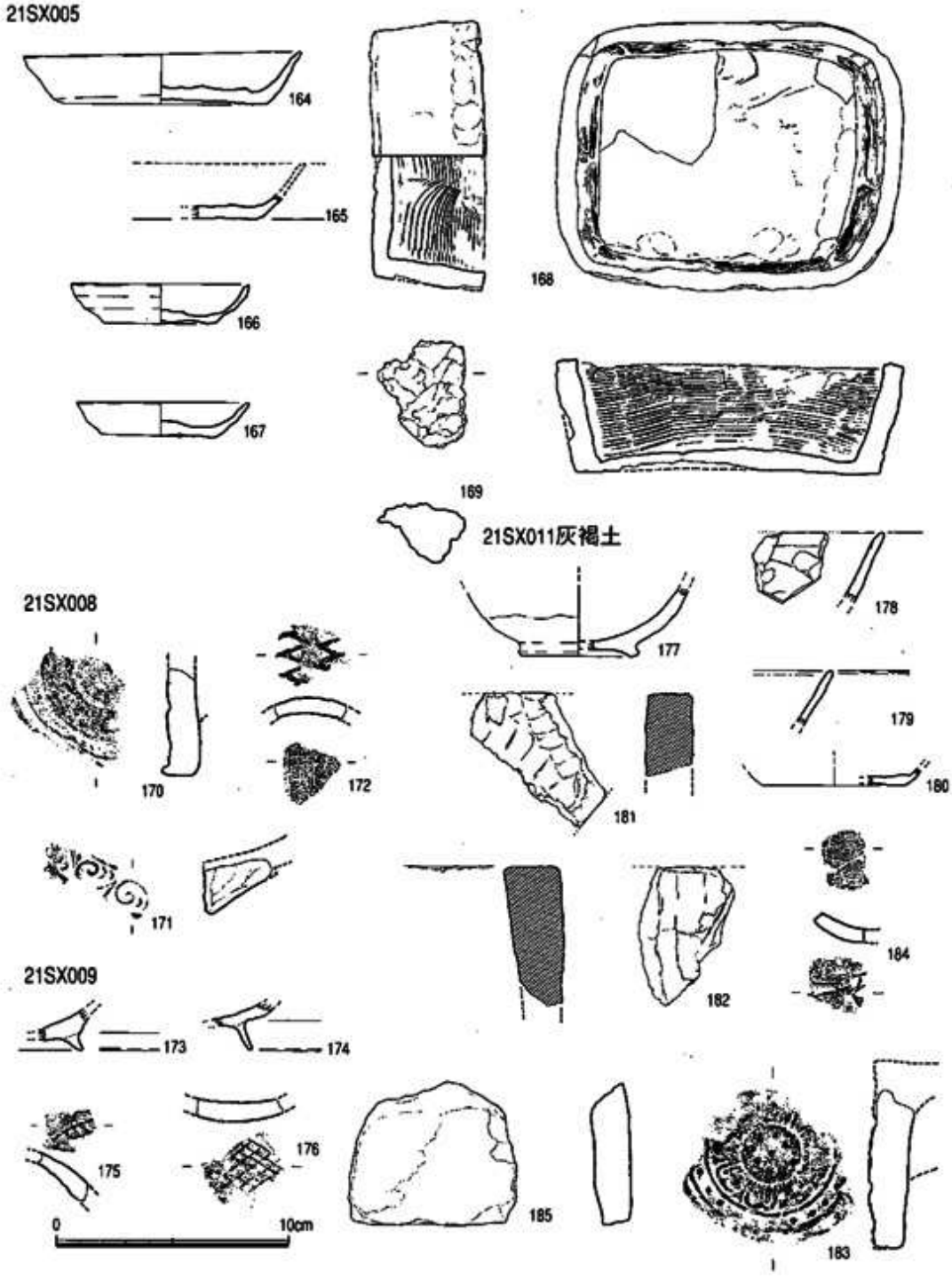


図29. 21SX005・008・009・011灰褐土出土遺物実測図（S=1/3）

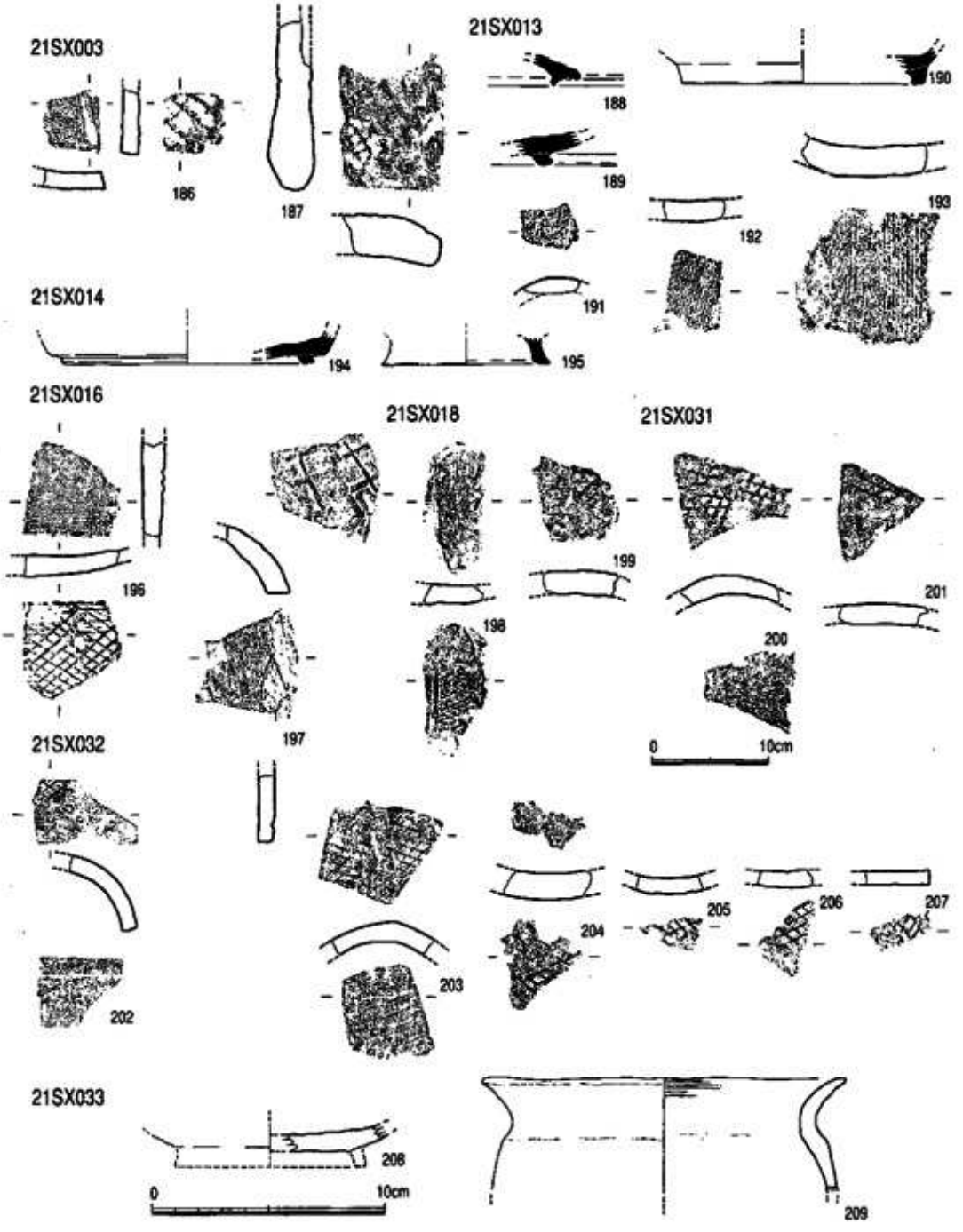


図30. 21SX003・013・014・016・018・031・032・033出土遺物実測図（S=1/6・1/3）

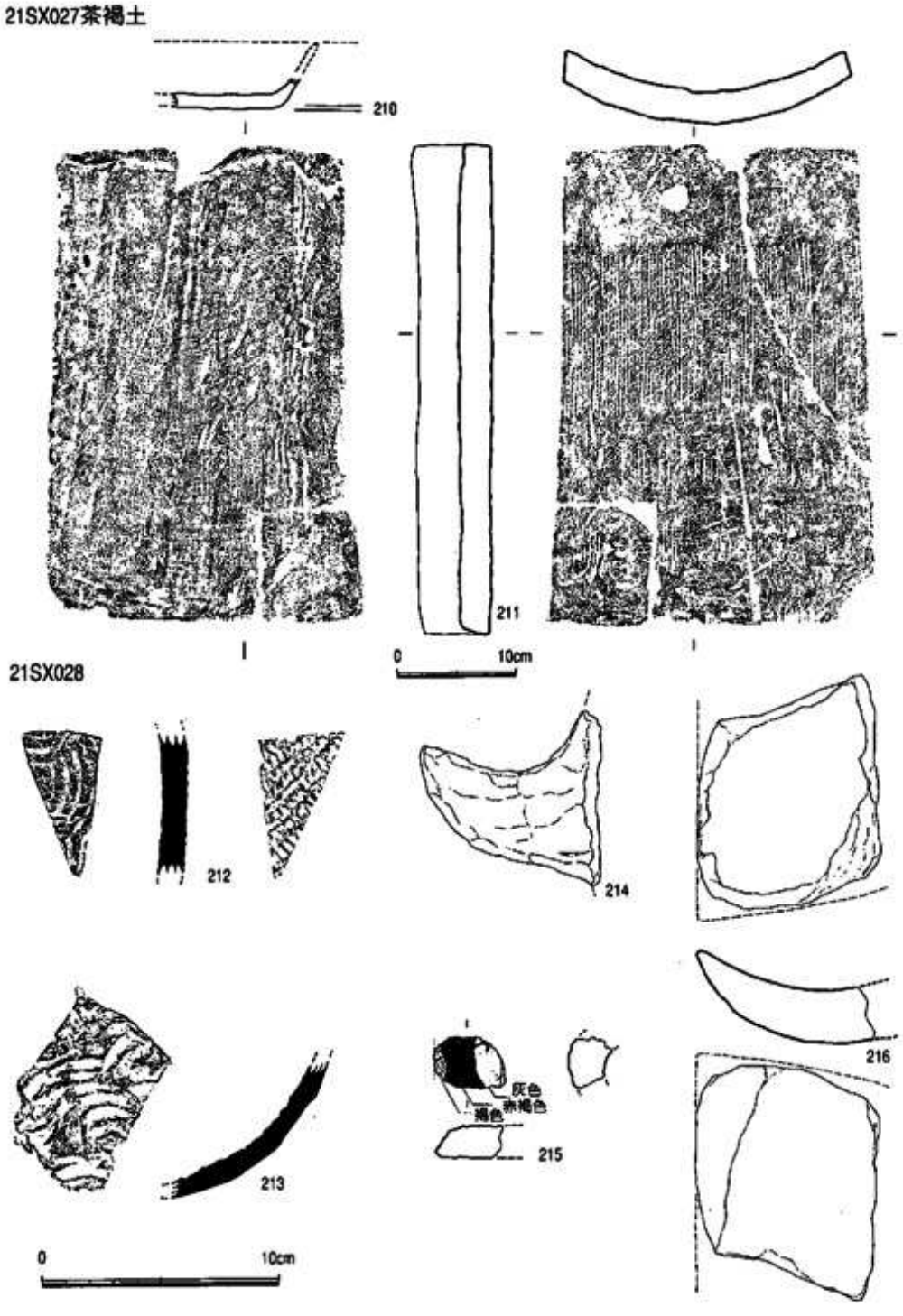


図31. 21SX027茶褐土・028（1）出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

21-1次

21SX028

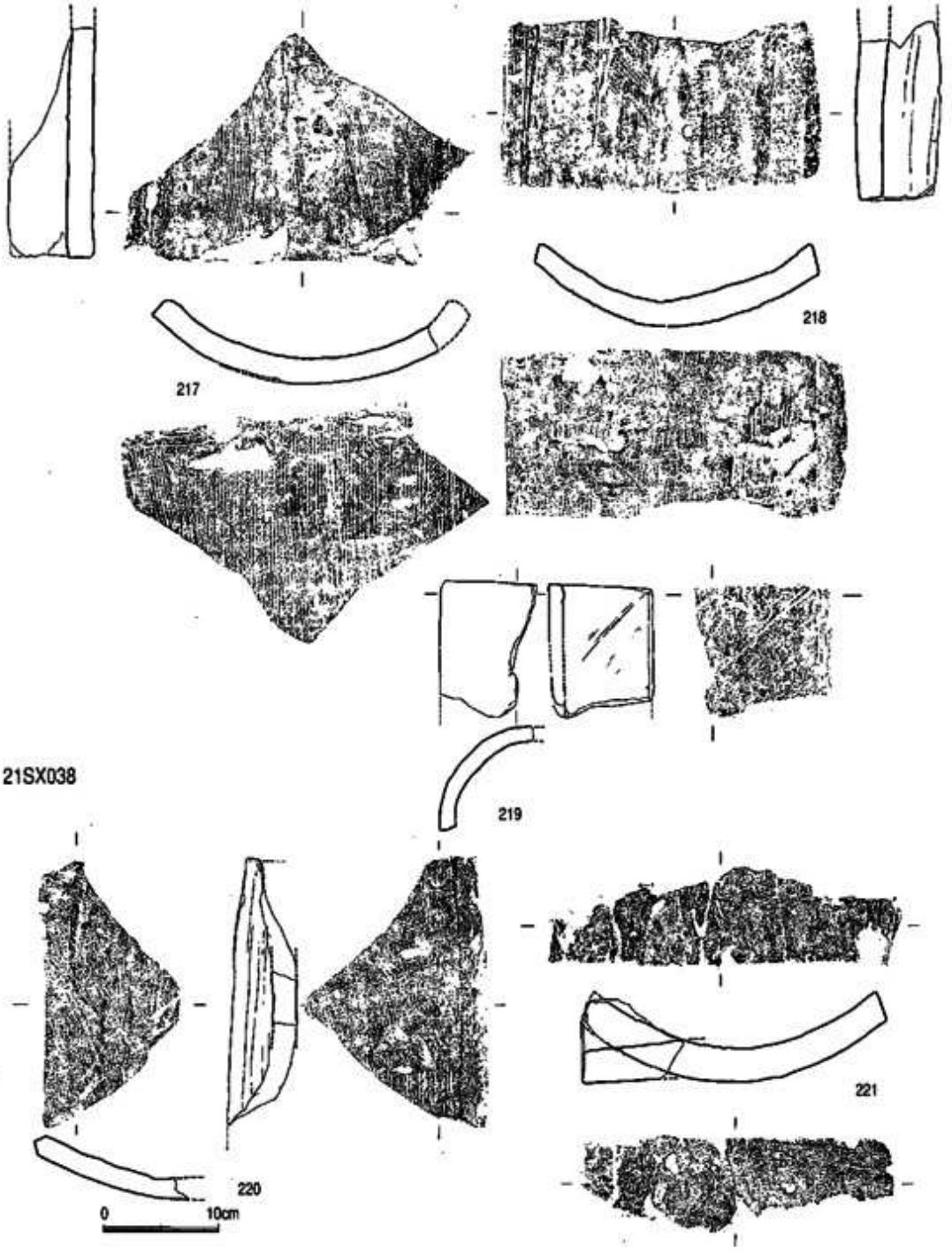


図32. 21SX028（2）・038（1）出土遺物実測図（S=1/6）

21SX038

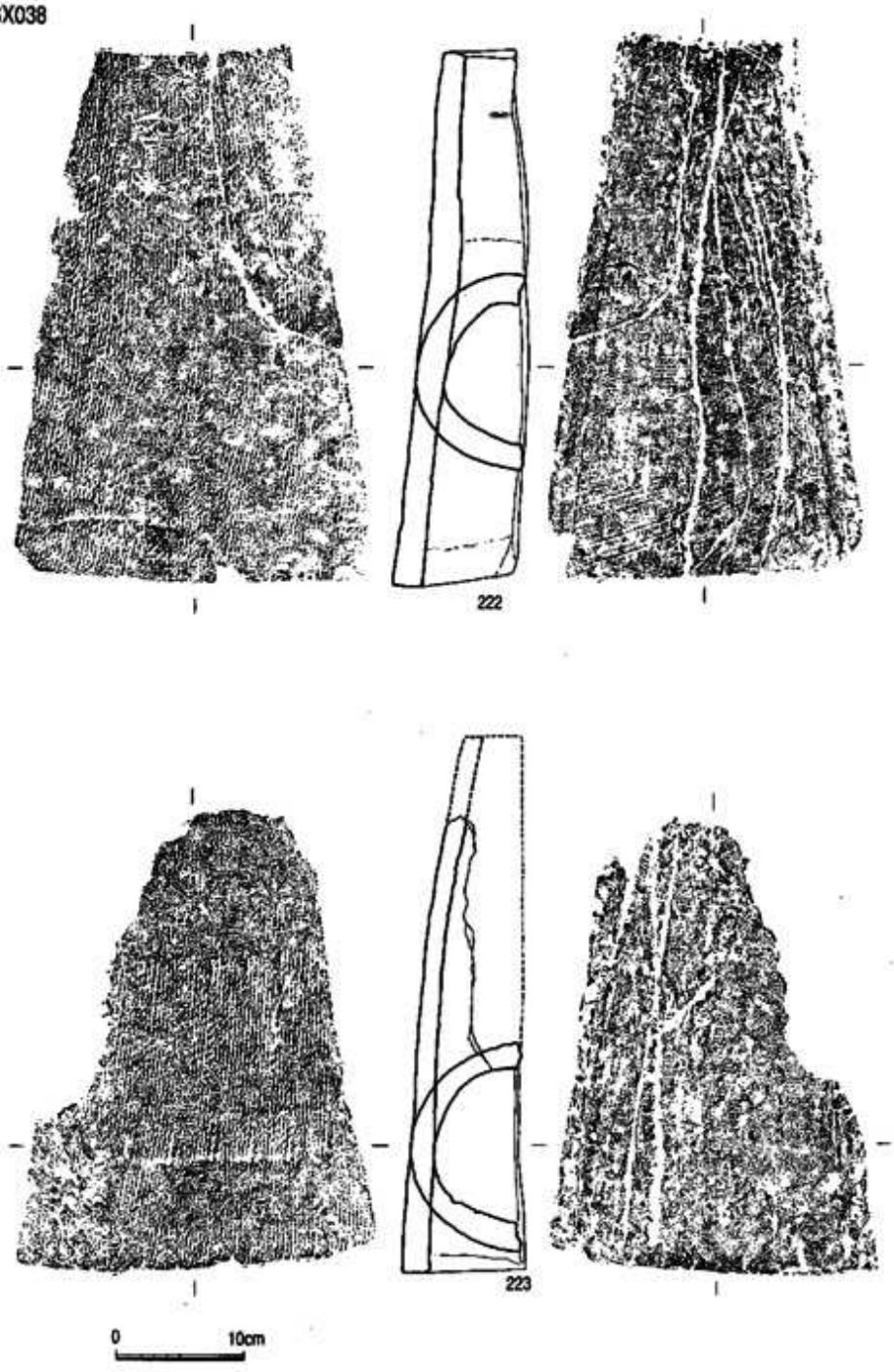


図33. 21SX038出土遺物実測図（2）（S=1/6）

21茶色土

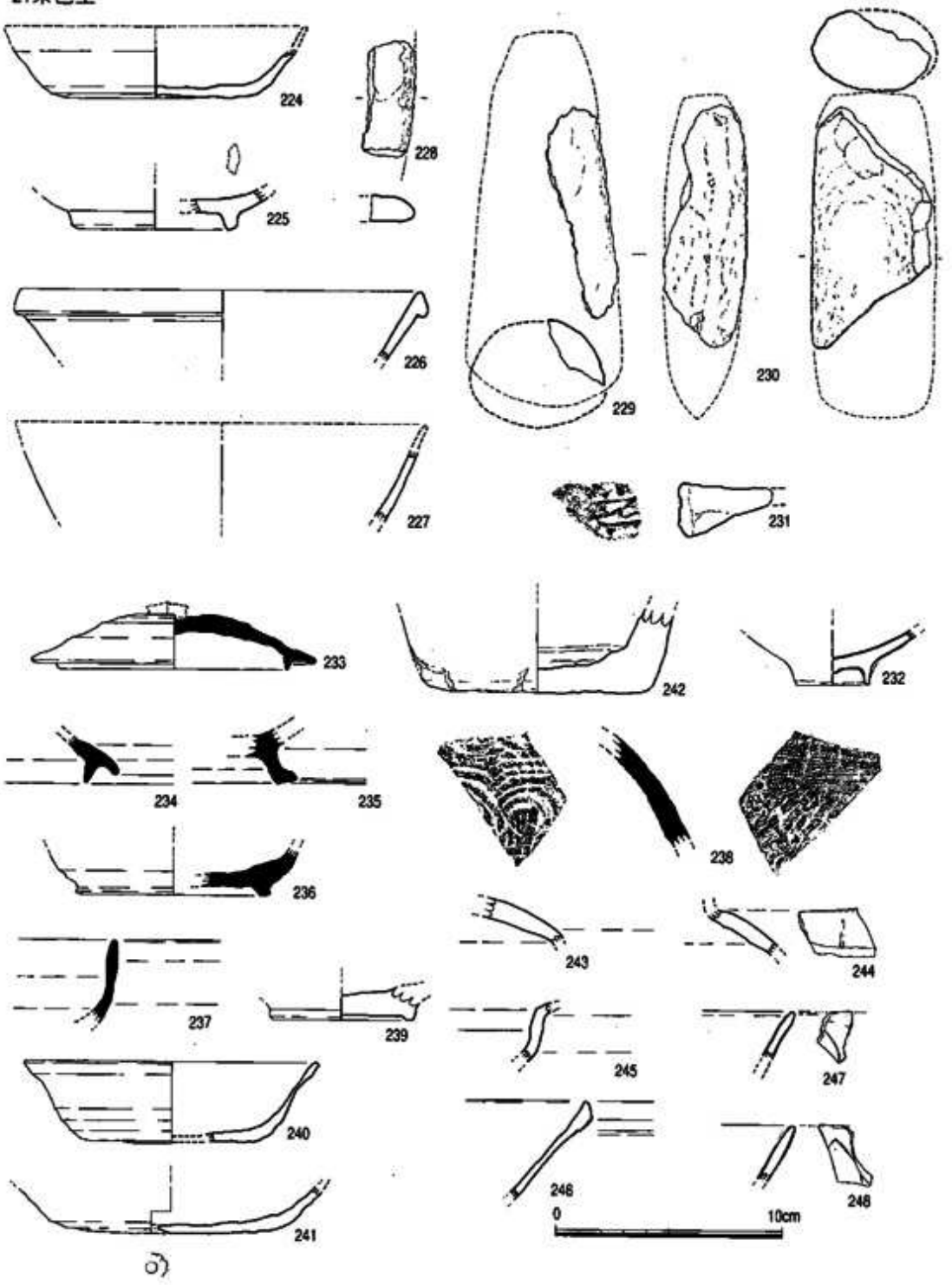


図34. 茶色土・灰色土・茶褐土（1）出土遺物実測図（S=1/3）

21茶褐土

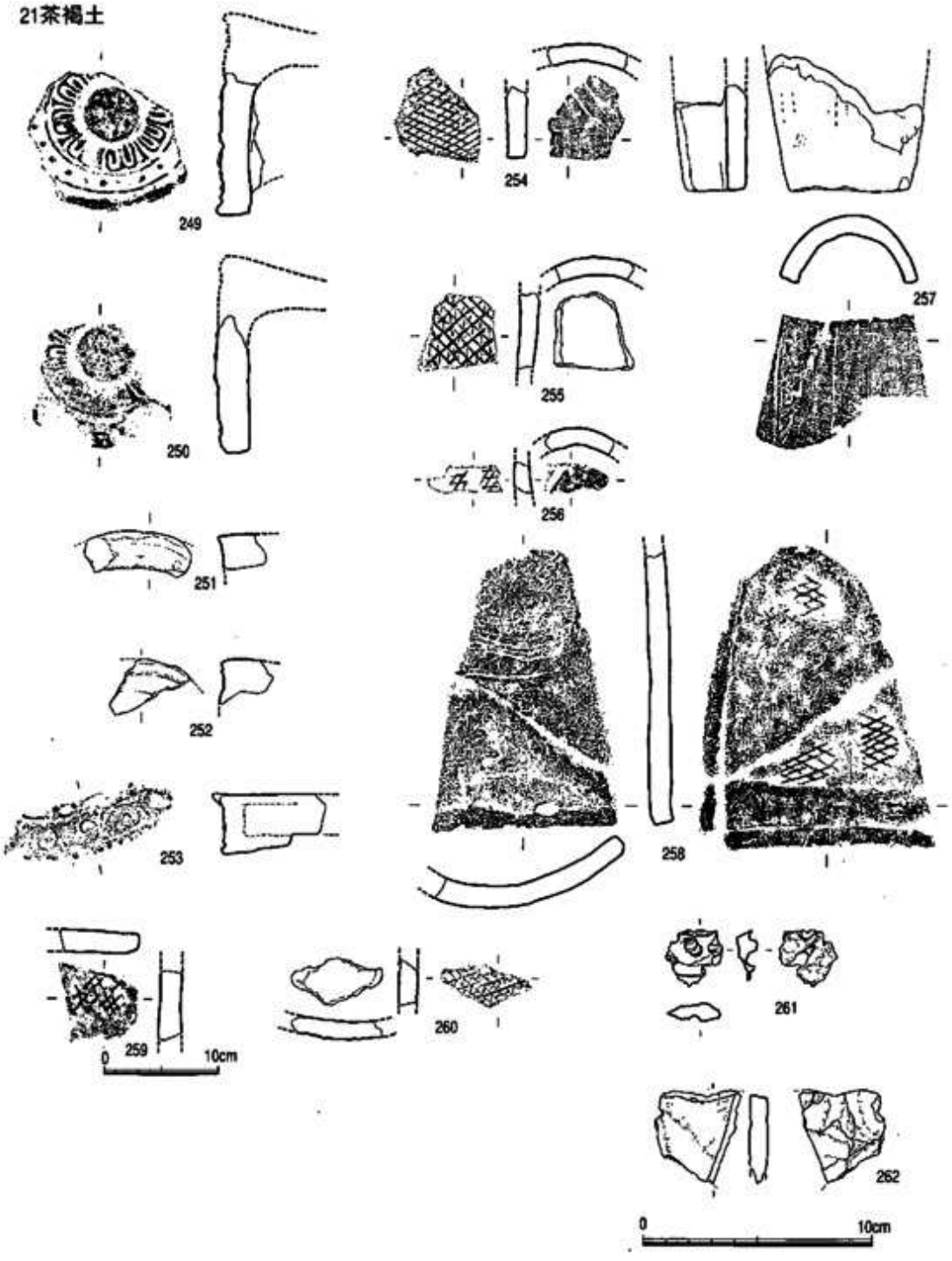


図35. 茶褐土出土遺物実測図（2）（S=1/6・1/3）

21-1次

21SX001茶褐土出土遺物（図22～28）

須恵器、土師器、瓦、石器、土製品、鉱滓が出土している。須恵器は8世紀前半から中頃に位置付けられる一群があり（86～95,98）、土師器甕のその時期のものか。一方、土師器には高台の付く椀があり（103～112）、直線的な体部のもの（105,106）と体部が丸くなる傾向が見られるもの（103,104）がある。この遺構の埋没時期はこの土器群が時期的な下限を示しており、その時期は10世紀初頭頃に相当する。少量の黒色土器A（113～115）とB（116）と越州窯系青磁椀I類（117～119）と壺（120）の小片が見られる。

瓦には鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦、無文塼、平瓦、丸瓦がある。鬼瓦は都府楼系の左目尻部分の破片である。軒丸瓦は鴻臚館系のもので占められる。軒平瓦には老司系（134）と鴻臚館系の二者がある。この遺構での平瓦、丸瓦に見られる叩き目の傾向は縄目叩対格子叩ではほぼ10対1の割で縄目叩が圧倒している（21次包含層の茶褐土では4.7対1、出土遺物相対では7.4対1の割合である。表２・３参照）。この10世紀初頭を下限とする埋没環境の資料群では1割の頻度で格子叩の瓦が存在することが判明した。格子目叩は今のところ基本的には8世紀には見られず、9世紀に入って本格的に導入されたものと考えられ、11世紀には大勢を占める様子が太宰府天満宮境内1次調査で明らかにされている。ここでは天満宮1次調査での分類手法を基にし、破片資料で占められる資料群のため全体の文様がつかめないことから分類項目を追加して分類をおこない、それぞれの類の数をカウントした（図38・39）。ここでは正格子（A2,A3類）、横長斜格子の中（C2類）、横長斜格子の小（C3類）、横長斜格子の中と正格子が供伴するもの（D類）の4種が目立って出土している（図39）。ほかに瓦を打ち欠いて円形にした瓦玉4点も見つかっている。

石器には弥生期のものと見られる玄武岩製の石斧がある（155）。刃先は階段状に剥離欠損しているが、先端は打具として二次的に使用されている。今山産の製品に比べ扁平度が高い。159は表面に指で撫でた軌跡が残る焼土塊である。色調により三層構造をなしている。用途は不明。158は炭やスサを含んだ鉱滓である。

21SX005出土遺物（図29）

土師器坏aが2点（164,165）、小皿a（166,167）が2点、土師器の箱形の鉢（168）1点と焼土塊（169）が出土している。法量から太宰府XX期ないしそれ以降に位置付けられ、年代は15世紀前半頃を想定している。箱形の鉢は体部に粗いハケの痕跡を残す。被熱して使用状況は分からないが、手あぶり火鉢のような用途が想定される。大分県伐株山城跡、広島県薬師城跡などに類例があり、広域に存在する形状である。

21SX009出土遺物（図29）

磨耗した土師器椀cの高台部分が2点（173,174）出土している。174は体部下半に下膨れの屈

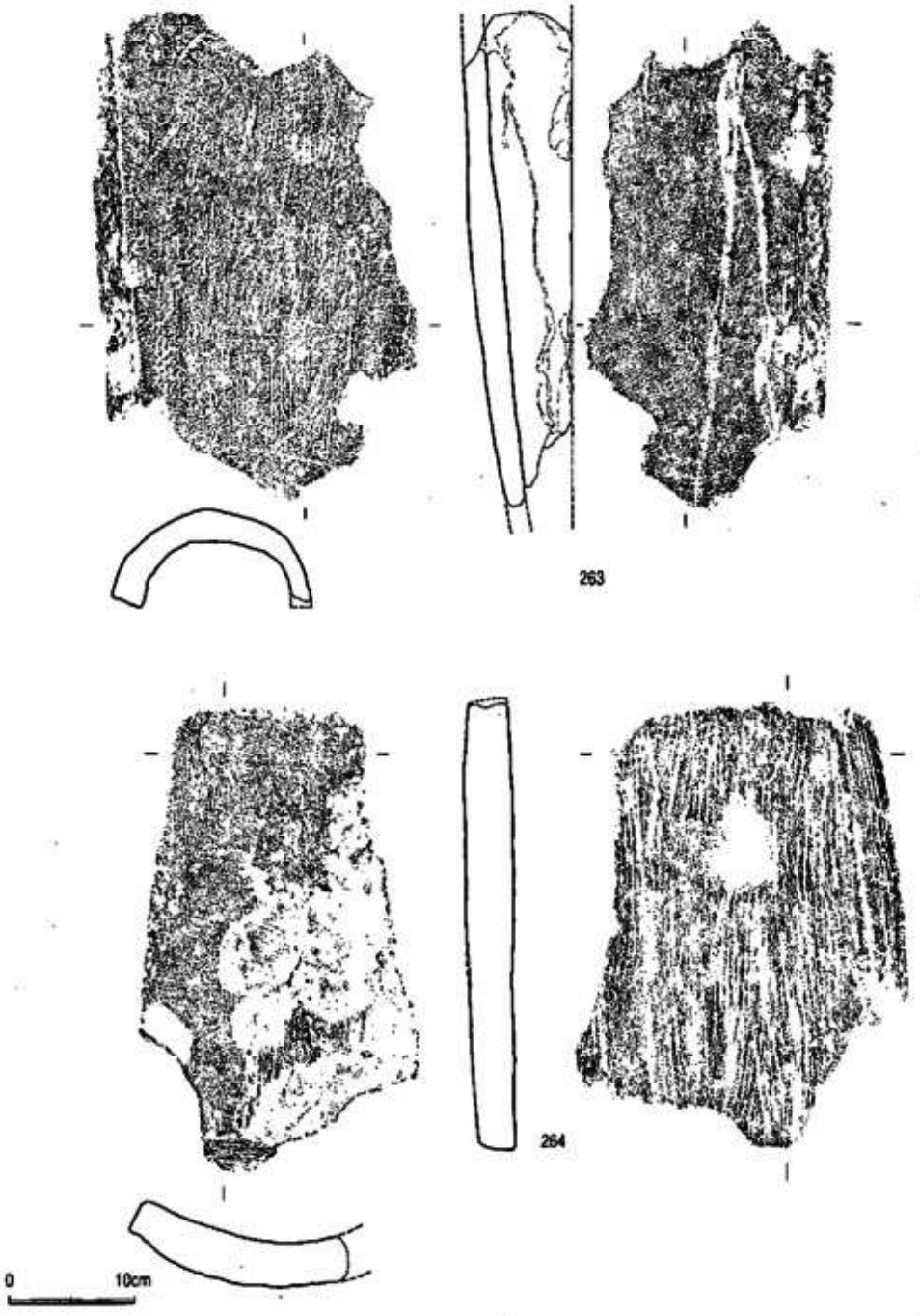


図36. 茶褐土出土遺物実測図（3）（S=1/6）

曲が見られ、丸椀の傾向を示している。9世紀後半から10世紀前半に置かれる。

21SX011出土遺物（図29）　龍泉窯系青磁椀片（178）、白磁IX類坏片（179,180）など13世紀代の陶磁器の他に乳灰色の光沢のある釉を掛けた唐津系の雑釉陶器椀が出土している（177）。胎土表面は鉄分が発色した光沢のある茶褐色を呈し、芯はザラザラの淡褐色の土に白色の砂粒が若干含まれている。

その他の遺構出土遺物（図30～33）

SX033では内面に斑状のむらを持つ淡緑色の釉を持つ東海系の皿（K14タイプか）が出土している。SX038では完形の玉縁がない丸瓦が出土している。

土層出土遺物

茶色土出土遺物（図34）

SX010南側に堆積した土層から出土した遺物。越州窯系青磁椀（225,227）、白磁IV類椀（226）など平安後期に下る陶磁器が出土している。石斧は緑色片岩製（229）と玄武岩製（230）の二者がある。いずれも剥片状ないし先端が欠損した破砕品である。230の表面には敲打痕跡が残る。

茶褐土出土遺物（図34～36）

全般的に遺構出土の遺物と同様の種類のものが出土している。須恵器は7世紀後半ないし8世紀前半のもの（233～236）から土師器は丸底化しつつある坏a（241）が、陶磁器には越州窯系青磁壺（244）、龍泉窯系青磁椀I-5-B類椀（247.248）、白磁IV類椀（246）などである。瓦当を持つ軒瓦はすべて鴻臚館系のものである（249.250.253）。石器類には黒曜石製（261）と安山岩製（262）の剥片が見られる。

Aトレンチ茶褐土出土遺物（図37）

8世紀代中頃の須恵器（265～269）と土師器甕（272～274）がこの地点でも一定量出土している。越州窯系青磁片（276.277）も本調査区同様に出土している。

5、小結

A.検出された主要遺構

1　調査区南で幅約3mの国分寺の南辺築地SX010

2　築地の西端に接し北に延びる掘立柱列SA020

3　それに平行する小ピット列SA030

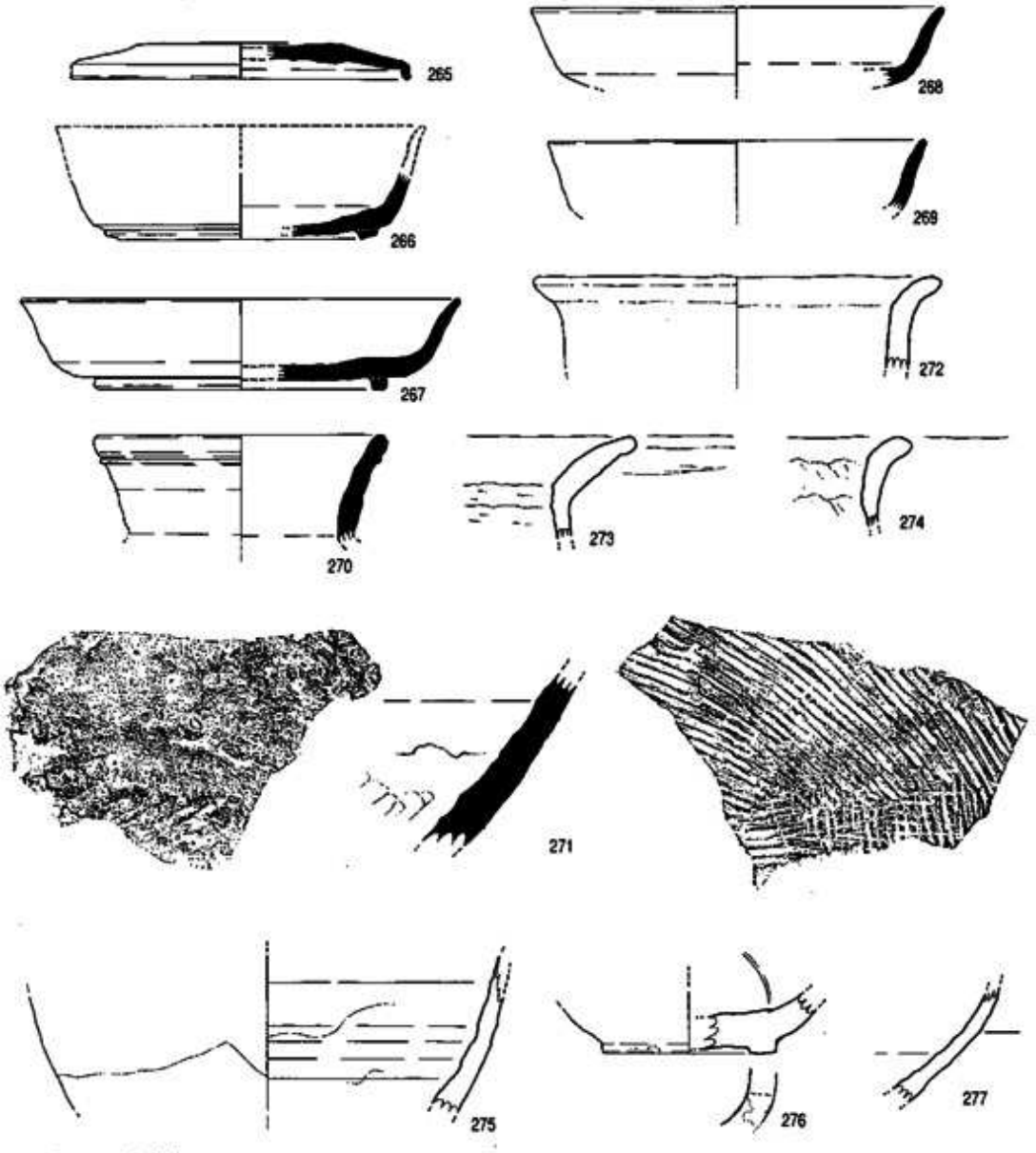
4　築地内側に形成された雨落ち溝らしい小規模な東西溝

5　それを覆う帯状の溜まり遺構SX001

6　その溜まりを切って形成された溝状の土取りの痕跡SX011

7　火葬土壙SX005などがあげられる。

21Aトレンチ茶褐土



21Aトレンチ表土

図37. Aトレンチ茶褐土・表土出土遺物実測図（S=1/3）

B.今回の調査の意義

1　国分寺の南の限りを示す南面築地の延長が確認された。

2　はじめて面的に西側の限りを示す施設が確認された。

3　これにより具体的に寺の四至（規模）を考えることができるようになった。

4 10世紀代に入って急速に境内の様相が変わってゆくことが判明した。（承暦4=1080年に講堂が再建されており、寺がこの時期から荒廃していたことが考えられる。）

C.遺構の諸相

南面築地は北側は地山削りだしで形成され、北側は茶褐色の粘質土で盛り土されている。南面築地の北側の溜まり遺構からは瓦が多量に検出された。溜まりの時期は10世紀初頭の土器を下限としておりその頃を埋没時期と推定している。もともと南縁築地内側は窪地状で湿気の多いぬかるんだ状態であったと考えられる。出土した瓦は大半が割れて磨耗したもので、窪地をならした際の混和剤として捨てられた可能性が考えられる。この時点で大半の寺としての機能は極端に低下していたと考えられるが（第4次の塔跡の調査では10世紀中頃に塔基壇の一部を破壊する土坑が検出されている。）、SX001などの瓦溜まり遺構（13SX001,14整地層,22SX005）は旧来の外郭線上に沿って形成されており、寺域の意識は継続されていたものと考えられる。瓦溜まりの性格は外郭施設に葺かれた瓦が倒壊・落下して飛散したとする想定もできるが、いずれの瓦も接合しない角が丸くなった不定形なものばかりで、21SX001の一部には並べ置かれたような箇所があったことから、整地時にぬかるみを防ぐために蒔かれたものと考えられる。

掘立柱列ＳA020は約3mの間隔で直径約20cmほどの柱が建てられ、平行する小ピット列SA030とともに遮蔽施設（塀か）を構築していた痕跡と考えられる。二者間の距離は約1.8m（約1間）である。この施設の南端は小ピットの存在から南辺築地に取り付く構造であったものと思われる。この柱列の振れは真北より東に1度54分である。

東西方向の21SX010は東隣地の13次調査では地山の落ち際に堤状に盛り土形成された築地遺構13SA010があり、21SX010はこれに連続するものと考えられるが、地山削り出しの基礎部分が辛うじて残存していた有り様で上部構造の復元は難しいが、13SA010土層状態から土塁状の垣であった可能性も捨てきれない。今回も21SX010上面には寄柱の痕跡は見られなかった。

土取りの痕跡SX011は大略南北方向に穿たれており、13世紀代の古瀬戸や鎬連弁の龍泉窯系青磁椀が出土するが、国産の雑釉陶器（唐津か）が出土しているところから17世紀前半までは土取りがおこなわれていたようである。

火葬土壙は供献された土師器坏の年代から14世紀代のものとみられる。同時期の拠点的な集

落（居館跡を含むか）が辻遺跡のある本調査地点の東側に推定されているが、葬送に関する遺構が判明したのはこの遺構がはじめてである。火葬して後に土器を供献しているが骨は持ち出された様子であり、埋葬地は別個に存在するようである。

D.国分寺の寺域について

寺の南限については先に行われた東隣地での13次調査に続いて今回も東西方向の築地が検出されたことや、水城東門、尼寺方面から延びる道路状遺構の取り付の様子からこの東西方向の築地が寺域の南限を示す南辺築地であることが追認されたといえよう。西限については今回の調査では掘立柱列SA020とそれに伴う小ピット列SA030が検出され13次調査から続く築地に平行して営まれる帯状の溜まり遺構SX001が、本調査区の中央で北に折れる点、現況道路を挟んで西隣する20次調査区では南北の区画に係わるような遺構が見られないことなどより、この掘立柱列SA020を以て寺域の西限とすることができると考えられる。SA020の位置は講堂中軸線より約92.36mで310尺（小尺）、SA030は約320尺にあり、東辺施設と考えられている７次調査の南北溝の位置の315尺とおおよそ14次調査の掘立柱列の325尺に近い数値である。

（山村信榮）

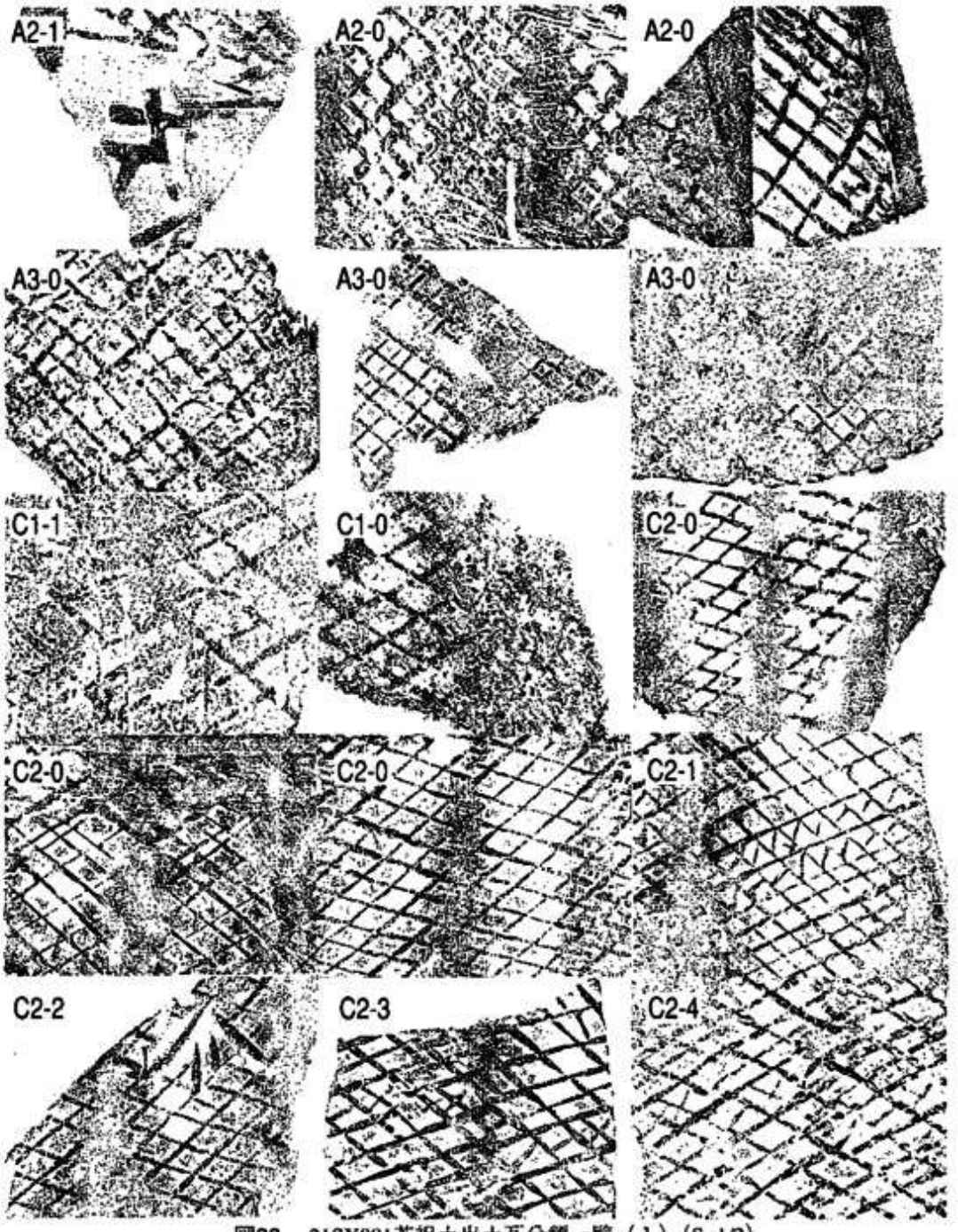
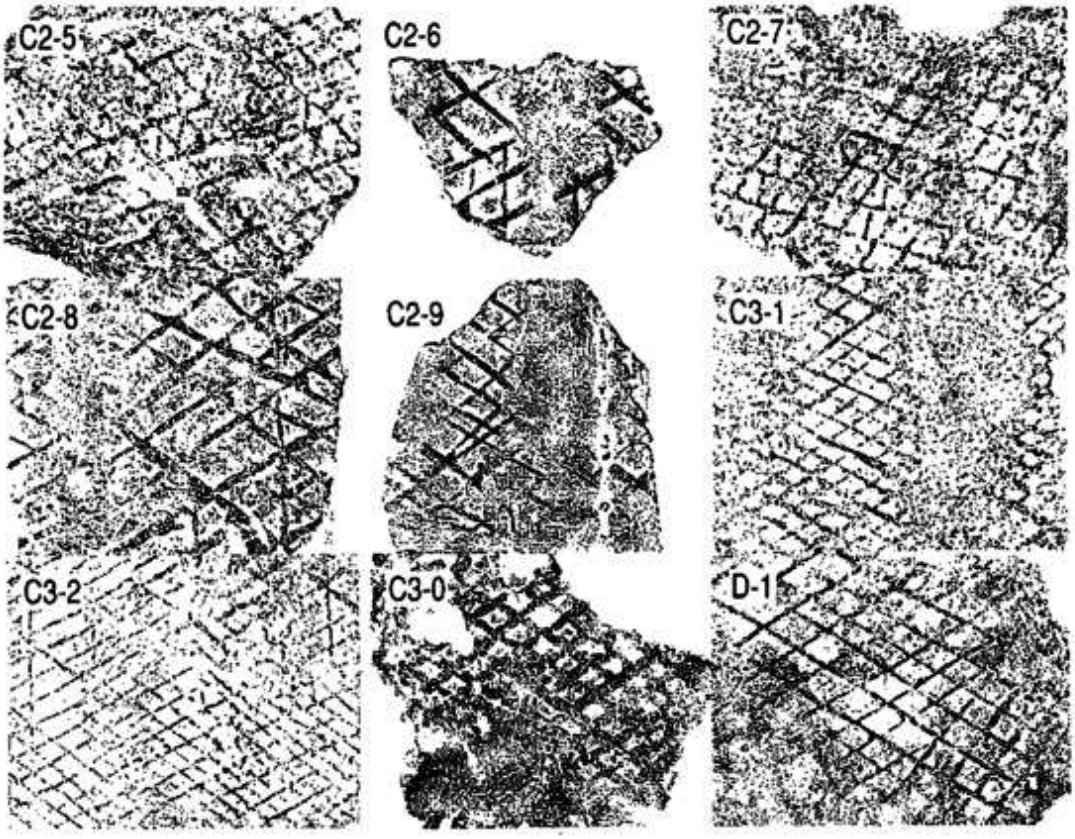


図38. 21SX001茶褐土出土瓦分類一覧（1）（S=1/2）



分類番号	個体数	瓦-番号
第1-A2-1	1	070
第1-A2-0	4	017,019,059,074
第1-A3-0	5	025,053,077,097,133
第1-C1-1	3	022,054,139
第1-C1-0	3	016,031,090,066,089
第1-C2-1	23	030,031,034,039,041,044,056,075,076,095,104,124,132,142,156,157,158,159,167,179,180,195,200
第1-C2-2	3	036,089,176
第1-C2-3	1	206
第1-C2-4	1	047
第1-C2-5	1	024
第1-C2-6	1	117
第1-C2-7	1	185
第1-C2-8	1	201
第1-C2-9	1	140
第1-C2-0	43	015,018,032,040,042,045,055,057,058,064,066,068,071,073,078,079,080,082,084,086,087,089,091,092,096,098,103,116,118,125,137,141,161,162,165,168,174,177,178,181,183,204,205
第1-C3-1	2	020,094
第1-C3-2	1	171
第1-C3-0	6	083,090,107,155,202,207
第1-D-1	17	001,035,037,041,052,073,081,102,106,154,155,160,184,192,193,194,208

図39. 21SX001茶褐土出土瓦分類一覧（2）（S=1/2）

表2．21-1次調査出土瓦　類別出土数一覧（1）

遺構	軒平瓦	軒丸瓦	無文瓦	文字瓦	平瓦格子叩	丸瓦格子叩	平瓦縄目叩	丸瓦縄目叩	平瓦無文	丸瓦無文	平瓦片	丸瓦片	破片	計
S-1茶褐土 D4		1			9	9	51	6			71	16	163	326
S-1茶褐土 D5		1			34	5	140	13	2	5	226	12	2	440
S-1茶褐土 D6	3	1	1		20	5	335	17	11	6	469	21	72	961
S-1茶褐土 D6.7						1	41	2	1	1	120	3		169
S-1茶褐土 D7		2			2		181	8	12	9	116	11	125	466
S-1茶褐土 D8							20					3		23
S-1茶褐土 D9							2				6			8
S-1茶褐土 E5					3		8		1		115			127
S-1茶褐土 E6	3	3			55	12	447	19	32	13	570	29	162	1345
S-1茶褐土 E7					1		7	1			55	3		67
S-1茶褐土 F5	2	1			2	3	171	11		2	166	26		384
S-1茶褐土 F6		2					164	11	2	2	376	23	4	584
S-1茶褐土 G5							7	1		1	10	1		20
S-1茶褐土 G6							4				15	4		23
S-1茶褐土 H5							6	4						10
S-1茶褐土					4		27				35	9		75
S-1茶褐土 小計	8	11	1	0	130	35	1611	93	61	39	2350	161	528	5028
S-2							3		4	4			3	14
S-3					2		12		4				2	20
S-3灰褐土							9		3				12	24
S-4							17	6	7	7		2	30	69
S-4橙色土							5		2	1				8
S-4茶色粘							1							1
S-4茶褐土		1					4	2		2	4			13
S-4黄色土							3	1						4
S-4茶黒土		1					3	3						7
S-5茶褐土										1			5	6
S-5茶灰土										1			3	4
S-5c							2							2
S-6	1						5		1				10	17
S-7							7	2	3				17	29
S-8	1	1				1	39	10	20	15			223	310
S-9 7ライン					2	1	16	1		5			68	93
S-9黒茶土							1			1			24	26
S-11					1									1
S-11灰褐土 G5		1		1	10	1	40	8	13	8	72	4	148	306
S-11灰褐土					1	1	29	4	1	2	92	5		135
S-12							2						3	5
S-13							7	2	4		2		33	48
S-14							29	3	1				51	84
S-15								7			4			11
S-15 D6							11							11
S-15 D7							19							19
S-16					1	1	4	3	2					11
S-18					2		16	1	2				41	62
S-21													7	7
S-22													10	10
S-23							6	1		2			5	14
S-23茶粘													2	2
S-24													1	1
S-26													3	3
S-27					1		10			3			42	56
S-27茶褐土							56	12	5	10			111	194
S-28							13	3		1	7		1	25
S-28赤褐土							1						1	2
S-31					1	1					5		16	23
小計	10	15	1	1	151	41	1981	162	133	102	2536	172	1400	6705

表3．21-1次調査出土瓦　類別出土数一覧（2）

遺構	軒平瓦	軒丸瓦	無文塼	文字瓦	平瓦格子叩	丸瓦格子叩	平瓦縄目叩	丸瓦縄目叩	平瓦無文	丸瓦無文	平瓦片	丸瓦片	破片	計
S-32					2	4	11		7	3			24	51
S-33													2	2
S-36							1						2	3
S-38							9	4	4	1		1	5	24
S-39							2		2	1			16	21
S-42							1							1
茶色土 B6		1			7	4	16	2			11	7		48
茶色土 B7	1			1	18	1	49	8	1		73	11		163
茶色土 C6					2						1			3
茶色土 D5							2			1	4			7
灰色土 I7					2	1	11	1	2		29	1		47
灰色土（Aトレ）					10		23	3			30	2		68
灰色土							6				6			12
茶褐土 C5					1		24	1		4	11			41
茶褐土 C7					1	1	6		1		2			11
茶褐土 C8							1				9			10
茶褐土 D4					7		20				122	9		158
茶褐土 D5	1				16	1	102	8	7	3	54	28		220
茶褐土 D6					13	1	114	10		3	105	10		256
茶褐土 D7					1		47	4	1	1	55	1		110
茶褐土 D8					1	5				2	16			24
茶褐土 E4					5		10		2		32	2		51
茶褐土 E5		2			22	56		1	5	1	32	7		126
茶褐土 E6		1			7		44	2	2	2	90			148
茶褐土 E7							10	1			5			16
茶褐土 E8						1	2				6			9
茶褐土 F5						1	1	1			14			17
茶褐土 F6					3		18				80	6		107
茶褐土 F7					3		20	3			40	5		71
茶褐土 G4	1						3		2		33			39
茶褐土 G5					1		5				8	3		17
茶褐土 G7							15	1	2		17	3		38
茶褐土 G8					1		2		1		1			5
茶褐土 H3							7			1	19	3		30
茶褐土 H5							13	1		9	66		1	90
茶褐土 H6							2				8	1		11
茶褐土 H7		1			1		22	1	37			9		71
茶褐土 H8							3				5	2		10
茶褐土 I5							8	4		1	13	12		38
茶褐土 I6							3				46			49
茶褐土 I7					2	1	37	10			87	13		150
茶褐土 I8							1				1			2
茶褐土 J6							25			1	98	5		129
茶褐土 J7					3	1	47	1	1	4	58			115
茶褐土 Aトレ					8	2	137	6	8	2	81	25		269
茶褐土 ALL					1	9		2			6			18
茶褐土					2		25	5		2				34
茶褐土 小計	2	4	0	0	99	79	774	62	69	36	1220	144	1	2490
淡茶土 D5							8				47	1		56
赤褐土 Aトレ							2	1			8			11
炭土											2			2
炭土 Aトレ					1	1	9				5			16
総計	13	20	1	2	292	131	2905	243	218	144	3972	339	1450	9730

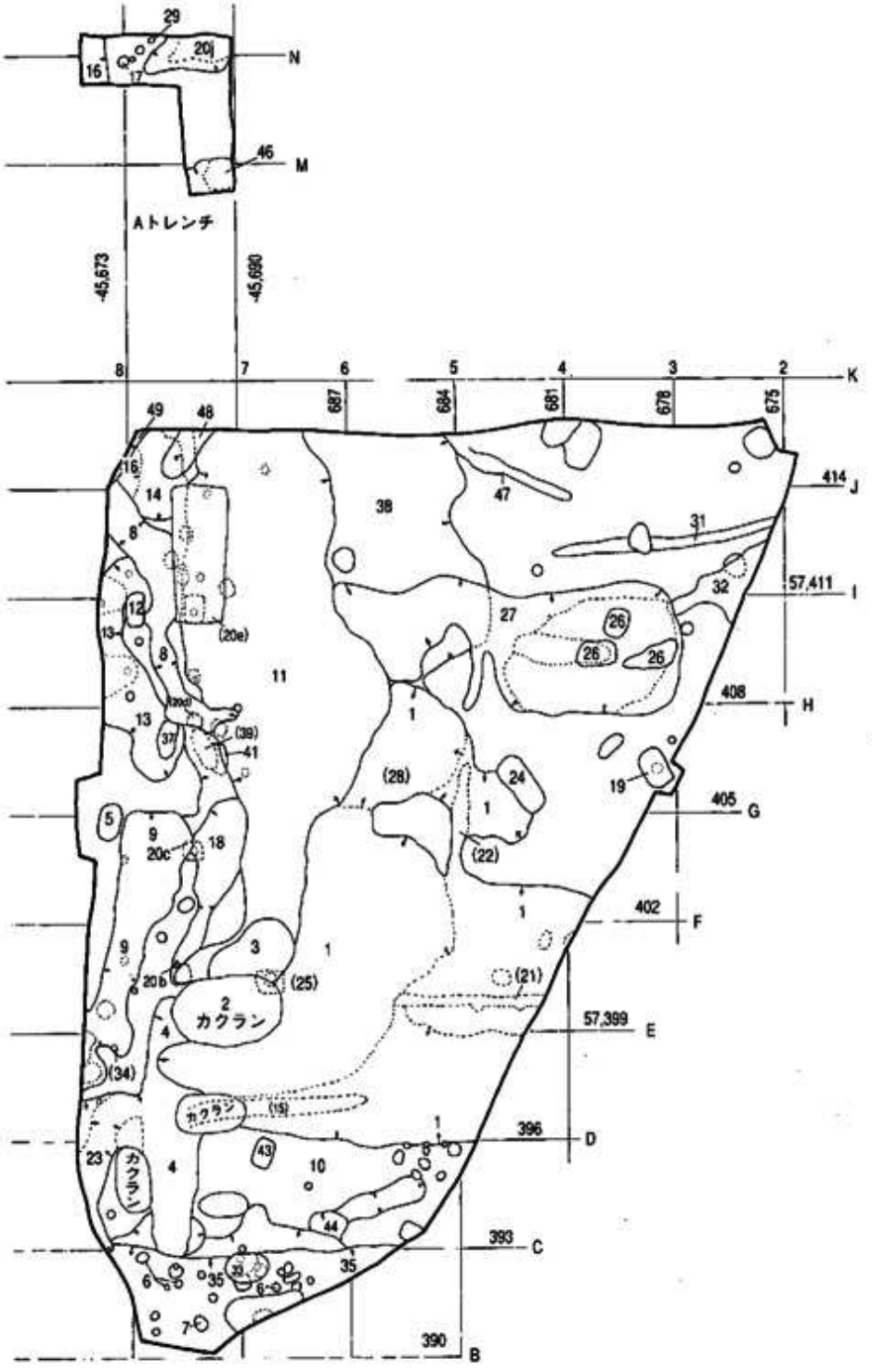


図40. 第21-1次調査遺構略測図（S=1/200）

表4．21-1次調査　遺構番号一覧

S-番号	遺構番号	種　　別		地区
1	21SX001	溝		C7
2		現代ゴミ穴		E7
3		溜まり状　灰褐土	13c後半～	E7
4	21SD004	溝	4→24 8c～	C7
5	21ST005	焼土壙		F8
6		ピット群		Cライン
7		ピット		B6
8	21SX008	溝	8→13 8→11	7ライン
9	21SX009	溝		7ライン
10	21SX010	築地		Cライン
11	21SX011	築地	1→11 13c末～14c前	F6
12		土壙		H7
13		溜まり		7ライン
14		土壙		I7
15	21SD015	溝	15→1 8c～か	Dライン
16		溝		Aトレンチ
17		ピット		Aトレンチ
18		溝		F7
19		ピット		G3
20	21SA020	ピット列→柵か	20→9	7ライン
21	21SD021	東西溝		E4
22	21SD022	南北溝		G5
23	21SD023	溝		C8
24		土壙	1→24	G4
25	21SX025	ピット	25→11	E6
26		溜まり　27の下層		H3
27	21SX027	溜まり	26→27	H4
28	21SX028	土壙		G5
29		Aトレンチ　ピット		Aトレンチ
30	21SA030	小ピット列		8ライン
31	21SD031	溝		1ライン
32		溜まり		I2
33		ピット	8c～	B7
34		ピット	8c～	D8
35	21SX035	溜まり		B5
36		ピット		H7
37		土壙		G7
38	21SX038	溜まり状		I5
39	21SK039	小溜まり	10c代か？	G7
41		溜まり状	39→41	G7
42		ピット		H7
43		ピット		C6
44		ピット		C6
46		溜まり		Aトレンチ
47	21SD047	溝		I4
48		溝		J7
49		溝		J8

表5．21-1次調査　出土遺物一覧

S-1茶褐土 C6

越州窯系青磁	椀：I(1)

S-1茶褐土 D4

須恵器	坏c(1)、壺(2)
土師器	坏a(1)
越州窯系青磁	椀：I-2(1)
瓦類	軒丸瓦(1)、平瓦格子叩(9)、平瓦縄目叩(51) 丸瓦縄目叩(6)、平瓦片(71)、丸瓦片(16)

S-1茶褐土 D5

須恵器	坏身c)(1)、壺(2)、甕(3)、破片(2)
土師器	破片(6)
瓦類	軒丸瓦：鴻臚館式(1)、平瓦格子叩(34)、丸瓦格子叩(5) 平瓦縄目叩(140)、丸瓦縄目叩(13)、平瓦無文(2) 丸瓦無文(5)、平瓦破片(226)、丸瓦破片(12)、不明(2)

S-1茶褐土 D6

須恵器	坏c(2)、坏(5)、壺c(2)、壺3)(1)、壺(2)、坏蓋(1)、甕(8) 甕片(9)、盤×皿(1)、壺(2)、鉢(1)、破片(11)
土師器	椀？c(1)、c(1)、坏(4)、甕(7)、破片(19)
黒色土器A	坏(1)、破片(3)
瓦類	軒平瓦(3)、軒丸瓦：鴻臚館式(1)、鬼(1) 平瓦格子叩(20)、丸瓦格子叩(5)、平瓦縄目叩(335) 丸瓦縄目叩(17)、平瓦無文(11)、丸瓦無文(6) 平瓦破片(469)、丸瓦破片(21)、破片(72)
土製品	土錘(1)、窯体レンガ(5)

S-1茶褐土 D6.7

須恵器	破片(1)
土師器	破片(4)
瓦類	丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(41)、丸瓦縄目叩(2) 平瓦無文(1)、丸瓦無文(1)平瓦破片(120)小片多し 丸瓦破片(3)

S-1茶褐土 D7

須恵器	坏(1)、坏c(2)、壺(1)、甕(3)、坏身(3)、坏蓋x(1) 坏蓋x(2)、長頸壺(1)、破片(1)
土師器	坏a(2)、坏c(1)、坏d(2)、坏(1)1*、椀(1)、椀c(5) 把手(1)、甕(20)、破片(3)
瓦類	軒丸瓦：鴻臚館式(1)、(1)、平瓦格子叩(2) 平瓦縄目叩(176)、丸瓦縄目叩(8)、平瓦無文(12) 丸瓦無文(9)、平瓦破片(116)、丸瓦破片(11) 破片(125)
土製品	瓦玉(3)、メンコ(1)

S-1茶褐土 D8

須恵器	坏(5)、甕(5)、壺(1)、破片(2)
土師器	坏a？(1)、坏c(1)、破片(10)
瓦類	平瓦縄目叩(20)、丸瓦破片(3)、破片(67)

S-1茶褐土 D9

須恵器	壺(1)
土師器	破片(2)
輸入陶磁器	未分類壺？(1)
瓦類	平瓦縄目叩(2)、平瓦破片 (6)

S-1茶褐土 E5

須恵器	壺？(1)坏a(1)、坏(1)、壺(1)、壺3(1)
土師器	坏a(2)、坏c(1)、甕(5)、破片(15)
黒色土器A	C(1)
黒色土器B	C？(1)
瓦類	平瓦格子叩(3)、平瓦縄目叩(8)、平瓦無文(1) 平瓦破片(115)

S-1茶褐土 E6

須恵器	坏a(2)、坏c(3)、坏(1)、坏片(1)、坏身z(1)、坏蓋x(1) 壺1(1)、(2)、壺(4)、壺×鉢(1)、壺、壺？(2)、甕(9) 破片(5)
土師器	坏1*、坏a(1)、坏c(1)、小皿×(1)、椀c(2)、椀(1)1* 甕(4)、甕？(1)、破片(43)
瓦類	軒平瓦：鴻臚館式(1)、(2)、軒丸瓦(3)、鬼瓦(2) 道具瓦？(1)、平瓦格子叩(55)、丸瓦格子叩(12) 平瓦縄目叩(447)、丸瓦縄目叩(19)、平瓦無文(32) 丸瓦無文(13)、平瓦破片(570)、丸瓦破片(29) 破片(162)
石製品	石器片(1)

S-1茶褐土 E7

須恵器	坏c(2)、坏(2)、壺(1)、甕(1)、破片(7)
土師器	坏c(1)、破片(3)
瓦類	平瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(7)、丸瓦縄目叩(1) 丸瓦破片(3)、平瓦破片(55)

S-1茶褐土 F5

須恵器	壺c(1)、坏(7)、甕(6)、甕片(1)、壺(3)、壺蓋(1) 破片(4)
土師器	坏c(2)、破片(18)
越州窯系青磁	坏：II(1)
瓦類	軒平瓦：鴻臚館式か？(1)、老司式(1) 軒丸瓦(1)、平瓦格子叩(2)、丸瓦格子叩(3) 平瓦縄目叩(174)、丸瓦縄目叩(11)、丸瓦無文(2) 平瓦破片(168)、丸瓦破片(26)、面戸瓦(1)
金属製品	鉱滓(1)

S-1茶褐土 F6

須恵器	坏(3)、坏c(4)、皿？(2)、壺(2)、甕(2)、長頸壺(1) 破片(2)
土師器	甕1*、破片(15)
灰釉陶器	壺(1)
瓦類	軒丸瓦(2)、平瓦縄目叩(164)、丸瓦縄目叩(11) 平瓦無文(2)、丸瓦無文(2)、平瓦破片(276)、 丸瓦破片(23)、破片(4)
石製品	ob-F

S-1茶褐土 G5

須恵器	坏身1(1)、坏蓋(1)3*、坏蓋(1)、壺(1)、甕片(2)
土師器	坏、甕、把手(1)、甕片(3)、破片(6)
瓦類	平瓦縄目叩(7)、丸瓦縄目叩(1)、丸瓦無文(1) 平瓦破片(10)、丸瓦破片(1)

S-1茶褐土 G6

瓦類	平瓦縄目叩(4)、平瓦破片(15)、丸瓦破片(4)

S-1茶褐土 H5

須恵器	坏(1)、坏蓋2(1)
瓦類	平瓦縄目叩(6)、丸瓦縄目叩(4)

S-1茶褐土 H6

須恵器	坏身(1)、坏身2(1)、坏蓋2(1)、甕(1)
土師器	破片(8)

S-1茶褐土

須恵器	甕(1)
瓦類	平瓦格子叩(4)、平瓦縄目叩(27)、平瓦破片(35) 丸瓦破片(9)

S-2

瓦類	平瓦縄目叩(3)、平瓦無文(4)、丸瓦無文(4)、破片(3)

S-3 E7

須恵器	坏c3(2)、壺(1)
土師器	破片(1)
瓦類	平瓦格子叩(2)、平瓦縄目叩(12)、平瓦無文(4) 破片(2)

S-3灰褐土 E6

須恵器	甕(1)
瓦類	平瓦縄目叩(9)、平瓦無文(3)、破片(12)

S-4 D7

須恵器	坏身(1)、坏c3(2)、蓋1(1)、甕(10)、壺(2)、長頸壺(1) 破片(15)
土師器	坏(1)、破片(14)
瓦類	平瓦縄目叩(17)、丸瓦縄目叩(6)、鬼斗瓦(2) 平瓦無文(7)、丸瓦無文(7)、丸瓦破片(2)、破片(30)

S-4橙色土

須恵器	坏c3(2)、蓋1(1)、鉢b(1)、甕(4)、壺(1)
土師器	甕(1)
瓦類	平瓦縄目叩(5)、平瓦無文(2)、丸瓦無文(1)

S-4黄色土

須恵器	坏(1)、坏身c3(1)、皿(1)
瓦類	平瓦縄目叩(3)、丸瓦縄目叩(1)

S-4茶黒土

須恵器	坏c(1)、甕(1)、坏蓋3(1)
土師器	甕(7)
製塩土器	破片(1)
瓦類	軒丸瓦(1)、平瓦縄目叩(3)、丸瓦縄目叩(3)、鬼斗瓦(1) 道具瓦(1)

S-4茶色粘

須恵器	坏身3(3)、坏蓋3(1)、坏蓋c(1)、破片(6)
土師器	破片(10)
瓦類	平瓦縄目叩(1)

S-4 茶褐土

須恵器	坏(3)、坏c(1)、甕(7)
土師器	破片(4)
瓦類	軒丸瓦：隋唐館式(1)、平瓦縄目叩(4)、丸瓦縄目叩(2) 丸瓦無文(2)、平瓦破片(4)
石製品	丸石(1)

S-5

土師器	坏a(1)、小皿a(3)

S-5茶褐土

土師器	坏a(1)
土師質土器	方鉢片(1)
瓦類	丸瓦無文(1)、破片(5)

S-5茶灰土

瓦類	丸瓦無文(1)、破片(3)
土製品	焼土塊(1)

S-5c

土師器	坏a(イト)(1)、小皿a(イト)
土師質土器	方鉢片1*
瓦類	平瓦縄目叩(2)

S-6

瓦類	軒平瓦(1)、平瓦縄目叩(5)、平瓦無文(1)、破片(10)

S-7

須恵器	瓶(1)
瓦類	平瓦縄目叩(7)、丸瓦縄目叩(2)、平瓦無文(3) 破片(17)

S-8

須恵器	坏(1)、坏c2(1)、坏身c3(1)、坏蓋1(1)、長頸壺(1) 甕(3)、壺(1)、破片(1)
土師器	甕(1)、破片(1)
瓦類	軒平瓦：隋唐館式(1)、軒丸瓦(1)、丸瓦格子叩(1) 平瓦縄目叩(39)、丸瓦縄目叩(10)、平瓦無文(20) 丸瓦無文(15)、破片(223)

S-9黒茶土

須恵器	坏(1)、破片(2)
土師器	破片(2)
瓦類	平瓦縄目叩(1)、丸瓦無文(1)、破片(24)

S-9 7ライン

須恵器	甕(1)、破片(1)
土師器	椀c(2)、破片(5)
瓦類	平瓦格子叩(2)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(16) 丸瓦縄目叩(1)、丸瓦無文(5)、破片(68)

S-11

須恵器	坏c、甕(2)、鉢b(1)
土師器	破片(5)
龍泉窯系青磁	破片(1)
瓦類	平瓦格子叩(1)

21-1次

S-11灰褐土G5.F6.G6.H6.I6.H7

須恵器	坏(1)、坏c3(1)、壺(3)、甕(5)、蓋c3(1)、破片(1)
土師器	坏c(1)、甕(1)、破片(10)
瓦器	椀c(1)
龍泉窯系青磁	椀；I-5a(1)
白磁	椀；IX(2) 皿；IX-1a(1)
肥前系陶磁器	椀(2)*混入か？
国産磁器	古磨染椀×1*
瓦類	軒丸瓦：鴻臚館式(1)、文字瓦(1)、平瓦格子叩(10) 丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(40)、丸瓦縄目叩(8) 平瓦無文(13)、丸瓦無文(8)、平瓦破片(72) 丸瓦破片(4)、破片(148)

S-11灰褐土

須恵器	坏×(1)、甕(1)
土師器	破片(2)
龍泉窯系青磁	椀；I-2(1)
瓦類	平瓦格子叩(1)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(29) 丸瓦縄目叩(4)、平瓦無文(1)、丸瓦無文(2) 平瓦破片(92)、丸瓦破片(5)
土製品	瓦玉(2)
石製品	滑石(2)*石鍋、板状石製品(石鍋を二次加工したもの)

S-12

土師器	破片(1)
瓦類	平瓦縄目叩(2)、破片(3)

S-13

須恵器	坏c1(1)、坏c3(1)、蓋t(1)、壺(1)
瓦類	平瓦縄目叩(7)、丸瓦縄目叩(2)、平瓦無文(4) 平瓦破片(2)、破片(33)

S-14

須恵器	坏c1(1)、坏c3(1)
瓦類	平瓦縄目叩(29)、丸瓦縄目叩(3)、丸瓦破片(1) 破片(51)

S-15

須恵器	甕片
瓦類	平瓦縄目叩(2)、平瓦破片(4)

S-15 D6

瓦類	平瓦縄目叩(11)

S-15 D7

須恵器	壺(2)
土師器	甕×(1)
瓦類	平瓦縄目叩(19)

S-16

瓦類	平瓦格子叩(1)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(4) 丸瓦縄目叩(3)、平瓦無文(2)

S-17 Aトレ

土師器	破片(1)

S-18

須恵器	甕(2)
瓦類	平瓦格子叩(2)、平瓦縄目叩(16)、丸瓦縄目叩(1) 平瓦無文(2)、破片(41)

S-21

瓦類	破片(7)

S-22

瓦類	破片(10)

S-23

須恵器	坏c(4)、坏c3(2)、甕(2)
土師器	坏c(1)、坏c3(1)、破片(6)
瓦類	平瓦縄目叩(6)、丸瓦縄目叩(1)、丸瓦無文(2)、破片(5)

S-23茶褐

須恵器	坏c3(2)
土師器	破片(3)
瓦類	破片(2)

S-24

土師器	坏a、破片(2)
瓦類	破片(1)

S-26

瓦類	破片(3)

S-27

須恵器	甕(1)
瓦類	平瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(10)、丸瓦無文(3) 破片(42)

S-27茶褐土

土師器	坏a(1)、破片(9)
瓦類	平瓦縄目叩(56)、丸瓦縄目叩(12)、平瓦無文(5) 丸瓦無文(10)、破片(111)

S-28

須恵器	破片(1)
土師器	破片(3)
瓦類	平瓦縄目叩(13)、丸瓦縄目叩(3)、丸瓦無文(1) 平瓦破片(7)、道具瓦(1)、破片(1)

S-28 G5

須恵器	甕(2)
土師器	甑(1)
土製品	ふいご羽口、カマド(把手)(1)

S-28黄褐土

土師器	破片(5)

S-28赤褐土

土師器	甕(1)、破片(2)
瓦類	平瓦縄目叩(1)、破片(1)

S-31

土師器	破片(2)
瓦類	平瓦格子叩(1)、丸瓦格子叩(1)、平瓦破片(5) 破片(16)

S-32

土師器	鉢c(1)
瓦類	平瓦格子叩(2)、丸瓦格子叩(4)、平瓦縄目叩(11) 平瓦無文(7)、丸瓦無文(3)、破片(24)

S-33

須恵器	坏(1)、坏蓋a(1)、甕(1)、破片(3)
土師器	甕(1)
灰釉陶器	鉢(1)
瓦類	破片(2)

S-34

土師器	破片(2)

S-36

瓦類	平瓦縄目叩(1)、破片(2)

S-37

須恵器	破片(1)
土師器	破片(1)

S-38

須恵器	坏(1)、甕(4)、鉢c1(1)
瓦類	平瓦縄目叩(9)、丸瓦縄目叩(2)、行基瓦(2) 丸瓦無文(1)、平瓦無文(4)、丸瓦破片(1)、破片(5)
弥生土器	壺(1)

S-39

瓦類	平瓦縄目叩(2)、平瓦無文(2)、丸瓦無文(1)、破片(16)

S-42

瓦類	平瓦縄目叩(1)

茶色土 B6

須恵器	高坏(1)、高坏？(1)、壺(1)、壺？(1)、甕(4)、破片(1)
土師器	甕(2)、把手(1)、破片(4)
瓦類	軒丸瓦(1)　外縁のみ、平瓦格子叩(7)、丸瓦格子叩(4) 平瓦縄目叩(16)、丸瓦縄目叩(2)、平瓦破片(11) 丸瓦破片(7)

茶色土 B7

須恵器	坏(3)、甕(7)、壺(1)、破片(1)
土師器	坏a(1)、坏？(1)、小皿a？(2)、甕(2)、把手(1)、破片(5)
越州窯系青磁	鉢；I (2)
白磁	鉢；IV(1)
瓦類	軒平瓦(1)、平瓦格子叩(18)、丸瓦格子叩(1) 平瓦縄目叩(49)、丸瓦縄目叩(8)、平文字瓦(1) 平瓦無文(1)、平瓦破片(73)、丸瓦破片(11)
石製品	石錘(1)、破片(2)

茶色土 C6

須恵器	坏c(1)、坏片(2)、甕(1)2*、鉢c？(1)
瓦類	平瓦格子叩(2)、平瓦破片(1)

茶色土 D5

須恵器	坏？(1)
土師器	甕(1)、破片(3)
瓦類	平瓦縄目叩(2)、丸瓦無文(1)、平瓦破片(4)

灰色土 I7

須恵器	甕(2)
土師器	破片(1)
龍泉窯系青磁	鉢；III(1)
瓦類	平瓦格子叩(2)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(11) 丸瓦縄目叩(1)、平瓦無文（3）、平瓦破片(29) 丸瓦破片(1)
石製品	石器破片(3)

灰色土

須恵器	坏(1)、甕(1)
土師器	破片(1)
龍泉窯系青磁	小鉢；III-2(1)
瓦類	平瓦縄目叩(6)、平瓦破片(6)

茶褐土 C5

須恵器	坏？(1)、坏c(1)、壺(1)、壺c(1)、壺(2)、壺？(4) 甕(15)
土師器	a(1)、c(1)、壺？(1)、破片(1)
灰釉陶器	？破片(3)
瓦類	平瓦格子叩(3)、平瓦縄目叩(24)、丸瓦縄目叩(1) 丸瓦無文(4)、平瓦破片(11)

茶褐土 C7

須恵器	坏c(1)、坏(2)2*、鍋2*、甕×壺4*
土師器	坏c(1)、破片(3)
瓦類	平瓦格子叩(1)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(6) 平瓦無文(1)、平瓦破片(2)

茶褐土 C8

瓦類	平瓦縄目叩(1)、平瓦破片(9)

茶褐土 D4

須恵器	坏(3)、甕(5)
土師器	坏(4)、高坏(1)
瓦類	平瓦格子叩(7)、平瓦縄目叩(20)、平瓦破片(112) 丸瓦破片(9)

茶褐土 D5

須恵器	坏(1)、壺(1)、甕(5)
土師器	坏a(3)1*、把手(1)、破片(2)
瓦類	軒平瓦(1)、平瓦格子叩(16)、丸瓦格子叩(1) 平瓦縄目叩(103)、丸瓦縄目叩(8)、平瓦無文(7) 丸瓦無文(3)、平瓦破片(56)、丸瓦破片(28)

21-1次

茶褐土 D6

須恵器	坏(1)、坏a(1)、坏c(1)、蓋(1)、壺×甕(7)、壺蓋？(1) 蓋(1)、c(1)、蓋3(2)、破片(2)
土師器	c(4)、壺(1)、甕(1)、破片(29)
越州窯系青磁	椀；II(1)
灰釉陶器	壺(1)
瓦類	平瓦格子叩(13)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(114) 丸瓦縄目叩(10)、丸瓦無文(3)、平瓦破片(105) 丸瓦破片(10)
土製品	焼体レンガ(1)

茶褐土 D7

須恵器	壺(1)、壺×甕(2)、破片(2)
土師器	a(1)、c(2)、甕(4)、破片(1)
瓦類	平瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(47)、丸瓦縄目叩(4) 平瓦無文(1)、丸瓦無文(1)、平瓦破片(55) 丸瓦破片(1)

茶褐土 D8

須恵器	坏(1)、坏c2*、蓋(1)、壺(1)、壺×甕(3)、破片(2)
土師器	c(2)、甕3*、破片(4)
瓦類	平瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(5)、丸瓦無文(2) 平瓦破片(16)

茶褐土 E4

須恵器	甕(1)
土師器	坏c(1)
緑釉陶器	？椀×皿(1)
瓦類	平瓦格子叩(5)、平瓦縄目叩(10)、平瓦無文(2) 平瓦破片(32)、丸瓦破片(2)
石製品	ob-f(1)

茶褐土 E5

須恵器	坏(5)、蓋1(1)、蓋(2)、壺(4)、甕(11)、把手(1)
土師器	坏a(2)、c(6)、坏(3)、破片(4)
越州窯系青磁	水注；破片(2)
瓦類	軒丸瓦(2)、平瓦格子叩(22)、平瓦縄目叩(56) 丸瓦縄目叩(1)、平瓦無文(5)、丸瓦無文(1) 平瓦破片(32)、丸瓦破片(7)

茶褐土 E6

須恵器	a(1)、c(1)、蓋(1)、蓋3(1)、壺×甕(7)、破片(3)
土師器	c(1)、甕(1)、破片(6)
瓦類	軒丸瓦(1)、平瓦格子叩(7)、平瓦縄目叩(44) 丸瓦縄目叩(2)、平瓦無文(2)、丸瓦無文(2) 平瓦破片(90)

茶褐土 E7

須恵器	蓋3(1)、壺(1)、壺×甕(1)
土師器	坏a(1)、甕(1)、破片(3)
瓦類	平瓦縄目叩(10)、丸瓦縄目叩(1)、平瓦破片(5)

茶褐土 E8

須恵器	壺×甕(3)、破片(2)
瓦類	丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(2)、平瓦破片(6)

茶褐土 F5

須恵器	坏c(1)、c(2)、甕(1)
土師器	破片(1)
瓦類	丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(1)、丸瓦縄目叩(1) 平瓦破片(14)

茶褐土 F6

須恵器	坏？(2)、蓋3(1)、壺×甕(6)
土師器	甕(1)
白磁	椀；VIII3(1)
瓦類	平瓦格子叩(3)、平瓦縄目叩(18)、平瓦破片(80) 丸瓦破片(6)

茶褐土 F7

須恵器	壺×甕(2)
土師器	甕(1)、破片(1)
瓦類	平瓦格子叩(3)、平瓦縄目叩(20)、丸瓦縄目叩(3) 平瓦破片(40)、丸瓦破片(5)

茶褐土 G4

須恵器	蓋1c3*、甕(1)、破片(1)
白磁	椀；破片(1)
瓦類	軒平瓦(1)、平瓦縄目叩(3)、平瓦無文(2) 平瓦破片(33)

茶褐土 G5

須恵器	蓋？(1)、甕(2)
土師器	破片(5)
瓦類	平瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(5)、平瓦破片(8) 丸瓦破片(3)

茶褐土 G7

須恵器	壺(2)
土師器	c(1)、破片(4)
瓦類	平瓦縄目叩(15)、丸瓦縄目叩(1)、平瓦無文(2) 平瓦破片(17)、丸瓦破片(3)
石製品	ob-f(1)

茶褐土 G8

土師器	把手(1)、c(1)、破片(1)
瓦類	平瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(2)、平瓦無文(1) 平瓦破片(1)

茶褐土 H3

土師器	破片(1)
龍泉窯系青磁	椀；I-5a(1)
瓦類	平瓦縄目叩(7)、丸瓦無文(1)、平瓦破片(19) 丸瓦破片(3)

茶褐土 H5

須恵器	坏？(2)、蓋3(1)、甕(1)3*
灰釉陶器	破片3*
国産陶器	？破片(1)
瓦類	平瓦縄目叩(13)、丸瓦縄目叩(1)、丸瓦無文(9) 平瓦破片(66)、瓦付着？破片(1)

茶褐土 H6

須恵器	壺(1)、壺×甕(1)
土師器	甕(1)、破片(1)
瓦類	平瓦縄目叩(2)、平瓦破片(8)、丸瓦破片(1)

茶褐土 H7

須恵器	甕(1)、壺×甕(5)、破片(3)
土師器	c(1)、破片(5)
瓦類	軒丸瓦(1)、平瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(22) 丸瓦縄目叩(1)、平瓦無文(37)、丸瓦破片(9)

茶褐土 H8

須恵器	蓋(1)
輸入陶磁器	未分類破片(1)
瓦類	平瓦縄目叩(3)、平瓦破片(5)、丸瓦破片(2)

茶褐土 I5

須恵器	破片(2)
白磁	椀；破片(1)
瓦類	平瓦縄目叩(8)、丸瓦縄目叩(4)、丸瓦無文(1) 平瓦破片(13)、破片(12)

茶褐土 I6

須恵器	坏a(1)、蓋(1)、壺×甕(2)、高坏(1)
龍泉窯系青磁	椀；I-5(1)
輸入陶磁器	未分類 陶器蓋？(1)
国産陶器	鉢(近世～？)
弥生土器	底部(1)
瓦類	平瓦縄目叩(3)、平瓦破片(46)

茶褐土 I7

須恵器	坏c(1)、蓋(1)、甕(1)、壺×甕(2)
土師器	c(1)、破片(2)
瓦類	平瓦格子叩(2)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(37) 丸瓦縄目叩(10)、平瓦破片(87)、丸瓦破片(13)

茶褐土 I8

瓦類	平瓦縄目叩(1)、平瓦破片(1)

茶褐土 J6

須恵器	坏c(2)、壺？(1)、壺×甕(1)、長頸瓶(1)
土師器	甕(3)、破片(1)
龍泉窯系青磁	椀；I(1)
灰釉陶器	椀？(1)
瓦類	平瓦縄目叩(25)、丸瓦無文(1)、平瓦破片(98) 丸瓦破片(5)
石製品	剥片(UF)An

茶褐土 J7

須恵器	坏(1)、壺(2)、壺×甕(3)
土師器	破片(3)
龍泉窯系青磁	椀；I(1)
白磁	椀；IV(1)
瓦類	平瓦格子叩(3)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(47) 丸瓦縄目叩(1)、平瓦無文(1)、丸瓦無文(4) 平瓦破片(58)

淡茶土 D5

須恵器	坏(1)、坏c(1)、甕(1)
土師器	甕(1)
瓦類	平瓦縄目叩(8)、平瓦破片(47)、丸瓦破片(1)

灰色土 (Aトレ)

須恵器	坏c(2)、甕(1)、破片(1)
土師器	坏c(1)、甕(1)
白磁	椀；片(1)
瓦類	平瓦格子叩(10)、平瓦縄目叩(27)、丸瓦縄目叩(3) 平瓦破片(30)、丸瓦破片(2)

茶褐土 Aトレ

須恵器	坏a(1)、坏c(1)2*、坏(1)、壺(1)、蓋3*、甕(4) 破片(1)
土師器	甕(8)、鉢(1)、破片(19)
越州窯系青磁	椀；II (2) 壺；破片(1)
龍泉窯系青磁	椀；I-1(1)、？I(1)
白磁	水注；破片(1)
弥生土器	破片(1)
輸入陶磁器	未分類　壺類(1)
灰釉陶器	？甕(1)
国産陶器	褐釉陶器　鉢 (1)
瓦類	平瓦格子叩(8)、丸瓦格子叩(2)、平瓦縄目叩(137) 丸瓦縄目叩(6)、平瓦無文(8)、丸瓦無文(2) 平瓦破片(81)、丸瓦破片(25)

赤褐土 Aトレ

須恵器	坏(1)、坏c(1)、壺3(1)
瓦類	平瓦縄目叩(2)、丸瓦縄目叩(1)、平瓦破片(8)

表土

瓦類	平瓦破片(2)

表土Aトレ

須恵器	壺(1)、蓋(1)、甕(1)
越州窯系青磁	椀；I(1)
白磁	椀；？破片(1) 皿；(1)
瓦類	平瓦格子叩(1)、丸瓦格子叩(1)、平瓦縄目叩(9) 平瓦破片(5)

茶褐土 Z

瓦類	平瓦格子叩(3)、平瓦縄目叩(34)、丸瓦縄目叩(7) 丸瓦無文(2)、現代瓦(1)、現代土管(2)

Z

土師器	坏a(1)、坏(2)、丸坏a(1)

表6．21-1次調査　出土遺物観察表

R番号とは遺物に付与された整理番号で、収蔵後の検索にはこの番号を用いる。
土器以外の法量は口径・高さ・底径を、長さ・幅・厚みに読み変える。
数値後の+は欠損状況での数値、*は復元状況での数値で表記している。

石器観察表について
観察表中の略号は次のとおり。
ob（黒曜石）、and（安山岩）、F（剥片）、RF（二次加工のある剥片）、UF（微細剥離など使用痕のある剥片）、AP（石鏃）

国分寺21次遺物観察表（1）

遺構		No.	図版番号	写真番号	R番号	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考（+は欠損、*は復原値）
21SD004黄色土	(S-4橙色土)	1	11		003	須 蓋1	-	1.0+		
〃	(S-4)	2	11		001	須 蓋1	-	1.4+		
〃	(S-4黄色土)	3	11		001	須 坏c	-	5.5+	12.8*	
〃	(S-4橙色土)	4	11		001	須 坏c	-	2.2+	8.0*	
〃	(S-4橙色土)	5	11		002	須 坏c	-	2.1+	8.4*	
〃	(S-4)	6	11		002	須 坏c3	-	2.5+	-	
〃	(S-4)	7	11		003	須 坏c3	-	1.1+	-	
〃	(S-4黄色土)	8	11		002	須 皿	-	2.0+	-	
〃	(S-4)	9	11		004	須 長頸壺	-	5.5+	-	
〃	(S-4橙色土)	10	11		004	須 甕b	-	4.5+	-	
〃	(S-4橙色土)	11	11		005	土師 甕	-	3.0+	-	
〃	(S-4)	12	11		005	瓦 丸瓦	16.7+	15.00	3.20	瓦質 縄目叩
〃	(S-4)	13	11		007	瓦 丸瓦	12.2+	6.6+	1.60	須恵質 縄目叩
〃	(S-4橙色土)	14	11		006	瓦 丸瓦	12.7+	12+	1.70	瓦質 不明
〃	(S-4)	15	11		009	瓦 平瓦	10.2+	10.8+	2.40	瓦質 不明
〃	(S-4)	16	12		006	瓦 平瓦	21.5+	20.0+	3.00	土師質 不明
〃	(S-4橙色土)	17	12		008	瓦 平瓦	30.4+	17.2+	2.30	瓦質 縄目叩
〃	(S-4橙色土)	18	12		007	瓦 平瓦	16.5+	11.5+	2.20	瓦質 縄目叩
〃	(S-4)	19	12		008	瓦 熨斗瓦	16.2+	9.0+	2.90	瓦質 縄目叩
21SD004茶黒土	(S-4茶色粘)	20	12		005	須 蓋c	-	0.9+		
〃	(S-4茶色粘)	21	12		006	須 蓋3	-	0.8+		
〃	(S-4茶色粘)	22	12		007	須 蓋3	-	0.9+		
〃	(S-4茶黒土)	23	12		006	須 蓋	-	0.85+		
〃	(S-4茶色粘)	24	12		002	須 坏c	-	2.6+	8.8*	
〃	(S-4茶色粘)	25	12		003	須 坏c	-	1.7+	9.8*	
〃	(S-4茶色粘)	26	12		001	須 坏c	-	1.6+	8.5*	
〃	(S-4茶色粘)	27	12		004	須 坏c	-	1.6+	10.2*	
〃	(S-4茶黒土)	28	12		005	須 坏c3	-	1.1+	-	
〃	(S-4茶黒土)	29	12		009	土 製塩土器	-	3.0+	-	
〃	(S-4茶黒土)	30	12		008	土 甕	-	2.6+	-	
〃	(S-4茶黒土)	31	12		007	土 甕	-	2.55+	-	
〃	(S-4茶黒土)	32	13		010	瓦 軒丸瓦				
〃	(S-4茶黒土)	33	13		001	瓦 丸瓦	23.6+	18.00	2.50	瓦質 縄目叩
〃	(S-4茶黒土)	34	13		013	瓦 丸瓦	11.75+	7.6+	2.20	瓦質 縄目叩
〃	(S-4茶黒土)	35	13		002	瓦 丸瓦	11.75+	10.25+	1.70	須恵質 縄目叩
〃	(S-4茶黒土)	36	13		003	瓦 平瓦	9.95+	10.8+	2.15	瓦質 縄目叩
〃	(S-4茶黒土)	37	13		004	瓦 平瓦	12.35+	9.5+	2.00	土師質 縄目叩
〃	(S-4茶黒土)	38	13		014	瓦 熨斗瓦	25.2+	13.20	2.30	土師質 縄目叩
〃	(S-4茶黒土)	39	13		011	瓦 平瓦	18.0+	12.6+	2.80	土師質 縄目叩
21SD004茶褐土	(S-4茶褐土)	40	14		014	須 坏	-	2.4+	-	
〃	(S-4茶褐土)	41	14		015	土 坏c×蓋	-	2.7+	-	
〃	(S-4茶褐土)	42	14		011	瓦 軒丸瓦	12.5+	15.0+	2.50	瓦質 珠紋飾系
〃	(S-4茶褐土)	43	14		002	瓦 丸瓦	19.0+	12.4+	3.30	瓦質 不明
〃	(S-4茶褐土)	44	14		003	瓦 丸瓦	11.8+	9.6+	1.60	瓦質 不明
〃	(S-4茶褐土)	45	14		006	瓦 丸瓦	11.6+	8.7+	1.40	土師質 縄目叩
〃	(S-4茶褐土)	46	14		012	瓦 平瓦	21.1+	14.2+	2.50	土師質 縄目叩
〃	(S-4茶褐土)	47	14		010	瓦 平瓦	10.55+	15.1+	2.70	土師質 縄目叩
〃	(S-4茶褐土)	48	14		004	瓦 平瓦	14.5+	8.9+	2.20	土師質 縄目叩

国分寺21次遺物観察表 (2)

遺構		No.	図版番号	写真番号	R番号	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
21SD004茶褐土	(S-4茶褐土)	49	14		008	瓦 平瓦	8.0+	10.7+	1.80	土師質 不明
〃	(S-4茶褐土)	50	14		001	瓦 平瓦	11.2+	7.5+	2.10	土師質 縄目叩
〃	(S-4茶褐土)	51	14		007	瓦 平瓦	6.8+	8.5+	2.90	土師質 縄目叩
〃	(S-4茶褐土)	52	14		005	瓦 平瓦	14.0+	6.5+	3.10	土師質 不明
〃	(S-4茶褐土)	53	14		016	石 不明石器	2.8	4.10	1.05	
21SD023茶砂	(S-23)	54	15		004	須 坏c	–	2.8+	9.45*	
〃	(S-23)	55	15		005	須 坏c	–	2.7+	9.25*	
〃	(S-23)	56	15		001	須 坏c	–	4.4+	–	
〃	(S-23)	57	15		006	須 坏c	–	1.35+	6.7*	
〃	(S-23)	58	15		003	須 坏c	–	1.3+	–	
〃	(S-23)	59	15		002	土師 坏c	–	1.35+	6.70	須恵器の可能性あり
〃	(S-23茶粘)	60	15		001	須 坏c	–	1.5+	9.10	
〃	(S-23茶粘)	61	15		002	須 坏c	–	1.4+	8.00	
21SD015	(S-15)	62	15		024	須 甕	–	4.5+	–	
〃	(S-15)	63	15		019	瓦 平瓦	39.5+	20.0+	3.10	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	64	15		010	瓦 平瓦	25.5+	18.0+	2.20	瓦質 縄目叩
〃	(S-15)	65	15		021	瓦 平瓦	8.2+	9.1+	2.10	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	66	15		006	瓦 平瓦	7.0+	7.0+	1.40	瓦質 縄目叩
〃	(S-15)	67	15		002	瓦 平瓦	29.0+	9.0+	2.50	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	68	16		003	瓦 平瓦	36.30	26.80	3.00	瓦質 縄目叩
〃	(S-15)	69	16		011	瓦 平瓦	35.00	28.00	3.20	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	70	17		013	瓦 平瓦	36.10	25.70	2.50	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	71	17		014	瓦 平瓦	37.40	27.60	2.90	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	72	18		015	瓦 平瓦	36.50	27.10	2.65	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	73	18		012	瓦 平瓦	35.50	27.00	3.20	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	74	18		001	瓦 平瓦	36.40	22.70	3.10	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	75	19		016	瓦 平瓦	27.1+	26.20	3.30	土師質～瓦質 縄目叩
〃	(S-15)	76	19		018	瓦 平瓦	37.20	11.5+	2.50	須恵質 縄目叩
〃	(S-15)	77	19		017	瓦 平瓦	33.0+	27.0+	2.10	瓦質 縄目叩
〃	(S-15)	78	19		023	瓦 平瓦	12.4+	8.9+	2.50	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	79	19		009	瓦 平瓦	14.7+	14.0+	2.40	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	80	19		008	瓦 平瓦	16.2+	11.4+	2.50	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	81	19		005	瓦 平瓦	7.0+	8.4+	2.00	瓦質 縄目叩
〃	(S-15)	82	19		007	瓦 平瓦	11.5+	11.5+	2.20	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	83	19		022	瓦 平瓦	14.2+	11.7+	3.90	土師質 不明
〃	(S-15)	84	19		004	瓦 平瓦	10.2+	18.1+	2.90	土師質 縄目叩
〃	(S-15)	85	19		020	瓦 平瓦	7.8+	10.0+	2.00	土師質 縄目叩
21SX001茶褐土	(S-1茶褐土)	86	20		191	須 蓋1	15.9*	1.8+		
〃	(S-1茶褐土)	87	20		188	須 蓋1	–	1.7+		
〃	(S-1茶褐土)	88	20		190	須 蓋1	–	1.8+		
〃	(S-1茶褐土)	89	20		145	須 蓋3	12.6*	2.2+		
〃	(S-1茶褐土)	90	20		198	須 坏c	–	4.5+	–	
〃	(S-1茶褐土)	91	20		189	須 坏c	–	1.7+	10.25*	
〃	(S-1茶褐土)	92	20		211	須 坏c	–	2.6+	7.6*	
〃	(S-1茶褐土)	93	20		148	土師 坏a	–	2.4+	8.0*	
〃	(S-1茶褐土)	94	20		013	須 長頸瓶	–	9.95+	–	
〃	(S-1茶褐土)	95	20		197	須 甕	–	4.2+	–	
〃	(S-1茶褐土)	96	20		196	須 甕?	–	3.2+	–	
〃	(S-1茶褐土)	97	20		119	須 甕	–	9.9+	–	
〃	(S-1茶褐土)	98	20		214	須 甕	–	7.2+	–	
〃	(S-1茶褐土)	99	20		212	土師 甕a	–	5.3+	–	
〃	(S-1茶褐土)	100	21		012	土師 坏a	–	1.1+	7.50	
〃	(S-1茶褐土)	101	21		143	土師 坏a	–	2.0+	–	
〃	(S-1茶褐土)	102	21		111	土師 坏	–	1.5+	–	
〃	(S-1茶褐土)	103	21		215	土師 椀c	–	3.6+	7.4*	
〃	(S-1茶褐土)	104	21		109	土師 坏c	–	2.6+	7.05*	
〃	(S-1茶褐土)	105	21		093	土師 坏c	12.2*	5.10	7.70	
〃	(S-1茶褐土)	106	21		123	土師 坏	13.0*	3.7+	–	

国分寺21次遺物観察表 (3)

遺構		No.	図版番号	写真番号	R番号	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
21SX001茶褐土	(S-1茶褐土)	107	21		011	土師 椀c	-	2.05+	7.6*	
〃	(S-1茶褐土)	108	21		002	土師 椀c	-	1.3+	8.4*	
〃	(S-1茶褐土)	109	21		010	土師 椀c	-	1.85+	8.4*	
〃	(S-1茶褐土)	110	21		128	土師 椀c	-	2.5+	-	
〃	(S-1茶褐土)	111	21		149	土師 椀c	-	2.1+	-	
〃	(S-1茶褐土)	112	21		127	土師 椀c	-	1.4+	-	
〃	(S-1茶褐土)	113	21		110	黒A 坏	13.0*	2.55+	-	
〃	(S-1茶褐土)	114	21		003	黒A 椀c	-	1.7+	-	
〃	(S-1茶褐土)	115	21		004	黒A 椀c	-	1.2+	-	
〃	(S-1茶褐土)	116	21		005	黒B 椀c	-	1.6+	-	
〃	(S-1茶褐土)	117	21		048	青磁 椀I-2ヶ類	-	2.6+	9.40	越州窯系青磁
〃	(S-1茶褐土)	118	21		175	青磁 椀I-5類	-	2.9+	9.2*	越州窯系青磁
〃	(S-1茶褐土)	119	21		144	青磁 椀I-2類	-	2.8+	-	越州窯系青磁
〃	(S-1茶褐土)	120	21		001	青磁 壺	-	3.9+	-	越州窯系青磁
〃	(S-1茶褐土)	121	22		173	瓦 丸瓦	10.1+	10.6+	3.8+	土師質
〃	(S-1茶褐土)	122	22		138	瓦 軒丸瓦	14.9+	15.5+	2.80	土師質
〃	(S-1茶褐土)	123	22		049	瓦 軒丸瓦	10.5+	13.1+	4.60	瓦質 簡単弁二一弁蓮華文？
〃	(S-1茶褐土)	124	22		163	瓦 軒丸瓦	10.05+	13.35+	2.70	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	125	22		146	瓦 軒丸瓦	5.8+	10.5+	8.40	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	126	22		063	瓦 軒丸瓦	4.05+	10.0+	4.45	土師質
〃	(S-1茶褐土)	127	22		046	瓦 軒丸瓦	6.6+	8.2+	3.10	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	128	22		122	瓦 軒丸瓦	2.5+	6.5+	5.40	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	129	22		027	瓦 軒丸瓦	4.1+	10.45+	3.25+	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	130	22		170	瓦 軒丸瓦	6.5+	6.0+	4.0+	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	131	22		126	瓦 軒丸瓦	6.4+	6.5+	2.5+	土師質
〃	(S-1茶褐土)	132	22		028	瓦 軒丸瓦	4.75+	8.4+	3.5+	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	133	22		050	瓦 軒丸瓦	6.2+	7.5+	3.10	瓦質 神護館式？
〃	(S-1茶褐土)	134	22		120	瓦 軒平瓦	13.0+	19.5+	8.30	瓦質 老司式
〃	(S-1茶褐土)	135	22		210	瓦 軒平瓦	9.9+	15.2+	4.50	瓦質 神護館式？
〃	(S-1茶褐土)	136	22		062	瓦 軒平瓦	12.4+	14.6+	4.05	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	137	22		021	瓦 軒平瓦	6.5+	12.6+	5.00	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	138	22		121	瓦 軒平瓦	6.5+	11.9+	5.20	瓦質 神護館式？
〃	(S-1茶褐土)	139	22		099	瓦 せん	7.7+	6.8+	5.90	須恵質 無文
〃	(S-1茶褐土)	140	23		171	瓦 丸瓦	19.7+	13.0+	3.70	瓦質 格子叩
〃	(S-1茶褐土)	141	23		205	瓦 丸瓦	12.3+	6.9+	2.90	須恵質 格子叩
〃	(S-1茶褐土)	142	23		074	瓦 丸瓦	11.5+	10.0+	1.90	瓦質 格子叩
〃	(S-1茶褐土)	143	23		047	瓦 丸瓦	15.1+	8.0+	2.30	瓦質 格子叩
〃	(S-1茶褐土)	144	23		176	瓦 丸瓦	13.55+	9.8+	2.35	須恵質 文字瓦XII類
〃	(S-1茶褐土)	145	23		036	瓦 丸瓦	11.2+	7.8+	1.80	須恵質 文字瓦XII類
〃	(S-1茶褐土)	146	23		069	瓦 丸瓦	17.0+	7.5+	1.80	瓦質 文字瓦XII類
〃	(S-1茶褐土)	147	23		017	瓦 平瓦	13.0+	11.7+	2.00	須恵質 格子叩
〃	(S-1茶褐土)	148	24		007	瓦 平瓦	36.60	24.50	2.90	土師質 縄目叩
〃	(S-1茶褐土)	149	24		008	瓦 平瓦	33.6+	26.20	3.10	土師質 縄目叩
〃	(S-1茶褐土)	150	24		014	瓦 平瓦	21.65+	26.70	2.70	土師質 縄目叩
〃	(S-1茶褐土)	151	24		113	瓦 平瓦	27.1+	25.6+	2.60	土師質 平行叩
〃	(S-1茶褐土)	152	25		164	瓦 平瓦	38.00	27.00	3.60	瓦質 縄目叩
〃	(S-1茶褐土)	153	25		112	瓦 平瓦	21.5+	29.40	3.00	瓦質 縄目叩
〃	(S-1茶褐土)	154	25		070	瓦 平瓦	12.5+	8.7+	1.90	瓦質 文字瓦II-4b類
〃	(S-1茶褐土)	155	26		186	石製品 石斧	11.60	7.90	3.20	482.5g
〃	(S-1茶褐土)	156	26		187	石製品 砥石	4.00	5.00	3.40	72.2g
〃	(S-1茶褐土)	157	26		216	石製品 ob-RF	3.10	2.20	0.90	
〃	(S-1茶褐土)	158	26		115	金属 敲石	3.10	2.50	1.40	
〃	(S-1茶褐土)	159	26		213	土製品 不明品	8.80	13.40	4.70	
〃	(S-1茶褐土)	160	26		151	瓦 瓦玉	5.20	4.80	2.30	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	161	26		153	瓦 瓦玉	3.30	4.00	1.80	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	162	26		152	瓦 瓦玉	3.00	4.40	1.90	瓦質
〃	(S-1茶褐土)	163	26		150	瓦 瓦玉	3.80	3.60	2.50	瓦質
21SX005	(S-5)	164	27		001	土師 坏a	11.90	2.30	8.70	

国分寺21次遺物観察表 (4)

遺構		No.	図版番号	写真番号	R番号	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
21SX005	(S-5c)	165	27		001	土師 坏a	–	1.0+	–	
〃	(S-5)	166	27		003	土師 小皿a	7.6*	1.70	4.90	
〃	(S-5)	167	27		002	土師 小皿a	7.4*	1.60	4.90	
〃	(S-5茶褐土)	168	27		001	土師質 鉢	14.90	11.70	5.00	
〃	(S-5・5茶灰土)	169	27		001	土製品 焼土塊	4.65	3.70	2.10	
21SX008	(S-8)	170	27		001	瓦 軒丸瓦	10.0+	9.5+	3.20	瓦質
〃	(S-8)	171	27		002	瓦 軒平瓦	11.0+	5.5+	4.0+	瓦質 瑞雲鎖系?
〃	(S-8)	172	27		003	瓦 丸瓦	6.5+	6.0+	1.50	須恵質 格子叩
21SX009	(S-9)	173	27		002	土師 椀c	–	1.8+	–	
〃	(S-9)	174	27		001	土師 椀c	–	2.05+	–	
〃	(S-9)	175	27		004	瓦 丸瓦	5.0+	4.5+	1.70	瓦質 格子叩
〃	(S-9)	176	27		003	瓦 平瓦	6.2+	7.5+	1.60	土師質 格子叩
21SX011灰褐土	(S-11灰褐土)	177	27		016	陶器 椀	–	3.1+	5.2*	古墳津
〃	(S-11灰褐土)	178	27		010	青磁 椀I-2類	–	3.1+	–	龍泉窯系青磁
〃	(S-11灰褐土)	179	27		015	白磁 皿IX-1a類	–	1.3+	6.0*	
〃	(S-11灰褐土)	180	27		009	白磁 皿IX類	–	2.4+	–	
〃	(S-11灰褐土)	181	27		019	石製品 板状石製品	3.60	5.80	2.05	二次加工
〃	(S-11灰褐土)	182	27		011	石製品 滑石製石鍋	–	6.05+	–	
〃	(S-11灰褐土)	183	27		002	瓦 軒丸瓦	13.0+	14.0+	3.40	瓦質 唐草系
〃	(S-11灰褐土)	184	27		005	瓦 平瓦	6.0+	4.9+	1.40	瓦質 文字瓦VI-3類
〃	(S-11灰褐土)	185	27		020	瓦 瓦玉	6.20	7.20	1.70	瓦質
21SX003	(S-3)	186	28		002	瓦 平瓦	5.7+	5.6+	1.60	瓦質 格子叩
〃	(S-3)	187	28		001	瓦 平瓦	16.7+	8.9+	3.70	土師質 格子叩
21SX013	(S-13)	188	28		003	須 蓋I	–	1.35		
〃	(S-13)	189	28		002	須 坏c	–	1.4+	–	
〃	(S-13)	190	28		001	須 坏c	–	1.5+	10.50	
〃	(S-13)	191	28		005	瓦 丸瓦	4.3+	5.4+	1.40	瓦質 格子叩
〃	(S-13)	192	28		004	瓦 平瓦	7.5+	5.8+	1.90	瓦質 格子叩
〃	(S-13)	193	28		006	瓦 平瓦	10.6+	11.2+	2.70	土師質 格子叩
21SX014	(S-14)	194	28		001	須 坏c	–	1.5+	10.90	
〃	(S-14)	195	28		002	須 坏c (脚)	–	1.1+	7.20	
21SX016	(S-16)	196	28		002	瓦 平瓦	8.45+	8.7+	1.95	瓦質 格子叩
〃	(S-16)	197	28		001	瓦 丸瓦	10.1+	9.5+	2.05	須恵質 格子叩
21SX018	(S-18)	198	28		002	瓦 平瓦	11.4+	5.7+	1.65	土師質 格子叩
〃	(S-18)	199	28		001	瓦 平瓦	8.1+	6.5+	2.15	土師質 格子叩
21SX031	(S-31)	200	28		001	瓦 丸瓦	8.15+	8.2+	1.80	瓦質 格子叩
〃	(S-31)	201	28		002	瓦 平瓦	8.9+	8.8+	1.85	瓦質 格子叩
21SX032	(S-32)	202	28		001	瓦 丸瓦	6.1+	8.5+	1.50	須恵質 格子叩
〃	(S-32)	203	28		003	瓦 丸瓦	9.5+	9.0+	1.90	瓦質 格子叩
〃	(S-32)	204	28		006	瓦 平瓦	8.5+	7.5+	2.40	瓦質 格子叩
〃	(S-32)	205	28		004	瓦 平瓦	3.5+	5.4+	1.40	瓦質 格子叩
〃	(S-32)	206	28		005	瓦 平瓦	7.5+	4.5+	1.60	瓦質 格子叩
〃	(S-32)	207	28		002	瓦 平瓦	3.2+	6.0+	1.30	瓦質 格子叩
21SX033	(S-33)	208	28		002	陶器 椀	–	1.25+	–	灰釉
〃	(S-33)	209	28		001	土師 甕	15.6*	5.0+	–	
21SX027	(S-27茶褐土)	210	29		001	土師 坏a	–	1.3+	–	
〃	(S-27茶褐土)	211	29		002	瓦 平瓦	42.50	26.50	2.90	土師質 縄目叩
21SX028	(S-28)	212	29		002	須 甕	–	6.0+	–	
〃	(S-28)	213	29		001	須 甕	–	5.85+	–	
〃	(S-28)	214	29		004	土師 カマド	–	7.4+	–	把手
〃	(S-28)	215	29		003	土製品 羽口	2.20	2.85	1.60	
〃	(S-28)	216	29		008	瓦 隅瓦	18.0+	15.5+	4.80	土師質 道具瓦
〃	(S-28)	217	30		007	瓦 平瓦	21.5+	25.0+	2.40	須恵質 縄目叩
〃	(S-28)	218	30		006	瓦 平瓦	15.4+	24.90	2.80	瓦質 縄目叩
〃	(S-28)	219	30		005	瓦 丸瓦	11.95+	12.1+	1.60	瓦質 不明
21SX038	(S-38)	220	30		001	瓦 平瓦	20.4+	14.0+	2.20	瓦質 縄目叩
〃	(S-38)	221	30		004	瓦 平瓦	9.0+	26.7+	3.20	土師質 縄目叩
〃	(S-38)	222	31		002	瓦 丸瓦	42.00	16.40	2.50	瓦質 縄目叩 行基瓦

国分寺21次遺物観察表 (S)

遺構		No.	図版番号	写真番号	R番号	器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考 (+は欠損、*は復原値)
21SX038	(S-38)	223	31		003	瓦 丸瓦	36.2+	17.80	2.40	土師質 縄目叩 行基瓦
21茶色土	(茶色土)	224	32		001	土師 坏a	12.6*	2.3+	9.00	
〃	(茶色土)	225	32		002	青磁 椀I	–	2.3+	7.3*	越州窯系青磁
〃	(茶色土)	226	32		004	白磁 椀IV	18.2*	3.05+	–	
〃	(茶色土)	227	32		003	青磁 椀I	–	3.1+	–	越州窯系青磁
〃	(茶色土)	228	32		008	石製品 不明石製品	5.2+	2.0+	1.10	
〃	(茶色土)	229	32		007	石製品 磨製石斧	9.1+	2.6+	1.5+	
〃	(茶色土)	230	32		006	石製品 磨製石斧	10.7+	5.2+	3.60	
〃	(茶色土)	231	32		005	瓦 軒平瓦	8.2+	7.7+	4.58	土師質
21灰色土	(灰色土)	232	32		001	青磁 小椀III-2	–	2.45+	3.2*	龍泉窯系青磁
21茶褐土	(茶褐土)	233	32		001	須 蓋c	12.60	2.5+		
〃	(茶褐土)	234	32		025	須 蓋	–	2.1+		
〃	(茶褐土)	235	32		029	須 長頸壺	–	2.4+	–	
〃	(茶褐土)	236	32		003	須 坏c	–	2.15+	8.60	
〃	(茶褐土)	237	32		024	須 高坏	–	3.7+	–	
〃	(茶褐土)	238	32		009	須 甕	–	5.8+	–	
〃	(茶褐土)	239	32		007	土師 坏c	–	1.5+	6.5*	
〃	(茶褐土)	240	32		006	土師 坏a	13.6*	3.60	8.0*	
〃	(Z)	241	32		001	土師 丸坏	–	2.1+	10.5*	
〃	(茶褐土)	242	32		004	土師 甕	–	3.8+	10.60	
〃	(茶褐土)	243	32		015	青磁 水注	–	2.1+	–	越州窯系青磁
〃	(茶褐土)	244	32		014	青磁 水注	–	2.05+	–	越州窯系青磁
〃	(茶褐土)	245	32		026	陶器 鉢	–	4.0+	–	近世陶器
〃	(茶褐土)	246	32		021	白磁 椀IV	–	4.5+	–	
〃	(茶褐土)	247	32		027	青磁 椀	–	2.3+	–	龍泉窯系青磁
〃	(茶褐土)	248	32		008	青磁 椀I-5b	–	2.5+	–	龍泉窯系青磁
〃	(茶褐土)	249	33		032	瓦 軒丸瓦	12.0+	12.5+	2.90	瓦質 峰龍院系
〃	(茶褐土)	250	33		033	瓦 軒丸瓦	11.0+	12.0+	3.20	瓦質 峰龍院系
〃	(茶褐土)	251	33		030	瓦 軒丸瓦	3.2+	9.2+	3.80	瓦質
〃	(茶褐土)	252	33		031	瓦 軒丸瓦	4.5+	4.2+	4.3+	瓦質
〃	(茶褐土)	253	33		002	瓦 軒平瓦	10.0+	17.8+	5.20	須恵質 峰龍院系
〃	(茶褐土)	254	33		020	瓦 丸瓦	7.5+	7.2+	2.40	須恵質 格子叩
〃	(茶褐土)	255	33		018	瓦 丸瓦	6.7+	7.0+	2.10	須恵質 格子叩
〃	(茶褐土)	256	33		022	瓦 丸瓦	2.8+	6.0+	2.40	須恵質 格子叩
〃	(茶褐土)	257	33		010	瓦 丸瓦	11.90	12.00	1.90	瓦質 縄目叩
〃	(茶褐土)	258	33		012	瓦 平瓦	24.5+	15.0+	2.40	土師質 格子叩
〃	(茶褐土)	259	33		011	瓦 平瓦	7.0+	7.0+	2.20	瓦質 格子叩
〃	(茶褐土)	260	33		019	瓦 平瓦	4.2+	8.0+	1.90	
〃	(茶褐土)	261	33		034	石器 ob－F	2.40	2.50	0.95	
〃	(茶褐土)	262	33		028	石器 (UF) An	4.10	3.8+	0.90	
〃	(茶褐土)	263	34		013	瓦 丸瓦	39.4+	15.8+	2.70	土師質 縄目叩
〃	(茶褐土)	264	34		017	瓦 平瓦	35.5+	17.5+	4.30	土師質 縄目叩
21Aトレ茶褐土	(Aトレ茶褐土)	265	35		004	須 蓋	13.7*	1.45+		
〃	(Aトレ茶褐土)	266	35		010	須 坏c	–	2.7+	10.95*	
〃	(Aトレ茶褐土)	267	35		001	須 坏c3	17.6*	3.70	11.7*	
〃	(Aトレ茶褐土)	268	35		011	須 坏	16.6*	3.2+	–	
〃	(Aトレ茶褐土)	269	35		003	須 坏	15.2*	2.85	–	
〃	(Aトレ茶褐土)	270	35		005	須 小甕	11.8*	4.4+	–	
〃	(Aトレ茶褐土)	271	35		009	須 甕	–	7.0+	–	
〃	(Aトレ茶褐土)	272	35		002	土師 甕a	16.3*	3.80	–	
〃	(Aトレ茶褐土)	273	35		012	土師 甕	–	4.1+	–	
〃	(Aトレ茶褐土)	274	35		013	土師 甕	–	3.7+	–	
〃	(Aトレ茶褐土)	275	35		007	青磁 壺	–	6.3+	–	越州窯系青磁
〃	(Aトレ茶褐土)	276	35		006	青磁 椀	–	2.5+	7.00	龍泉窯系青磁
〃	(Aトレ茶褐土)	277	35		008	陶器 鉢	–	4.7+	–	鉄釉陶器
〃	(Aトレ灰色土)	278	35		001	須 坏c3	14.00	3.10	10.55	
21Aトレ表土	(Aトレ表土)	279	35		002	青磁 椀	–	3.1+	–	越州窯系青磁
〃	(Aトレ表土)	280	35		001	白磁 皿	–	2.4+	–	近現代

2.第21-2次調査

1.調査に至る経緯

調査地は、太宰府市国分３丁目622-3に所在し、平成８年度に調査を実施した21次調査の北に隣接している。駐車場造成に伴っての調査であったが、南に隣接する21次調査によって国分寺西外郭遺構が検出され、その北側延長部分および施設の詳細を確認する必要が生じ発掘調査を実施した。

調査に至る経過は、平成８年度に実施した21次調査の成果から、国分寺西外郭遺構の確認が必要となってきたため、21次調査途中において平成８年12月に地権者である中島洋之氏と発掘調査に関わる協議を行った。その際、中島氏から当該地番において倉庫兼車庫の建設計画についての申し出がなされたため、合わせて発掘調査の必要性について説明し、平成９年度において調査を実施することで合意をみた。発掘調査は平成９年７月14日から開始し、同年９月27日に終了した。開発対象面積は191.39㎡、調査面積は100㎡を測る。発掘調査は中島恒次郎が担当した。

2.層位

現地表面下、約0.2m程に整地のためのマサ土による造成土があり、その下位に暗茶系の色調の堆積土が確認できた。この堆積土中には瓦等の遺物が包含されており、遺物取り上げ層位を茶褐色土で記載した。この堆積層は、西端部にて下位の遺構形状に規制されてか、下へ下がっている。この暗茶系の堆積土を除去すると、中世に形成されたと考えられる遺構面が確認できた。中世の遺構は、調査区西端部にのみ南北方向で確認でき、他の部分については検出できなかった。この中世に形成された遺構の下位に国分寺西外郭施設と考えられる遺構群が検出できた。主たる遺構は、溝２条および塀と考えられる柱穴を検出した。さらにこれら外郭施設形成時に整地されたと考えられる明黄茶色土が下位に確認できた。遺跡保存のため完全に掘り下げる調査は実施していない。調査終了後、マサ土によって遺構表面を保護し、その上に調査時に出た排土を被せ、さらに上位に再びマサ土による埋め戻しを実施している。

3.遺構

1）塀跡

21SA075

調査区中央部に検出した方形の掘り方を有する柱穴で、西半部の調査および東半部の調査の境界部分に検出したことから、当初大形の掘り方を有した柱と考えていたが、精査の結果２つ

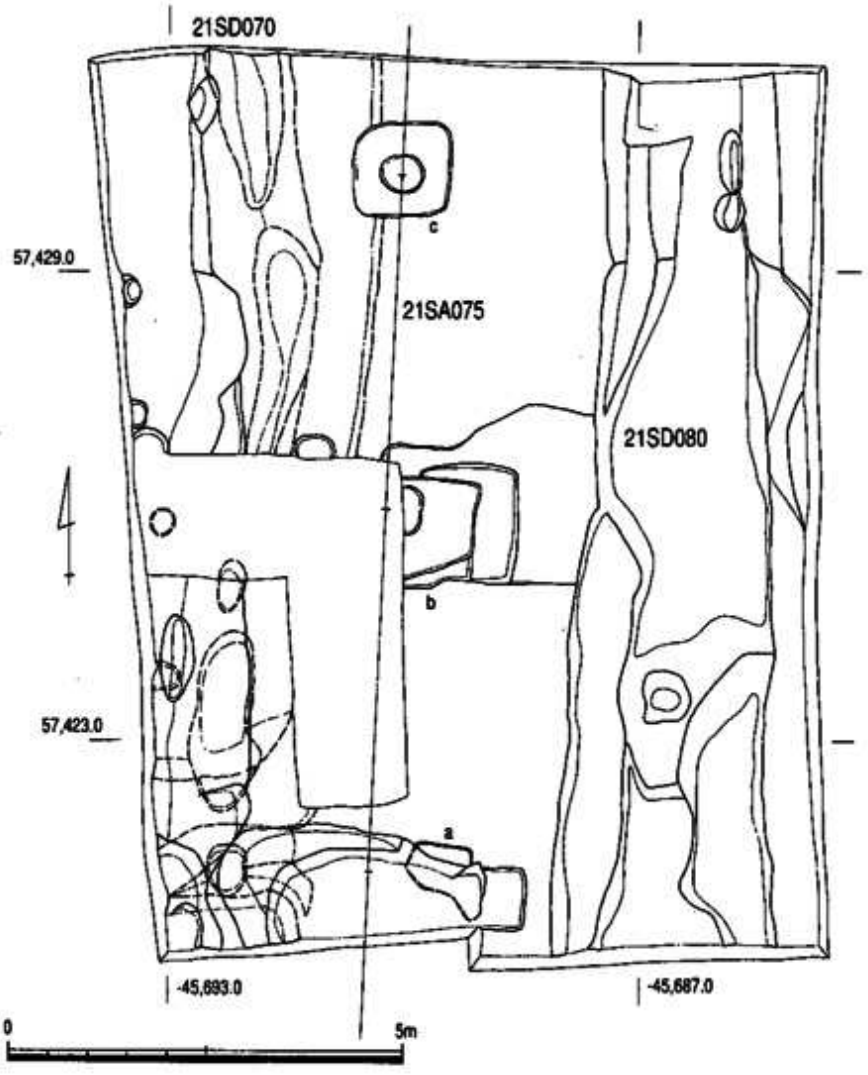


図41. 第21-2次調査遺構配置図（S=1/100）

の柱であったことが判明し、切り合い関係から西側の柱穴が新しく2時期存在していることがわかった。新しい柱穴の塀については、調査区内において3基確認しているが、古い柱穴の塀に関しては、調査区中央および南端部の2基を検出した。したがって、古い柱穴を有する塀に関しては、北方へ延びるかどうか定かではない。新しい柱穴の塀の方向は、柱穴任意中点座標から算出した結果、N0° 34′ 31″ Wを測る。ただし21-2SA075bの柱穴に関しては、平成8年度の21次調査時のトレンチ調査によって全形を確認できない状態であったため、柱穴任意中点の座標は、柱穴形状を正方形と仮定し柱穴東辺の1/2から導き出した。全形を確認できたのは、北端にて検出した21-2SA075cのみであったが、平面および土層にて確認した柱は、径約0.5mを測り、残存する深さは僅か0.3m程であった。

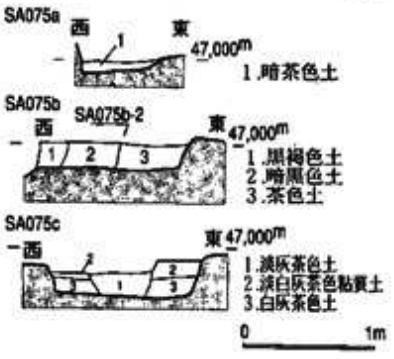


図42. 21SA075土層実測図（S=1/60）

2）溝跡

21SD060

中世に形成された堆積土21-2SX055によって西半部分を欠失しているため溝とするには問題が残り、西外郭施設外側の段に堆積した土層である可能性もある。遺構の幅は前述のとおり西部分を欠失しているため定かではない、残存する深さは0.25m程を測る。

21SD065

21-2SD060下位に検出した土壙状に南北に連なる溝で、堆積土の状況から上位の21-2SD060との境界は確認し難い。一連の遺構と考えた方が良いが、21-2SD060が包含層である可能性があるため、遺構と認定した時点で分けることにした。検出した溝幅は、最大で0.94m、最小で0.36mを測り、残存する深さは0.25m前後を測る。溝南北端の任意中点座標から算出した方向は、N2° 33′ 53″ Eを測る。

21SD080

調査区東半部にて検出した南北溝で、溝幅2.1m～2.8mを測り、残存する深さは0.5mを測る。溝断面の形状は2段掘りの状況を呈するが、溝全体にわたって2段掘りで確認できず、部分的に崩壊に伴って欠失する箇所が認められた。溝南北端の任意中点座標から算出した方向は、N2° 3′ 42″ Eを測る。溝南東部には、塀に葺いてあったと考えられる瓦が、塀倒壊を想起させる状態で多量に出土している。また溝内からも多量の瓦が出土しているが、散在する

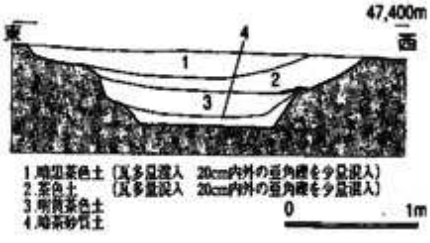


図43. 21SD080土層実測図（S=1/60）

ような状況で出土しており、使用の共時性については定かではない。

3）その他の遺構

21SX055

調査区西端部分に検出し、調査区外に延びるため遺構の性格については定かではない。北壁土層から包含層である可能性が高い。堆積土には、国分寺に関わると考えられる瓦が多量に包含され、極少量青磁や土師器が出土している。したがって、周辺に散在していた瓦を片づけた際に埋置されたとも考えられる。遺構規模については、調査区外へ延びるため定かではないが、検出面からの残存する深さは、0.23mを測る。

（中島恒次郎）

4.遺物

柵出土遺物

21SA075 出土遺物　（図44）

土師器

甕a（1）　口径23.0cmを測る。外面はハケ調整、内面はヘラ削りである。頸部内面の屈曲は明瞭はでない。

須恵器

坏c（2）口径14.0cm・器高3.2cmを測る。見込みは平滑で転用硯と思われる。

大坏c（3）　高台径12.1cm。高台は外側へ開く形状で、底部外面と体部外面下位は回転ヘラ

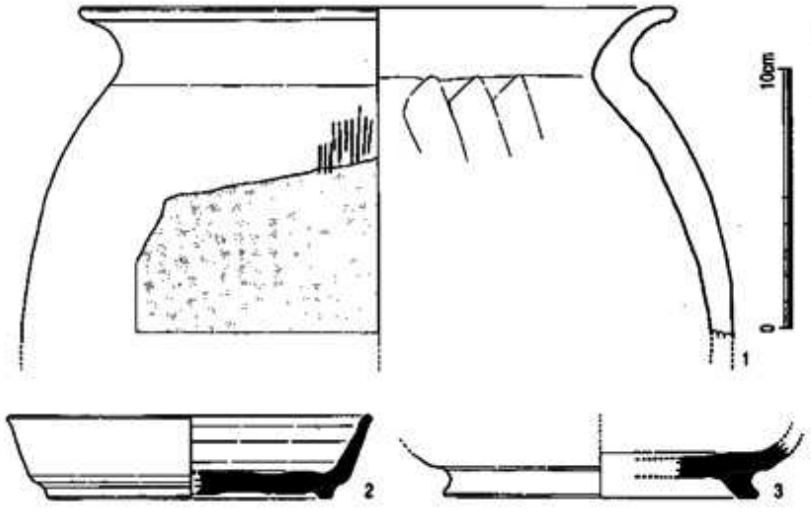


図44.　21SA075出土遺物実測図（S=1/3）

削りを行う。

溝出土遺物

21SD080 出土遺物　（図45）

土師器

坏（1）　口縁端部がわずかに欠損するが、推定口径13.5cm。赤茶色を呈し、体部内面はナデ調整と思われる。古墳時代後期のものと考えられる。

坏d（2）　底径は8.1cmを測り、残存部の底部と体部外面は回転ヘラ削りを行う。

椀c（3～5）　高台径はそれぞれ7.0・7.7・7.4cm。明茶灰色を呈し、直立気味の高台を有す。

須恵器

壺f（6）　直立気味の頸部から口縁を外反させ、直線的に立ち上がる。胴部内面は粘土紐接合痕の上を粗くナデている。

越州窯系青磁

椀（7）　口径17.2cm。明灰色の精良な胎土で、やや黄色味を帯びた明灰緑色の釉を施す。口縁端部を外反させる。I類。

21SD080 黄茶色土出土遺物　（図45）

須恵器

坏c（8）　口径12.4cm・器高3.8cmを測る。高台を坏底部の際に接合する。

21SD080 出土倒壊瓦　（図46～48）

次の1～10の瓦は建造物の倒壊に伴って一括廃棄された状態で出土した瓦で、SD080出土の

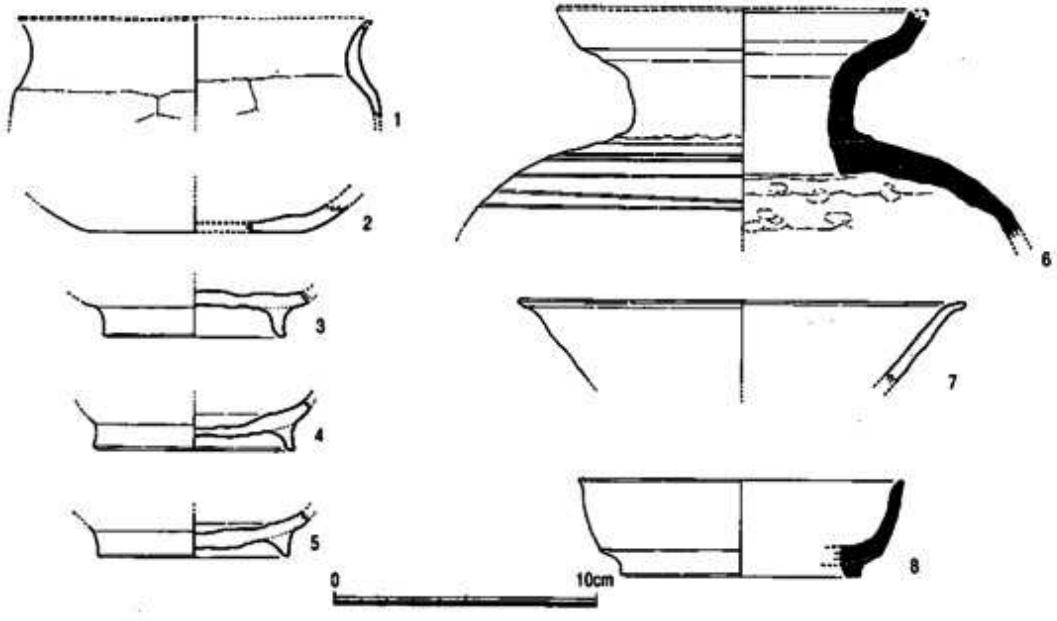


図45.　21SD080出土遺物実測図（S=1/3）

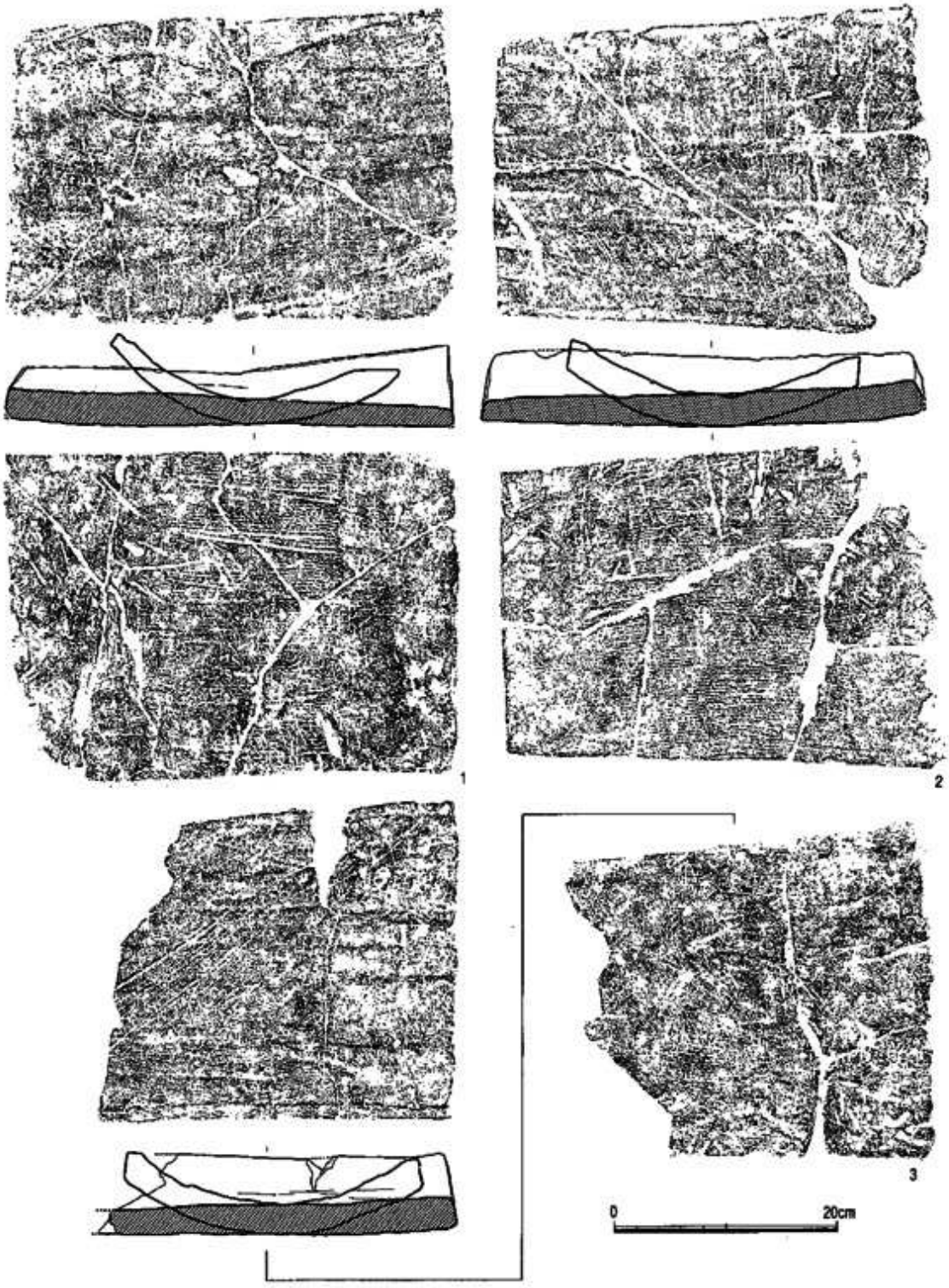


図46. 21SD080倒壊瓦出土遺物実測図（1）（S=1/6）

他の瓦と分けて報告する。

平瓦（1～7） 1～7の凸面はいずれも縦方向の縄目叩きで1・2は両端をスリ消している。1

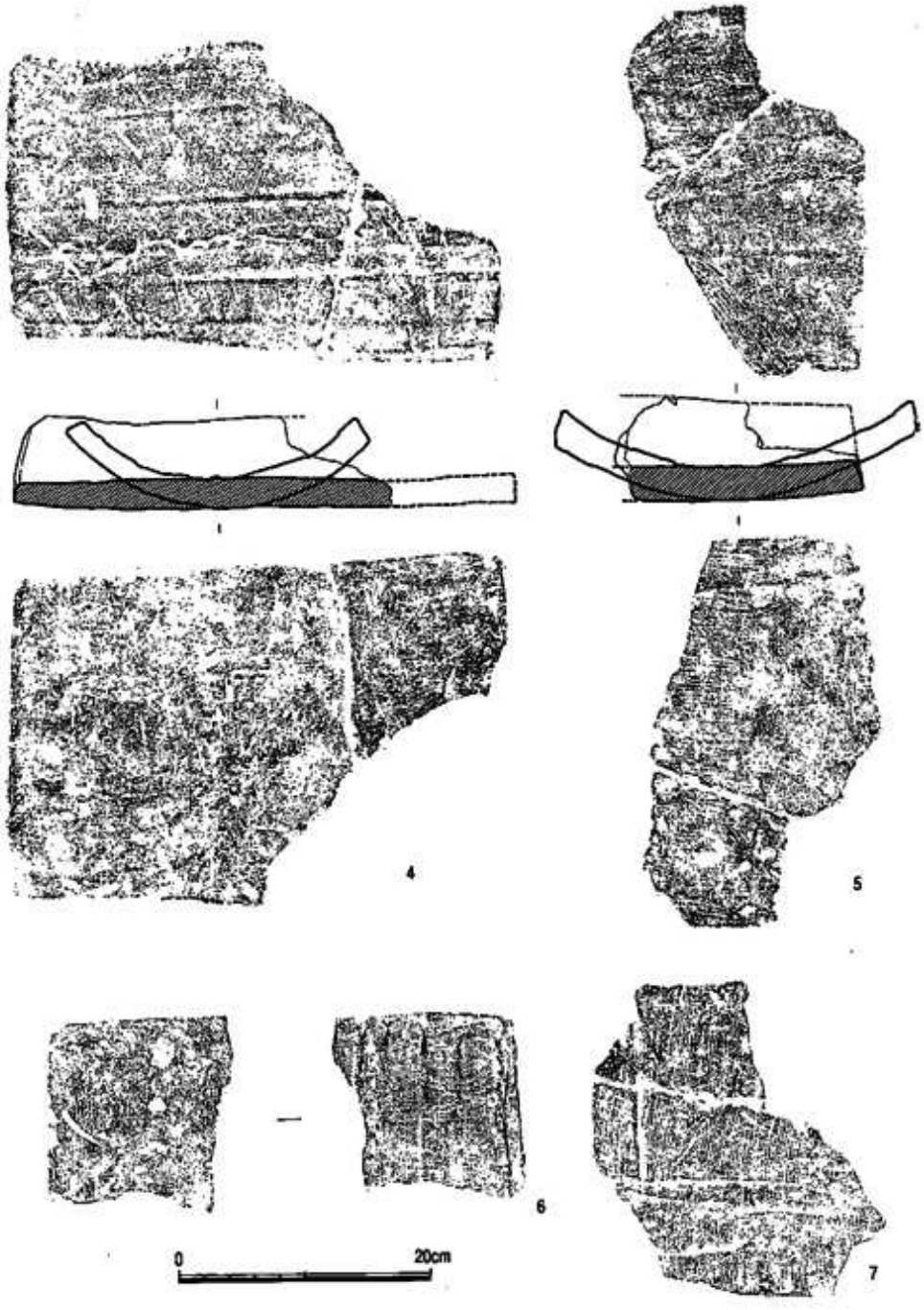


図47. 21SD080倒壊瓦出土遺物実測図（2）（S=1/6）

は叩きの単位が14.5×4.8cm。7は叩きで生じた凹凸を上から工具で粗くナデたと思われ、その痕跡が多く残っている。凹面は 1・2・7に縦方向に布を継いだ痕跡と、4・5には粘土の接合痕が観察される。3～6の凹面についた段は模骨痕と考えられる。3の側縁には端部方向に条痕があり、ヘラ削りで調整している。4は側縁に破断面が残っている。以上のことから1～7は桶巻

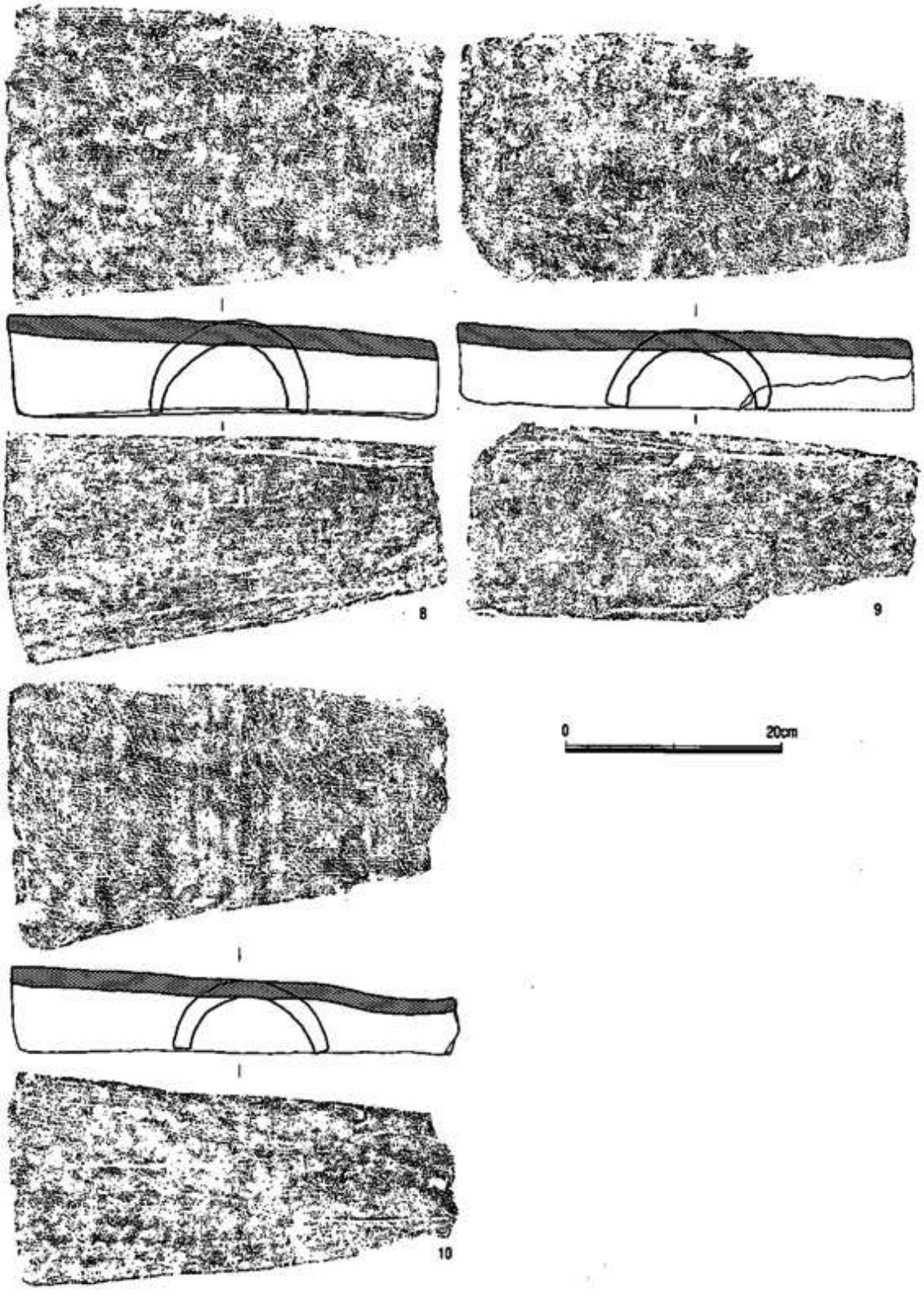


図48. 21SD080倒壊瓦出土遺物実測図（3）（S=1/6）

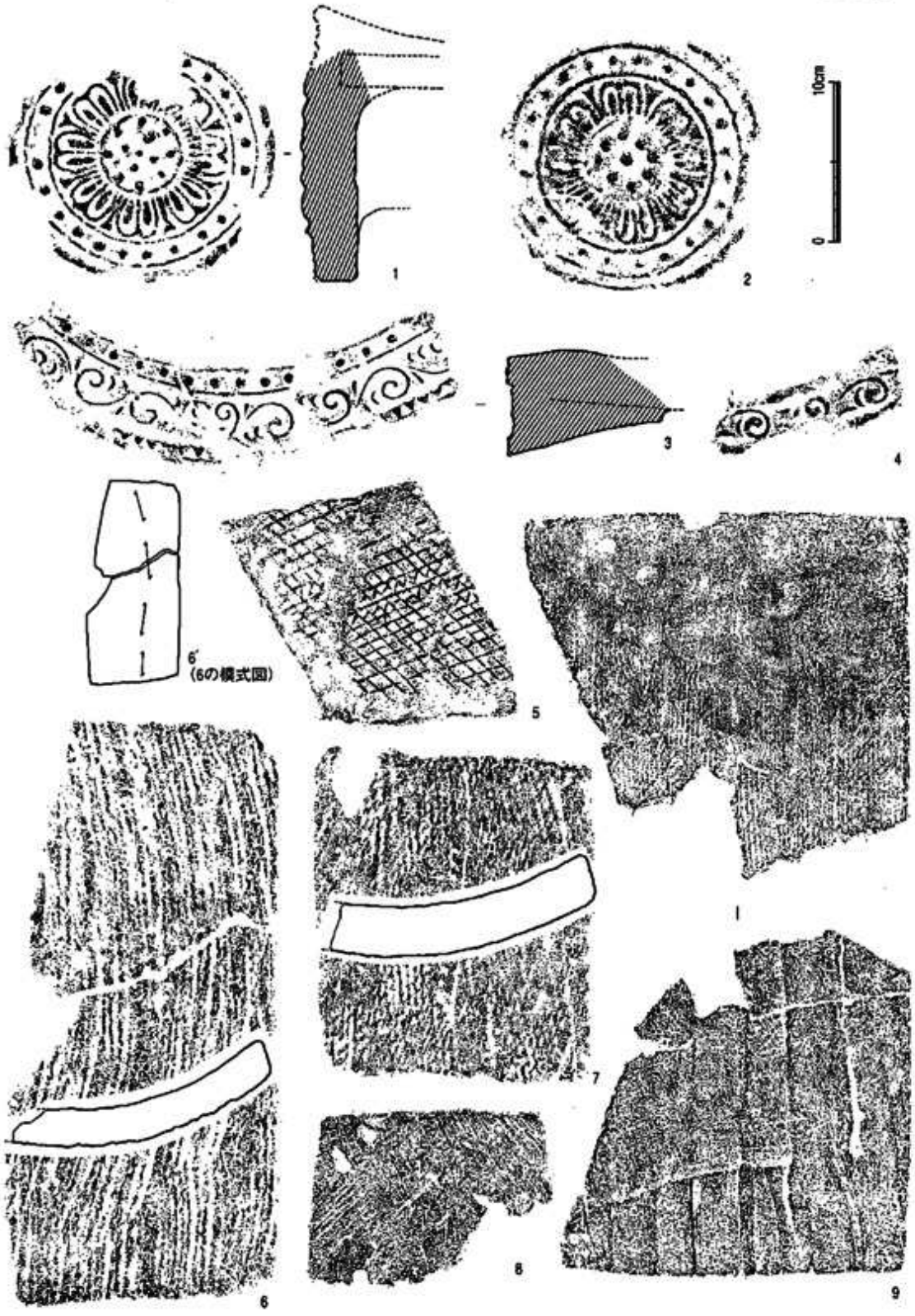


図49. 21SD080出土瓦実測図（1）（S=1/4）

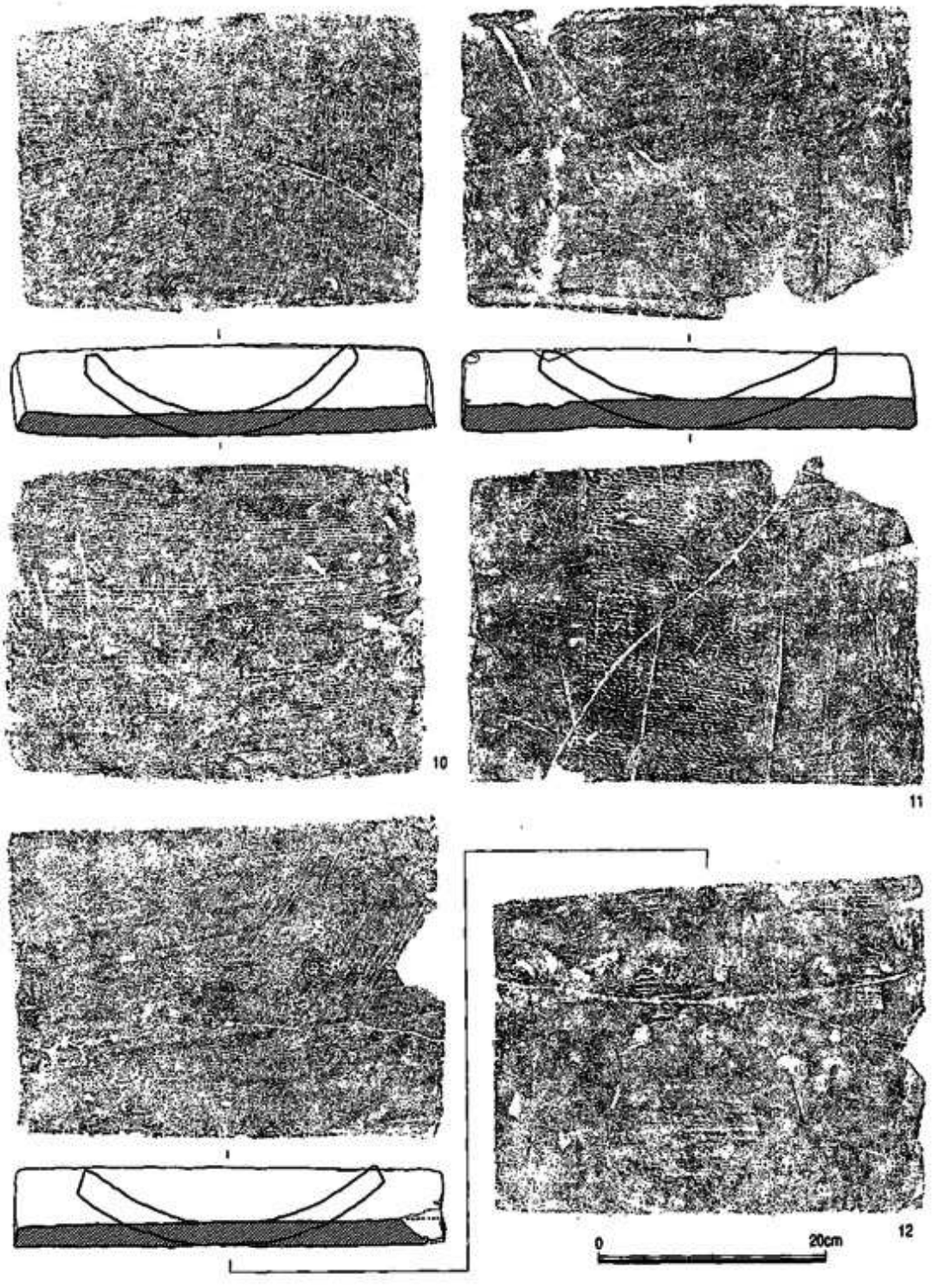


図50. 21SD080出土瓦実測図（2）（S=1/6）

き作りであろう。

丸瓦（8～10） 凸面は縄目叩き。いずれも内側から切り込みを入れて分割、外側に破断面

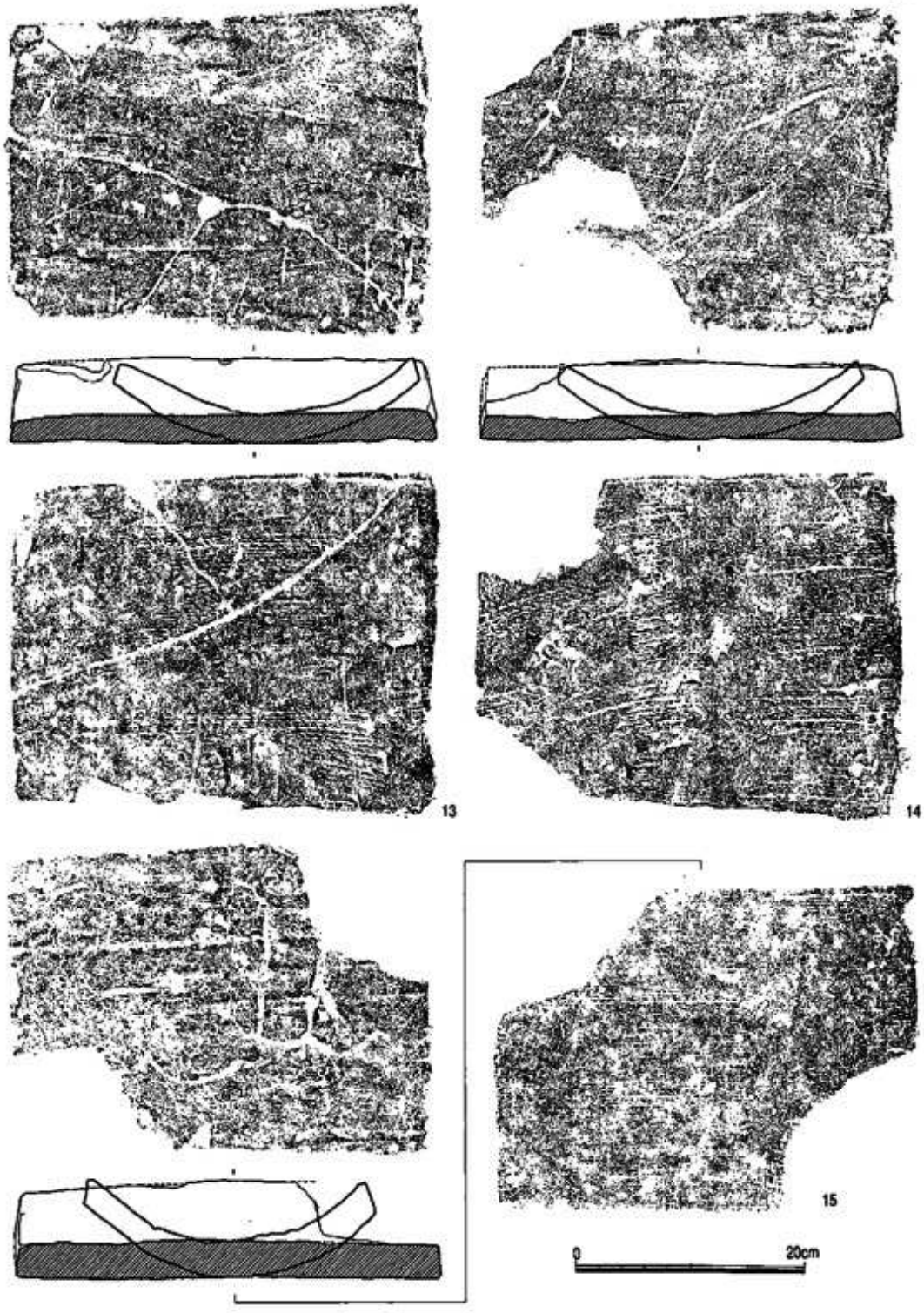


図51. 21SD080出土瓦実測図（3）（S=1/6）

が残っている。3枚とも行基瓦で、10は狭端部近くに緩やかな段を有しているが、肩部に粘土を接合した痕はない。

21-2次

21SD080 出土瓦　（図49～53）

軒丸瓦　（1・2）　1は複弁蓮華文で鴻臚館式。2は1に似ているが弁の一つが単弁になっており、国分寺創建期の瓦と報告されているものと同じタイプである。

軒平瓦（3・4）　3は鴻臚館式で、寸法を合わせるために両端を切断したものと考えられる。顎部上面に布目痕が残っていることから、平瓦部分を瓦当面に対しやや鋭角気味に角度をつけて挿入するため、端部の突き出る部分をだけを削って調整したものと考えられる。3と同様方法で作られた軒平瓦は他に2片SD080から出土している。4は瓦当面に唐草文のみ施したものである。

平瓦（5～17）　5は格子叩き、6～17は縄目叩きである。8は凸面に糸切り痕が残っており、それに直交するように斜め方向に細い縄目で叩きを行っている。6・7は縄目が粗く、6は 6′ に示したように四分割して叩きを行っている。6・7・12の側縁の切断面は円弧の中心方向であるが、7はヘラ削り調整されている。9の縄目は端部近くはかなり磨耗して、凹面は布が端部まで

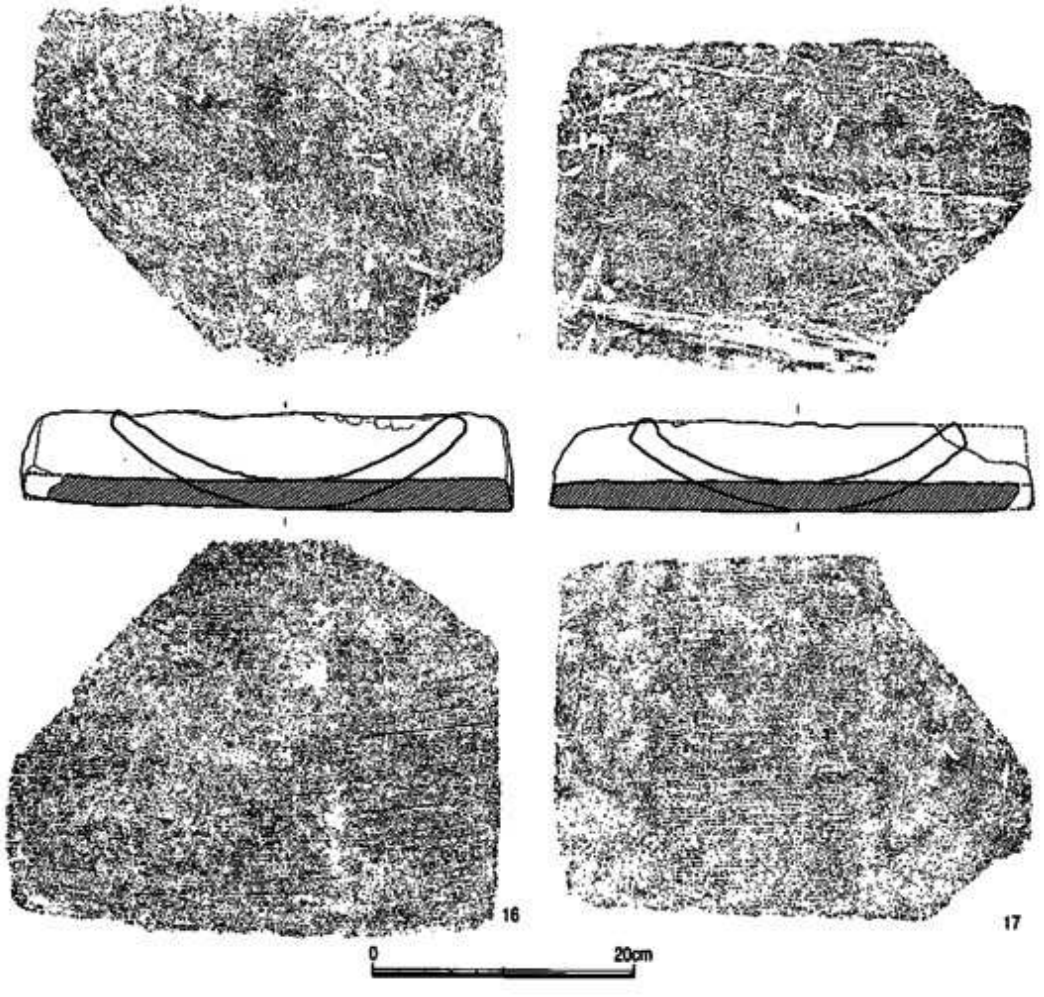


図52.　21SD080出土瓦実測図（4）（S=1/6）

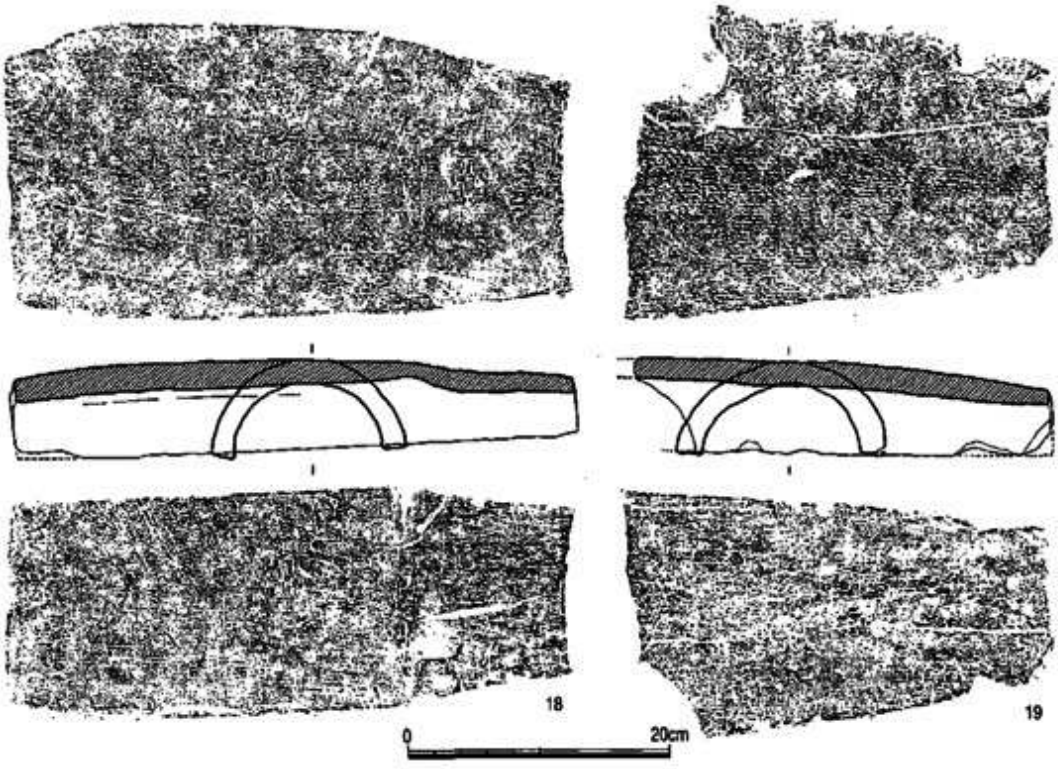


図53. 21SD080出土瓦実測図（5）(S=1/6)

達しておらず模骨の痕に段がついている。10の凸面は縦方向に二分割して縄目叩きを行い、叩きの単位は約15×4cmである。14は縦に三分割して叩きを行っている。11は凸面の縄目を両端部擦り消し、片方の側縁近くに縦方向の浅い段が残っている。横方向にも段が観察されるので、凹型のあたりの可能性がある。13・14にも側縁に平行して同様の痕跡が観察される。12・15の凹面は模骨痕と思われる。15の凹面は縦方向に粘土の接合痕が残り、横断面の厚みに差がある。10・11・15・17の側縁端はヘラ削り調整される。16・17は磨耗が著しいので不明だが、9・12・15は桶巻き作りで、11・13・14は型作りの可能性がある。

丸瓦（18・19） いずれも行基瓦で凸面は縦方向の縄目叩きを行う。18は狭端面をナデ消し、狭端部近くは玉縁を意図したと思われ、緩い段がつく。凸面は凹面ほど明瞭な段でなく肩部にも粘土の接合はない。

21SD080黄茶色土 出土瓦 （図54）

平瓦（1・2）1は凸面は縄目叩きを行い、両端部は擦り消している。凹面には模骨痕が残る。2も凸面の縄目叩きを端部で擦り消している。側縁近くに縦方向の段があり、縄目叩きの下に横方向の型のあたりのような段が残っている。2の凹面に残る屈曲は模骨痕にしては整合性がないので、凸面の痕跡も含めて、型作りの可能性がある。

その他の遺構出土遺物

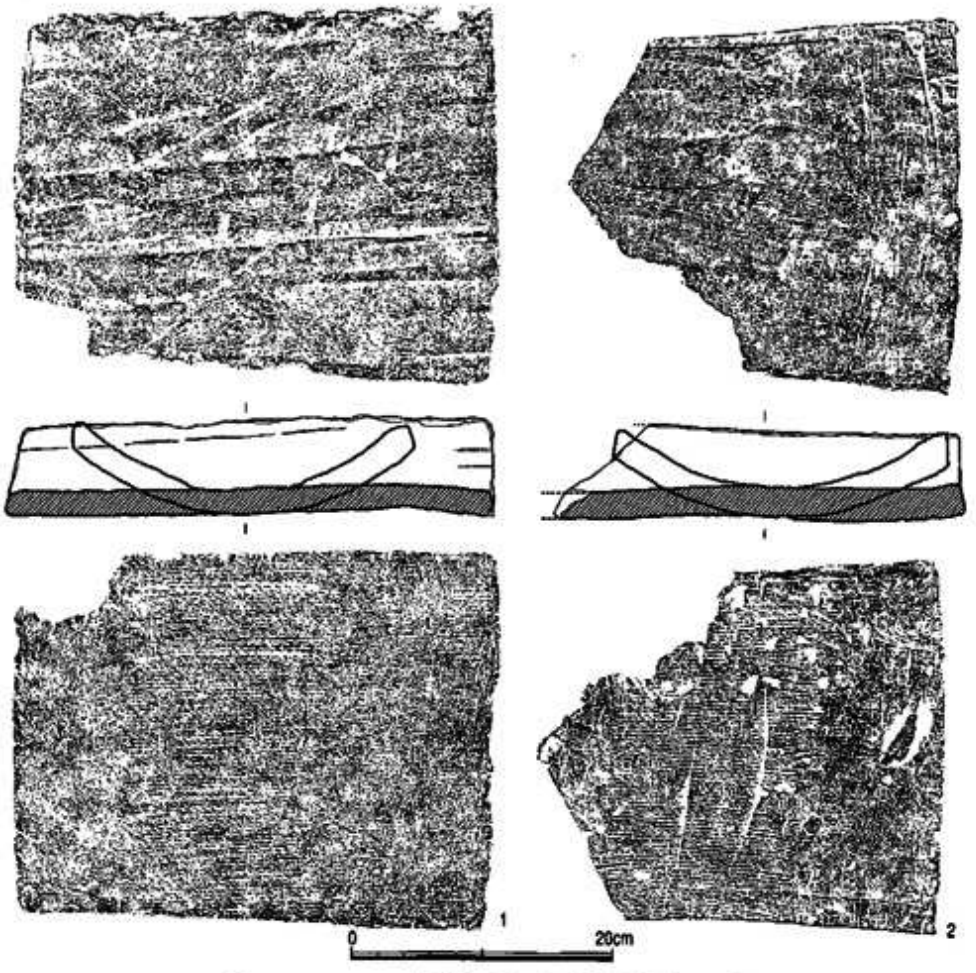


図54. 21SD080黄茶色土出土瓦実測図（S=1/6）

21SX055 出土遺物　（図55）

須恵器

鉢（1・2）　1 は口径22.0cm。胎土はキメ細かく、体部は回転ナデで、口縁端部を丸くおさめる。2は胎土が粗く、内面は磨滅が著しい。外面は強い回転ナデで下位は回転ヘラ削りを行う。高台がつくものと考えられる。

白磁

椀　（3～6）　3 は口径16.0cmを測り、大きめの玉縁口縁をもつ。IV類。5 は見込みに段を有し、IV-1a類。4 は口縁端部を横に屈折させ、体部は直線的に外へ開く。淡い灰緑色をおびた透明釉が施されている。VIII-3×V-4。6は見込みの釉を輪状に掻き取っている。高台下半と見込みの掻き取り部に薄茶色の粘土状の付着物がある。VIII 類。

龍泉窯系青磁

椀（7）　黄色味をおびた灰緑色の釉調で高台畳付以下は露胎で、高台底部に4 足の目跡を

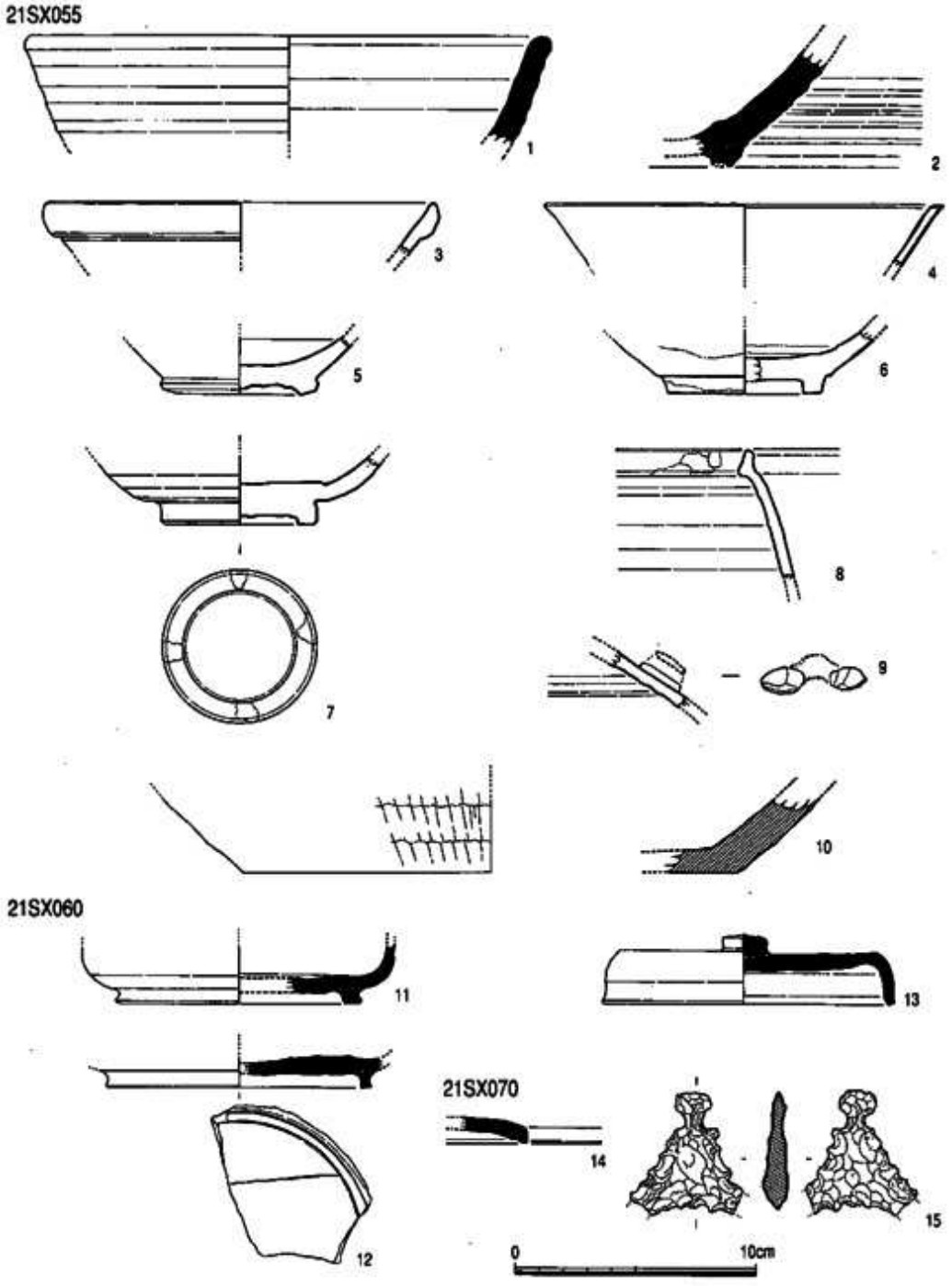


図55. 21SX055・060・070出土遺物実測図（S=1/3）

もつ。体部内外面とも無文。I-1 類。

中国陶器

壺×水注（8）　くすんだ灰緑色の釉を施し、胎土は精良で黒色粒を含んでいる。口縁部は

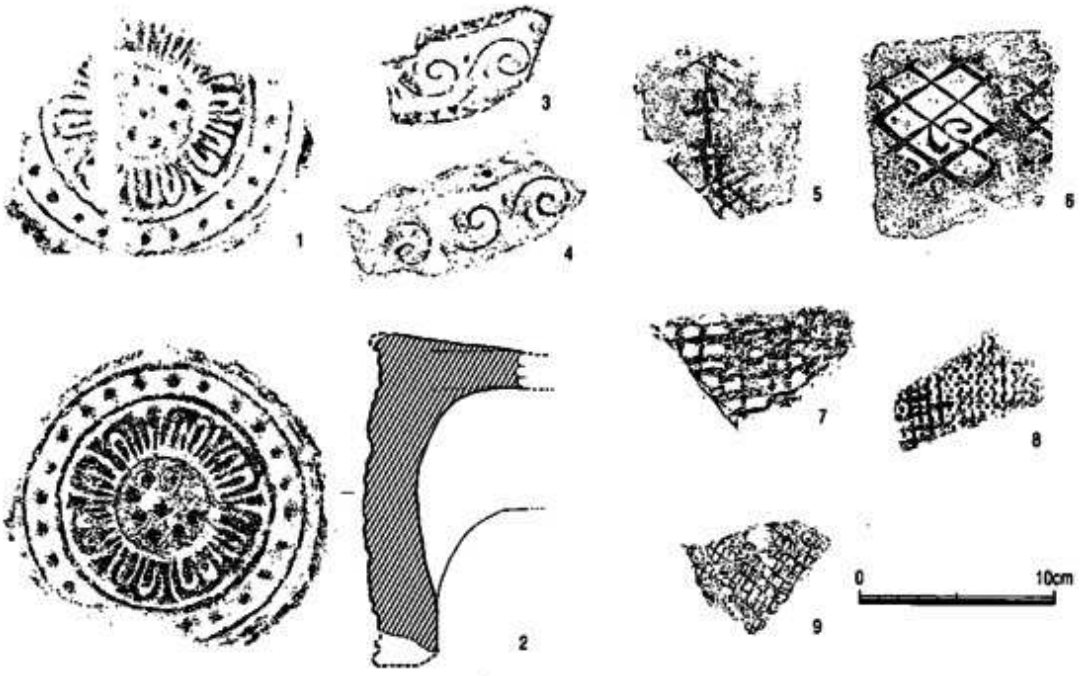


図56. 21SX055・060出土瓦実測図（S=1/4）

「く」の字形に外反して、口縁部内面に目跡がつく。

四耳壺（9） 釉は茶色味の強い灰緑色を呈し、耳が貼付される。

石製品

石鍋（10） 滑石製品で、推定底径20.6cmを測る。細かく削って成形された鍋底には煤が付着している。

21SX060 出土遺物 （図55）

須恵器

坏c（11・12） 底径10.3・11.0cmに復原される。11は体部下位で腰が張るもので底部外面は回転ヘラ削りされる。12の底部はヘラ切りされ、ヘラ記号と考えられる沈線が一条残っている。

壺蓋（13） 口径11.8cm。天井部外面は丁寧なナデによって処理されており、天井部外縁部のみ回転ヘラ削りによって調整されている。

21SX055・060 出土瓦 （図56）

軒丸瓦（1・2） 1はSX055、2はSX060より出土し、SD080で述べた国分寺創建時の瓦といわれるものと同じタイプである。SX060からは同タイプの軒丸瓦がもう一片出土している。1は丸瓦部分を瓦当の中心よりかなり外側に取り付けている。

軒平瓦（3・4） 鴻臚館式で、3はSX055、4はSX060より出土。

平瓦（5～9） いずれも格子叩きで、5は「平井」の文字瓦。I-8b。6も格子目の中に装飾文様が入っている。

21SX070出土遺物　（図55）

須恵器

蓋3（14）　口縁部の内面に沈線を巡らせ、端部は断面三角形に成形する。

石製品

石匙（15）　5.1×4.7×1.1cm。両先端を欠損している。石材は安山岩。

各土層出土遺物

明茶色土 出土遺物　（図57）

須恵器

坏c（1）　底径9.6cm。高台が坏底部の外側に貼付される。

茶褐色土 出土遺物　（図57）

須恵器

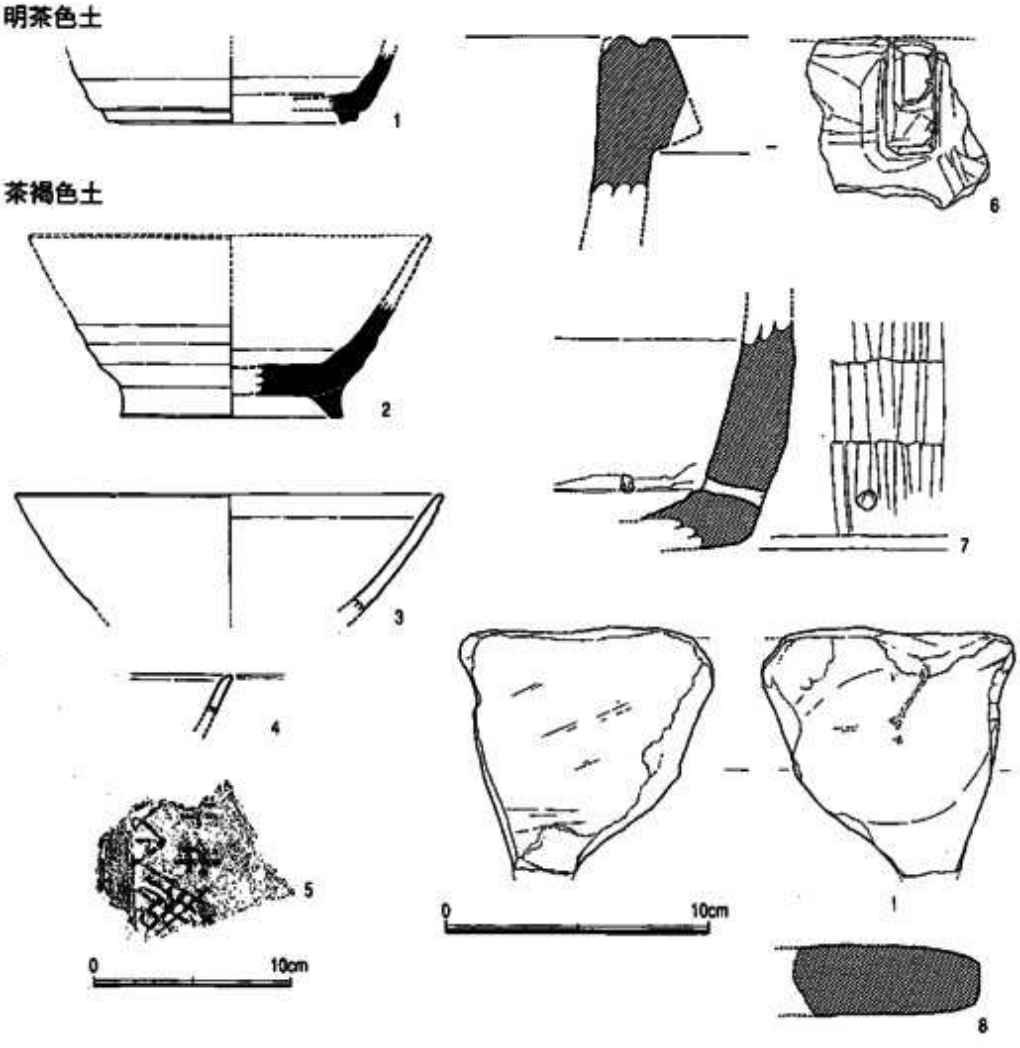


図57.　明茶色土・茶褐色土出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

21-2次

坏c（2）　底径8.5cm。高い高台をもち、体部は直線的に外側に開く。底部外面は回転ナデ調整される。

青磁

椀（3・4）　3の口径は16.4cmを測る。釉は黄色味をおびた明灰緑色に発色、胎土は精良で明灰色を呈している。越州窯系×龍泉窯系。4は口縁部小片で緑灰色の光沢のある釉が施される。龍泉窯系青磁椀I類。

瓦

平瓦（5）　格子叩きで「平井」の文字がはいる。I-7bと考えられる。

石製品

石鍋（6・7）　いずれも滑石製品で煤が外面に付着している。6は縦耳を削りだす。A群。7は底部片で、体部最下位に径7mm程度の穴が穿たれている。

砥石（8）　割れ面以外は平滑で砥石として使用されたと考えられる。石材は黄灰色から黄白色を呈する砂岩。

（森田レイ子）

5．小結

西外郭施設

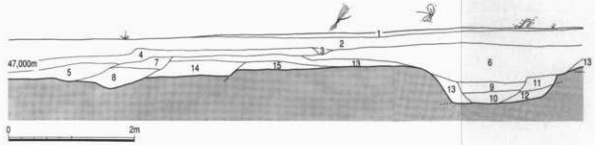
今次調査によって、国分寺跡西外郭施設の位置と構造について明らかになった。特に13次調査にて検出された築地塀との接合部分に関する構造に関して問題を残しつつも、南外郭施設と西外郭施設の構造に違いがある点や、国分寺の寺域を考える上で具体的な規模が特定できるようになったことは、大きな前進であったといえる。ここでは調査時の所見を中心に検出された外郭施設と考えられる遺構について述べる。

まず、掘立柱列について。調査区内にて検出し得た柱は３基で、内２基は先のトレンチ調査および後世の掘削によって残念ながらその大半を欠失してしまい。柱列の方向および柱間の距離を算出することが不可能となってしまった。しかし、21-2SA075bとした中央の柱には、約半分と考えられる柱痕跡を確認している。この柱痕跡を半分と仮定した上で、柱痕跡が残存する21-2SA075aとの柱の中心間の距離は4.2m前後を測る。この距離は、東外郭施設にて検出された掘立柱列の柱間距離3.12mより約1.0m程度長く、規模が大きいことになり、東外郭施設と同一規模の施設であったかどうかは検討が必要となる。ただし、21-2次調査区の南で実施された21-1次調査で検出された掘立柱列の柱間距離が、東外郭施設の規模とほぼ同じであることから、今次調査区にて検出された掘立柱列の構造自体を同一性格の遺構と考えることに無理があるのかもしれない。これは、後述する寺域内側の溝（21-2SD080）構造と関係する可能性もある。

ついでこの掘立柱列を挟むように検出された南北溝について記述する。まず掘立柱列西側で検出された溝は、上位に中世に形成されたと考えられる包含層が覆っており、当時の形状を留

1.真砂土
2.灰黒色土
3.灰黒色土および黄茶色土の混合土
4.暗黄茶色土
5.茶色土（瓦・土器を多量に混入）
6.暗茶色土（瓦・土器を多量に混入）
7.茶黄色粘質土
8.茶黄色土
9.茶色土（やや粘質）
10.黄茶色土（やや粘質）
11.明茶褐色土（やや粘質）
12.黄色ブロック混入茶褐色土
13.明茶褐色土
14.明黄茶色土（3cm大の茶黒色粘質土ブロックをわずかに混入）
15.茶褐色土

4・6層：茶褐色土で遺物取り上げ。　13・14層：明茶色土で遺物取り上げ。



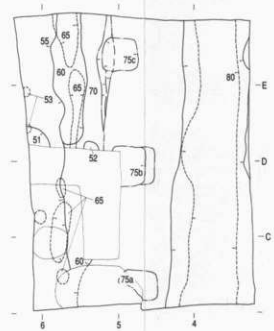


図58.　北壁土層実測図・21-2次遺構略測図・21-2SD080例壊瓦取り上げ図（番号は図46～48に一致、▲印：丸瓦出土位置）

めているものかどうか疑わしいが、この包含層下位に断続的ながら凹み状の土壙を検出した。排水を意図した溝として機能していたのかどうか、検出状況からは判断し難く、この溝東肩部分から先の掘立柱列への標高落差は約0.4mを測り、寺域を画する境界を形成していた段の裾部が風雨によって僅かに凹んだ可能性も考えられる。これに対し、掘立柱列の東側、寺域内に検出された溝（21-2SD080）は、報告にて述べたように、深さ0.5mを測るほどの遺構で、明らかに排水を意図したのものと考えられる。しかし、調査区内で二分するように検出され、現標高を反映するように北から南への排水は考えがたい状況であった。したがって、先述した掘立柱列の柱間の関係から、この溝が二分される地点に何らかの進入路が形成されていた可能性もある。この問題に関しては、今次調査のみでは判断し難い面もあり、今後の北側の調査成果によって再考すべき問題である。

また以上述べた外郭施設の敷設箇所に整地が確認できている。確認調査の性格上基盤層までの完掘は行なっていないが、21-1次調査で実施したトレンチ壁面や、後世の掘削時の穴などの壁面から判断すると先述した21-2SD065の溝東肩から東方向に整地が確認でき、自然地形の凹凸を平坦にした意図が伺える。

これら外郭施設の設計方向や、推定寺中軸線からの距離については、V章にて記述する。

表7．21-2次調査　出土瓦定量分析表

遺構名	平瓦				
	縄叩き1	縄叩き2	格子叩き1	格子叩き2	叩き不明
黄土	19	8	4	0	31
黒褐色土	239	47	24	9	319
S-53	299	53	60	39	451
S-60	288	49	2	0	343
S-65	25	4	0	0	29
S-80（[illegible]）	845	132	5	0	982
明黄色土	1	1	0	0	2
S-70	3	1	0	0	4
S-80（[illegible]）	29	0	0	0	29
S-80[illegible]色土	129	57	0	0	186
S-80[illegible]色土	5	3	0	0	8
小計	[illegible]	352	95	48	2488
合計	[illegible]				

遺構名	丸瓦				
	縄叩き1	縄叩き2	格子叩き1	格子叩き2	叩き不明
黄土	5	1	1	0	20
黒褐色土	28	1	6	1	139
S-53	18	0	15	4	138
S-60	51	0	1	0	79
S-65	0	0	0	0	11
S-80（[illegible]）	129	0	4	0	171
明黄色土	2	0	0	0	30
S-70	1	0	0	0	11
S-80（[illegible]）	12	0	0	0	0
S-80[illegible]色土	30	0	1	0	103
S-80[illegible]色土	0	0	0	0	11
小計	244	3	28	5	7160
合計	[illegible]				

遺構名	丸瓦・平瓦				
	縄叩き1	縄叩き2	格子叩き1	格子叩き2	叩き不明
黄土	7	4	0	0	18
黒褐色土	42	3	1	0	564
S-53	5	1	0	0	516
S-60	17	3	0	0	236
S-65	0	0	0	0	11
S-80（[illegible]）	137	12	4	0	1327
明黄色土	0	0	0	0	28
S-70	1	0	0	0	4
S-80（[illegible]）	0	0	0	0	0
S-80[illegible]色土	39	3	0	0	274
S-80[illegible]色土	0	0	0	0	13
小計	263	32	6	0	3793
合計	[illegible]				

21-2次

瓦の出土傾向

寺域内に位置する21-2SD080からは、溝全体から散在するように瓦が多量に出土している。これら多くの瓦は、周辺に散乱していた瓦が不規則に溝内へ堆積していったものと考えられ、堆積の同時性のみが看取できる資料である。しかし、溝南部分にて外郭施設倒壊によって堆積したと考えられる瓦の集積状況が確認できた。この集積した瓦は、図59に見るように平瓦と丸瓦が屋根に葺いてあったごとく交互に折り重なっており、外郭施設の寺域内への倒壊を想起させる出土状況であった。これらの瓦については、遺物の項にて詳述したとおりである。また先述したように溝内からは散在するように瓦が出土しており、同じ外郭施設（7次・23次調査および隣接地域として辻遺跡2次調査）での瓦の出土状況の比較のため、破片数量法による定量分析を実施した。定量の結果、縄叩きのものが平瓦および丸瓦共に多くを占めており、僅かに細かい格子叩きのものが入っている（表7）。この傾向は後述する23次調査においても同様であり、外郭施設の屋根に葺かれていた瓦の組成にさほど差はなかったものと考えられる。溝から出土した食器の食器相は大宰府VIII期ないしはIX期に分布中心を有するものであり、このような傾向を取る瓦の年代の一側面を示していると考えられる。しかしこのような傾向が同時期の瓦の様相に普遍化できるものではない。これは屋根に長年葺かれていることからくる瓦の有する欠点である。つまり瓦の廃棄が食器ほど短期間ではないということと、欠損した箇所のみを差し替えるという行為によって屋根が保たれているということに起因している。

（中島恒次郎）

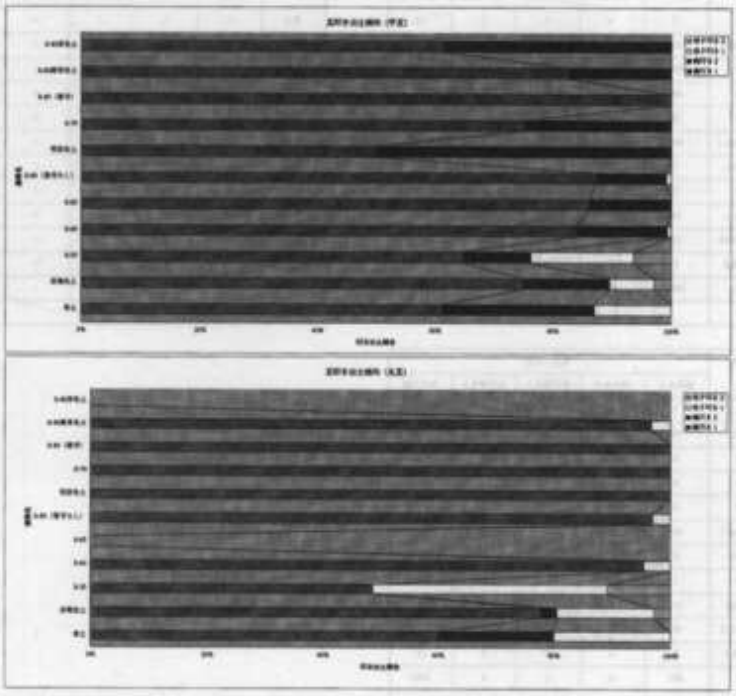


図59. 21-2次調査　出土瓦定量分析グラフ

表8．21-2次調査　遺構番号一覧

S-番号	遺構番号	種　別			地区
51		凹み	黄茶色土　S-55→S-51		D6
52		ピット	茶灰色土		D5
53		ピット群	茶灰色土		D6
55	21SX055	落ち	茶黒色土　瓦多数包含	平安後期～	5ライン以西
60	21SX060	落ち	暗茶色土		5ライン
65		溝	暗茶色土　S-65→S-60		D5他
70	21SX070	落ち	暗茶褐色土		5ライン
75	21SA075	柵	国分寺西外郭施設		5ライン
80	21SD080	溝	国分寺西外郭施設		3ライン

表9．21-2次調査　出土土器計測表

S-60

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・坏c	1	001	11	－	2.5+	10.3	－	－
	2	002	12	－	1.3+	11.0	○	－

S-70

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・蓋3	1	001	14	11.8	2.15	－	－	－

S-75 b-1

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・大坏c	1	001	3	－	2.1+	12.1	－	－

S-75 b-2

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・坏c	1	001	2	14.0	3.2	11.0	○	－

S-80 黄茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・坏c	1	005	8	12.4	3.8	9.2	－	－

S-80

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏d	1	053	2	－	1.1+	8.1	－	－
土・椀c	1	004	3	－	1.8+	7.0	－	－
	2	005	4	－	2.0+	7.7	－	－
	3	006	5	－	1.7+	7.4	－	－

茶褐色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・坏c	1	002	2	－	4.3+	8.5	－	－

明茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・坏c	1	001	1	－	2.5+	9.6	－	－

表10. 21-2次調査 出土遺物一覧

S-51

瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小、大)、丸瓦

S-52

瓦類	平瓦不明(2)

S-53

土師器	破片
瓦類	丸瓦(叩き不明)(1)、破片(2)

S-55

須恵器	甕、壺、坏c、鉢
土師器	甕、器台、坏？、把手、坏×小皿
龍泉窯系青磁	椀；I-1
白磁	椀；IV(3)、VIII-3(1)、VIII(1)
中国陶器	壺×水注(1)、四耳壺V(1)
瓦類	平瓦(文字瓦)(縄目-細、粗、格子-小、大) 丸瓦(縄目-細、格子-小、大)、軒平瓦、軒丸瓦、磚
石製品	石鍋

S-60

須恵器	坏c、壺蓋、坏
土師器	椀c2、甕、供膳、小皿a(ヘラ)
弥生土器	甕
瓦類	平瓦(縄目-細、粗、格子-小)、丸瓦(縄目-細、格子-小) 軒丸瓦

S-65

瓦類	平瓦(縄目-細、粗)、丸瓦(叩き不明)

S-70

須恵器	蓋3
瓦類	平瓦(縄目-細、粗)、丸瓦(縄目-細)

S-75 a

土師器	破片

S-75 b

須恵器	壺
土師器	甕a(角閃石あり)、破片
瓦類	丸瓦(叩き不明)

S-75 b-1

須恵器	坏c

S-75 b-2

須恵器	坏c
土師器	供膳具

S-80

須恵器	蓋3、甕、坏、壺f×d
土師器	坏c、坏d、甕a、椀c2、破片
越州窯系青磁	椀；越I(2)
白磁	椀；V-4(1)
瓦類	平瓦(縄目-細、粗、格子-小)、丸瓦(縄目-細、格子-小) 軒丸瓦、軒平瓦、磚
石製品	サヌカイト

S-80 黄茶色土

須恵器	坏c、高坏、甕
土師器	坏c、破片
弥生土器	甕
瓦類	平瓦(縄目-細、粗)、丸瓦(縄目-細、格子-細)、軒丸瓦

S-80 茶色土

須恵器	蓋3
瓦類	平瓦(縄目-細、粗)、丸瓦、軒丸瓦

表土

国産陶器	破片

明茶色土

須恵器	坏c
土師器	破片
瓦類	平瓦(縄目-細、粗)、丸瓦(縄目-細)

茶褐色土

須恵器	供膳具、坏c、甕、大甕
土師器	小甕、高台片、小皿a、椀c2、把手 後期壺I？(角閃石混入)
黒色土器A	椀c2
瓦類	軒平瓦(縄目-細、粗、格子-小、大) 軒丸瓦(縄目-細、粗、格子-小、大)
石製品	石鍋A群、石鍋底部、砥石

3.筑前国分寺跡第22次調査

1.調査に至る経緯

太宰府市国分4丁目702-4番地において、平成8年10月7日に個人住宅建設を目的とした文化財取り扱いに関わる問い合わせが、太宰府市教育委員会にあった。当地は、筑前国分寺推定寺域に位置しており、隣接する土地で国分寺東外郭施設に比定されている溝が検出されているなど埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高い場所に当たるため、平成9年2月4日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面下約0.6mに埋蔵文化財が確認でき、協議の結果、発掘調査を実施することで合意をみた。発掘調査は平成9年2月4日から平成9年3月23日にかけて実施した。試掘調査は山村信榮が行い、発掘調査は山村信榮・高橋学が担当した。開発対象面積は390.90m²、発掘調査面積は114m²を測る。

2.層位

地表面から淡灌色土、青灰色土、淡灰色土、灰褐色土の順で堆積しており、灰褐色土を除去すると灰色砂を基盤にした地山に達する。遺構はこの地山面から直接切り込んでいる。

3.遺構

1）溝

22SD002（図60、写42）

調査区A1からB3地区で検出した溝である。幅0.25～0.3m、深さ0.15m、長さ5.8m分を検出した。近代までの遺物が出土している。

22SD003（図61、写42）

調査区B2からB5地区で検出した溝で、調査地を南北に貫通している。幅0.8～1.2m、深さは7～16cmを測り、長さ14.2m分を検出した。全体的

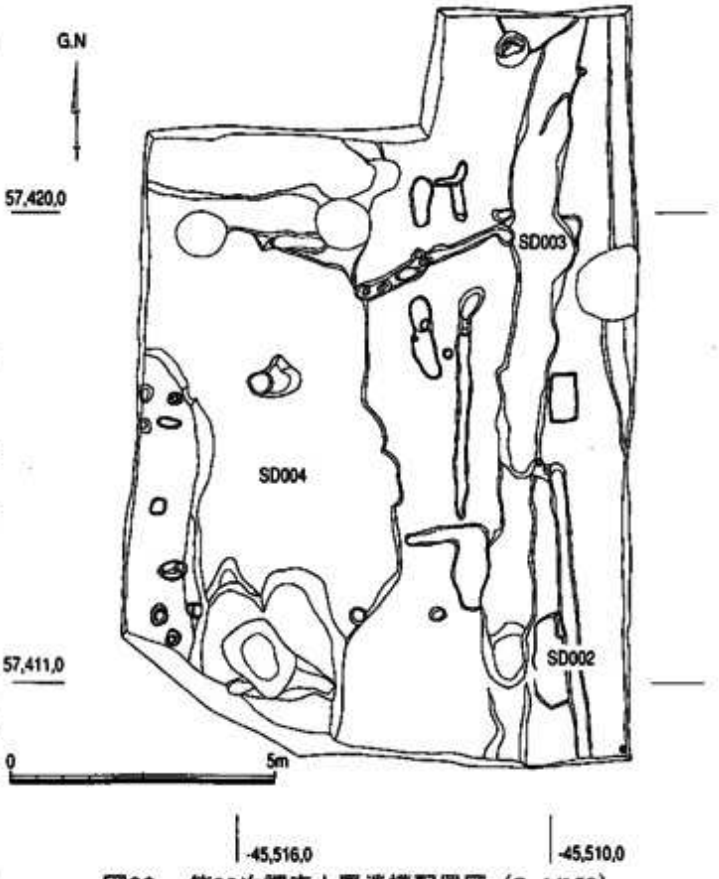


図60. 第22次調査上層遺構配置図（S=1/150）

22次

南・西壁土層観察図

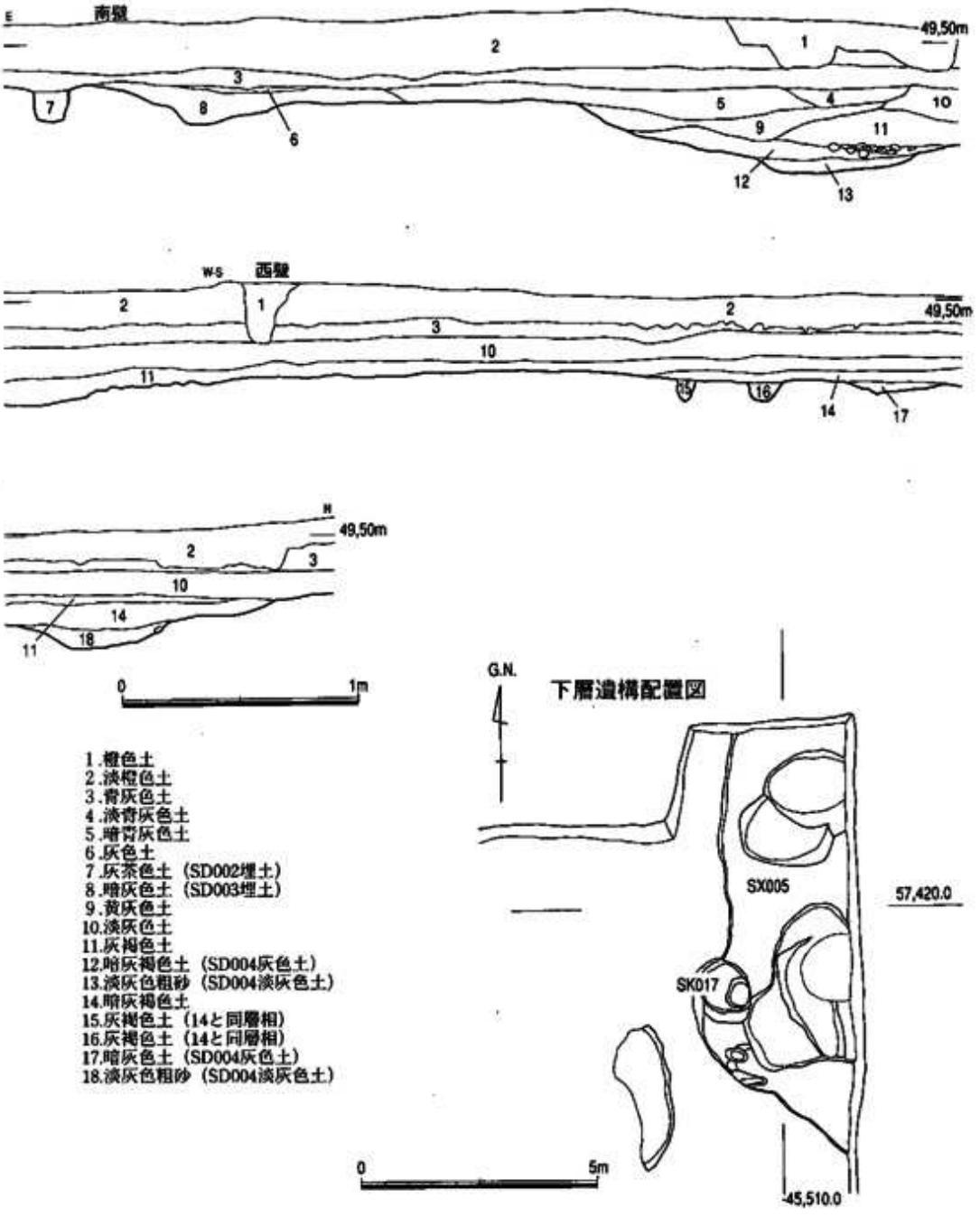


図61. 第22次調査下層遺構配置図（S=1/150）、南・西壁土層図（S=1/60）

に削平されており浅く、埋土は暗灰色土の単一層である。堆積土中から瓦片と拳台の礫を検出した。中世の遺物が出土した。

22SD004（図61、写42）

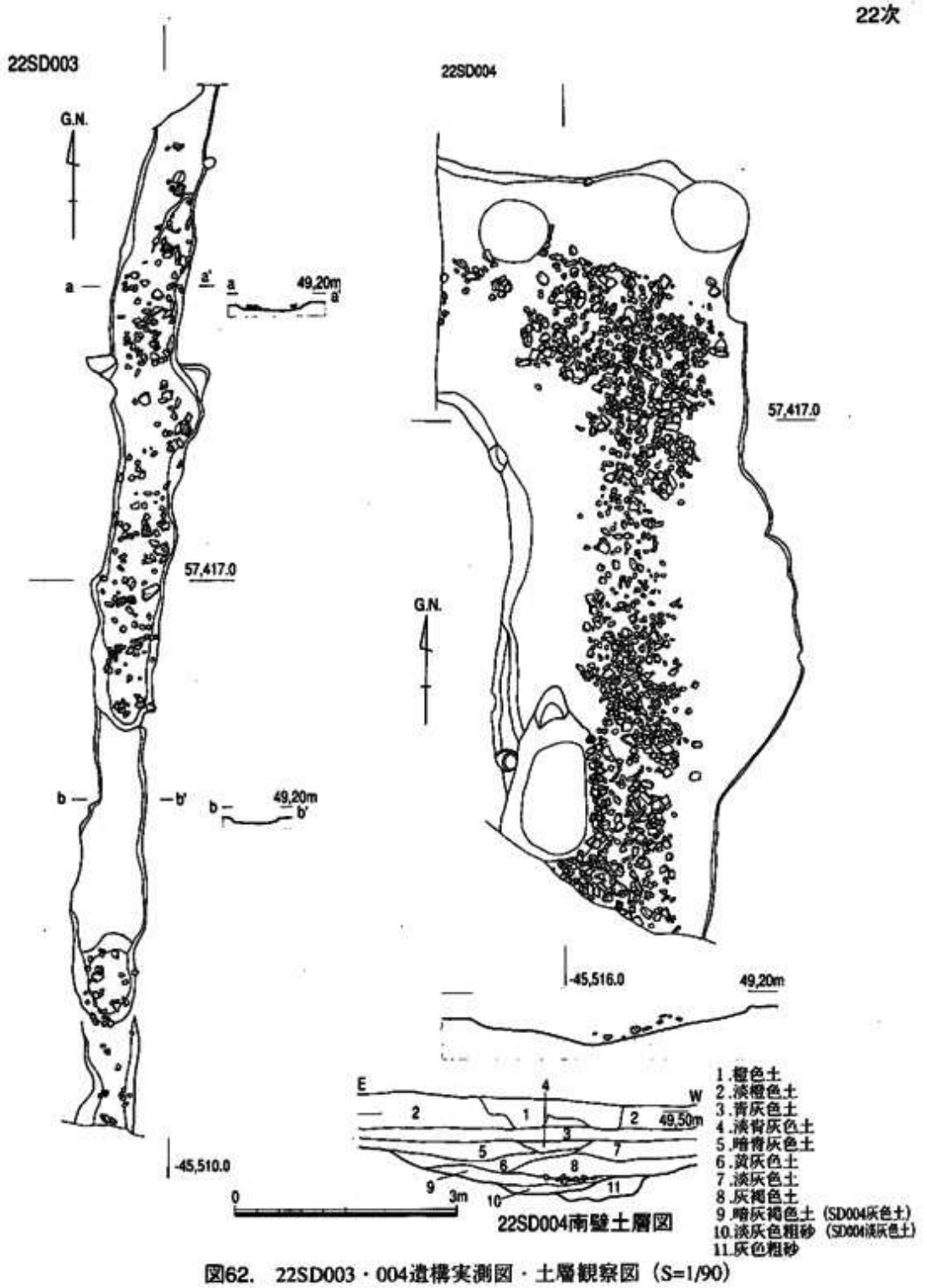


図62. 22SD003・004遺構実測図・土層観察図（S=1/90）

調査区C2からC5地区で検出した溝である。幅3～4m、深さは北側で0.14～0.27m、南側で0.4～0.55mを測り、長さ13m分を検出した。検出した当初は南北溝と思われたが、北側で西に向かって西側のプランが曲がっていることがわかった。埋土は暗灰褐色土、淡灰色粗砂の2層で

ある。下層で検出された淡灰色粗砂は流水の形跡と考えられ、現状の溝の深さから北から南方向へ流れていたものと想定できる。上層の暗灰褐色土中からは、溝の中央部付近に溝の形状と同じく逆L字形の平面形で瓦片・礫が約1.5mの幅で集中している。土器は中世の遺物を含んでいる。

2）土坑

22SK017（図64、写43）

調査区B4地区で検出した土坑である。22SD003と22SX005に切られており、22SX005を除去すると不整円形の平面プランが確認できた。検出面で東西1.2m、南北1.3m、深さ0.70mで、底面の南東部が円形掘り込み状を呈し、直形0.5×0.5m、検出面からの深さ0.95mを測る。埋土は淡灰色土が主に堆積しており、その下に同様だが粗砂まじりの淡灰色土が検出された。埋土の不等沈下等によって上層には22SX005の遺物を含んでいる可能性も考えられる。

3）その他の遺構

22SX005（図63、写43）

調査区A3からA6地区で検出した溜まり状遺構である。幅2.4～3.5m、深さは0.1～0.38mを測り、長さ8.2m分を検出した。全体的に深さは浅く10cm程度だが、部分的に深さ30cm程度の不整形たまり状遺構が検出された。埋土は淡灰色土の単一層である。多量の瓦片と礫が出土した。古代までの遺物が出土している。

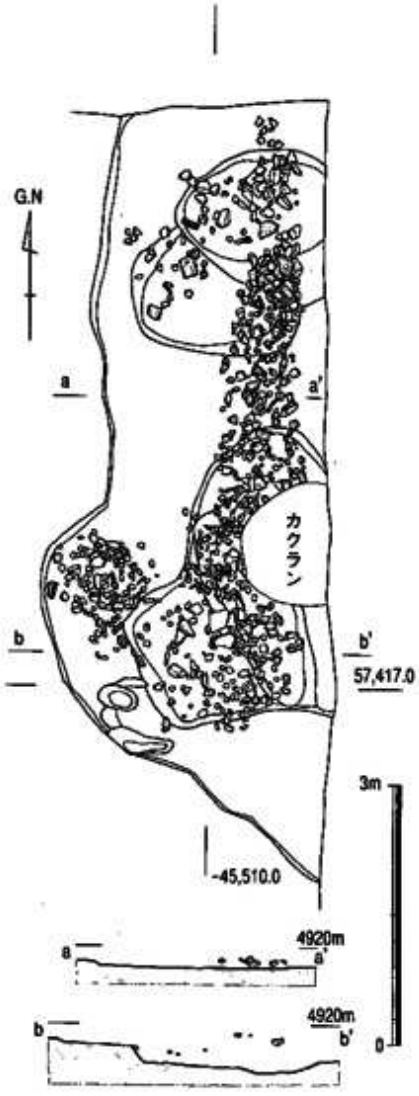


図63. 22SX005実測図（S=1/90）

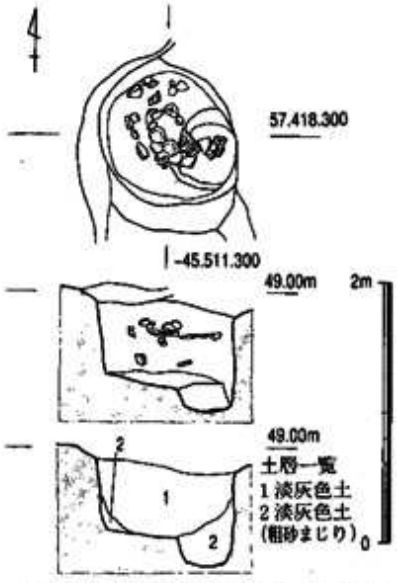


図64. 22SK017実測図・土層図（S=1/60）

4.出土遺物

1）土器・陶磁器

溝出土遺物

22SD003出土遺物（図65）

土師器

小坏a（1・2）　口径7.7cm、器高2.1cm、底径5.4cmを測る。底部外面は回転糸切りで切り離す。

坏a（3・4）　復元口径12.1cm、復元器高3.4cm、高台径7.2～7.5cmを測る。内外面ともナデが施されるが磨滅のため明瞭ではない。底部は回転糸切り。

鍋（5）　内面にハケ目が施される。口縁端部上面は平坦である。

22SD004出土遺物（図65.）

土師器

擂り鉢（6）　体部中位の破片。内面に幅2～4mmの擂り目が、5条を一単位として施される。

青白磁

蓋（7）　口径1.5cm、器高1.6cm、幅3.1cmを測る。環状把手が付くもので、小型の直口壺に

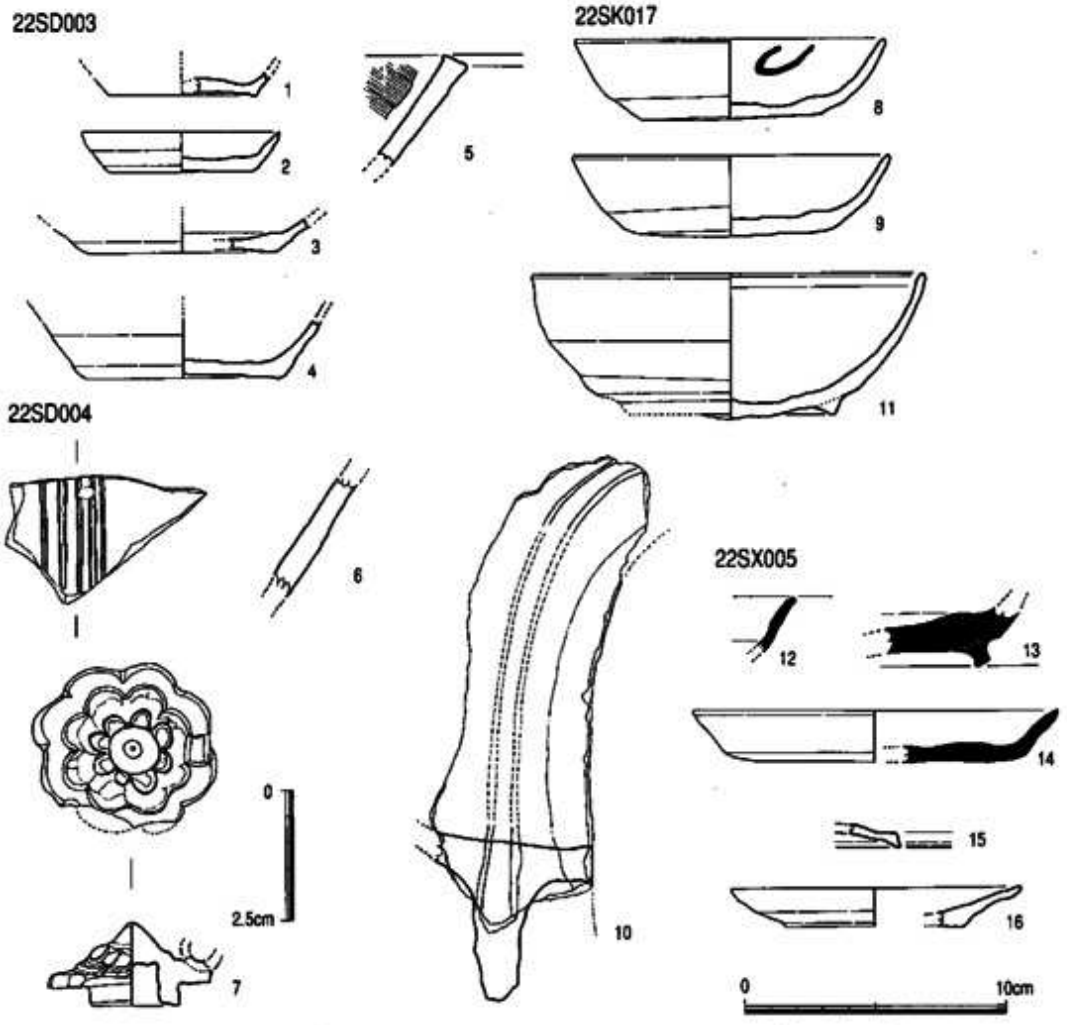


図65.　22SD003・004・SK017・SX005出土遺物実測図（S=1/3・2/3）

伴うと考えられる。外面は俯蓮状に8蓮弁が三重に施される。

土壙出土遺物

22SK017出土遺物（図65）

土師器

坏a（8・9）　口径11.8・12.2cm、器高6.8～7.5cm、底径6.9～7.5cmを測る。内外面とも回転ナデを施し、底部外面はヘラ切りの後、板状圧痕が施される。8には体部内面に墨書状のものが認められる。

竈（10）　鍔付き移動式竈の鍔の部分である。内面はハケ調整を施す。鍔内面には煤が付着している。

黒色土器

椀c（11）　口径15.1cm、器高5.6cm、復元底径7.8cmを測る。A類。全体的に表面が磨滅しており調整は不明瞭である。内面に僅かにミガキcが残存している。外面下位に押し出し痕跡が明確に認められる。内面に漆状の被膜が付着している。

22SX005出土遺物（図65）

須恵器

坏（12）　器高2.1cm。体部から口縁部への立ち上がり部である。

壺（13）　器高2.2cm。高台は貼付られる。底部の厚みがあるために大型製品の可能性が高い。

皿a（14）　復元口径14.0cm、器高2.0cm、復元底径11.6cmを測る。底部ヘラ切りの後は未調整である。

土師器

蓋3（15）　器高0.9cmを測る。口縁端部のみ残存。

皿a（16）　全体的に磨滅しており、調整は不明。坏か托の可能性もある。

2）瓦類

軒丸瓦（図66）

1・2は、複弁蓮華文で鴻臚館式である。中房の蓮子は1＋8。1は22SD004出土。2は22SD003出土。1は文様の彫りがしっかりとしており、2は1の同氾の彫り直しと思われる。3は複弁蓮華文で鴻臚館式と考えられるが磨滅がはげしく細部は不明である。中房から弁との境に鋸歯状に彫り込みが施されている。22SX005出土。4は細単弁二十一葉蓮華文と思われる。外縁は他に比較的高く1.7cm程度を測る。22SK017出土。

軒平瓦（図66）

5は均正唐草文。22SD004出土。6は内区は狭く、展体しない唐草文が施される。上外区には

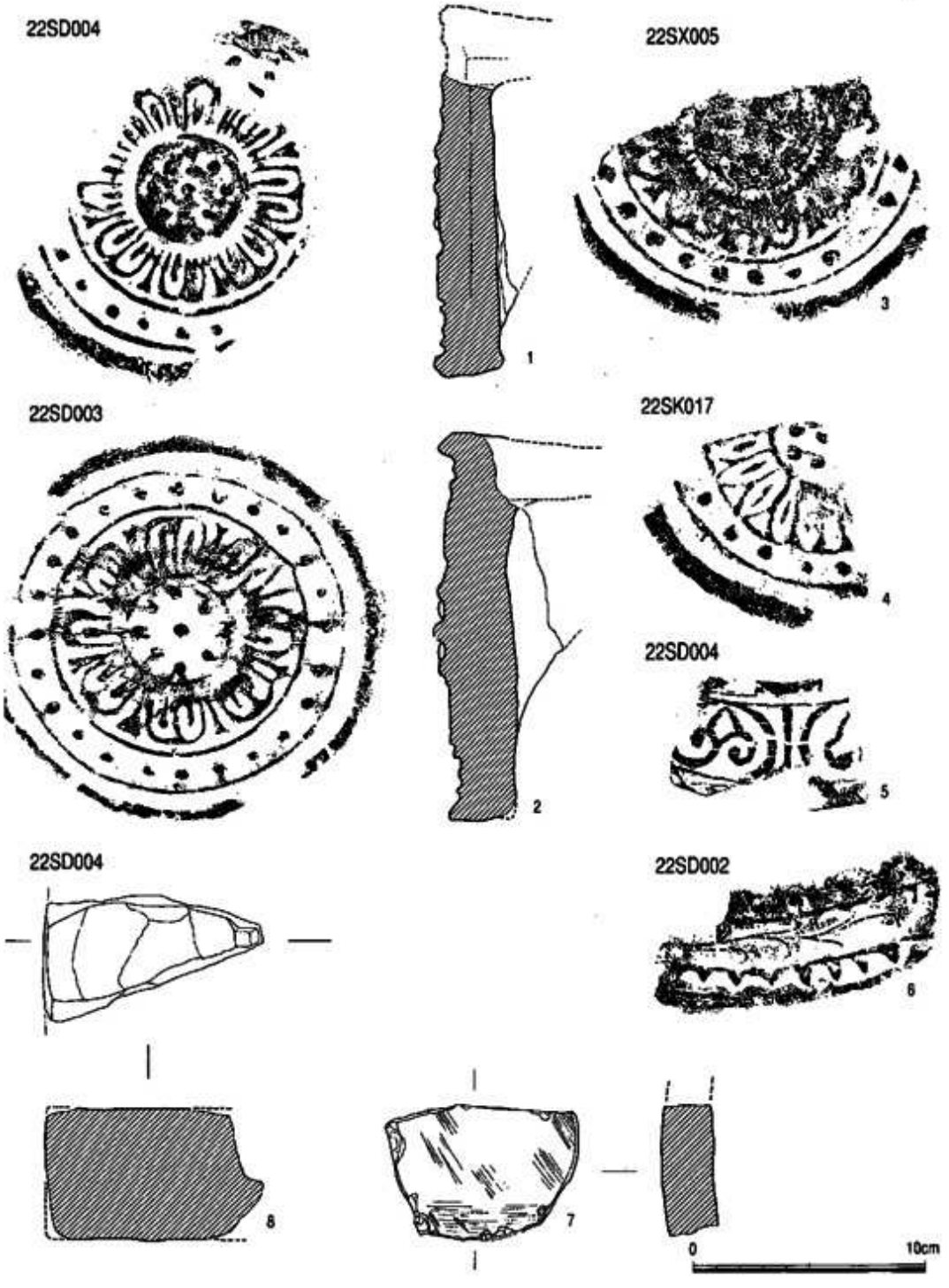


図66. 22SD002・003・004、SK017、SX005出土瓦実測図（S=1/3）

珠文を配し、右外区は左向する凸鋸歯文、下外区は下向する凸鋸歯文を配する。焼成は不良で軟質。22SD002出土。7は面戸瓦。22SD004出土。8は無文塼である。厚みは5.8cm 。22SD004出土。

22SD004　　22SX005

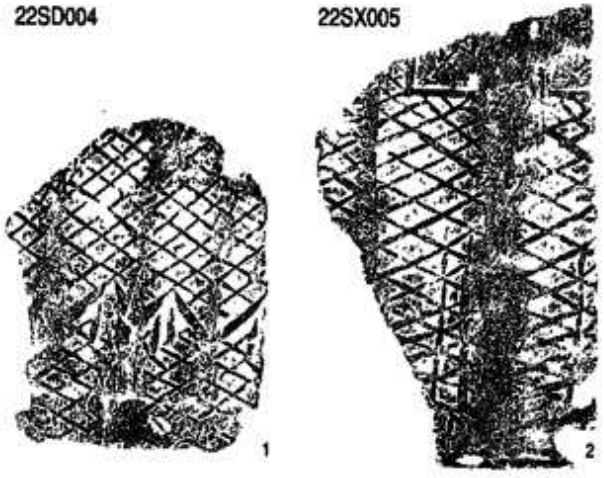


図67. 22SD004、SX005出土文字瓦拓影（S=1/3）

文字瓦（図66）　1は「介」でXII類。22SD004出土。2は「筑」でVI-4類。22SX005出土。

5.小結

今回の調査では、溝、土坑、溜まり遺構、ピット群を検出した。以下、各遺構について所見、年代観を中心に簡単に述べることとする。

A.溝

22SD002

近現代に使用されていた畑地の湿抜き用の溝と考えられる。

22SD003

出土遺物をみると、土師器の坏a、小皿（イト）のものが大半で、土師器鍋なども含まれている。国産陶器（備前か）などが出土していることからも14～15世紀に溝の埋没時期は求められる。

22SD004

多量に出土した瓦の破片は奈良時代のものが主であるが、供出する土師器擂り鉢、国産陶器片などから、14世紀後半に埋没したものと考える。その性格については溝の断面形状などから単純に区画溝的なものとすることは出来ないが、平面プランを考えてみると矩形区画の北東部隅に当たる可能性がある。また、埋土内の瓦片が東側の傾斜に沿うように堆積していることに注目すれば西側（区画内にあたる）から投げ込まれたものと考えられる。その行為の解釈としては、埋め戻す際に地固めの為に行ったものと現状では考えている。

これらの溝は調査地の東地域に存在する中世集落（辻遺跡）との関連で考えていくべき遺構である。

B.土坑

22SK017

22SX005との新旧関係から今回の調査でもっとも古い段階に位置付けられる遺構である。現状の土器の位置づけから遺物の年代を考えてみたい。まず土師器坏aは9世紀前半から後半にあたるVIB～VII期であり、また黒色土器A類椀は10世紀中～後半にあたるIX期と、それぞれの遺物の帰属時期に幅があるが、最終埋没の時期はIX期になると考えられる。

C.不明遺構（溜まり状）

22SX005

当初は国分寺21次調査で検出された南面築地北側の溜まり状遺構と同じく、東外郭施設（板塀）内側の溝に伴う溜まり状遺構と考えていたが、国分寺7次、14次、23次の各調査で検出された溝との位置関係を整理すると、東外郭施設内側の溝本体に相当する可能性があることがわかった。これは西側外郭施設で確認された板塀と内・外溝の位置関係とも整合するため可能性は高いと思われる。

D.まとめ

以上、簡単ではあるが各遺構の所見の補足と年代観について整理した。その成果を元に調査区内の遺構変遷をまとめてみる。まず、国分寺造営以前の遺構は確認できなった。遺物としては灰褐土（包含層）から石鏃が出土しているため、周辺に弥生時代の遺構の存在が推定できる。国分寺造営に伴う遺構としては22SK017 と22SX005があげられる。22SK017から出土している9世紀前半から後半の土器群は当該期における寺域内の遺構の展開を示唆している。東外郭施設に伴うと推定される22SX005は、22SK017との切り合い関係から10世紀中～後半には掘られており、出土遺物によると12世紀中頃に埋没していることがわかる。寺域を示す外郭施設が消滅するということは、周囲との境界が不明瞭になるということであるが、この12世紀段階では調査区内に遺構の展開はない。しかし22SD004から出土している同安窯系青磁碗片や青白磁蓋などにより、当該期の遺構の存在の可能性はあると思われる。この後、14世紀から15世紀にかけて、従来の国分寺の設計主軸に合致しない方向性の南北溝、矩形区画の溝が新たに作られる。

今回の調査区は狭小ではあるが、国分寺の東外郭施設に関連する遺構や中世の国分寺エリアを考える上で重要な意味を持つと思われる。　　（高橋学）

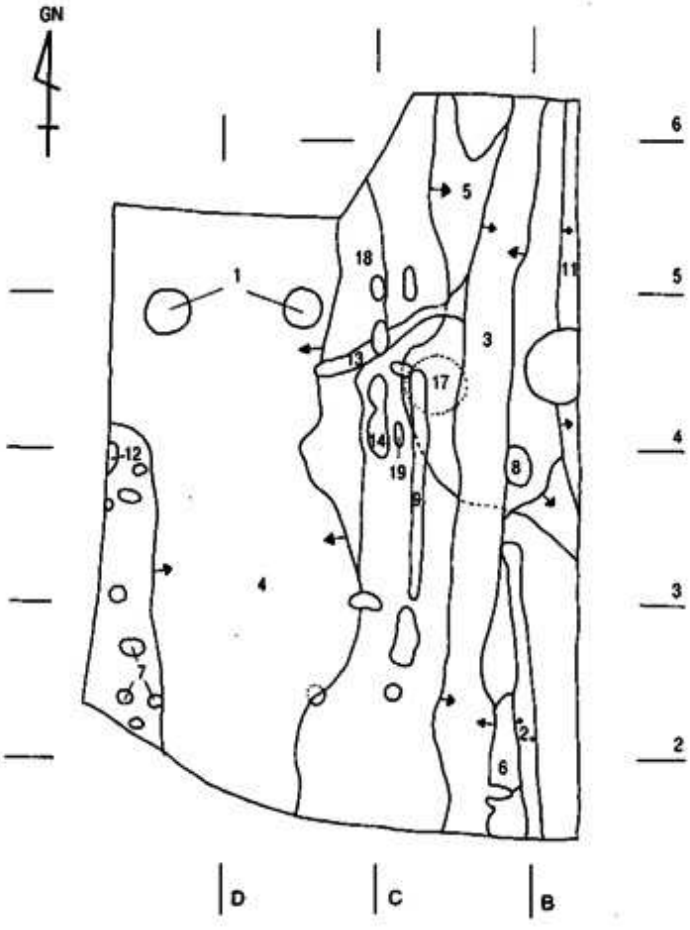


図68.　第22次調査　遺構略測図（S=1/150）

表11. 22次調査　遺構番号一覧

S-番号	遺構番号	種　　別			地区
1		井戸群	4→1	現代	C・D4
2	22SD002	溝	3→6→2	近現代	A1～B3
3	22SD003	溝	3→6→2	中世	B1～B6
4	22SD004	溝	18→14→13	中世	C1～C5
5	22SX005	溜まり	5→3	10C後半～	A3～B6
6		溜まり	3→6→2		B2
7		ピット群	7→4		D2
8		ピット	3→8		B3
9		溝	17・5→9	近代	B3
10	欠番				
11		溜まり	5→11	18C後半～	A3・4
12		ピット			D3
13		溝		近代	B4～C4
14		溜まり			B4
15	欠番				
16		溜まり	3→16		B6
17	22SK017	ピット	17→5→3	～10C	B4
18		溜まり	18→4・13		C4
19		溜まり	19→5・13・14・18		B4・5

表12. 22次調査　土器計測表

22SD003

器　種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小坏a（イト）	1	003	1	-	0.8+	5.6	○	×
	2	005	2	7.7	1.7	6.8	○	×
土・坏a（イト）	1	001	3	-	1.3+	7.2	○	×
	2	002	4	-	2.2+	7.5	○	×

22SK017

器　種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a（ヘラ）	1	002	8	11.9	3.1	6.9	○	○
〃	2	001	9	12.2	3.1	7.5	○	○
須A・椀c	1	004	10	15.1	5.6	7.8		

22SX005

器　種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・皿a（ヘラ）	1	003	14	14.0	2.0	11.6	○	×
土・皿a	1	002	16	11.1	1.5	6.8	-	-

表13. 22次調査　出土遺物一覧

S-2（22SD002）

瓦　類	軒丸瓦（縄脇館式）、軒平瓦（縄脇館式並式）
	丸瓦（格子）、平瓦（縄・格子目）、文字瓦

S-3 灰色土（22SD003）

須恵器	蓋、甕
土師器	坏a（イト）、小皿a（イト）、鍋
瓦　類	軒丸瓦（縄脇館式）、平瓦（縄・格子目）
石製品	緑色片岩
国産陶器	備前×常滑片
白　磁	椀；V

S-4（22SD004）

須恵器	坏c
土師器	坏a
瓦　類	軒丸瓦（縄脇館式）、軒平瓦、丸瓦（格子・無文）
	平瓦（縄・格子目）、道具瓦

S-4灰色土（22SD004）

須恵器	蓋、坏c、甕
土師器	鍋×、すり鉢
瓦　器	甕
瓦　類	軒丸瓦、丸瓦（格子）、平瓦（縄・格子目）、棟
須恵質土器	備前×常滑片
青白磁	壺
中国陶器	瓷片

S-5（22SX005）

須恵器	蓋、坏、皿a、甕
瓦　類	軒丸瓦、丸瓦（縄目・格子目・無文）
	平瓦（縄・格子目）

S-7

須恵器	坏
土師器	破片
瓦　類	破片

S-8

土師器	坏c
瓦　類	平瓦（縄目）

S-9

須恵器	坏
瓦　類	平瓦（縄・格子目）

S-11

須恵器	坏
瓦　類	平瓦（縄目）
肥前系陶器	碗

S-12

瓦　類	平瓦（縄目）

S-13

瓦　類	平瓦（縄目）

S-14

土師器	破片
瓦　類	平瓦（縄目）

S-17（22SK017）

須恵器	甕
土師器	坏a、鍋
黒色土器A	椀
瓦　類	軒丸瓦（縄脇館式並式）、軒平瓦（縄脇館式）
	平瓦（縄・格子目）、丸瓦（無文）、文字瓦
土製品	瓦玉

S-17淡灰褐砂（22SK017）

瓦　類	平瓦（縄）

S-17淡灰土（22SK017）

黒色土器A	破片
瓦　類	破片

S-18

須恵器	坏a
瓦　類	平瓦（縄目）、丸瓦（無文）

S-19

瓦　類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）
土師器	破片

灰色土

瓦　類	平瓦（縄・格子目）

灰褐土

須恵器	坏a、長頸壺
土師器	坏a
瓦　類	軒丸瓦（縄脇館式）、平瓦（縄・格子目）
	丸瓦（格子目・無文）、近代瓦
石製品	石錘、緑色片岩

4.第23次調査

1.調査に至る経緯

調査地は、太宰府市国分4丁目662-1に所在し、専用住宅改築に伴って発掘調査を実施した。

調査地周辺では、既に第14・19次調査によって古代から中世の遺跡が確認されており、特に筑前国分寺に関わる遺構として、当該調査区の南に隣接する第14次調査によって、東外郭線とみられる柵列の柱穴が2基確認されており、当該調査区は北側延長線の確認および外郭施設を検討する際の情報収集が必要な地域の一つであった。

調査に至る経過は、平成9年2月24日に当該地番の地権者（古賀徹志氏）より専用住宅改築に先立つ、埋蔵文化財取り扱いの問い合わせが、建設業者を介してなされたことによる。法57条提出の書面より筑前国分寺東外郭線上に建築設計がなされていることから、埋蔵文化財の取り扱いが必要となり、発掘調査の必要性について説明し協議を行ったところ、平成9年度において発掘調査を実施することで合意をみた。開発対象面積は322.25㎡、調査面積は95㎡を測る。調査は、I面を山村信榮が、II面以降を中島恒次郎が担当した。

2.層位

現地表面下、約0.2m程に住宅建設のための造成土があり、その直下に茶色系の土を切るかたちで黒色系の土を埋土とする中世の遺構面（I面）が形成され、さらに黒色系の埋土によって形成される遺構に切られるように暗茶色系の土を埋土とする平安中期の遺構面（II面）が形成

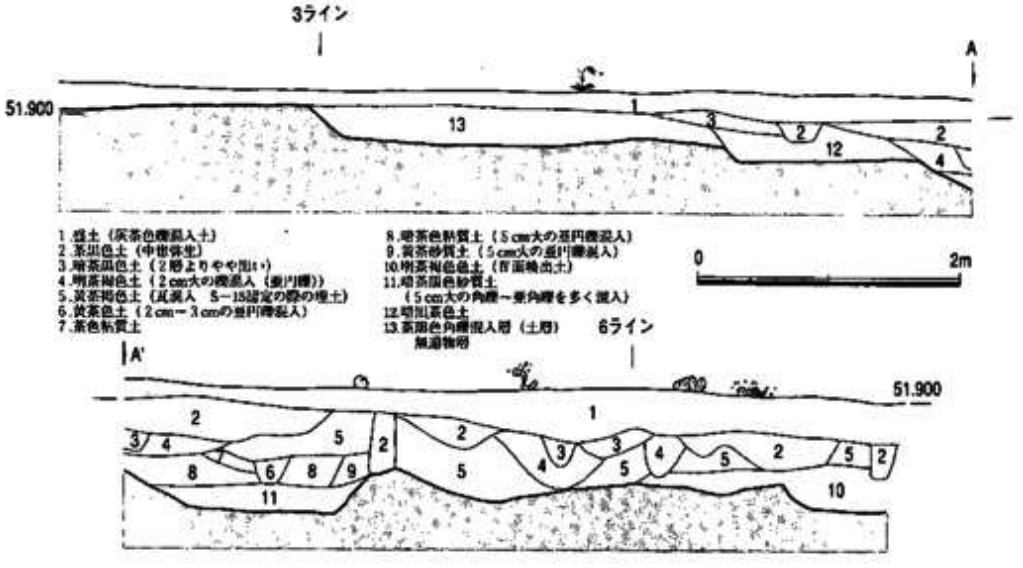


図68.　第23次土層観察図（S=1/60）

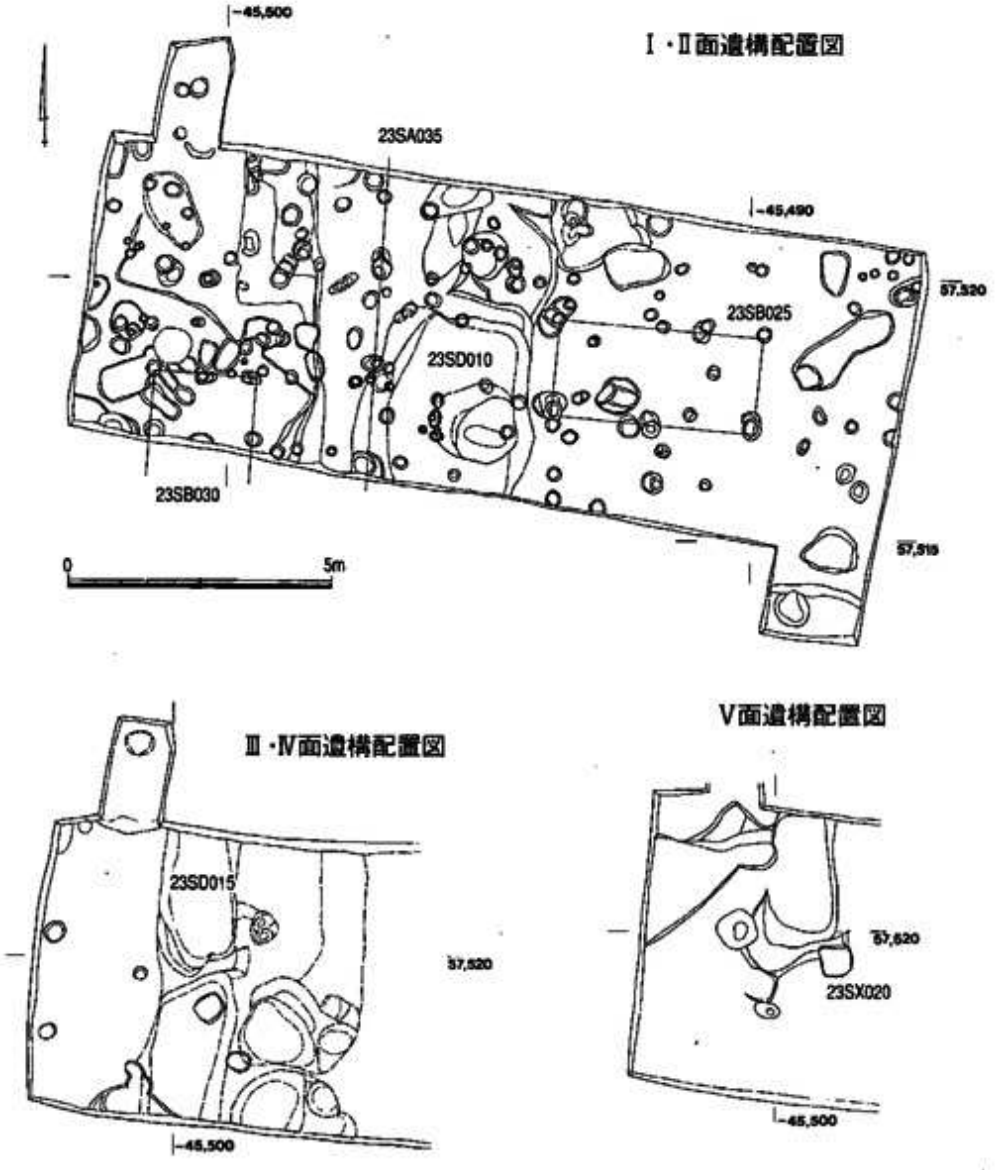


図69. 第23次遺構配置図（S=1/150）

されている。整地層ないしは包含層と考えられる茶色系の土層は調査区西半部に分布しており、東半部分については、礫混じりの茶黒色土が分布している。調査過程において東半部分については、一部トレンチによる土層精査作業を実施したが、土層下位に遺構を確認できなかったこと、さらに土層内より遺物の出土をみなかったことから、基盤層と認定した。生活I面およびII面を形成している西半部分の茶色系土は、さらに黄茶色の土層と下位の茶色土に分層でき、層境界付近において生活III面およびIV面が形成されていた。さらに茶色土を除去すると黄色系の基盤層が露出し、そこに生活V面と認定した面がある。ただしV面に関しては、上位の茶色土内および検出した遺構が無遺物であることから、人為性に関しては疑問が残る。

3.遺構

掘立柱建物

23SB025（図70）

I面東側に検出した建物で、1間×2間で柱間約1.9mを測る小規模な建物である。柱穴掘り方は約0.2mと小さい。建物軸の振れは、東端の柱穴掘り方心心を結ぶ直線からN5°0′2″Eを測る。

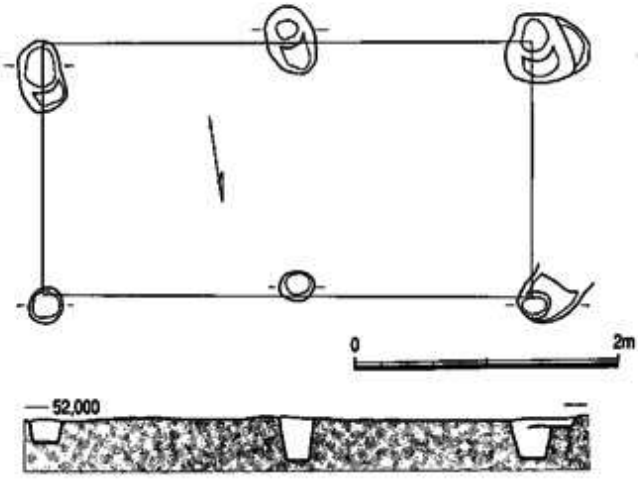
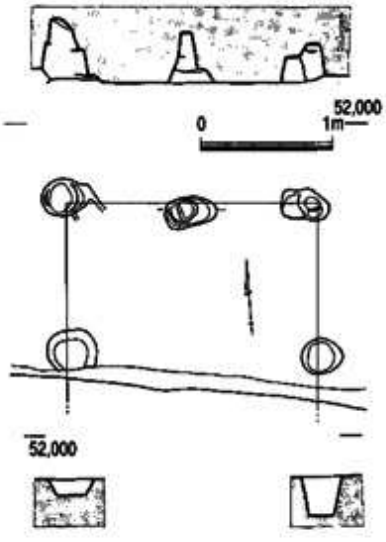


図70. 23SB025遺構実測図（S=1/60）

23SB030（図71）

I面西南端に検出した建物で、調査区外へ延びているため全容は定かではない。検出できた範囲では東西2間以上、南北2間の建物で柱間は1m前後を測る。建物軸の振れは、東端柱穴心心を結ぶ直線からN4°11′6″Eを測る。柱穴掘り方は約0.2mと小さい。



柵跡

23SA035（図72）

I面西側に検出した遺構で、調査区を南北に縦断する状況で検出した。柱間は1m前後を測り、軸の振れはN3°51′2″Eを測る。

図71. 23SB030遺構実測図（S=1/60）

溝跡

23SD010

II 面中央部分に検出した幅約4.0m、深さ0.6mを測る遺構で、調査区を南北に縦断するように検出した。埋土内から瓦、土器が散在する状況で多く出土している。土層状況によって暗茶黒色土および明茶褐色土の２層に分層できた。溝心心による軸の振れはN6°17′26″Eを測る。遺構の状況から、当該調査区の南に隣接する14SD005と一連のものと解するすることができる。

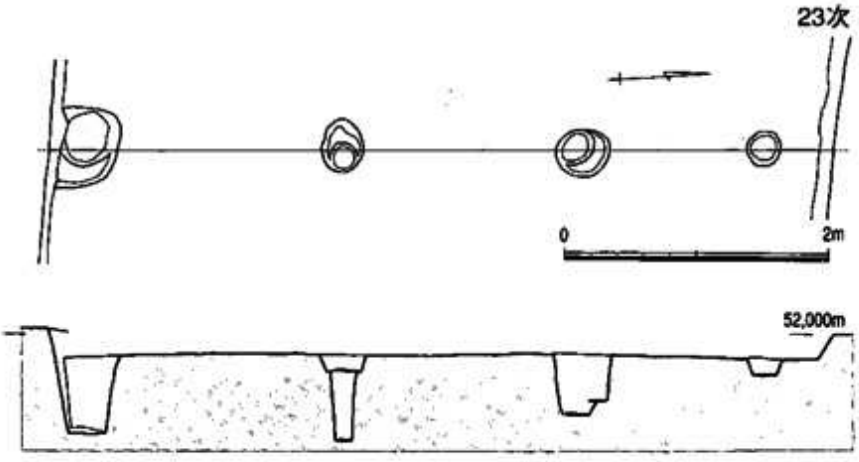


図72. 23SA035遺構実測図（S=1/60）

23SD015

IV面西側に検出した溝で、調査区を南北に縦断するかたちで検出した。完掘時の遺構形状は土壙を２基連ねた状況を呈しているが、検出時に一連の溝と認定したため、溝という理解のもと調査を進めた。溝幅は1.3m、深さ0.3mを測り、溝内からは、散在する状況で瓦が多数出土している。溝心心による軸の振れはN4°31′51″Eを測る。

その他の遺構

23SX020

V面にて検出した方形のピットで、土層観察からは柱穴と認定できるが、他に連なるピットが検出できていない。また遺構内および遺構上面の茶色土からは、遺物が出土していないため、具体的な時期決定のための確証が得られていない。したがって、ここでは遺構の確認のみに留めておく。

（中島恒次郎）

4 ..遺物

掘建柱建物出土遺物

23SB025 出土遺物　（図73）

図73. 23SB025出土遺物実測図（S=1/3）

土師器

坏a（1）　磨耗して調整は不明。底部は回転ヘラ切りされる。

椀c2（2）　高台径7.4cmを測る。体部下位に丸味をもち、内面は平滑でミガキが施されてい

たと考えられる。

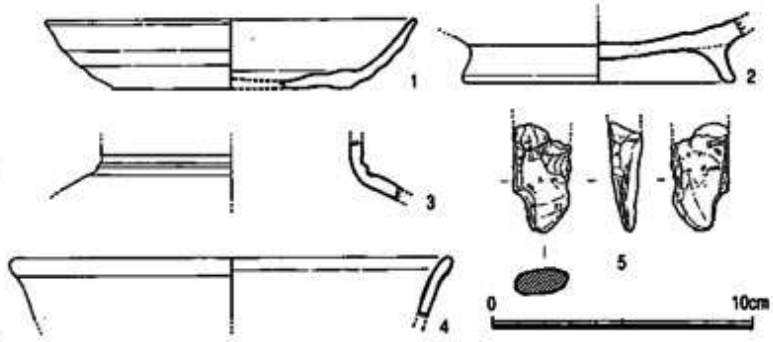


図74. 23SA035出土遺物実測図（S=1/3）

柵出土遺物

23SA035 出土遺物

（図74）

土師器

坏a（1） 口径14.2cm、器高2.7cm、底径9.2cm。底部は糸切り。

椀c（2） 高台径は10.4cmを測り大椀と思われる。調整は不明。

越州窯系青磁

壺（3） 水注とも考えられる頸部破片。頸部と胴部の境に突帯状の段をもつ。胎土は明灰色を呈し緻密で、釉は灰緑色。I類。

龍泉窯系青磁

椀(4) 口径17.0cm復原される。口縁端部を外反させ、玉縁状に丸くおさめている。胎土は灰白色を呈し緻密。釉は茶色味をおびた明灰緑色で厚めに施されている。IV類。

石製品

砥石(5) 小型の刃物用に使用されたと思われる手持ちの砥石。暗灰色を呈し、石材は泥岩。

溝出土遺物

23SD010 出土遺物 （図75）

土師器

1～3は上層よりの混入と思われる。

小皿a（1・2） 口径が7.0・7.9cm、器高0.9・1.2cmに復原される。1は底部切り離しは不明で、板状圧痕が残る。2の底部外面は糸切りで、内面の屈曲部が強く押さえられているのが特徴的である。

坏a（3） 口径13.8cm。内面屈曲部を強く押さえ、口縁端部は薄く引き出す。底部は糸切り。

椀c2（4～6） 4・5は高台のみで、体部に丸味をもつ。6は口径14.6cm、器高5.0cm。口縁部を直に引き出す。

皿c（7） 口径は14.4cmを測り、体部が直線的に外上方に開く。

甕（8） 内外面を丁寧に横ナデによって仕上げ、口縁部を短く外反させる。胎土は精選さ

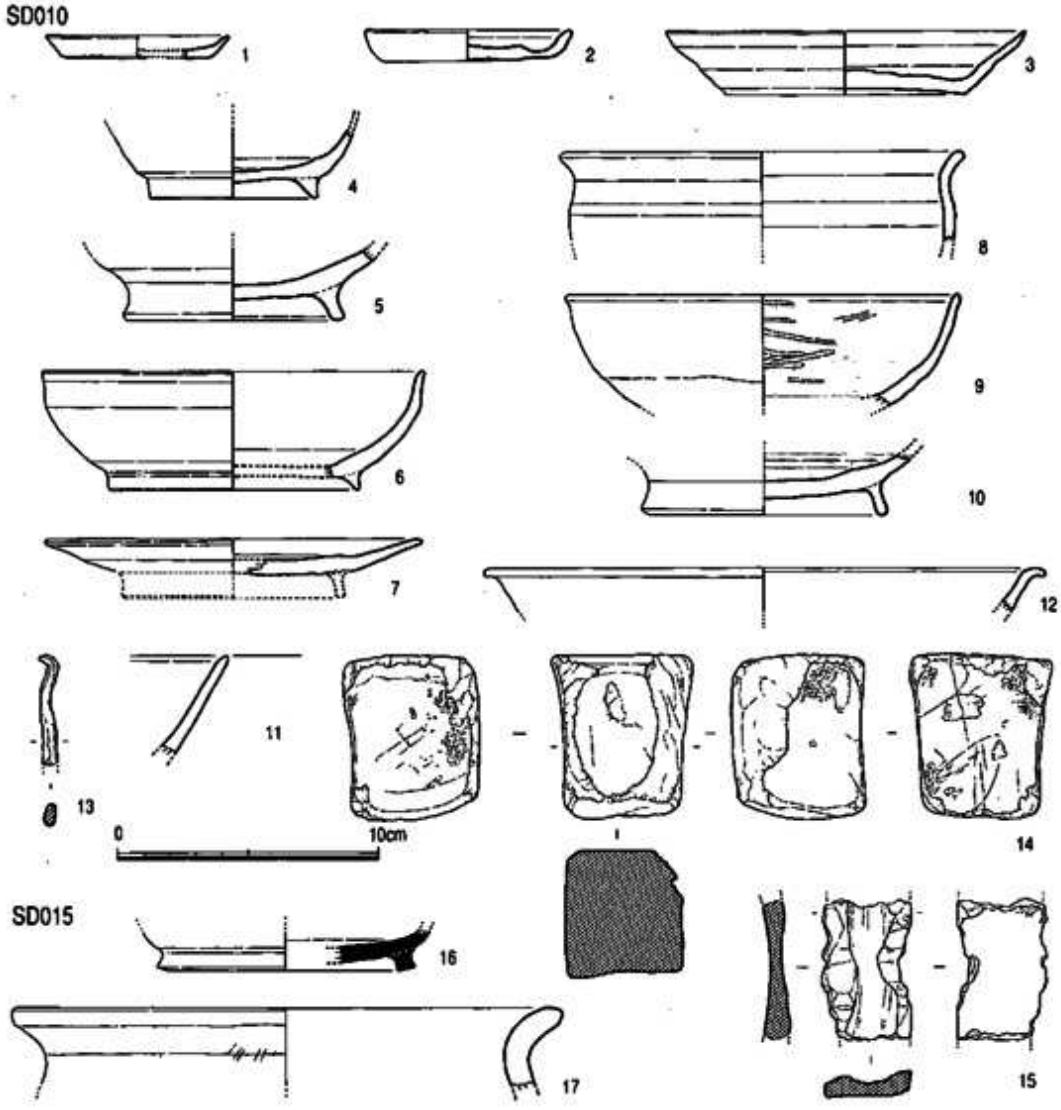


図75. 23SD010・015出土遺物実測図（S=1/3）

れ少量の砂粒を含んでいる。

黒色土器

椀（9・10） 9は口径15.0cm、体部は丸味をもち口縁部は直線的に立ち上がる。内面に粗いミガキcを施している。10の内面調整は粗雑でわずかにミガキの痕跡が残る。いずれもA類。

白磁

鉢 （11） 灰白色を呈し、緻密な胎土である。口縁部は大きく外反し内面屈曲部は稜をなす。

越州窯系青磁

椀（12） 胎土は灰色。釉は明灰緑色。口縁部は直線的に外方へ開く。I類。

23次

金属製品

鉄製品

釘（13）　残存長4.3cm、幅0.5cm、厚さ0.8cmで先端部を欠損する。

石製品

砥石（14・15）　14は明黄灰色を呈する砂岩製で、角を欠損するが四面を使用している。15は滑石製で石鍋の口縁部破片を再利用したもの。使用による凹みが一面に二方向あり、小型刃物の砥石として使用したと考えられる。

23SD015 出土遺物（図75）

須恵器

坏c（16）高台径9.8cm。高台はやや外に開き気味に貼付され、見込みは粗雑な不定方向のナデで仕上げる。

土師器

甕a（17）　胴部外面にわずかにハケ調整が認められる。口縁部の内外面に煤が付着している。

その他の遺構出土遺物

23SX007 出土遺物（図76）

土師器

小皿a（1）　口径9.6cm、器高1.1cmを測る。底部はヘラ切り、板状圧痕が残る。

瓦器

椀（2）　灰白色の胎土で選され、体部外面に粗いミガキcが認められる。口縁端部は肥厚し玉縁状におさめる。口縁部は黒灰色に焼け重ね焼きの痕と思われる。

23SX008 出土遺物（図76）

土師器

椀c2（3）　口径17.6cm、器高4.2cmに復原される。浅めの体部に低めの高台が貼付される。

23SX013 出土遺物（図76）

土師器

坏a（4・5）　口径12.0・12.4cm、器高2.9・2.4cmを測る。底部はいずれも糸切り。

瓦製品

瓦玉（6）　上面に縄目叩き、側面に瓦の切断面が残っている。

23SX014 出土遺物（図76）

土師器

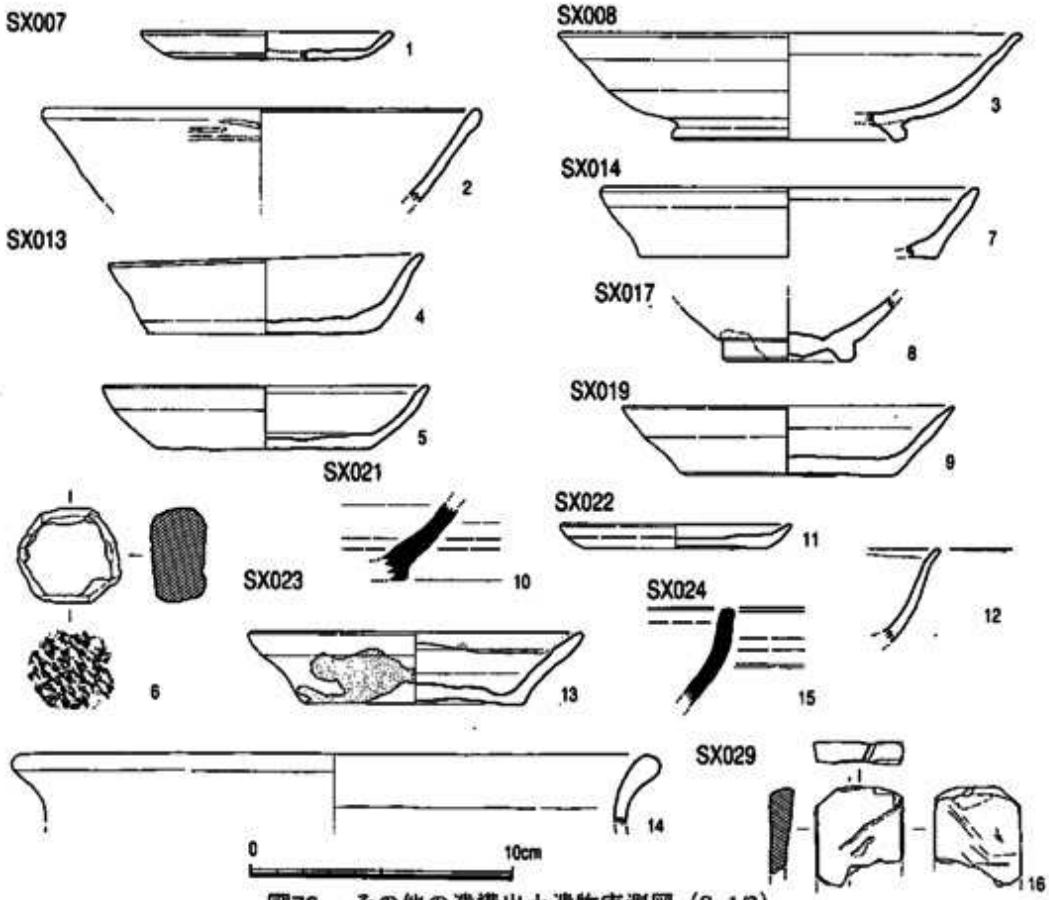


図76. その他の遺構出土遺物実測図（S=1/3）

坏a（7） 口径14.4cm、器高2.7cmを測る。底部は糸切りされ体部と底部の境は明瞭である。

23SX017 出土遺物（図76）

白磁

椀（8） 高台径5.1cm。胎土はわずかに灰色をおびた白色で精選されている。淡い水色を帯びた透明釉が高台際まで施され、体部下位はヘラ削りをおこなう。見込みが非常に狭い。IX-2類。

23SX019 出土遺物（図76）

土師器

坏a（9） 口径12.6cm、器高2.7cm。底部は糸切りされ体部は直線的に外方に開く。

23SX021 出土遺物（図76）

須恵質土器

椀（10） 胎土は灰白色で精良。内外面ともに回転ナデ調整で、底部は糸切りされる。小片のため全体の形状は不明。

23SX022 出土遺物（図76）

23次

土師器

小皿a（11）　口径8.8cm、器高0.9cm。底部は糸切り。

白磁

皿（12）　口縁端部の釉をふき取る。内面下位にわずかに屈曲が残りIX 類の口縁部を外反させるタイプ。

23SX023 出土遺物（図76）

土師器

坏a（13）　口径12.8cm、器高2.8cm。胎土は粗く砂粒を多く含む。屈曲部内面を強く押さえ、底部は糸切りである。

鍋（14）　口径24.8cm。口縁部は横ナデ調整で端部を丸く肥厚させる。

23SX024 出土遺物（図76）

須恵器

鉢（15）　内面は横ナデ、外面には粗いミガキaが認められる。口縁端部に浅い沈線が巡る。

23SX029 出土遺物（図76）

石製品

砥石（16）　二面が使用される。石材は砂岩、淡赤紫色を呈し側面に暗赤紫色の部位が露出している。

各土層出土遺物

茶褐色土出土遺物（図77）

土師器

小皿a（1）　器高1.2cm。底部は糸切り。

鉢×大椀（2）　口径は19.2cmに復原される。体部は横ナデ調整で口縁部外面に煤が付着する。

瓦器

椀（3）　胎土は灰白色を呈し精良。内外面に粗いミガキを施し、口縁端部は肥厚させ玉縁状におさめる。口縁部内外面とも黒灰色を呈し、重ね焼きの痕と思われる。

白磁

椀（4・5）　4 は灰白色の胎土で、淡い黄灰色の釉を施す。5 は胎土は黄灰色、釉は水色味をおびて、高台の削りが粗い。いずれもIV 類。

陶器

瓶（6）　口径8.4cm。口縁部を大きく外方に開き、端部は内側に断面三角形につまみ出す。

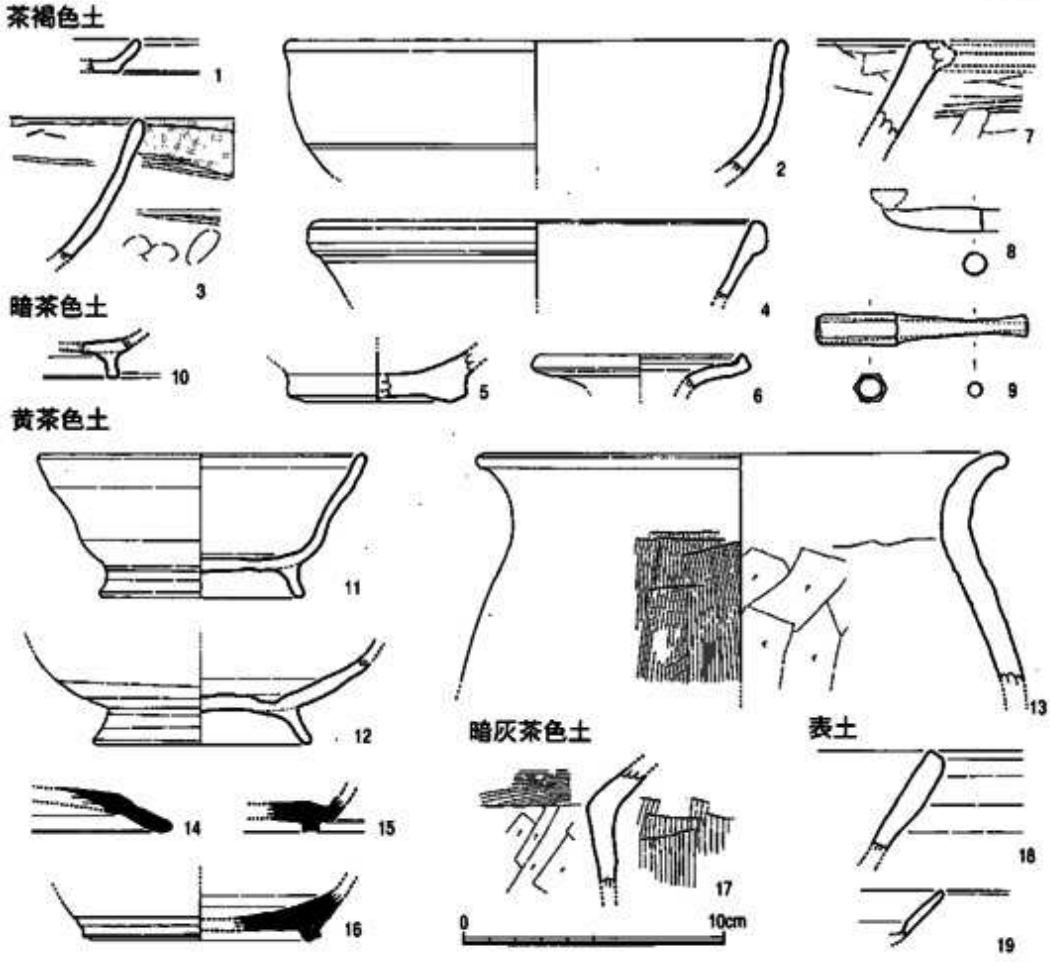


図77. 各土層出土遺物実測図（S=1/3）

茶灰色の胎土で、内面は灰緑色、外面は一部褐色味をおびた緑茶色の釉が施される。近世の国産陶器。

石製品

石鍋 (7) 滑石製で鍔の部分は欠損するが、体部の傾きから森田分類 C 群の鍋と考えられる。口縁部には煤が付着している。

金属製品

キセル (8・9) 8 はキセルの吸口部でやや重みがあり、真鍮製と考えられる。 9 は銅製の雁首でいずれも木質のラウ部を欠いている。近世の製品。近世の煙管の編年による3・4段階の製品と考えられる（小泉、1983)。

暗茶色土出土遺物（図77）

土師器

椀c (10) 体部の形態は不明だが、細く高めの高台が貼付される。

黄茶色土出土遺物（図77）

土師器

椀c（11・12）　11は口径12.6cm、器高4.5cm。体部は横ナデ、見込みはナデ調整され、外上方にほぼ直線的に開く、椀c1類。12は丸味をもった張りのある体部で外面下位にヘラ削りをおこなう。細く高い高台が貼付され八の字状に開く。椀c2類。

甕a（13）　口縁部と胴部の境は緩やかで、外面はハケ、内面には削り調整をおこなっている。外面に煤が付着。

須恵器

蓋4（14）　口縁端部は丸くおさめ、内面に浅く沈線を巡らせる。

坏c（15・16）　いずれも断面四角形の低い高台である。16は高台径9.2cmを測り、高台が底部と体部の境に貼付される。

暗灰茶色土出土遺物（図77）

土師器

甕a（17）　口縁部内面に横方向、胴部外面に縦方向のハケ、胴部内面は削り調整をおこない、口縁部の屈曲はシャープである。

表土出土遺物（図77）

土師器

鍋（18）　口縁部のみの小片で、胎土はやや粗く砂粒を多く含んでいる。外面は明茶褐色に焼けている。

同安窯系青磁

皿（19）　胎土は明灰色を呈し緻密で、灰緑色の透明釉が施される。

瓦類

23SD010出土瓦（図78）

軒丸瓦（1・2）　1は老

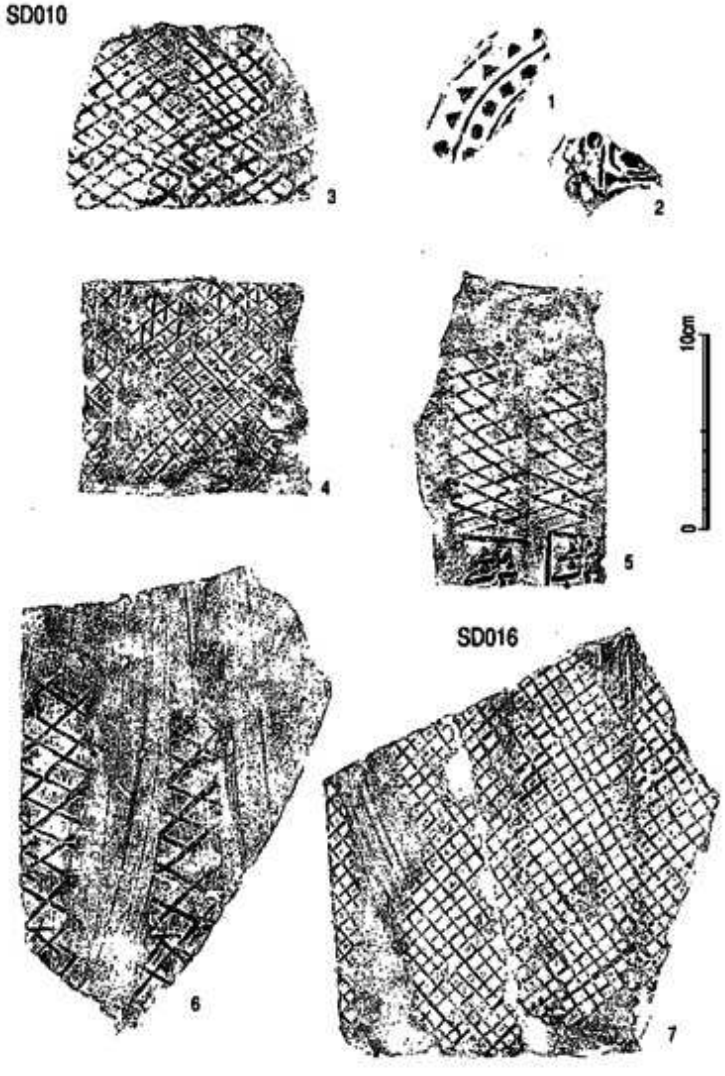


図78.　23SD010・016出土瓦拓影（S=1/4）

司系で外区に突鋸歯文、珠文をもつ。2 は複弁蓮華文である。

平瓦 (3・4) いずれも格子叩きであるが、3 は横長の小さめの格子、4 は小さい格子で部分的に縦線が入る。

文字瓦 (5・6) 5 は「筑」で VI -3 類。6 は大きめの斜格子を一部ナデ消している。文字は「大」と読める。XV 類。

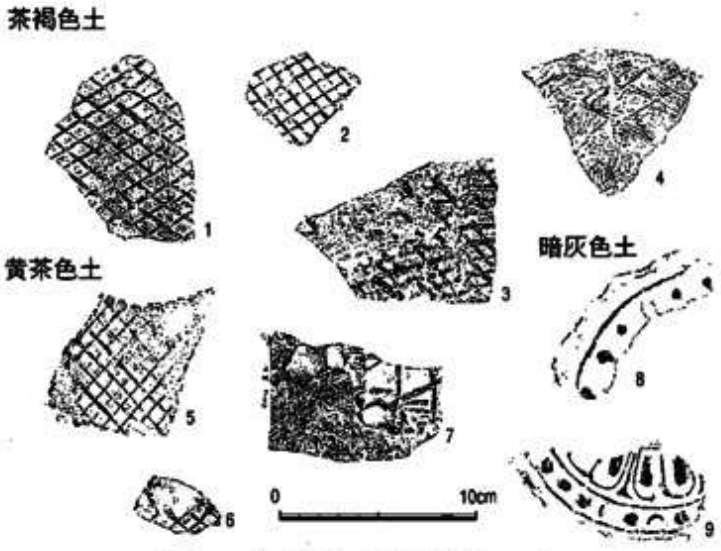


図79. 各土層出土瓦拓影 (S=1/4)

23SX016 出土瓦 (図78)

平瓦 (7) 小さめの正格子叩きで、一部ナデでスリ消している。

茶褐色土出土瓦 (図79)

軒丸瓦 (4) 瓦当面に細い隆線の格子叩きを施す。裏面の調整は組雑なナデである。

平瓦 (1・2) いずれも小さめの格子叩きある。

丸瓦 (3) 格子叩きで、線が太めである。

黄茶色土出土瓦 (図79)

平瓦 (5~7) 5・6 は小さめ格子叩き。7 は大きめの縦長格子で縁に布目痕が残る。

暗灰茶色土出土瓦 (図79・80)

軒丸瓦 (8・9) 8 は外区の珠文のみ残る。9 は老司系の軒丸瓦で複弁蓮華文と外区にわずかに突鋸歯文が残っている。

平瓦 (10) 凹面は布目の下に小口面と平行な糸切り痕が観察される。凸面は縄目叩きで下端部をナデ消し側面はヘラケズリを施している。桶巻き作りである。

(森田レイ子)

5.小結

A.I 面遺構群の評価

23次調査にて検出した1面目の遺構は、おおむね13世紀前半から14世紀代に機能していたと考えられる建物および柵であった。周辺地域の調査においても同時期の遺構が展開しており、

23次

建物や柵等の方向は、N4°～3°E前後の振れを有している。特に辻遺跡1次調査にて検出したSD190は、N94°46′E前後の振れを有し、直角方向ではN4°46′Eとなる。したがって、何らかの計画的な土地区割りに沿った建物および柵等の諸施設が配置されていたとも解することができる。また遺構の検出状況をみると、筑前国分寺の寺域より東側に分布中心があるようにも見受けられる。

B.溝23SD010および23SD015の評価

23SD015は、今次調査の主目的である寺域境界施設と考えられる遺構で、その上位に23SD010が形成されている。23SD015の形成時期は定かではないが、埋没開始時期は出土遺物から、平安時代前期と考えられ、次第に堆積を増してゆき23SD010へと移行していったものと考えられる。23SD015の北端および南端（いづれも任意）の中心座標から計算された溝の振れは報告にて記載したとおり、講堂中軸線の振れから想定されている寺中軸線の振れとは程遠い。しかし、同一の溝と考えられる第7次調査検出の溝SD090の南端座標と23SD015の北端座標から導き出される溝の振れは、N2°39′54″Eを測ることから、巨視的に見ると現在想定されている中軸線の振れと近似している。なお7次調査のSD090の埋没時期については、奈良期に埋没とされている。今次報告にあたって再度確認したところ

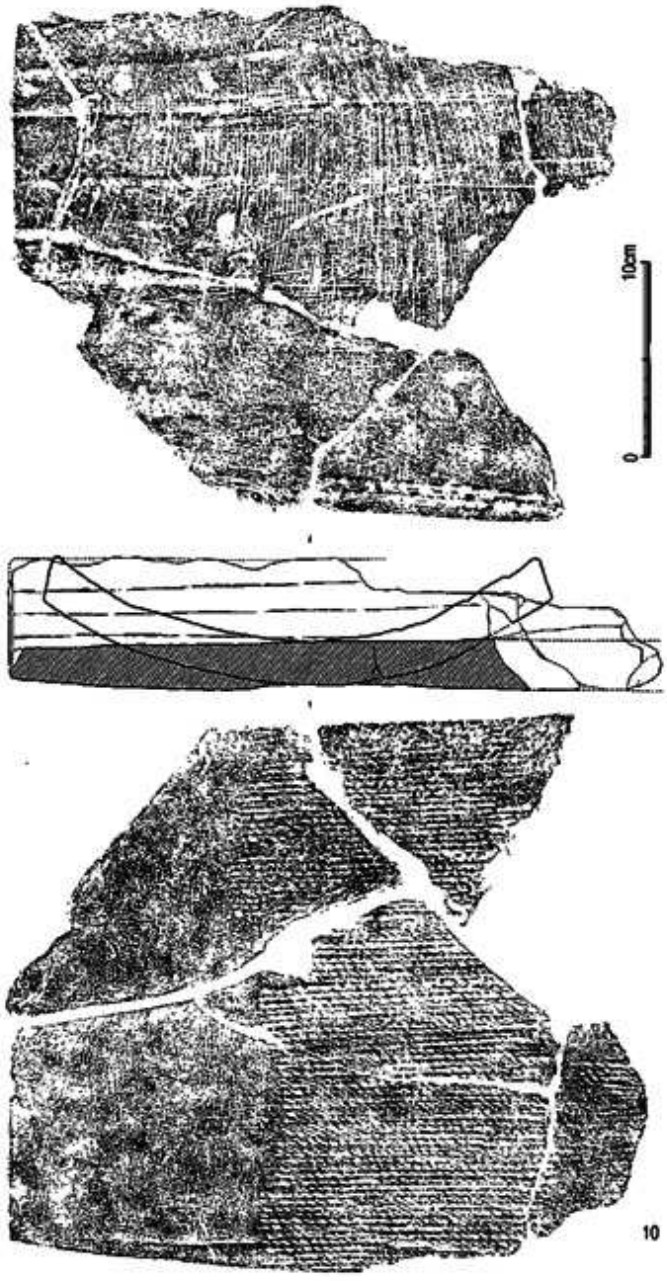


図80. 暗灰茶色土出土瓦実測図（S=1/4）

瓦出土傾向に関して、23SD015出土傾向と同じであり、一連の溝と解して大過ないものと考える。溝の性格については、西外郭施設を検出した21-2次調査および南接する14次調査の成果と合わせて考えると、東外郭線外側の溝である可能性が高い。

C.各土層の形成時期

茶褐色土は最上層の遺物包含層で近世までの遺物を含む。黄茶色土は平安時代前期、暗灰茶色土は奈良期の遺物が中心である。ただし遺物の主体が瓦であり、食器の出土が極めて希薄なことから、堆積時期に直接結びつくかどうかは検討を要する。各層および遺構からの瓦の出土傾向を破片数量法を用いて数量化したのが、表14である。過半数の瓦が縄目叩きを凸面に残すものであるが、上位へいくにつれて格子叩きのものが多くなる。ただし、破片数量法の分析限

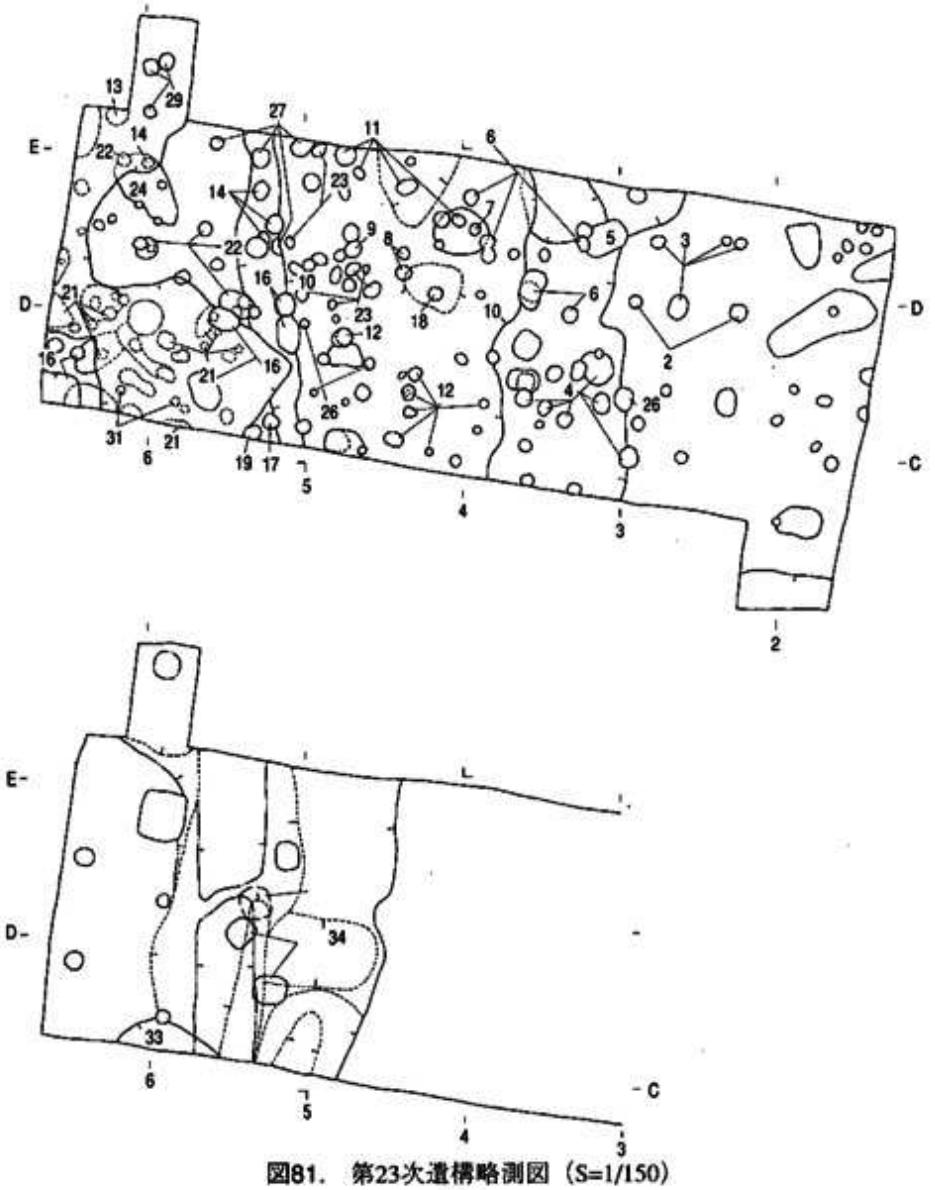


図81. 第23次遺構略測図（S=1/150）

界があり、細片化した遺物をも数量化していることから、実際の個体数にどれだけ近づいているのかは甚だ疑問である。傾向把握として理解していただきたい。

（中島恒次郎・森田レイ子）

表14. 23次調査　瓦出土傾向

土層・遺構	平瓦			丸瓦			平瓦×丸瓦			(縄目叩)		(格子叩)		総数（不明除去）
	(縄目叩)	(格子叩)	不明	(縄目叩)	(格子叩)	不明	(縄目叩)	(格子叩)	不明					
茶褐色土	69	4	26	1	1	8	4	0	99	74	93.67%	5	6.33%	79
23SD010	119	66	83	5	5	32	12	7	174	136	63.55%	78	36.45%	214
23SD010 灰色粘土	40	2	21	2	1	7	0	1	20	42	91.30%	4	8.70%	46
暗茶色土	29	1	0	5	0	0	0	0	59	34	97.14%	1	2.86%	35
黄茶色土	218	3	80	12	1	33	43	0	205	273	98.56%	4	1.44%	277
暗灰茶色土	166	1	36	10	0	14	4	1	79	180	98.90%	2	1.10%	182
23SD015	23	0	11	5	0	5	0	0	44	28	100.00%	0	0.00%	28

※破片数量法によっている。また(格子叩)の中には、細かい格子叩きのものと大きめの格子叩きのものが混在している。傾向としては小さい格子が大半を占める。

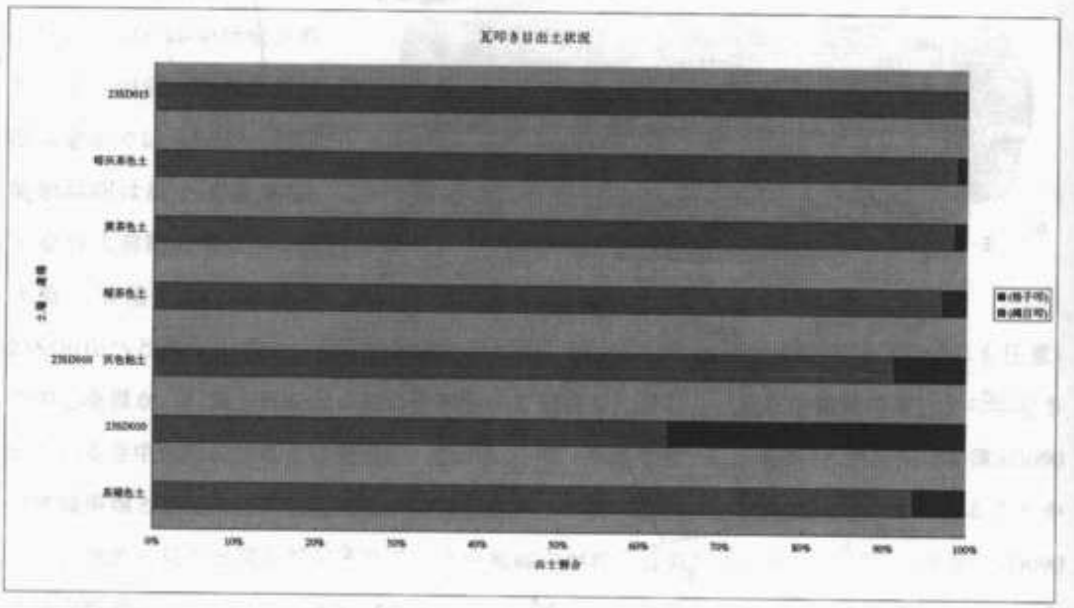


表15. 23次調査　遺構番号一覧

S-番号	遺構番号	種　別	地区
1			
2	23SB025	掘立柱建物	C2他
3		ピット群	D2
4		ピット群	C3
5		ピット	D5
6		ピット群	D3
7	23SX007	ピット	D3
8	23SX008	ピット群	D4
9	23SA035	ピット	D4
10	23SD010	溝　黒灰色土	C・D4
11	23AS035	ピット群	D4
12	23SA035	ピット群	C4
13	23SX013	ピット	E6
14	23SX014	ピット群	D5
15	23SD015	溝　砂質明茶色土	5ライン
16	23SX016	ピット群　黒灰色土	C5
17	23SX017	ピット群	C5
18		ピット	D4
19	23SX019	ピット	C5
20	23SX020	ピット　最下層	D5
21	23SX021	ピット群　黒灰色土	C5・6
22	23SX022	ピット群　黒灰色土	D5
23	23SX023	ピット群　黒灰色土	D4
24	23SX024	溜まり状　白色粘土ブロック、茶色粘土の混土	D6
25	23SB025	掘立柱建物	
26		ピット群	C4
27		ピット群	D5
28		土壙　茶灰色土	D4
29	23SX029	ピット群　茶黒色土　中世	E5
30	23SB030	掘立柱建物	
31		ピット群　茶黒色土	C6
32		ピット群　暗茶色土　古代	C5
33		凹み　暗茶色土　古代	C5
34		溝か？　暗茶色土　平安前期	C4他
35	23SA035	柵	

表16. 23次調査 出土遺物一覧

S-2

土師器	椀c、坏
瓦類	丸瓦

S-2c

土師器	供膳具
瓦類	破片(縄目-細)

S-2d

土師器	坏a

S-3

土師器	坏a
土製品	フイゴ
瓦類	丸瓦、破片

S-4

須恵器	供膳具
土師器	坏
瓦類	破片

S-5

須恵器	壺d×f
土師器	破片
瓦類	破片

S-6

土師器	坏×皿、椀c
白磁	椀；破片(1)
瓦類	丸瓦(格子-小)、破片

S-7

須恵器	坏c
土師器	小皿a(ヘラ)、煮沸具
瓦器	椀

S-8

土師器	椀c2、鍋
黒色土器B	破片

S-9

土師器	供膳具
龍泉窯系青磁	椀；IV(1)
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小)、破片

S-10

須恵器	坏a、壺
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、皿c、椀c2、鍋、壺 壺b、丸底坏a×c(角閃石あり)
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀；I(1)
	壺；破片(1)
龍泉窯系青磁	椀；I-5(1)
緑釉陶器	破片(1)
白磁	椀；破片(1)、II-2b×4b(1)
	壺；鉢II(1)
肥前系陶磁器	染付(1)
瓦類	軒平瓦、軒丸瓦、丸瓦(縄目-細、格子-小) 平瓦(文字「大」・「筑」、縄目-細、格子-小、大) 破片(縄目-細、格子-小、大)
石製品	砥石、滑石加工品

S-10 茶色粘

須恵器	壺3、皿a、小壺
土師器	坏d
黒色土器A	椀2
瓦類	丸瓦(縄目-細、格子-小)、平瓦(縄目-細、格子-小) 破片(格子-小)
白磁	椀；破片(3)
瓦類	平瓦(縄目-細)、丸瓦(縄目-細) 破片(縄目-細、格子-小)

S-11

土師器	坏、煮沸具
瓦類	破片
石製品	砥石

S-12

土師器	坏a(イト)、椀c2、大椀c、煮沸具
越州窯系青磁	壺；水注×壺I(1)
中国陶器	壺；破片A'a(1)
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小)、破片
石製品	砥石

S-13

土師器	坏a(イト)
白磁	破片(1)
瓦類	瓦玉

S-14

土師器	坏a(イト)、椀c
瓦類	平瓦(縄目-細)、破片

S-15 明茶色砂質土

須恵器	壺、坏c
土師器	供膳具、甕a
瓦類	平瓦(縄目-細)、丸瓦(縄目-細)、破片

S-15 暗茶褐色土

瓦類	破片

S-16

須恵器	壺
土師器	坏a(ヘラ)、椀c
黒色土器A	椀c
白磁	椀；破片(1)
瓦類	丸瓦(縄目-細)、平瓦(縄目-細、格子-小)、破片
その他	焼け石

S-17

須恵器	供膳具
土師器	供膳具
白磁	椀；IX-2(1)
瓦類	平瓦(縄目-細)、破片

S-18

土師器	供膳具
その他	焼土塊

S-19

土師器	坏a(イト、ヘラ)
瓦類	平瓦(縄目-細)、破片

S-21

須恵器	坏、壺
土師器	坏a(イト)、小皿×坏(イト)、壺、供膳具
瓦器	破片
龍泉窯系青磁	椀；I-5(1)
同安窯系青磁	椀；I(1)
須恵質土器	椀(東播系？)

S-22

土師器	小皿a(イト)、椀c
瓦器	破片
白磁	皿；IX(1)
	壺；破片(1)
瓦類	平瓦(縄目-細)、破片(縄目-細)

S-23

須恵器	坏、壺3
土師器	坏a(イト)、鍋、甕b、椀c
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-大、小)、丸瓦、破片

S-24

須恵器	鉢a
土師器	煮沸具
瓦類	破片

S-26

土師器	坏a×小皿a(イト)
瓦類	平瓦(縄目-細)、丸瓦、破片

S-27

須恵器	供膳具
土師器	供膳具
瓦類	平瓦(縄目-細)、丸瓦(縄目-細)、破片

S-29

土師器	坏a×皿a(イト)
瓦類	平瓦(格子-小)
石製品	砥石

S-31

土師器	供膳具

S-32

須恵器	坏
土師器	供膳具
瓦類	丸瓦(縄目-細)、平瓦(縄目-細)、破片

S-33

瓦類	平瓦(縄目-細)

S-34

須恵器	供膳具
土師器	坏a
瓦類	平瓦(縄目-細)、丸瓦(縄目-細)、破片

表土

須恵器	皿a、碗
土師器	供膳具、鍋、坏a、皿(天満宮皿)
白磁	壺；破片
同安窯系青磁	破片
瓦類	丸瓦(縄目-細)、平瓦(縄目-細)、破片(縄目-細)

茶褐色土

須恵器	坏×皿、坏c
土師器	坏a(イト)、坏c、小皿a(イト)、坏×皿、椀c2、甕b 鍋、鉢×椀、
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀c2
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀；I-5b(1)
国産陶器	花瓶(近世)(1)
白磁	椀；IV-(3)、破片(2)
	壺；破片(1)
金属	キセル
瓦類	軒丸瓦、丸瓦(縄目-細、格子-小) 平瓦(縄目-細、格子-小)、破片(縄目-細)、瓦玉
石製品	石鍋

黄茶色土

須恵器	坏a、坏c、壺、壺4、壺
土師器	椀c1、椀c2、甕a、坏c、坏a×皿a(イト？)
瓦類	軒丸瓦、丸瓦(縄目-細、格子-小) 平瓦(縄目-細、格子-小、大)、破片(縄目-細)
その他	銅付着石

暗茶色土

須恵器	皿、坏
土師器	椀c、坏×皿
瓦類	丸瓦(縄目-細)、平瓦(縄目-細、斜格子-小)、破片

暗灰茶色土

須恵器	壺、供膳具
土師器	甕a、破片
瓦類	軒丸瓦、丸瓦(縄目-細)、平瓦(縄目-細)、(斜格子-小) 破片(縄目-細、斜格子-小)

茶色土

土師器	破片(供膳具)
瓦類	破片

表17. 23次調査 土器計測表

S-7

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a (ヘラ)	1	001	1	9.6	1.1	7.0	○	○
瓦・桶	1	002	2	16.8	3.6+	−	−	−

S-8

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c2	1	001	3	17.6	4.2	9.0	−	−

S-10

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a (不明)	1	005	1	7.0	0.9	5.8	−	○
(イト)	2	002	2	7.9	1.2	6.7	○	−
土・坏a (イト)	1	001	3	13.5	3.0	9.1	−	−
土・椀c2	1	004	4	−	2.8	6.4	−	−
	2	003	5	−	2.8	8.4	−	−
土・椀c	1	007	6	14.6	5.0	9.6	−	−
土・皿c	1	009	7	14.4	1.4+	−	○	○
皿A・椀c	1	008	10	−	1.3+	9.4	−	−

S-10 灰色粘土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒A・椀	1	001	9	15.0	4.3+	−	−	−

S-12

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (イト)	1	002	1	14.2	2.7	9.2	○	○?
土・大椀c	1	003	2	−	2.4+	10.4	−	−

S-13

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (イト)	1	001	4	12.0	2.9	8.4	−	−
〃	2	002	5	12.4	2.4	8.1	−	○

S-14

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (イト)	1	001	7	14.4	2.7	11.5	−	−

S-15

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
須・坏c	1	001	16	−	1.5+	9.8	○	−

S-19

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (イト)	1	001	9	013	2.7	8.3	○	−

S-22

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a (イト)	1	002	11	8.8	0.9	6.9	○	−

S-23

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a (イト)	1	001	13	12.8	2.8	8.4	○	−

S-25

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c	1	001	2	−	1.9+	7.4	−	−

S-25d

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a (ヘラ)	1	001	1	−	2.3	−	−	−

茶褐色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小皿a (イト)	1	007	1	−	1.2+	−	−	−
瓦・桶	1	005	3	−	5.4+	−	−	−

黄茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c1	1	002	11	12.6	5.5	7.8	○	○
土・椀c2	1	001	12	−	3.4+	12.8	○	−
土・鍋4	1	003	14	−	−	−	−	−
須・坏c	1	004	15	−	−	−	○	−
	2	005	16	−	1.9+	9.2	○	−

暗茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c	1	001	10	−	1.5+	−	−	−

B.周辺地域の調査

1.筑前国分尼寺跡　第14次調査

1.調査に至る経緯

所在地は太宰府市国分２丁目469-1で、個人住宅建築の照会が地権者である荻尾興孝氏から平成２年に寄せられた。調査地は旧国道三号線から四王寺山麓にある国分の集落にむかう市道田中・松本線沿いに位置する。これまでの周辺の調査で当該地は筑前国分寺跡と国分尼寺跡との間に挟まれた部分に位置することがほぼ判明していた。調査対象面積は527㎡、調査面積は220㎡である。調査期間は平成２年10月18日～11月16日までで、文化庁の補助を受けておこなった。調査は城戸康利が担当した。

2.層位

調査地は大野城のある四王寺山（大城山）の南斜面の小谷が御笠川に向けて西に開いた扇状地上に位置する。標高は約37mである。現況は水田である。耕作土・床土、その下の無遺物層である灰褐色土と橙色土を除去すると、遺物包含層である灰色砂質土を検出した。この包含層の下で平安時代の遺構面を確認した。北側は遺構面を削平して流路になっていたと考えられ、砂礫が堆積している。さらに平安時代の遺構面が乗る灰褐色砂質土を除くと拳大の礫を多く含む灰色砂礫層上面で遺構面を検出した。遺構は奈良時代のものである。

さらに奈良時代の遺構面の形成過程を知るために、一部を掘り下げたところ遺構面から約70cm下で花崗岩風化土の基盤層に達した。基盤層は溝状の凹凸が激しく水流によって抉られたと考えられる。また、灰色砂礫層は弥生時代中期の土器片を少量包含している。周辺の地盤の状況については「筑前国分尼寺跡II」（太宰府市の文化財第16集　1991）を参照されたい。

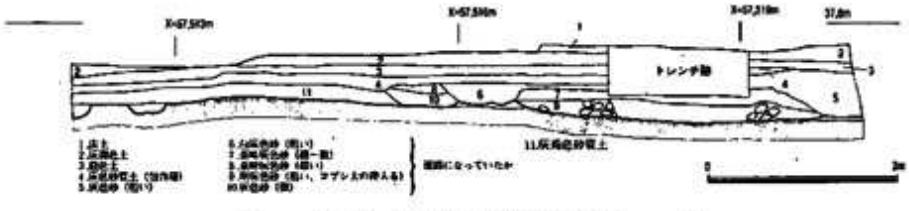


図82.　尼第14次東区西壁土層図（S=1/75）

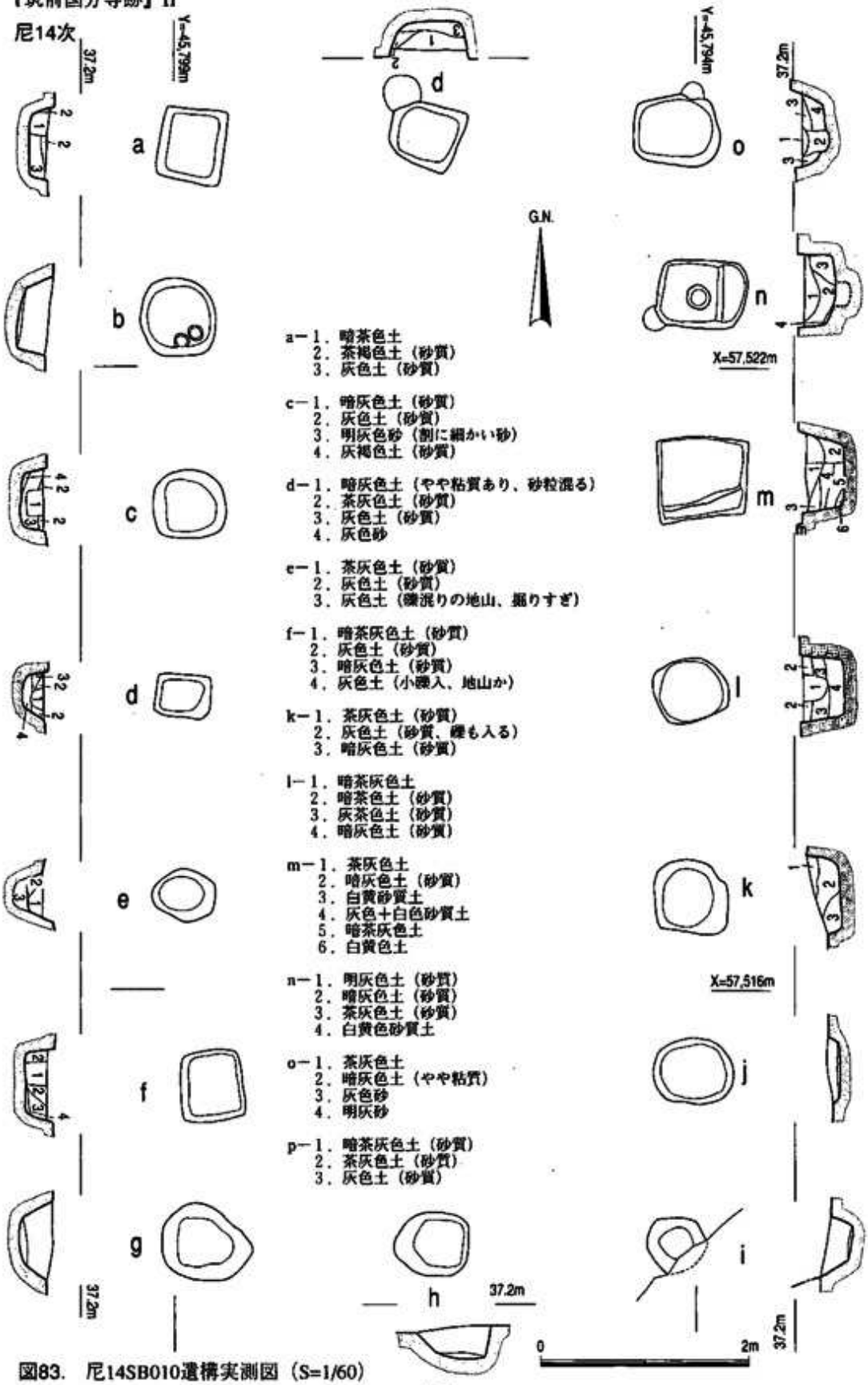
3.遺構

1）掘立柱建物

14SB010

梁行二間、桁行六間の南北棟の掘立柱建物である。規模は南北10.8m、東西4.8mに復原され、

尼14次



a－1．暗茶色土
　2．茶褐色土（砂質）
　3．灰色土（砂質）

c－1．暗灰色土（砂質）
　2．灰色土（砂質）
　3．明灰色砂（割に細かい砂）
　4．灰褐色土（砂質）

d－1．暗灰色土（やや粘質あり、砂粒混る）
　2．茶灰色土（砂質）
　3．灰色土（砂質）
　4．灰色砂

e－1．茶灰色土（砂質）
　2．灰色土（砂質）
　3．灰色土（礫混りの地山、掘りすぎ）

f－1．暗茶灰色土（砂質）
　2．灰色土（砂質）
　3．暗灰色土（砂質）
　4．灰色土（小礫入、地山か）

k－1．茶灰色土（砂質）
　2．灰色土（砂質、礫も入る）
　3．暗灰色土（砂質）

l－1．暗茶灰色土
　2．暗茶色土（砂質）
　3．灰茶色土（砂質）
　4．暗灰色土（砂質）

m－1．茶灰色土
　2．暗灰色土（砂質）
　3．白黄砂質土
　4．灰色＋白色砂質土
　5．暗茶灰色土
　6．白黄色土

n－1．明灰色土（砂質）
　2．暗灰色土（砂質）
　3．茶灰色土（砂質）
　4．白黄色砂質土

o－1．茶灰色土
　2．暗灰色土（やや粘質）
　3．灰色砂
　4．明灰砂

p－1．暗茶灰色土（砂質）
　2．茶灰色土（砂質）
　3．灰色土（砂質）

図83．尼14SB010遺構実測図（S=1/60）

柱間は梁が約2.4m、桁が約1.8mである。柱掘方は0.85～0.65mの方形から略円形を呈し大きいが企画性に乏しい。建物の振れは座標北から西へ1°30′である。遺物は須恵器、土師器、弥生土器の小片を少量検出したが図示できるものはなかった。

2）井戸

14SE005

板組の枠をもつ井戸である。掘り方は径約2.2mの略円形を呈し井戸枠は一辺約0.9mの方形である。残存する深さは約1.1mで底は二段掘りになっている。井戸枠は底に横に渡した板材が三辺に残っていただけであったが、板材の下に石を置き、高さの調節をしていることがわかった。裏込めには調査地周辺で入手できるような礫と瓦片で構成される。東側は14SK015と微妙に重複しており、埋土の類似性から同時期並存の可能性を考えている。但し、築造の先後関係は14SE005が古いことが切り合いからわかる。枠内の埋土は上層から黒色粘質土、黒褐色粘質土、礫混じりの砂層そして最下層に暗灰色土がそれぞれほぼ水平に堆積する。黒褐色粘質土は水っぽく、すくも状をしている。暗灰色土は井戸使用時の堆積で、砂層は洪水などによる自然堆積、黒褐色粘質土、黒色粘質土はその後徐々に堆積したと推定でき、井戸使用時に自然災害によって埋没したものであると考えられる。

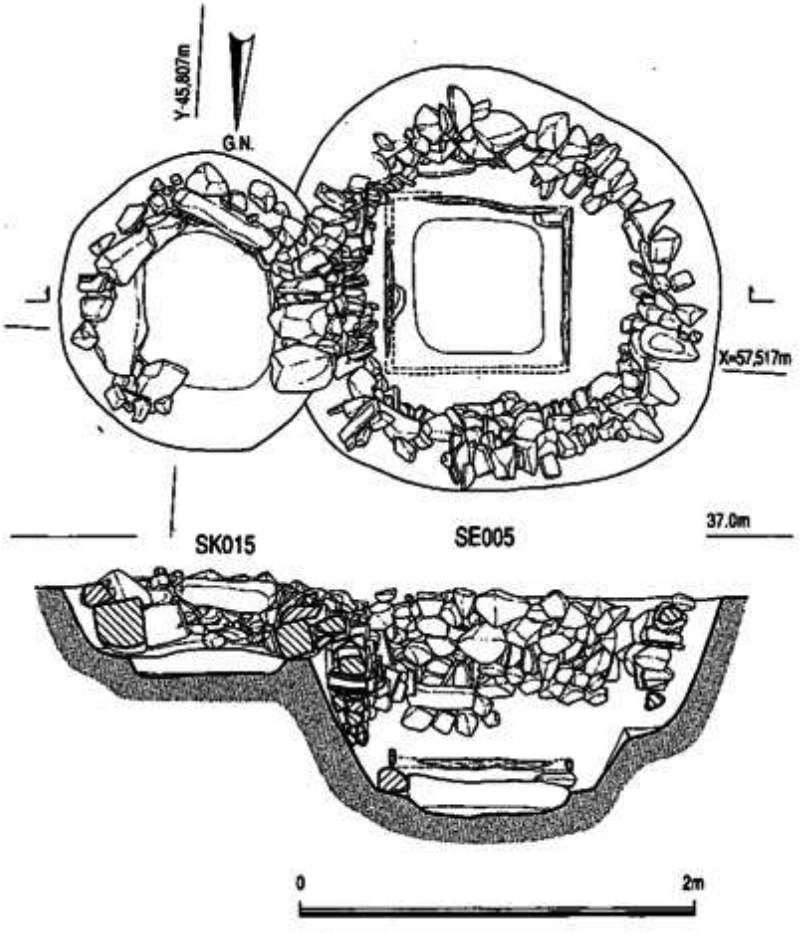


図84. 尼14SE005・SK015遺構実測図（S=1/40）

3）土壙

14SK015

14SE005の西側に一部重複している石組みの土坑である。北側の石組みは崩落していた。規模は掘り方約1.3mの円形を呈し、二段掘りをしている。深さは約0.5mである。石組みは二段掘りの上段に乗った形で組まれており、高さ0.4mほどである。石の間には瓦片も

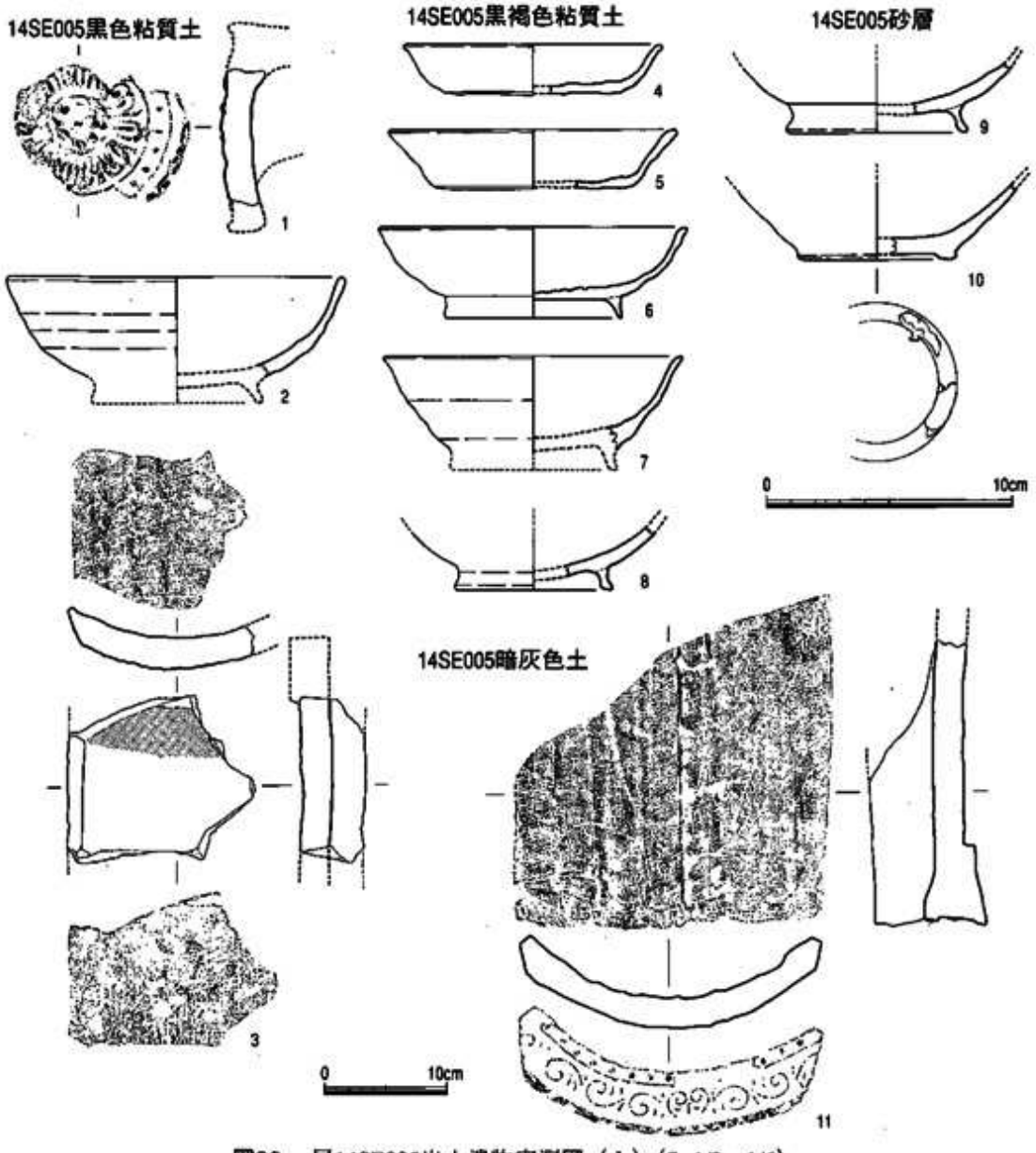


図86. 尼14SE005出土遺物実測図（1）（S=1/3・1/6）

用されている。埋土の状況はは14SE005に似ており上層から灰色粘土、砂礫層、灰色シルト層、白色砂層の順に水平に堆積している。なお、遺構検出時点で14SE005と弁別できず最上層の遺物は両遺構のものが混在している。

3.遺物

井戸出土遺物（図86～88）

14SE005

土師器

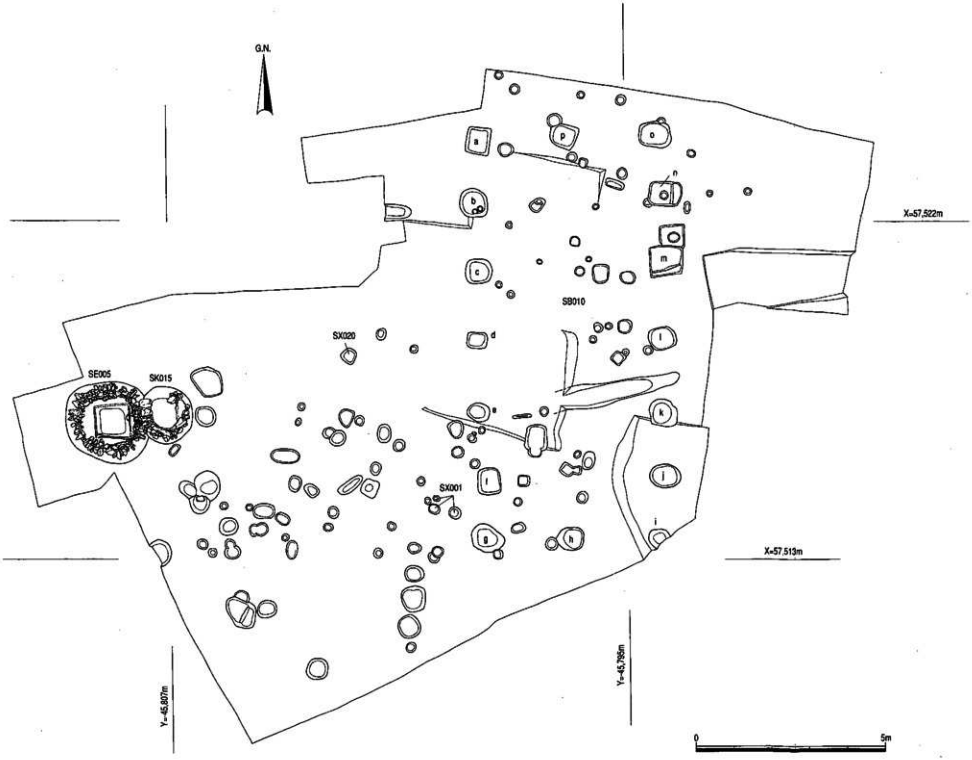


図85. 尼第14次遺構配置図（S=1/100）

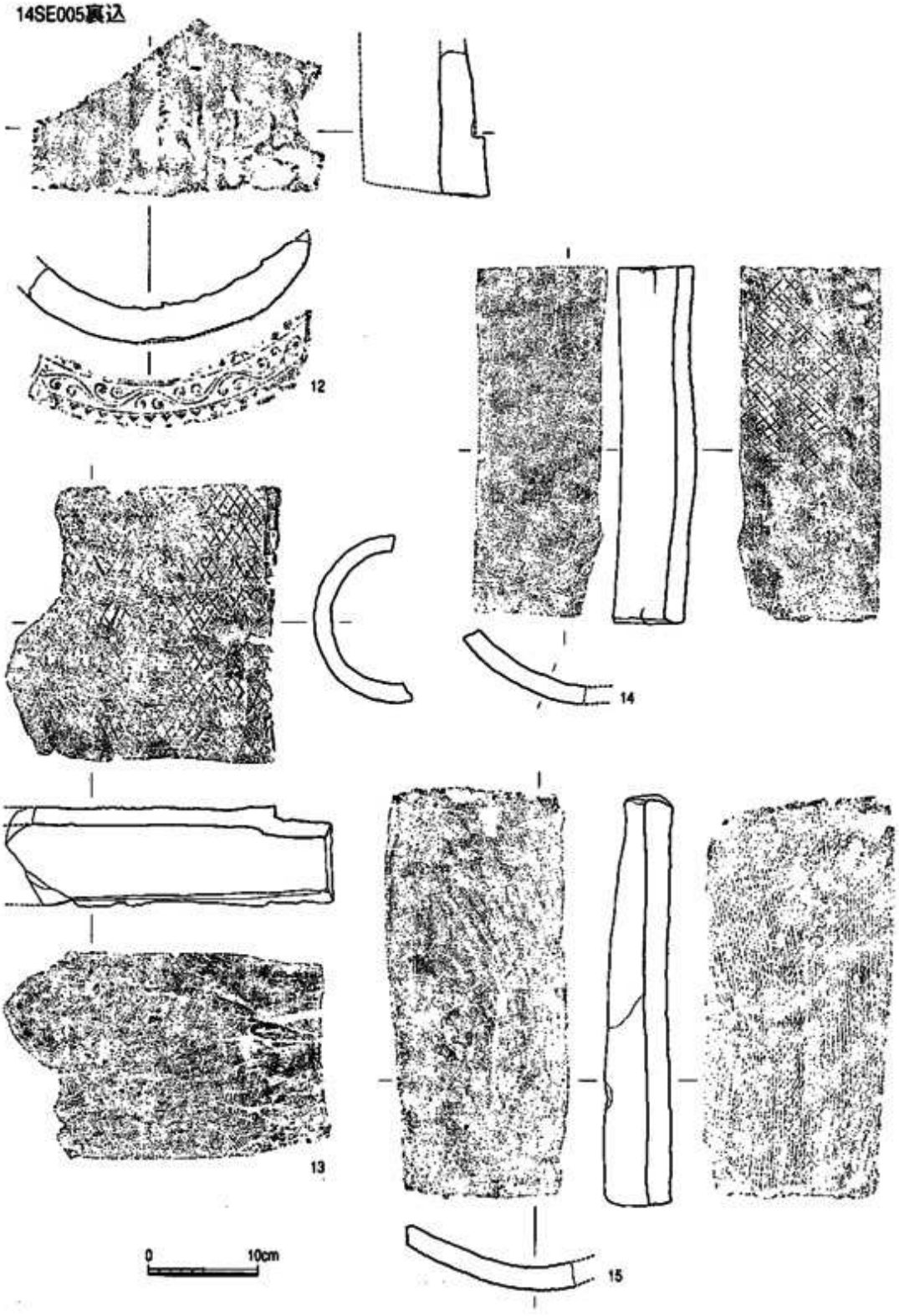


図87. 尼14SE005出土遺物実測図（2）（S=1/6）

14SE005裏込

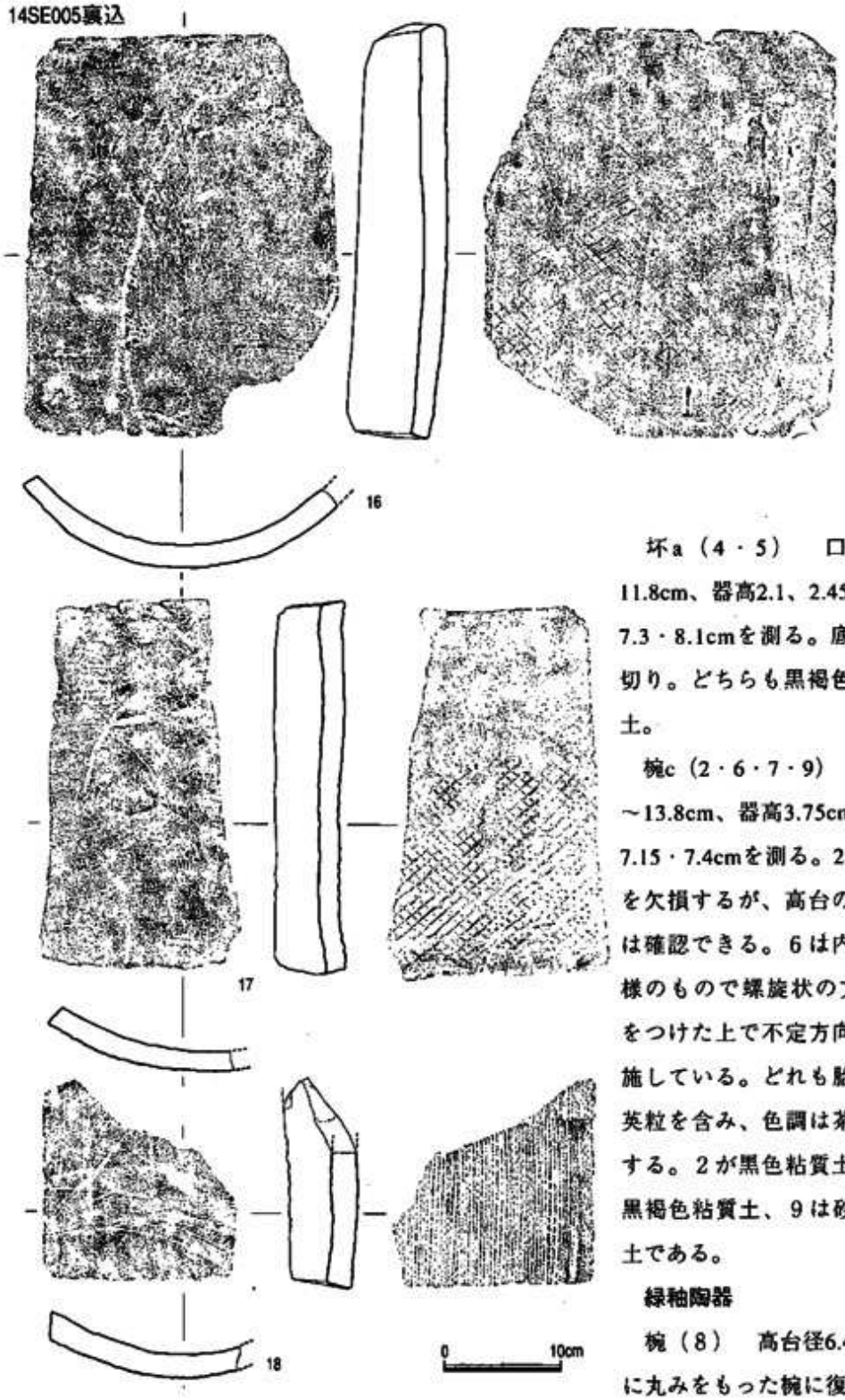


図88. 尼14SE005出土遺物実測図（3）（S=1/6）

坏a（4・5）　口径10.6、11.8cm、器高2.1、2.45cm、底径7.3・8.1cmを測る。底部はヘラ切り。どちらも黒褐色粘質土出土。

椀c（2・6・7・9）　口径12.2～13.8cm、器高3.75cm、高台径7.15・7.4cmを測る。2・7は高台を欠損するが、高台の張付け跡は確認できる。6は内底にヘラ様のもので螺旋状の文様（？）をつけた上で不定方向のナデを施している。どれも胎土には石英粒を含み、色調は茶白色を呈する。2が黒色粘質土、6・7は黒褐色粘質土、9は砂層から出土である。

緑釉陶器

椀（8）　高台径6.4cmの体部に丸みをもった椀に復元される。張付けの輪状高台をもち、高台

外面にヘラミガキらしい痕跡があるほかは、ナデによる調整を施す。胎土は白黄色で軟質である。釉は淡緑色の透明で、ムラがあり2mmほどの斑点にみえる。黒褐色粘質土出土。

青磁

椀（10）　高台径6.5cmに復元される越州窯系青磁椀I-2類である。胎土は細かく、堅緻。釉は埋没環境により変質しており、明灰緑色でつやが無く、ピンホールが多くある。砂層出土。

瓦類

軒丸瓦（1）　複弁八葉の蓮華文の瓦当面だけ残存する。推定径17.4cmに復元される。黒色粘質土出土。

軒平瓦（3・11・12）　鴻臚館系の瓦である。両端面が残りその幅は約25cmである。凸面は縄目叩き後ヘラ削りをおこなう。凹面には布目と模骨の痕跡が残る。制作時の粘土の幅は凹面

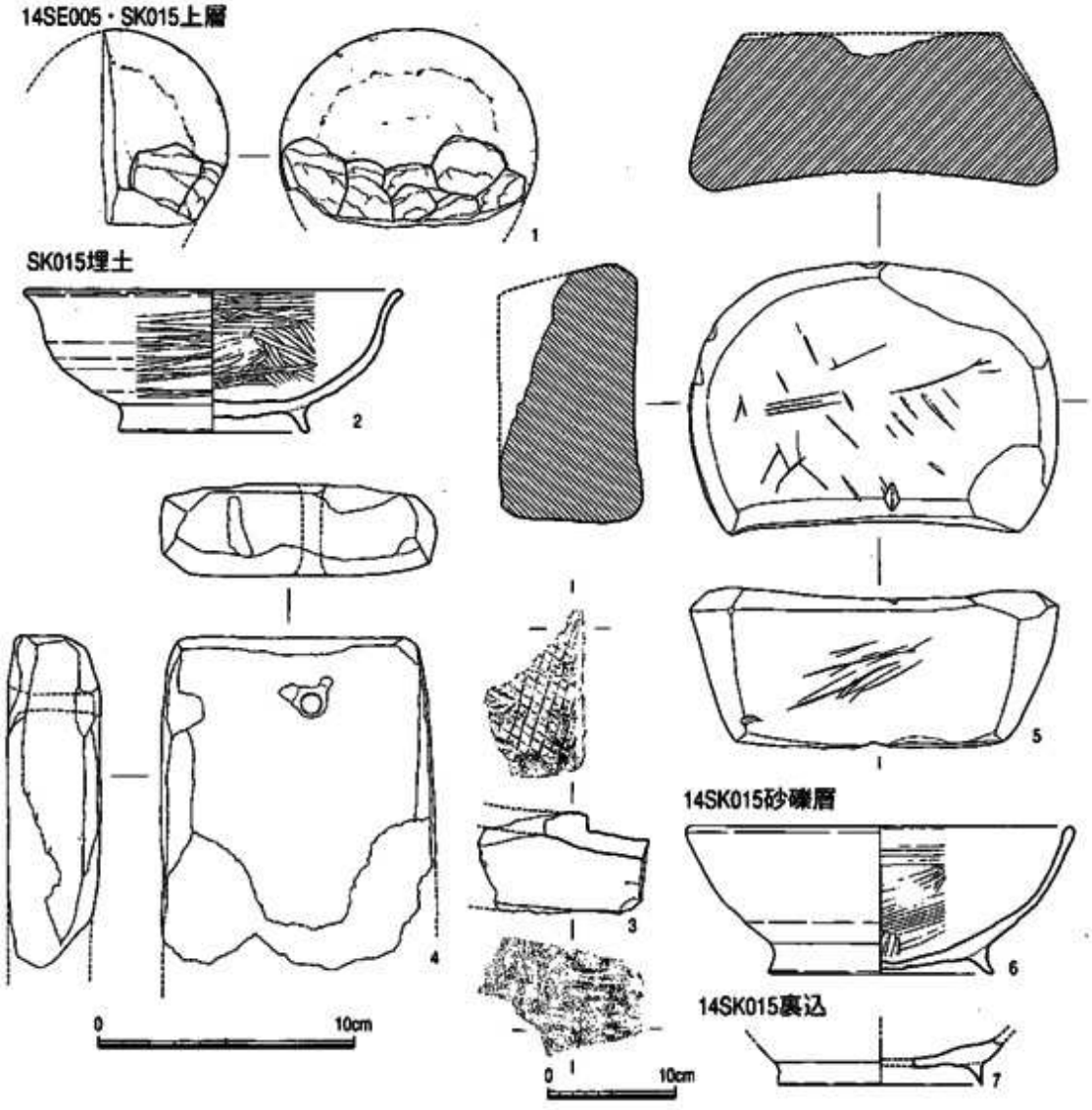


図89.　尼14SK015出土遺物実測図（1）（S=1/3・1/6）

の痕跡から5cmであることがわかる。また顎付近に6～7cm幅で瓦当面と平行に建物に彩色した際のものと思われるベンガラが付着している。3も同様にベンガラが付着しており瓦当部分を欠失した軒平瓦と考えられる。12は老司系である。凸面は縄目叩きであり、有顎である。顎付近はヘラ削りで調整している。11と同様の部分にベンガラが少し付着している。3は黒色粘質土、11は暗灰色土、12は裏込めからの出土。

丸瓦（13）　凸面は斜格子叩きである。切断面は内側から切り込みを入れ、折りとったまま未調整である。須恵質に焼けている。幅は15.3cmである。裏込め出土。

平瓦（14～18）　15・18は縄目叩き、14・16・17は斜格子の叩きである。側面端部の処理は15・17・18がヘラ削りを14・16は分割後未調整である。長さは32.5～37.3cmである。すべて裏込め出土。

土壙出土遺物

14SK015（図89～90）

土師器

椀c（7）　径8.0cmの高台をもつ底部片である。調整は風化著しく不明。胎土は細かく、明黄茶色を呈する。裏込め出土。

黒色土器

椀c（2・6）　口径14.9・15.2cm、器高5.65・5.85cm、高台径7.5・8.8cmを測る。2は内外とも、6は内面にのみミガキcを施す。2は内面口縁近くに塗布した漆が残っている。胎土はきめ細かい。2は埋土中から、6は砂礫層から出土した。

瓦類

丸瓦（3）　斜格子に「介」字が入ったものである。側面端部は切り離し後未調整である。

8は不明土製品であるが、瓦製作の技法・焼成が使用されているため瓦類に含めた。底面と考えられる部分は5mmほどの石英粒を噛み込み平坦であるが荒れている。側面は「凸」形をしていると考えられ、底から約6cmのところで幅約1cmの段をもつ。段から上はほぼ垂直にたちあがるが、段から下は台形状になると思われる。上面から見るとコーナーが一カ所あり、全体の形状は方形の可能性が考えられる。製品を止めるための穴と思われるものが径約1cmで底から連続して2回穿孔されている。穴が上面まで抜けていたか否かは不明である。拳大くらいの粘土塊をひっつけながら成形をおこなっている。調整は段の部分は段に沿って粗いナデをおこない、段から上は布目がある。残存する長辺15cm、短辺13cm、現存高は15.2cmである。胎土には7mm以下の石英粒を含み、赤味のついた灰色を呈し、表面は黒灰色をしている。灰色粘質土と掘方出土のものが接合した。

石製品

4は滑石製の権または錘と考えられる。扁平な直方体（13.1以上×10.7×3.7cm）をしており、短辺側に一ヶ所、径約1.0cmの穴を開けている。紐を通すためのものと考えられるが、紐ずれ

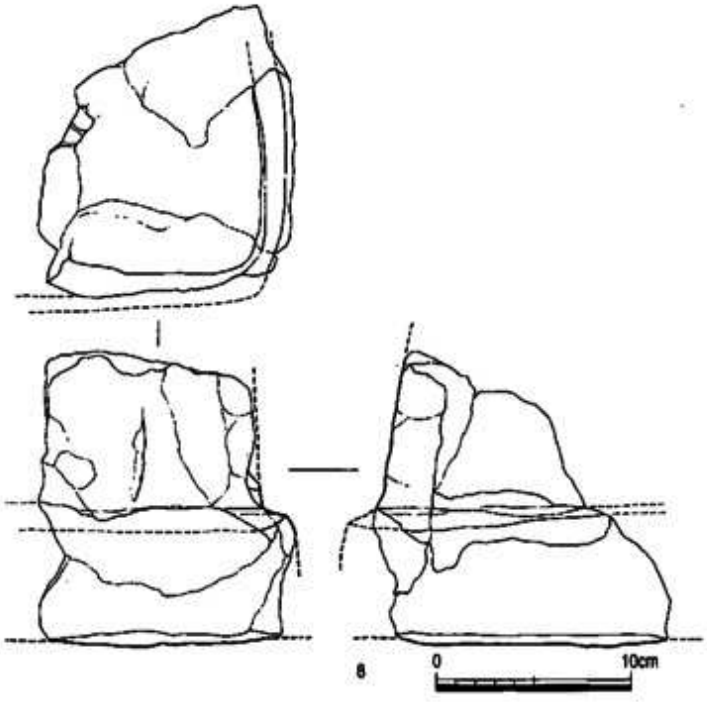


図90. 尼14SK015出土遺物実測図（2）（S=1/4）

はみられない。重量は864.4gである。5は滑石製の石枕である。平面形は蒲鉾形でコーナーは面取りがしてある。特に頭が乗る部分などは丁寧に仕上げてある。底面には擦れ痕があり、使い込んでいたものと考えられる。長さ10.7cm、幅14.4cm、高さ6.2cm、重量1652.5gを測る。二次加工を施そうとしたのか方々が欠損している。色調は暗灰色である。4・5ともに灰色粘質土からの出土。1は用途不明の製品の一部である。直径約10cmの球形をしていたと考えられ、表面は滑らかに研磨している。灰色をした火成岩でできている。重量は553.1gである。出土地点は14SE005・SK015の切り合いを確認している際に出土したためどちらの遺構か明確でない。

土層出土遺物

砂礫層（図91）

弥生土器

広口壺（1）　広口壺の口縁部である。推定口径14.8cm。表面に丹塗りの痕跡が残る。

他に弥生時代中期のものと見られる遺物があるが、図示できない。砂礫とともに流されてきたと考えられ磨耗が激しい。

表土（図91）

土師器

小皿b（2）　口径6.1cm、器高1.4cm、底径4.3cm。底部は糸切り。淡橙茶色を呈す。

白磁

3は小皿と考えられる。高台径4.5cm。畳付を除いて全面に施釉をする。釉は黄色味を帯びた透明釉で、細かい貫入が入る。胎土はきめ細かく硬質である。

瓦

6は凸面に斜格子のなかに花柄様の叩きをもつ丸瓦である。幅は15.7cmである。側面端部は内側より切れ目を入れて、折り取ったままである。

弥生土器

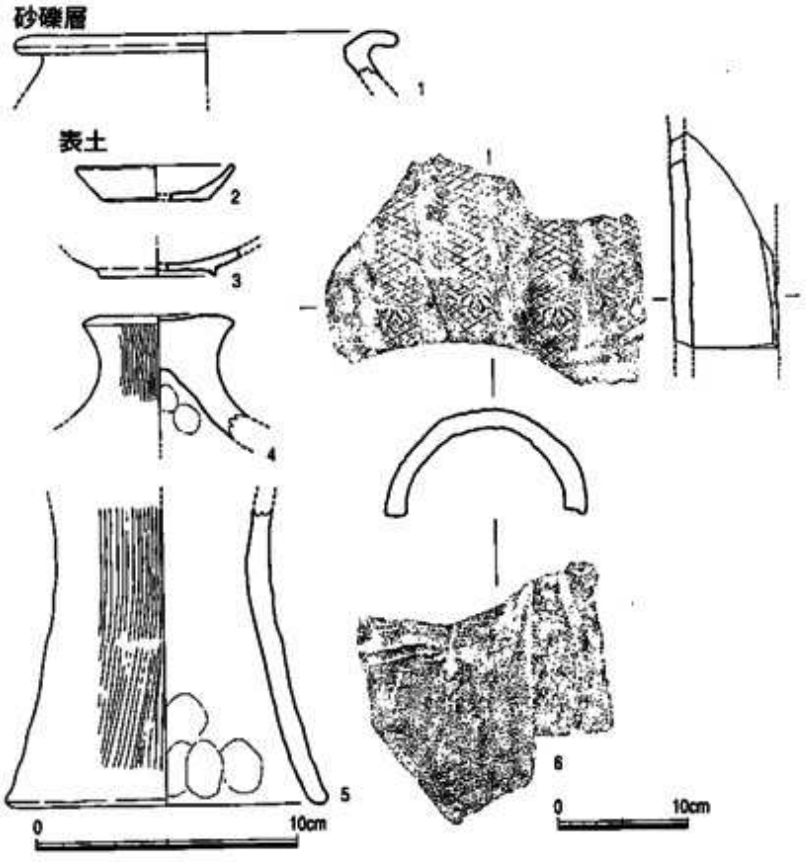


図91. 尼14砂礫層・表土出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

蓋（4）胎土は3mm以下の白色粒子を含み、淡黄茶色を呈する。

器台×支脚（5）器台または支脚の下半部と考えられる。底部径は12.4cm。胎土は4と同様で、淡茶色を呈する。

4.小結

調査地は大城山から派生する扇状地上で御笠川に向けて西にひらけている。このため少なく見積もっても3回は洪水などの自然災害により遺構が押し流されたり、埋没したと推定できる。最下層は花崗岩風化土の基盤層が見え、それを覆う砂礫層から弥生時代中期の土器が検出されていることから、少なくともこの時代に周辺に人々が居住していたことがうかがえる。おそらくこの時代の遺跡が流失したさいに基盤層も抉られて凹凸ができたのではないだろうか。これらの堆積物の上面には、奈良時代中頃から後半の掘立柱建物（14SB010）ができる。さらにこれらは再び水成堆積物に埋没し、10世紀代の遺構が三たび形成されることになる。この遺構面も洪水などにより10世紀中頃に埋没したことが14SE005・SK015の埋没過程から推定できる。

周辺の調査で筑前国分寺・尼寺跡の南を東西に貫通する道路跡が検出されているが、それに伴う街区の存否が、このエリアでの問題点となりつつある。今回検出された掘立柱建物（14SB010）は、街区の存在を示唆するものであると考えられる。今後周辺での調査報告により古代大宰府のグランドデザインはより明瞭になると思う。（城戸康利）

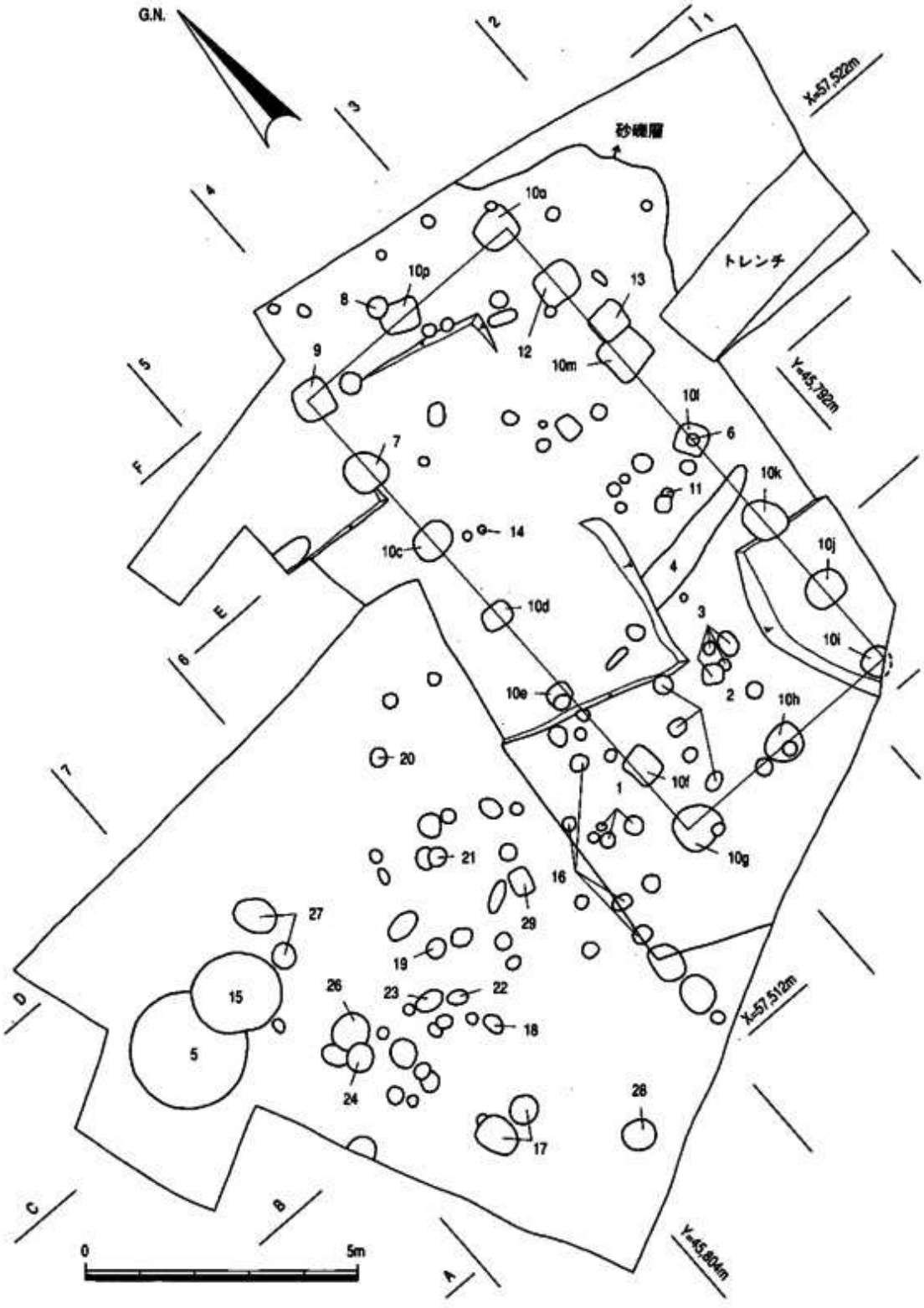


図92. 尼第14次遺構略測図（S=1/120）

表18. 尼14次調査　遺構番号一覧

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1		ピット群		8c後半～9c初頭？	B4
2		ピット群		8c後半～9c初頭？	B3
3		ピット群		8c後半～9c初頭？	B3
4		溝		8c後半～9c初頭？	C3
5	14SE005	井戸		10c	C7
6		ピット	SB010lの柱痕	8c	C2
7		ピット	SB010a	8c	E4
8		ピット		8c	E3
9		ピット		8c	D3
10	14SB010	掘立柱建物　a～p			B～E・2～4
11		ピット		8c	C3
12		ピット	SB010n		E2
13		ピット			D2
14		ピット			D4
15	14SK015	土壙		10c	C7
16		ピット群			AB4
17		ピット群		平安	A6
18		ピット			B5
19		ピット			B5
20		ピット			C5
21		ピット			C5
22		ピット		平安	B6
23		ピット		8c？	B6
24		ピット			B6
25		欠番			
26		ピット			B6
27		ピット群			C6
28		ピット			A5
29		ピット			B5
暗灰色砂	灰色砂質土	包含層			
暗灰白色砂	灰色砂質土	包含層			
茶褐色土	灰褐色砂質土	包含層	平安時代の遺構が乗る		
砂礫層上層	砂礫層	包含層	弥生時代中期の遺物		
砂礫層下層	砂礫層	包含層	弥生時代中期の遺物		
表土					

表19. 尼14次調査　出土遺物一覧

S-1

土師器	坏a、甕

S-2

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-3

須恵器	甕×壺
土師器	甕、高坏、坏
瓦類	平瓦(縄目)

S-4

須恵器	壺4
土師器	坏、坏d？

S-5 黒色粘

須恵器	甕×壺
土師器	甕、坏a、椀c×坏c
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)、丸瓦(格子)
弥生土器	甕×壺

S-5 黒褐色粘

須恵器	甕
土師器	甕×鉢、坏a、椀c1、椀c2
黒色土器A	椀
緑釉陶器	坏c×皿c
瓦類	平瓦(縄目、斜格子、すりけし)、丸瓦(斜格子)

S-5 砂層

須恵器	甕×壺、坏×皿
土師器	甕、高坏、椀c2
越州窯系青磁	椀1
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)、丸瓦(斜格子)

S-5 暗灰色土

須恵器	坏
土師器	破片
瓦類	軒平瓦(均等唐草文)、平瓦(縄目、斜格子) 丸瓦(縄目、斜格子)

S-5 側方

瓦類	軒平瓦(老司系)、平瓦(縄目、格子、斜格子) 丸瓦(斜格子)

S-6

土師器	甕、坏×椀

S-8

須恵器	甕
土師器	甕、坏×皿

S-9

須恵器	破片
土師器	甕

S-10a

土師器	破片

S-10b

土師器	破片
弥生土器	破片

S-10l

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片

S-10m

土師器	破片

S-10n

須恵器	破片
土師器	破片
弥生土器	破片

S-10o

土師器	破片
弥生土器	甕(中期)

S-10p

須恵器	大甕
土師器	甕
弥生土器	甕

S-11

土師器	椀×坏

S-13

土師器	破片

S-14

土師器	破片

S-5・15 上層

須恵器	大甕、甕、壺
土師器	椀c×坏c、椀c、坏a、甕
黒色土器B	破片
瓦類	軒丸瓦(破片)、平瓦(縄目)
石製品	丸石

S-15 灰色粘土

須恵器	大甕、甕、坏
土師器	椀c×坏c、壺、甕
黒色土器A	椀c2
瓦類	軒丸瓦(模弁)、平瓦(縄目、斜格子)、丸瓦(斜格子) 用途不明製品(S-15側方出土の物と接合)
石製品	権状製品、枕(共に滑石製)

S-15 砂層

須恵器	甕
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)、丸瓦(斜格子)
石製品	砥石

S-15 側方

須恵器	大甕、壺c
土師器	椀c
瓦類	用途不明製品(S-15壁土出土の物と接合) 平瓦(縄目、斜格子)

S-16

土師器	甕
弥生土器	破片

S-17

須恵器	壺、甕
土師器	破片
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)

S-18

瓦類	平瓦(縄目)

S-19

須恵器	破片
土師器	甕、坏a、坏d?

S-20

瓦類	軒平瓦

S-21

須恵器	壺、坏

S-22

土師器	坏a、鉢、甕、壺4

S-23

須恵器	壺3
土師器	破片
	流塩窯
瓦類	平瓦(縄目)

S-24

土師器	破片
瓦類	平瓦(縄目、すりけし)

S-26

土師器	破片

S-27

須恵器	甕
土師器	高坏

S-28

土師器	破片

S-29

瓦類	平瓦(縄目)

Z

土師器	坏a
瓦類	平瓦(縄目、斜格子)
弥生土器	甕

表土

須恵器	大甕、甕、坏c、鉢、高坏、壺3、蓋
土師器	甕、小皿b、椀c、坏a
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀II
	壺I
白磁	坏I
	椀V-4
	皿 近世～
陶器	近世～
青花	国産 近世～
瓦類	軒丸瓦、平瓦(縄目、斜格子)、丸瓦(斜格子)
石製品	滑石破片
弥生土器	壺、器台
金属製品	鉄片
土製品	瓦玉

暗灰色砂質土

須恵器	甕、壺、壺3、坏c
土師器	坏a、椀c、坏×皿、甕、壺
越州窯系青磁	椀I
白磁	破片
青花	染付
瓦類	軒丸瓦、平瓦(縄目、斜格子)
弥生土器	壺、甕

表20. 尼14次調査 土器計測表

S-1

	器種	R番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
1	土師器 坏a?	R-001		9.6+	1.35+	(8.0)		×

S-5 黒色粘

	器種	R番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
1	土師器 椀c?	R-001	2	(13.8)	4.2+	—		

S-5 黒褐色粘

	器種	R番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
1	土師器 坏a	R-001	4	(10.6)	(2.1)	(7.3)	×	×
2	〃 〃	R-002	5	(11.8)	(2.45)	(8.1)	○	
3	〃 椀c	R-003	7	(12.2)	4.1+	—		
4	〃 〃	R-004	6	(12.6)	3.75	(7.15)	○	×

S-5 砂層

	器種	R番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
1	土師器 椀c	R-001	9	11.0+	2.9+	(7.4)	○	

S-15 埋土

	器種	R番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
1	黒色土器A 椀c	R-004	2	(14.9)	5.65	(7.5)		○

S-15 砂層層

	器種	R番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
1	黒色土器A 椀c	R-001	6	(15.2)	5.85	(8.8)		

S-15 裾方

	器種	R番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
1	土師器 椀?c	R-001	7	—	1.9+	(8.0)		○

表土

	器種	R番号	図版番号	口径	器高	底径	A	B
1	土師器 小皿b	R-001	2	(6.1)	(1.4)	(4.3)		×

2.川添遺跡　第1次調査

1.調査に至る経緯

太宰府市国分3丁目627-2他において、専用住宅建設に伴う埋蔵文化財取り扱いの有無について問い合わせが、平成8年9月に中島康秀氏よりなされた。開発対象地は筑前国分寺跡の西にあり、周辺の調査では国分寺跡17次および20次調査によって平安時代における生活痕跡が確認されていた。したがって、当該地において埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高く、建築内容によっては調査が必要となると判断された。建築に先立ち埋蔵文化財の有無および規模を確認する必要から、試掘調査を実施することで合意し、平成8年11月に試掘調査を実施した。その結果、現況標高から下0.5mに奈良時代から平安時代にかけての遺構が確認された。その後建築内容を文化財保護法57条に従い提出していただき、その結果、将来的に調査が不可能となる道路造成箇所のみ発掘調査を実施し、平成9年10月より調査を開始することで合意をみた。

発掘調査は、中島恒次郎が担当し、平成9年10月8日から同年10月31日の間実施した。調査面積は、調査を実施した区域の遺構の残存状況が極めて悪かったこともあり、60㎡を測る。

2.層位

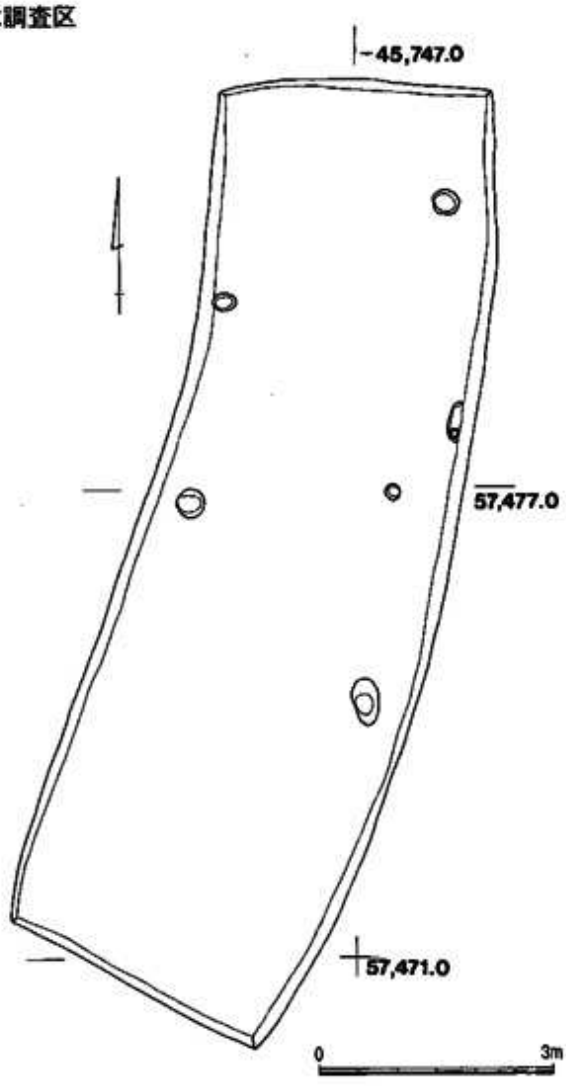
道路敷設箇所全面を調査範囲と設定し、重機にて表土を除去したが、道路敷設箇所の中間部分には遺構が展開してなかったため、遺構が検出できた箇所2ヶ所を設定し調査を行った。ここでは説明の便宜上、北側調査区と南側調査区と呼称する。

北側調査区は、現況で簡易道路として利用されていたため、表面にバラスが敷かれ、約0.45mのマサ土が盛り土されていた。このマサ土の下には、0.2mの暗灰色土および下位に0.2mの灰茶色土が堆積しており、その下に遺構が検出できた。したがって、現標高から下位に約0.85mのところに遺構を検出した。しかし、遺構の残存状況は低く、また検出できた遺構も浅いことから、後世の削平によって大半は欠失した可能性が高い。

南側調査区は、北調査区同様に簡易道路として利用さていたため、表面にバラスが敷かれ、約0.2mの厚さでマサ土が盛り土されていた。なお調査区北西側では、後世の掘削によって大きく遺構は欠失し、その部分では約1.20mものマサ土の盛り土がなされていた。これら盛り土の下に0.2mから0.5mの盛り土造成時の廃土と考えられる灰色土および黄色マサ土が堆積し、その下位に瓦を多量に包含する茶灰色の遺物包含層が検出できた。この遺物包含層下に黄茶色基盤土層を切り込むように各遺構が検出できた。

川1次

北調査区



南調査区

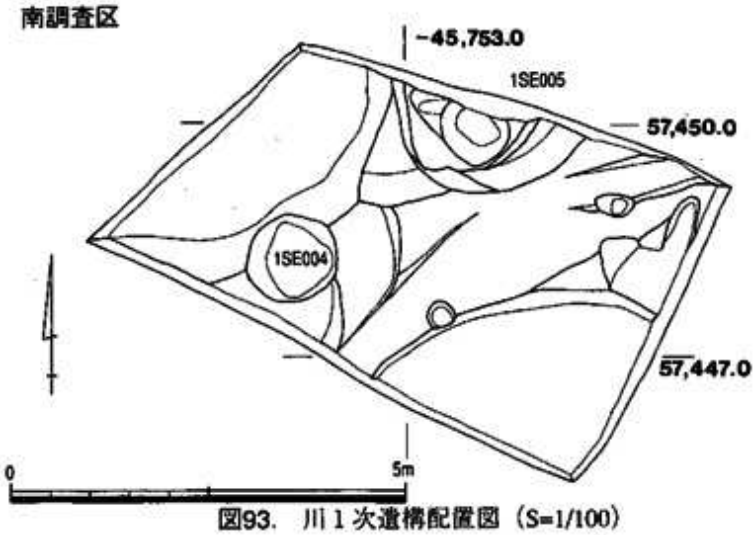


図93. 川1次遺構配置図（S=1/100）

3.遺構

主に南側調査区にて遺構の検出が顕著であり、北側調査区においては、小穴のみが検出できた。井戸などの遺構が残存していた南側調査区においても、後世の削平によるものか、遺構規模の深い遺構のみが検出でき、調査区東側、すなわち筑前国分寺側へ向かって遺構の残存状況は良好になる傾向がある。

1）井戸

1 SE004（図94）

南側の調査区にて検出された遺構で、後世の削平によって遺構形状の約半分は削られていた。遺構の平面形状は円形で、茶色土が堆積していた。遺構規模は、長径1.22m、短径1.10mを測り、残存する深さは、約0.87mを測る。調査の結果、井戸枠の痕跡は確認できず、また遺物も堆積土中から散在的に出土した。したがって、遺構の性格としては遺構規模から、素掘りの井戸と考えられるが、基盤層である風化した花崗岩に直接掘り込まれており、湧水層とみられる層が確認できないことから、水を溜めた土壙の可能性もある。

1 SE005（図95）

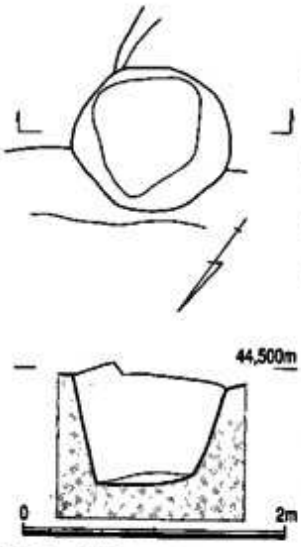


図94. 川1SE004
遺構実測図(S=1/60)

1SE004と同様に南側の調査区にて検出できた遺構で、調査区北側へ延びる状況で検出したため、調査区内では南半部のみしか調査できなかった。調査の結果、検出規模は、長径2.60mを測り、残存する深さは、残りの良い箇所で3.16m、後世の削平によって欠失した箇所からで2.70mをそれぞれ測る。最下部には曲げ物などの施設が設けられていたと考えられるが、径0.9mを測る円形のプランを検出したのみで、木枠などの具体的な痕跡は検出できなかった。なお検出標高から約1.7m下位から下は、裏込め土が崩壊しており、井戸枠自体の検出はできなかった。したがって井戸掘り形の形状はおよそ円形であると推定できるが、具体的な構造については不明確な点が多い。

井戸枠内と推定できる堆積土中には、煮沸具をはじめとした各種食器、瓦、焼けた木材が多量に包含されており、黒茶色の腐植土と砂質土の互層状態で堆積していた。20層から23層は、崩壊した裏込め土および井戸機能時の堆積層と考えられるが、7層から19層および25層については、堆積層の状況および出土した遺物の状況（図95）から、裏込め崩壊に伴う井戸機能廃絶後、火事場の後片付けに伴う廃棄土壙として転用された可能性が高い。したがって、廃棄土壙として転用された土壙内より出土した遺物群は、廃棄の共時性が看取できる一括資料に位置づけることは可能であるが、使用の共時性については不明確な資料群に位置づけることが可能となる。

2）その他の遺構

1SX001

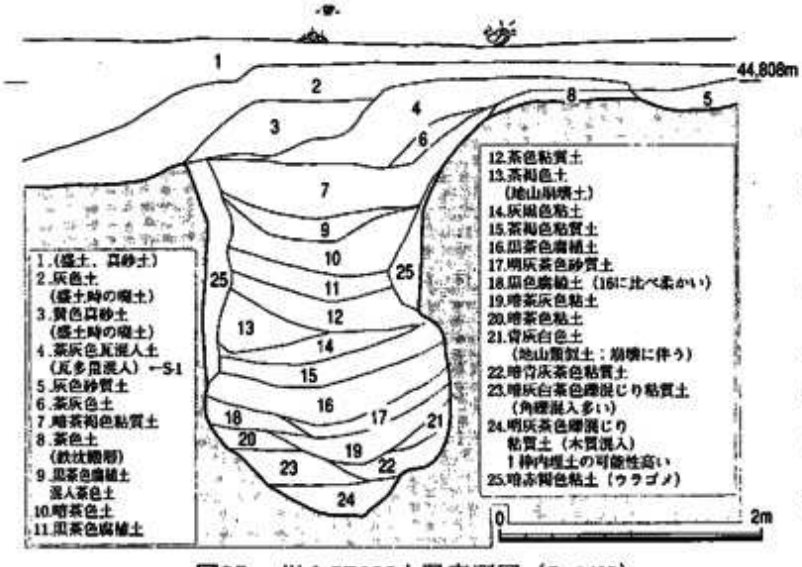


図95. 川1SE005土層実測図（S=1/60）

これも南側の調査区にて検出した遺構で、後世の削平が調査区北西側に広がるが、その削平線上に瓦を多量に集積した状況で検出した。遺物の出土状況は、包含層中の遺物を掻き集めたような状況であり、削平ないしは耕作に伴って出土した遺物を集積させたもので

はないかと考えられる。したがって、出土遺物から推定できる時代になされたものかどうかは定かではない。

4.遺物

井戸出土遺物

1 SE004 出土遺物 （図96）

土師器

丸底坏a （1）口径15.0cmに復原される。磨耗が著しいが体部外面に指頭圧痕が残っている。

丸底坏c （2） 口径14.6cm、器高4.1cmを測り、浅い坏部に高めの高台を付す。磨耗しているが、体部下位の屈曲部は押し出しと考えられる。

1 SE005 出土遺物 （図97）

土師器

椀c 1 （1） 口径13.0cm、器高4.2cm、高台径7.0cmに復原される。磨耗著しく器壁が薄くなっている。体部は外方にまっ直ぐに開く。

瓦類

軒平瓦 （2） 瓦当面は外区に珠文、内区に唐草文。平瓦の凸面には縄目の叩き痕が残る。

1 SE005 暗茶色土 出土遺物 （図98～100）

土師器

坏a （1～4） 口径11.4～12.2cm、器高3.1～3.4cmを測る。いずれも底部と体部の境に丸味がある。1は底部から体部にかけ外面に粘土の絞り痕があり、土器の回転方向は右回りであることが観察できる。底部はすべてヘラ切りされる。

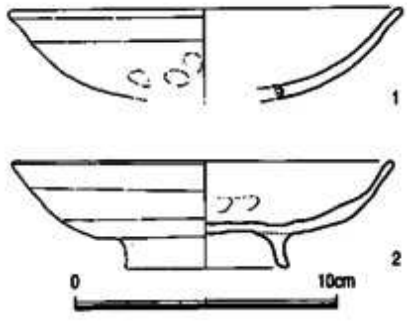


図96. 川1 SE004出土遺物実測図（S=1/3）

椀c1 （5・6） 5は口径13.6cm、器高4.8cm。6は口径16.0cmを測り、高台底部を欠いている。いずれも体部が直線的に開く。6は見込みが円形に灰色に焼けており、重ね焼きの痕と考えられる。

甕a （7～11・13・14） 口径18.6cm～30.5cm。7～9・13・14は同じタイプで、体部外面と口縁部内面をハケで調整し、やや立ち気味の口縁は僅かに肥厚、内面の体部との境の屈曲はシャープさを欠く。いずれも口縁部に幅1.2～1.5cmの粘土紐の痕跡が観察される。10は口縁は肥厚せず、磨耗のため調整の変換点が不明だが、体部との境も不明瞭で口縁付近で緩やかに外反させる。11も口縁部は肥厚しない。体部外面はハケで調整され、屈曲部に指頭痕が多く残っている。10・11も粘土紐の痕が観察できる。

甕b（12）　体部下位のみ残存、内面は磨耗するが外面は格子叩きを行っている。

須恵器

壺d（15）　肩部内面は指頭痕の上からナデ、外面は平行叩きを行う。頸部付近は粘土を継いだ痕が観察される。小さい耳を接合する双耳壺。

黒色土器

甕（16・17）　16は内面に細かい手持ちヘラミガキを施す。外面は工具を用いて横ナデしたような段が残っている。17は磨耗のため調整不明。いずれもA類で薄手に作られている。

越州窯系青磁

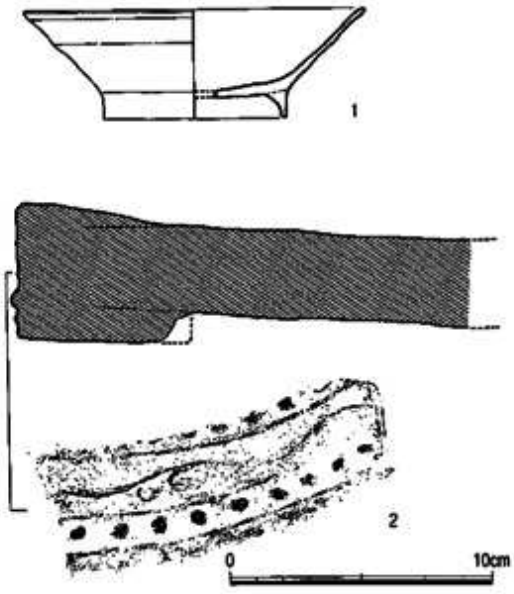


図97.　川1SE005出土遺物実測図（S=1/3）

椀（18・19）　18は口径18.9cm、器高6.2cm、底径8.3cmを測る。胎土は茶灰色～灰色を呈し、黒色粒を少量含む。やや黄茶色味を帯びた濁った緑色の釉を体部下位まで施し、釉下に化粧掛けしている。内外面に推定7個の大きめな目跡がつく。II-2b 類。19は高台径9.6cmを測り、キメの細かい灰色の胎土に黒色粒を少量含んでいる。淡い灰緑色の釉で残存部に目跡が3個つく。底部外面の目跡は磨耗のため不明。II-2 類。

灰釉陶器

壺（20）　高台径18.0cmに復原される。蛇の目風の大きな高台がつき、体部下位は回転ヘラ削りされる。底部内面は降灰による釉が厚めに残っている。大型の短頸壺等の底部と考えられる。

1 SE005黒茶色土 出土遺物（図101～104）

土師器

坏a（1～5）　口径11.8cm～12.6cm。器高2.5～3.5cm。底部と体部の境に丸味をもつ。底部はいずれもヘラ切り。1は全体的に黒色の炭化物が付着している。

椀c1（6）　口径14.2cm、器高5.6cm、高台径7.1cmを測る。体部は下位にやや丸味をもつが直線的に開いて、底部はヘラ切り後丁寧にナデている。口縁部の一部は内外面とも黒色に変色している。

甕a（7～11）　復原口径15.0cm～30.0cm。7～11まで外面と口縁部内面をハケで調整し、体部内面をヘラ削りしている。口縁部は僅かに肥厚、体部から口縁にかけて屈折も緩やかで、9以外は粘土紐の痕が観察される。いずれも外面、又は内外面に煤が付着している。SE005暗茶色土出土の甕a（10・11を除く）と同じタイプである。

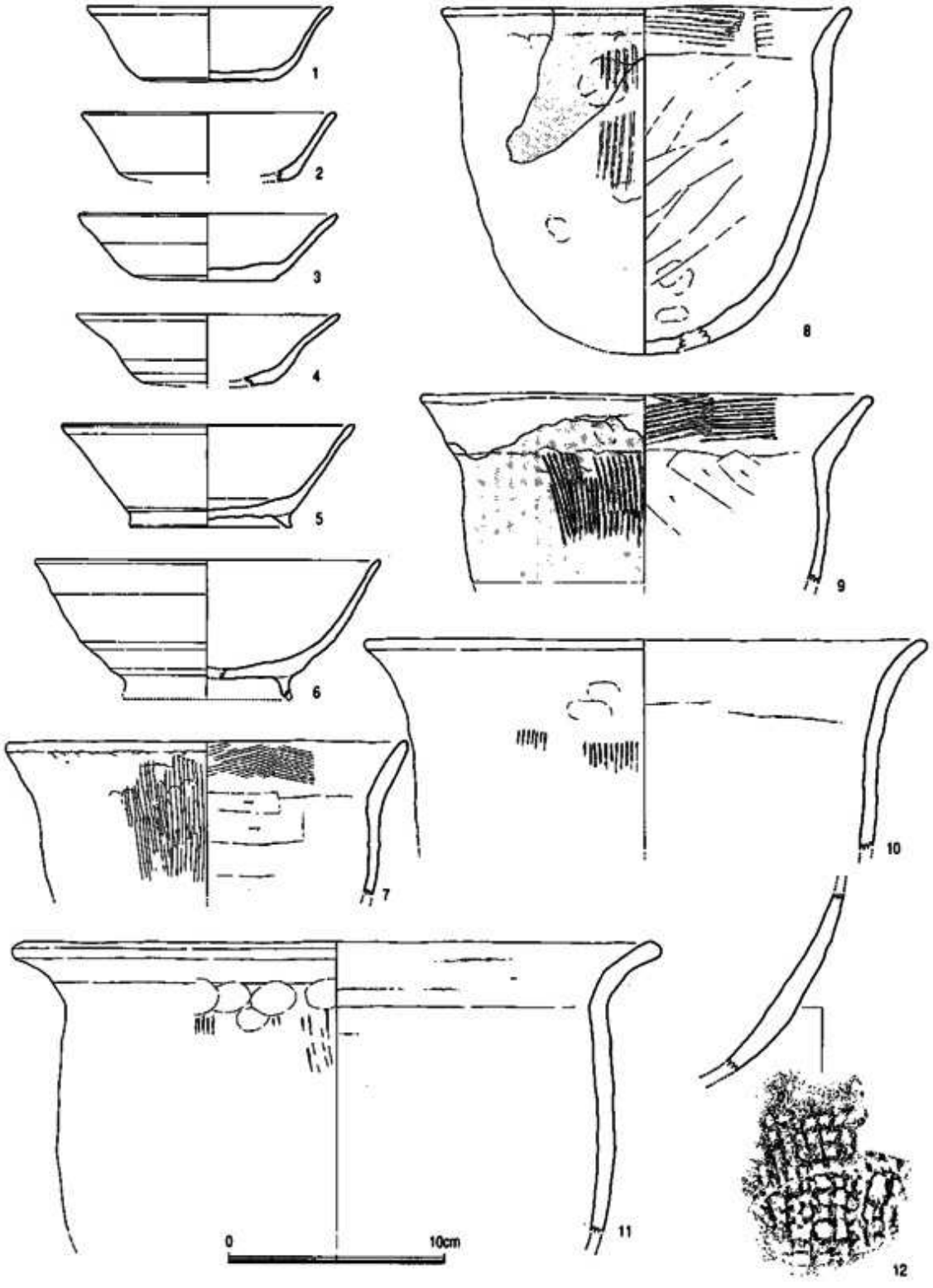


図98. 川1 SE005暗茶色土出土遺物実測図（1）（S=1/3）

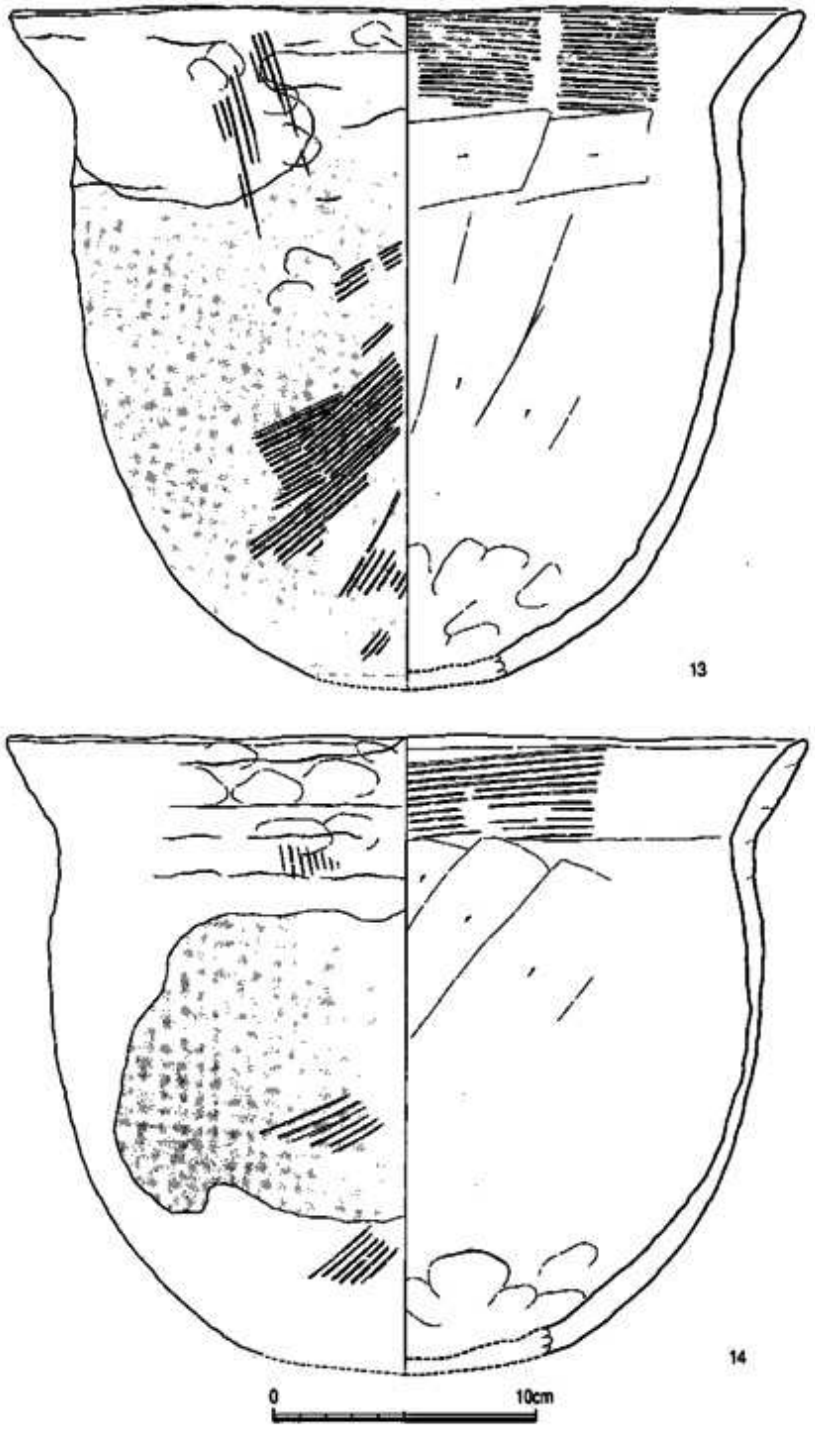


図99. 川1SE005暗茶色土出土遺物実測図（2）（S=1/3）

須恵器

椀c（12） 高台径7.4cmで口縁部を欠く。高めの高台がつき、底部はヘラ切り後ナデている。内外面に墨痕があり見込みが平滑なことから、硯に転用されていたのであろう。

黒色土器

椀（13）器壁が非常に薄く、内面は細かい手持ちのヘラ磨きを行う。外面はナデと指で調整し、やや凹凸している。口縁端部内面には沈線を巡らし段をつくっている。搬入品と考えられる。A類。

椀c（14～19）14～17は口径12.1cm～15.0cmに復原される。いずれも内面を磨いているが磨耗気味である。口縁は外方へ開くが体部には丸味がある。14・15・17の高台は口縁に対しやや大きめのものが貼付されている。17は見込みにコテあての痕跡がある。16は体部下位で腰が張り、径が小さめで幅広い高台がつく。18は内面を丁寧に磨いており、体部を丸く

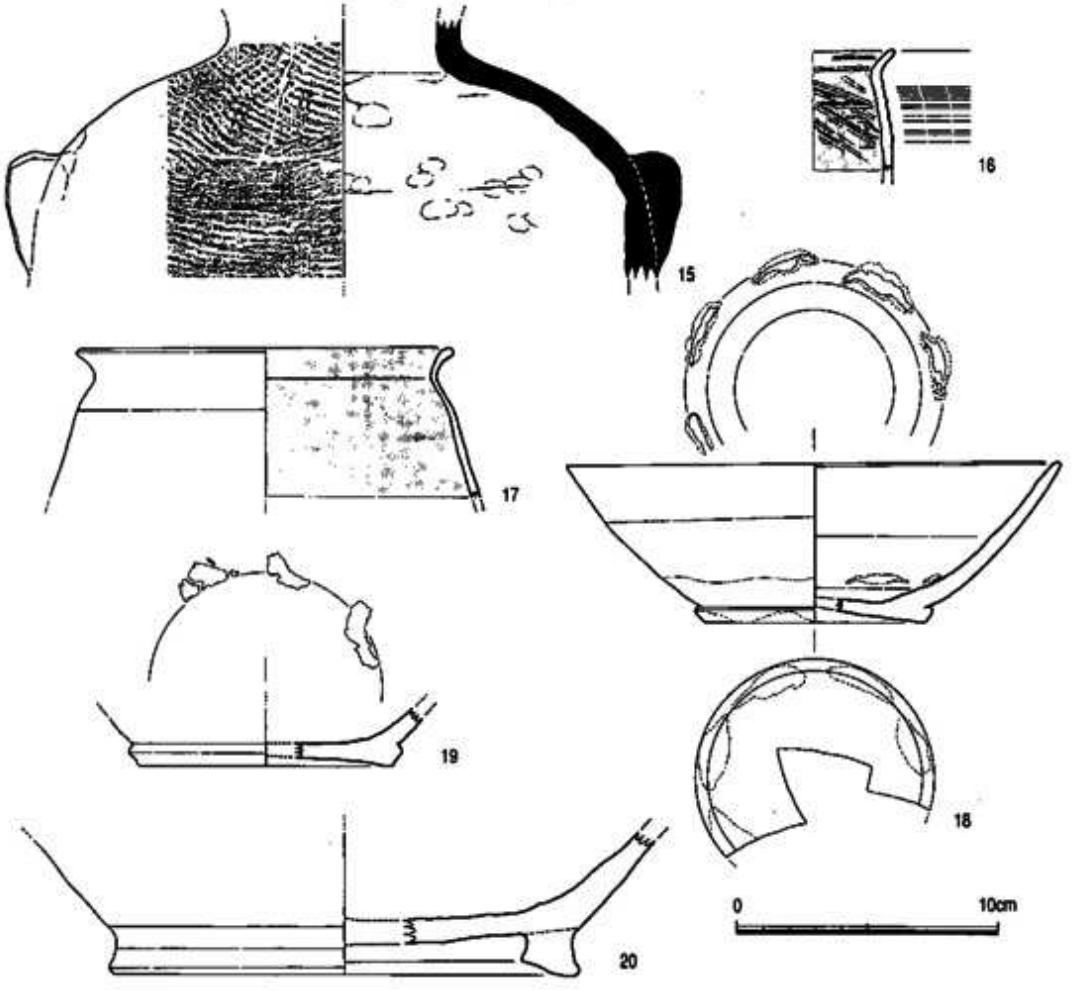


図100. 川1SE005暗茶色土出土遺物実測図（3）(S=1/3)

つくる。高台は高めで、金属器模倣の形態である。19は大ぶりの椀で、高台の接合が粗雑である。すべてA類。

甕（20） 推定口径18.0cm。内面は口縁部までヘラ磨きを行う。外面は横ナデで体部に指頭痕が残る。A類。

白磁

椀（21） 高台径6.2cm。底部を除き全面施釉される。胎土は乳白色を呈しやや粉っぽい。釉は僅かに空色をおびた乳白色で、光沢がある。高台の内側はキメの細かい砂が付着しざらざらしている。I類。

越州窯系青磁

椀（22～24） 22は口径15.0cmを測る。明灰色のきめ細かい胎土に明灰緑色の釉を施す。外面は体部中位までヘラ削りされる。I類。23は口径18.0cm、器高6.0cm、底径8.8cmを測る。

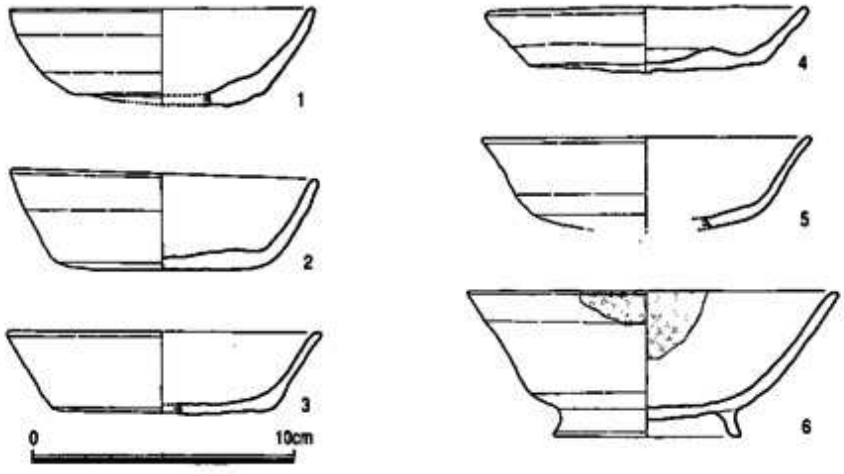


図101. 川1SE005黒茶色土出土遺物実測図（1）（S=1/3）

胎土は灰色を呈し、キメは細かいが黒色粒を含んでいる。外面の体部中位まで、化粧掛けの上から濁黄茶色の釉を施している。見込みと底部外面に推定 5～6個の目跡がつく。II-2b 類。24 は高台径6.2cm を測る。灰茶色の胎土に黒色粒を少量含み、釉は剥落しているが化粧土をかけている。高台は蛇の目高台に削りだしている。II-2a 類。

緑釉陶器

椀 (25)　口径18.8cm、器高6.6cm、高台径10.0cmを測る。胎土は灰色を呈しやや暗めの緑色の釉を施している。見込みに浅い沈線が巡り、口縁は外面から工具で押圧して輪花をつくる。口縁部内面には押圧による膨らみの両側に細い爪かヘラ先でつけたような条痕がある。口縁部の残存が少ないので輪花の数は不明。磨きも有無は不明。外面の底部から体部中位まで回転ヘラ削りを行っている。焼成は須恵質で見込みと高台底部にハリ痕があり、重ね焼きされている。高台形が断面四角形で産地は東濃もしくは近江かと考えられる。近江産とすれば初現期のものであろう。

瓦類

軒平瓦 (26)　鴻臚館系。凸面に縄目叩きが僅かに残る。凹面は顎部上面に布目痕が残っており瓦当面側は削っている。削りは最終調整で、瓦当面からはみ出した平瓦部分を一部削って調整したのであろう。

1 SE005黒色砂土 出土遺物 (図105～106)

土師器

坏a (1)　口縁部を欠損、推定底径 8.2cmでヘラ切りされる。坏a の底部に墨書があるが文字は不明。

甕b (2)　口径29.4cm に復原される。外面は口縁部下から体部下位まで、大きめのハケで調整し、体部下位は格子叩を施す。口縁部の形状はSE005 暗茶色土、黒茶色土出土のものと同じである。体部外面は全体に黒色炭化物が付着している。

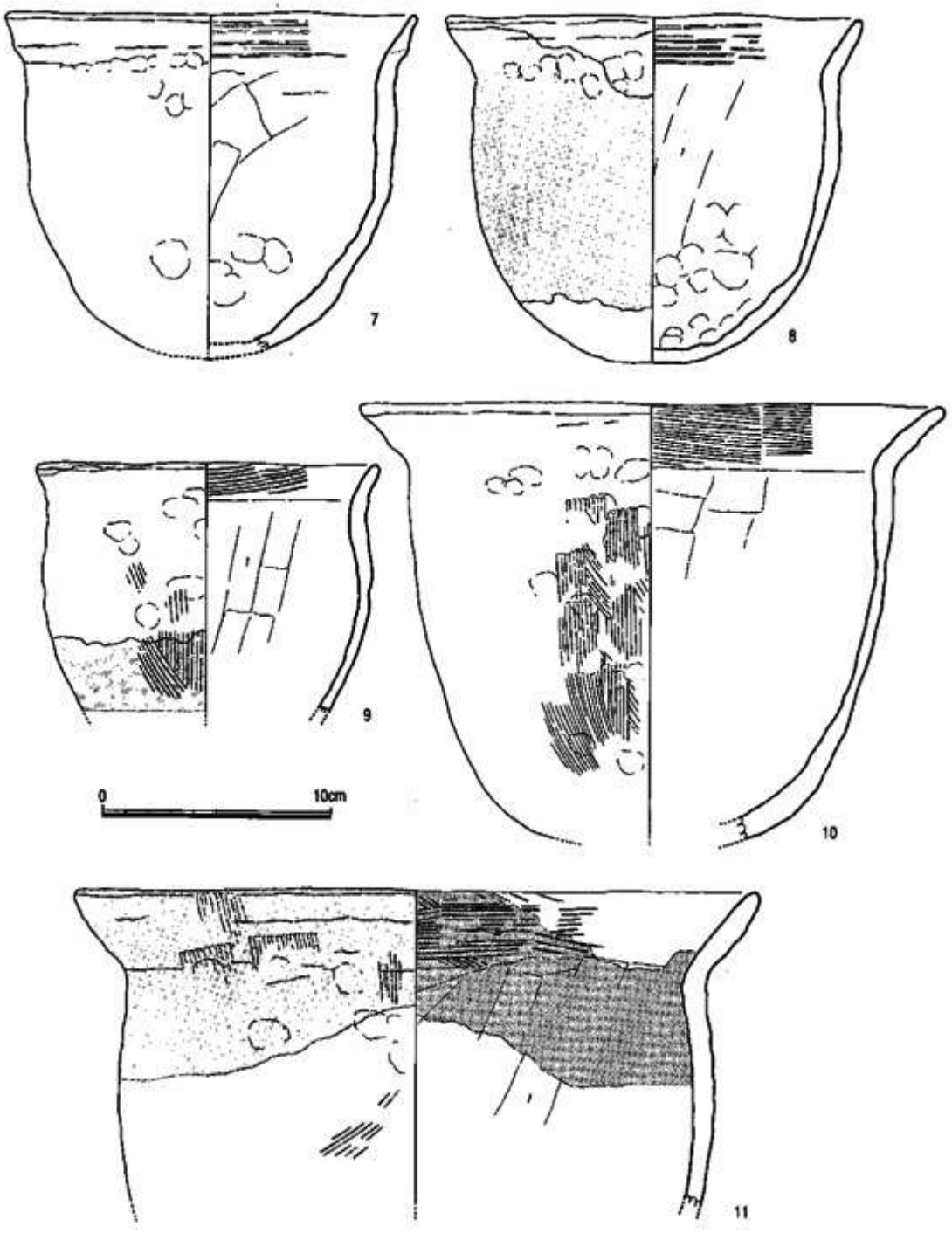


図102. 川1 SE005黒茶色土出土遺物実測図（2）（S=1/3）

須恵器

椀c (3)　推定口径12.0cm、器高5.3cm、高台径7.1cm。体部は回転ナデ、見込みは簡単にナデている。底部はヘラ切り。見込みは黒褐色、残存部の外面は底部から口縁まで殆ど黒色であ

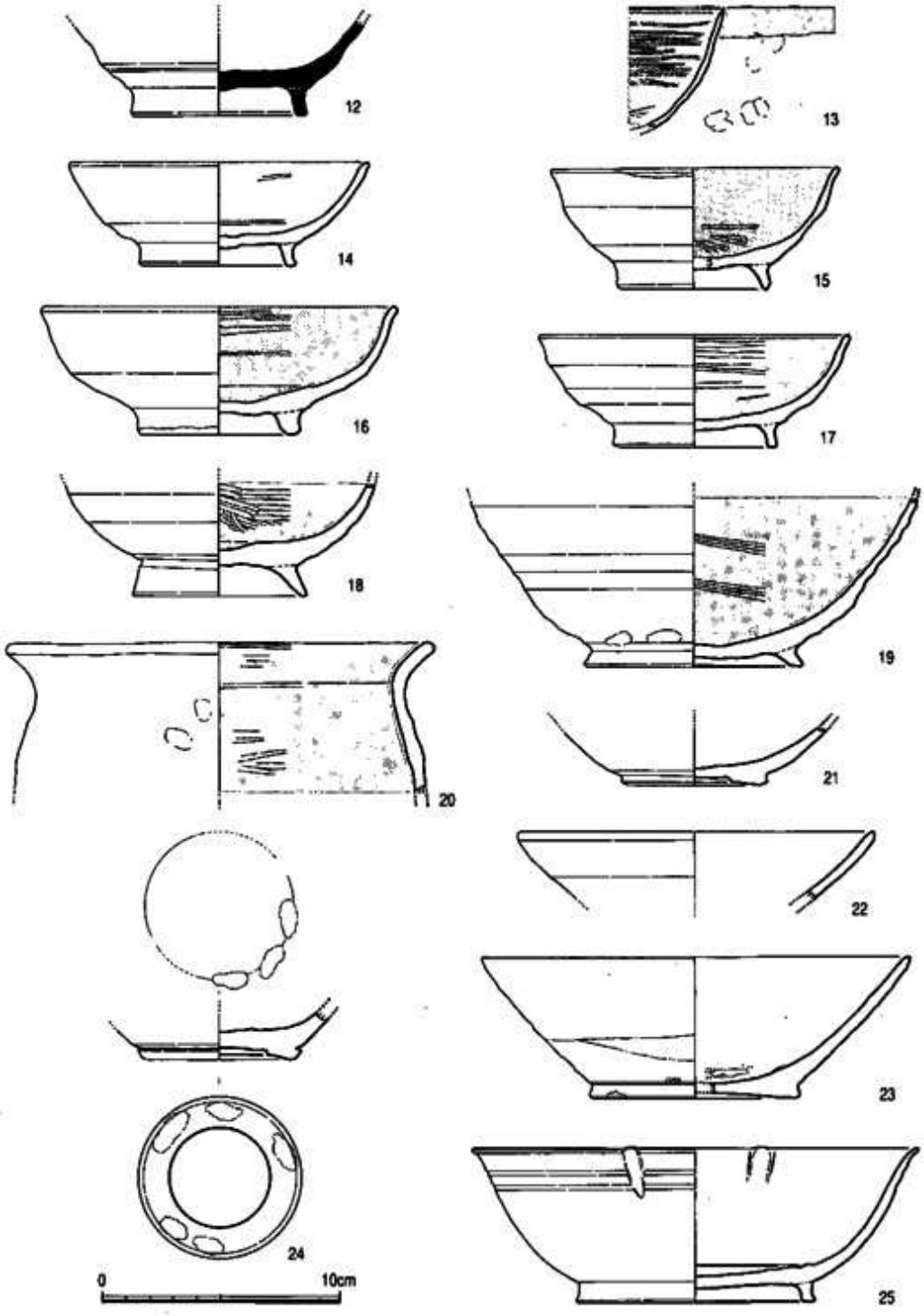


図103. 川１SE005黒茶色土出土遺物実測図（３）（S=1/3）

る。

黒色土器

椀c2 （4・5） それぞれ口径16.4cm・16.2cm、器高5.8cm・6.9cm、高台径8.2cm・7.8cmに復

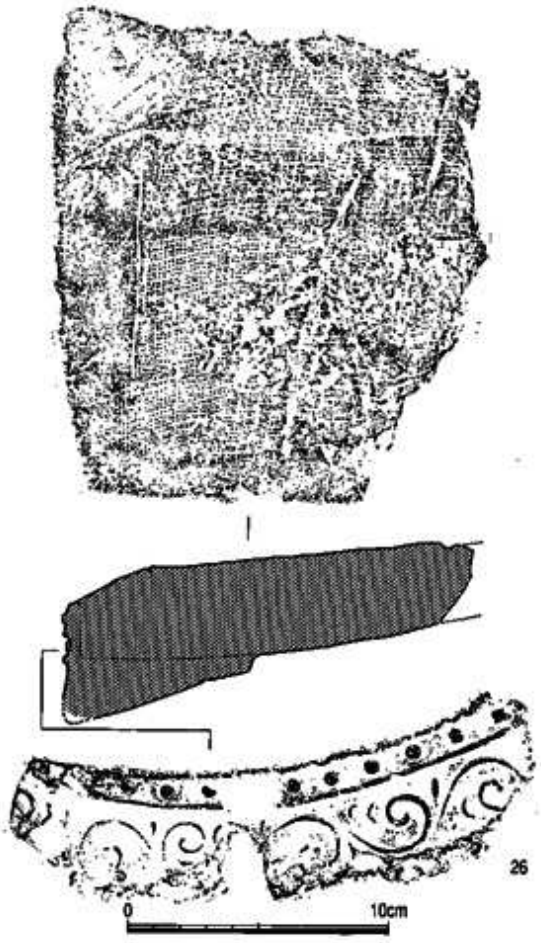


図104. 川1 SE005
黒茶色土出土瓦実測図（S=1/3）

原される。体部外面は回転ナデを行い、内面は丁寧にヘラ磨きしている。4の体部下位は押し出している。いずれも体部は丸味をもたせて外方に開いている。A類。

甕（6） 復原口径15.8cm。外面は回転ナデ、内面は口縁端部まで丁寧にヘラ磨きを施している。口縁部外面に黒色の炭化物が付着している。A類

瓦類

平瓦（7・8） 7は表、裏とも糸切り痕が観察される。裏側の縄目叩きの単位は3cm×13cm程で、残存部で縦方向に3分割して叩いている。凹面に模骨痕のような凹凸がなく、側縁は縦方向にヘラ削りし接地面に対して垂直方向であることから一枚作りの可能性がある。8の縄目は非常に粗く単位は4cm×9cmぐらいである。8も側縁を縦方向に削っており、表側に凹凸がないので一枚作りと考えられる。いずれも表側に焼けた痕がある。

1 SE005 茶灰色粘土出土遺物（図107）

土師器

坏a（1・2） 1の口径は推定で13.6cm。磨耗しているが底部から体部への立ち上がりは2に比して古い形態である。2は底径は7.7cmを測る。底部から体部の屈曲はシャープさが残っているが。底部の外側を指で押圧している。

椀c1（3） 口径13.5cm、器高5.5cm、高台径6.9cmを測る。見込みはナデで体部は回転ナデを行う。体部はやや丸味があるが外方に直線的に開いている。口縁部内外面と底部外面に茶褐色の焦げ目がある。

黒色土器

椀c1（4） 口径15.0cm、器高5.5cm、高台径8.4cmに復原される。体部外面の回転ナデ、内面のヘラ磨きはやや粗い。体部も断面四角形の高台も直に外方に開いている。A類

1 SE005 茶褐色土出土遺物（図107）

土師器

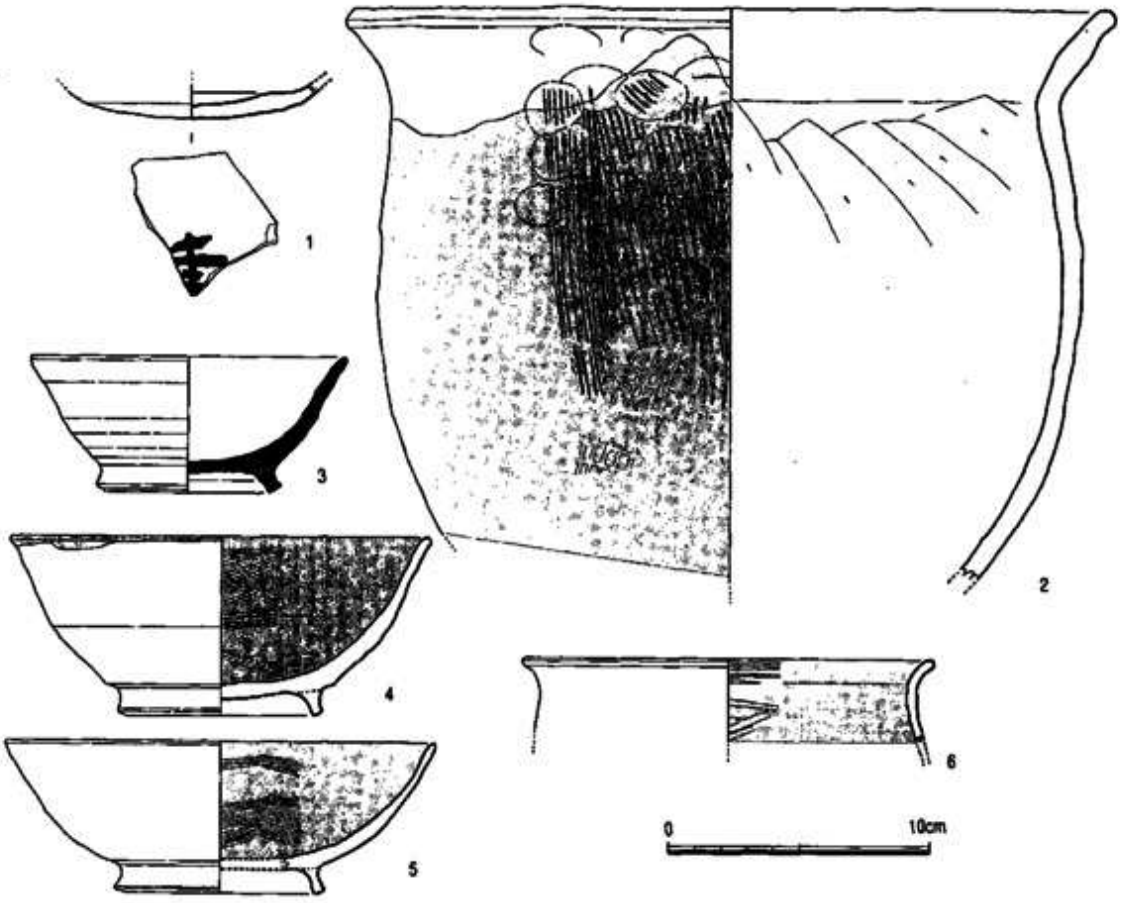


図105. 川1SE005黒色砂土出土遺物実測図（S=1/3）

坏a（5・6） 口径12.0cm・12.2cm、器高3.5cm・3.7cmに復原される。5は底部から体部への立ち上がりにシャープさを残している。

瓦類

平瓦（7） 両面に糸切り痕が観察される。縄目は4×15cmぐらいの単位である。SE005黒色砂土出土の瓦と同様に、側縁が縦方向にヘラ削りされ、接地面に対し垂直方向であること、凸面に凹凸がないこと等で一枚作りと考えられる。瓦の表面には半分ほど黒色に焦げている。

その他の遺構出土遺物

1 SX001 出土遺物（図108）

瓦類

軒平瓦（1） 大きめの唐草文を施している。焼成は良好で焼き締まっている。

1 SX001 茶色土出土遺物（図108）

土師器

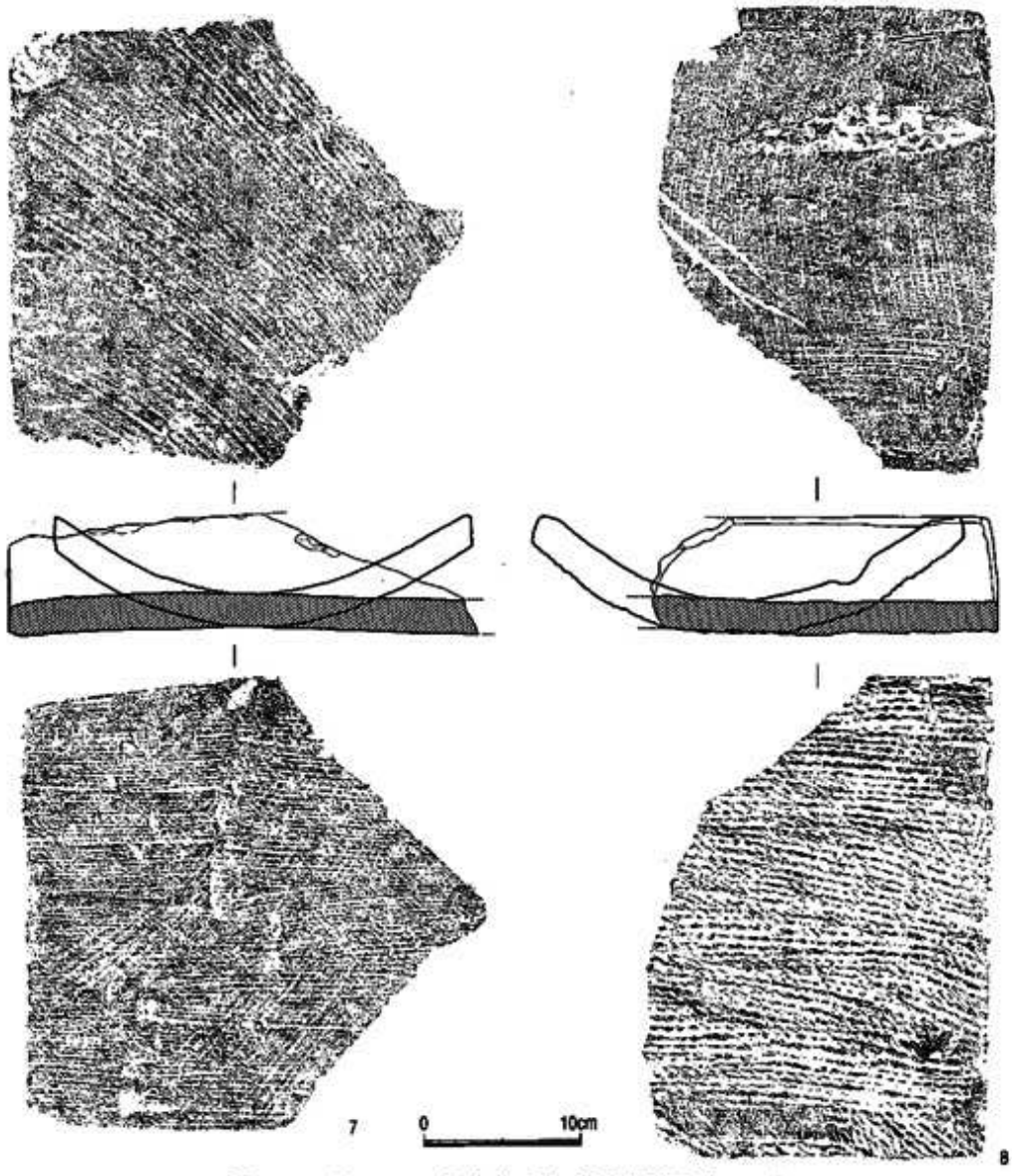


図106. 川1 SE005黒色砂土出土瓦実測図（S=1/5）

甕a （2） 口径24.0cmに復原される。外面は口縁部下位からハケで調整され、屈曲部には指頭痕が観察される。内面胴部はヘラ削りされるが口縁部への屈曲は緩やかで、明瞭な稜はつかない。

黒色土器

椀c （3） 推定口径14.8cm、器高4.8cm、高台径8.0cm。内外面とも風化が著しいので調整不明。体部はやや直線的に外方に開いて、底部には丸味がある。A類。

1 SX003 出土遺物 （図108）

瓦類

軒平瓦 （4） 焼成不良で瓦当面は磨耗しているが、細い唐草文が僅かに残っている。

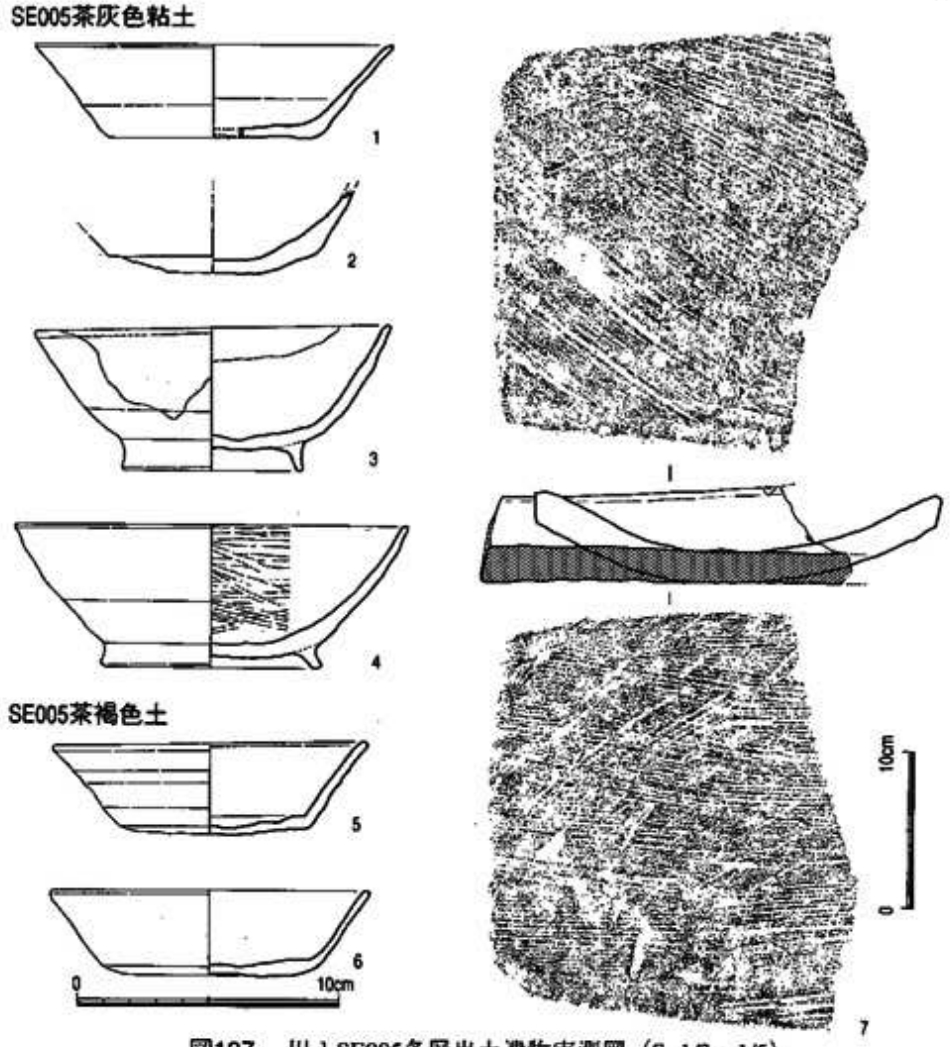


図107. 川1SE005各層出土遺物実測図（S=1/3・1/5）

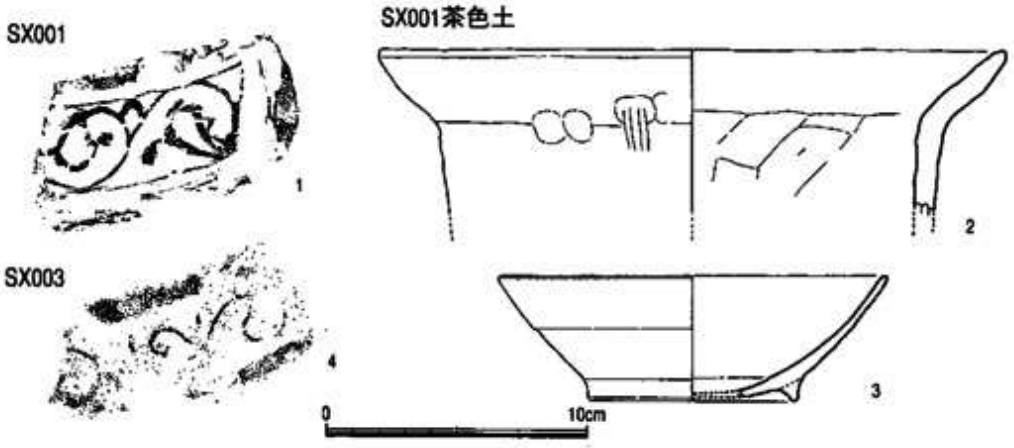


図108. 川1SX001・SX003出土遺物実測図（S=1/3）

川1次

土層出土遺物

暗茶色土出土遺物（図109）

石製品

砥石 (1)　現存5.6cm×3.8cm×2.0cm。三面使用されている。石材は砂岩。茶褐色の煤が付着する。

(森田レイ子)

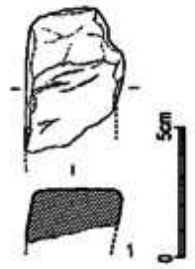


図109. 川1暗茶色土出土遺物実測図 (S=1/3)

5.小結

調査の結果、北側調査区においては、顕著な遺構は検出できなかった。また南側調査区についても、後世の削平によって遺構規模の深い遺構のみを検出したに留まり、調査範囲が狭小であったことも手伝って具体的な生活空間を考える資料としては、やや困難な状況であった。しかし、今回調査を行った区域の中で南側調査区として設定した調査区の南東側では、試掘調査の結果、生活空間として利用されていたことを物語る遺構が多く検出されており、今回調査によって検出した井戸を含めて、遺跡の残存状況は国分寺側において顕著となることが分かった。なお試掘調査後、地権者との合意に基づき遺跡保存措置がとられたため、遺構残存率の高い南東側についての詳細なことは将来に期することとなった。

南側調査区にて検出した井戸1 SE005から出土した遺物から、今次調査区の近隣において何らかの火事場処理がなされた可能性が高いことが推察でき、平安時代前期における食器構成を考える上で貴重な資料を得ることができた。　(中島恒次郎)

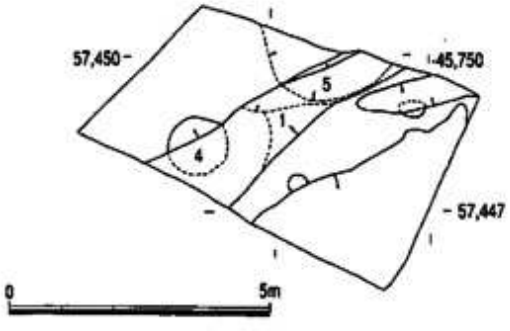


図110. 川1次遺構略測図 (S=1/150)

表20. 川1次調査　遺構番号一覧

S-番号	遺構番号	種　別				地区
1	1SX001	溝	暗茶色土	礫、瓦多数混入		
2		ピット	暗茶色土		古代	
3	1SX003	撹乱				
4	1SE004	井戸	黒茶色土	S-4→S-1	平安中期	
5	1SE005	井戸	S-5→S-1		平安前期末	

表21. 川1次調査　土器計測表

S-1 茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒A・椀c1	1	001	3	14.8	4.8	8.0	—	—

S-4

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・丸底坏a	1	002	1	15.0	3.5+		—	—
土・丸底坏c	1	001	2	14.6	4.1	6.1	—	—

S-5

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c1	1	001	1	13.0	4.2	7.0	—	—

S-5 茶褐色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a(ヘラ)	1	002	5	12.0	3.5	7.2	○	○
〃	2	001	6	12.2	3.7	8.2	○	—

S-5 茶灰色粘土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a(ヘラ)	1	001	1	13.6	3.6	7.8	—	—
〃	2	004	2	—	3.1+	7.7	○	○
土・椀c1	1	002	3	13.5	5.5	6.9	○	○
黒A・椀c1	1	003	4	15.0	5.5	8.4	—	○

S-5 黒茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a(ヘラ)	1	009	1	11.6	3.6+	7.4	—	—
〃	2	005	2	11.8	3.7	8.0	○	○
〃	3	007	3	12.0	3.1	8.5	—	—
〃	4	020	4	12.4	2.5	9.0	—	—
〃	5	006		12.4	3.5	7.1	○	○
〃	6	013	5	12.6	3.5+	8.6	—	—
土・椀c1	1	014	6	14.2	5.6	7.1	○	—
須・椀c1	1	011	12	—	3.5+	7.4	○	—
黒A・椀c2	1	017	14	12.6	4.6	6.5	—	○
	2	015	15	12.1	5.1	6.4	—	—
	3	018	16	15.0	5.4	6.8	—	—
	4	016	17	13.0	4.7	6.8	—	○
	5	024	18	—	4.8+	7.3	—	—
	6	010	19	—	7.1+	9.0	○	—

S-5 黒色砂土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒・椀c	1	001	3	12.0	5.25	6.2	○	—
黒A・椀c2	1	005	4	16.0	5.4	7.2	—	—
	2	002	5	16.4	5.8	6.2	—	—

S-5 暗茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a(ヘラ)	1	004	1	11.4	3.4	6.5	—	—
土・坏a(不明)	2	006	2	11.8	3.1+	8.3	—	—
土・坏a(ヘラ)	3	003	3	12.0	3.1	6.8	○	—
〃	4	005	4	12.2	3.3+	6.0	—	—
土・椀c1	1	007	5	13.6	4.8	7.5	—	—
	2	009	6	16.0	6.2+		—	—

表22. 川1次調査　出土遺物一覧

S-1

須恵器	甕、坏c、壺d、甕a
土師器	坏a×皿a、椀c、高坏、器台
黒色土器A	椀c2
越州窯系青磁	椀；I(2)
国産陶器	小皿?(近世以降)(1)
肥前系陶磁器	染付；椀(1)、白磁；折縁皿(1)
石製品	滑石破片
瓦類	平瓦(格子-小、大、縄目)、丸瓦(格子-小、大、縄目) 軒平瓦、軒丸瓦

S-1 茶色土

須恵器	甕
土師器	甕a、大椀c
黒色土器A	椀c1
瓦類	平瓦(格子-小、大、縄目)、丸瓦(格子)

S-2

土師器	鉄滓具
瓦類	平瓦(格子-大)

S-3

瓦類	平瓦(格子-小、縄目)、丸瓦(格子-大)、軒平瓦

S-4

須恵器	甕
土師器	小皿a、椀c2、丸底坏a、丸底坏c
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(格子-小、大、縄目)、丸瓦(格子-大、小)、無文磚

S-5

土師器	甕a、甕b、椀c1
瓦類	平瓦(格子-小、縄目)、丸瓦(格子-小、縄目)、軒平瓦

S-5 暗茶色土

須恵器	壺d、甕、坏c
土師器	甕a、甕b、鉢c1、坏a
黒色土器A	甕、椀c1
越州窯系青磁	椀；II-2(1)、II-2b(1)、II(1)
	皿；I(1)
灰釉陶器	鉢?
白磁	椀；I(2)、破片(1)
瓦類	平瓦(格子-小、縄目-粗)、丸瓦(格子-小)、破片(縄目)

S-5 黒茶色土

須恵器	甕、坏c、壺f×d、椀c1
土師器	甕a、小甕、甕b、椀c2、坏a(ヘラ、イト-撒入) 椀c1、大椀c
黒色土器A	椀c2、鉢(撒入)、甕
越州窯系青磁	椀；I(1)、II-2b(2)、II-2a(1)
	その他；壺×水注(1)
緑釉陶器	椀[近江×東海](1)
白磁	椀；I(1)
瓦類	丸瓦(格子-小、縄目)、平瓦(縄目-細、粗、格子-小) 軒平瓦

S-5 黒色砂土

須恵器	坏c、椀c
土師器	甕a、坏a(墨書)
黒色土器A	甕、椀c2
瓦類	丸瓦(格子-小)、平瓦(縄目-粗、粗、格子-小)、磚

S-5 茶灰色粘土

須恵器	甕
土師器	椀c1、坏a、大椀c
黒色土器A	椀c1
瓦類	平瓦(格子-小、縄目)、丸瓦、軒平瓦

S-5 茶褐色土

土師器	坏a、甕a
瓦類	平瓦(格子-小、縄目)、丸瓦、磚

暗茶色土

須恵器	鉢、甕×壺、坏c
土師器	椀c1×2
黒色土器A	椀c1×2
越州窯系青磁	椀；I(1)
白磁	椀；V-1×VIII-2(1)、破片(1)
石製品	砥石
瓦類	丸瓦(格子-小)、平瓦(格子-小、大、縄目)

３.辻遺跡　第２次調査

１.調査に至る経緯

太宰府市国分４丁目670-5（地権者：久保勝正氏）において、専用住宅改築に伴う埋蔵文化財取り扱いの有無について問い合わせが、平成９年８月12日に（株）積水ハウスよりなされた。開発対象地は筑前国分寺跡の東北に位置し、平成９年度に調査を実施し、国分寺東外郭遺構を検出した筑前国分寺跡第23次調査地の東に隣接している。この筑前国分寺跡第23次調査によって東外郭線をほぼ確定したことで、今次調査から国分寺周縁部の遺跡という理解に基づき、遺跡名を辻遺跡とした。しかし、国分寺周縁部の状況確認と23次調査によって確認した外郭施設の確証を得る目的で、発掘調査必要との判断から協議を進めたところ、平成９年10月中旬から調査に着手することで合意を得た。調査期間は平成９年10月27日から同年11月28日までに実施

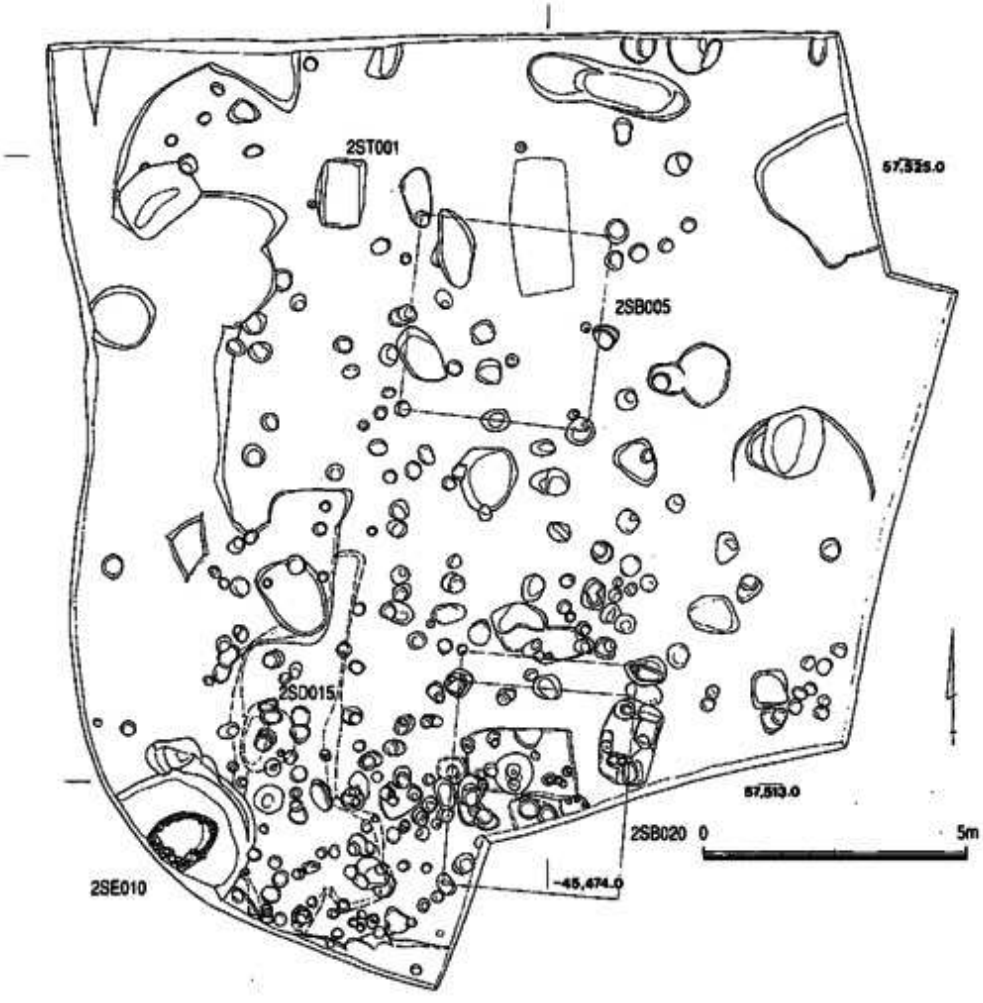


図111.　辻２次遺構配置図（S=1/150）

辻２次

した。開発対象地の面積は317.97㎡、調査面積は225㎡を測る。発掘調査は中島恒次郎が行った。

2.層位

現況で宅地として活用されていたため、現地表面から約0.4m～0.6mについては宅地造成に伴う盛り土がなされており、その下約0.2m程が遺物を包含する茶黒色土が堆積していた。この遺物包含層を除去すると調査区南西部分にのみ茶褐色土が形成されており、また他の部分には礫を多く混入する黄茶色土が堆積しており、これらの土層を切るようにI面遺構が形成されている。また調査区南西部に堆積している茶褐色土を除去すると、下位にII面遺構を検出できたが、このII面遺構は後述するが調査区南西部にのみ検出しただけで、調査区全体にわたって同時期の遺構が展開していたわけではなかった。

3.遺構

検出できた遺構は、調査区南西部から北東へ向かって標高が高くなっており、標高が高くなるにつれて遺構密度が低くなっている。このことから、後世の削平によって遺構の残存状況が悪くなっているものと推定できる。検出した遺構は、調査区南西部に集中しており多数の小穴を検出した。これら小穴の中に掘立柱建物を想定できるものを１棟検出している。また北半部においても１棟検出している。他に井戸・墓・溝などを検出した。

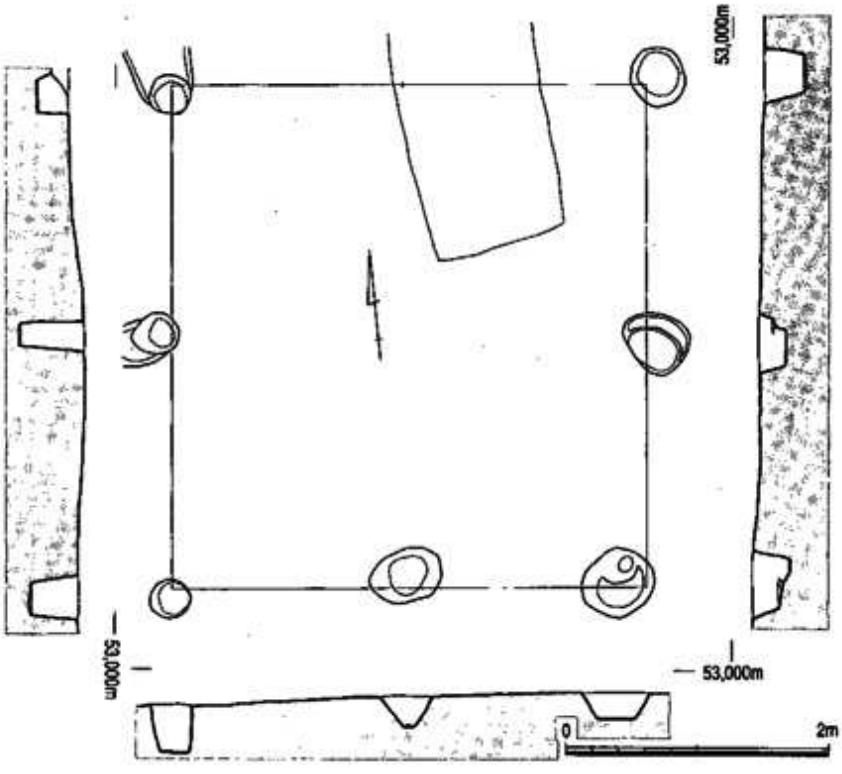


図112.　辻２SB005遺構実測図（S=1/60）

１）掘立柱建物

２SB005（図112）

調査区北半部において検出した建物跡で、後世の攪乱によって北側中央の柱穴が欠失しているものの、他の柱穴は全て残存していた。ほぼ正方形の建物形状を想定でき、柱間

の平均は約1.8mを測る。建物の建造方向は、N-5°37′-Eを測り、後述する2SB020とほぼ同一方向に建てられている。

2SB020（図113）

調査区南東隅にて検出した建物で、全体の規模に関しては、残念ながら不明確である。規模の判明する点からみると、平均の柱間はやはり約1.8mを測り、建造方向はN-5°9′34″-Eを測る。北面に庇ではないかと考えられる小穴を検出している。

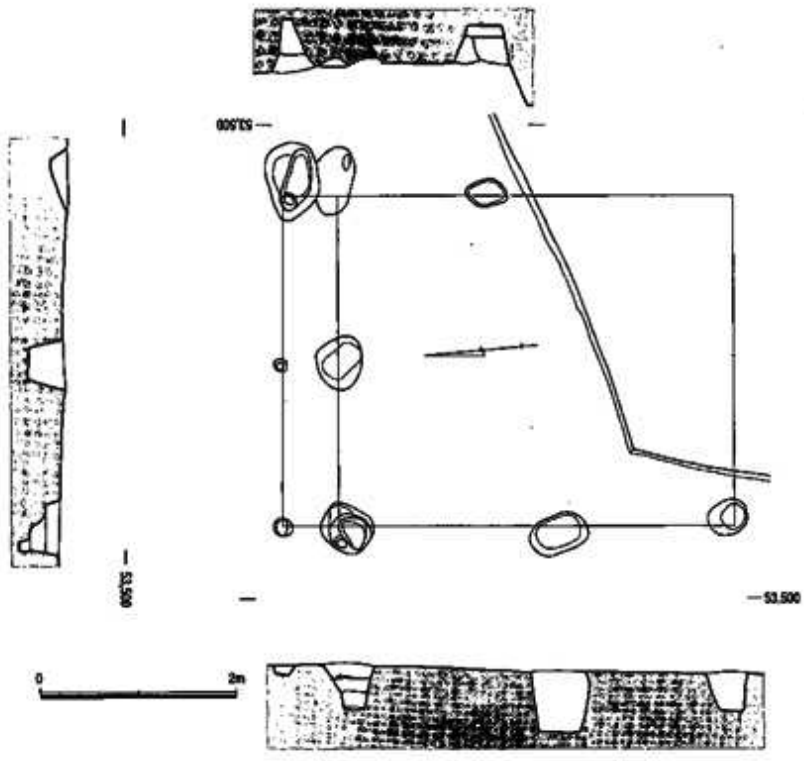


図113. 辻2SB020遺構実測図（S=1/60）

2）井戸

2SE010（図114）

調査区南西部に検出した井戸で、約半分を調査区外へ延ばす状況で検出した。したがって、全形についての確証は得られていないが、調査区内での状況ではほぼ円形を呈している。掘り形の長径約2.8mを測り、掘り形内に径約1mの井戸枠を検出した。井戸枠は、約0.2mないしは0.1mの大きさを有する亜円礫を積み上げたもので、枠内には同一大の礫が投げ込まれた状態で埋められていた。現地表面から約3m程を掘り下げたが、調査区壁の崩落の危険性があったため、これ以上の調査を断念した。したがって、井戸最下部の構造については不明である。この井戸の

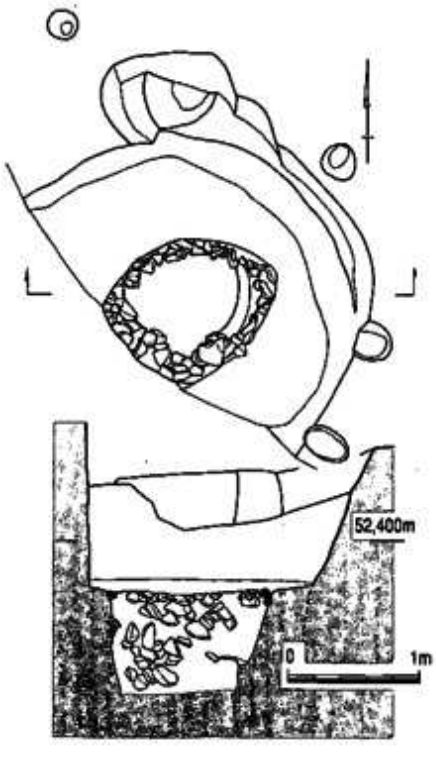


図114. 辻2SE010遺構実測図（S=1/60）

辻２次

検出形状は井戸北側が突出する形状を呈しており、精査を試みたがこの突出部と井戸が想定できる円形形状との部分に切り合いを示す土層境界を見い出すことができなかった。そのまま掘り下げたところ、井戸内部へ向かって階段状に下がっており、この階段最下部から井戸内部の堆積土が異なったことから、井戸に付帯する階段であった可能性が高い。したがって、井戸使用時にはII面検出標高より下がった位置に井戸汲み上げ面があったことになる。この井戸への転落を防止するための防護施設としての杭の有無については、この遺構周辺部における小穴の検出密度が極めて高いことから、特定することは困難だが防護施設の存在を否定するものではない。井戸内の堆積土は、階段下部までが黒茶色土が堆積しており、その下位から礫の積み上げによる井戸枠が検出でき、井戸枠内には暗茶色土に包含されつつ先述した大きさの礫が投げ込まれていた。井戸裏込め土は黄色土のブロックを多く混入する茶色土によって構成されており、この土層出土遺物は便宜的に茶色土にて取り上げている。

３）墓

1ST001（図115）

調査区西北部分にて検出した遺構で、長軸長1.42m、短軸長0.91mを測る。残存する深さは、遺構検出標高から0.4mから0.15mを測る。遺構検出標高が調査区北西から南東へ向けて高くなっていることから、少なくとも残存状況が良い南東部分の約0.4m以上は深さがあったものと推定できる。遺構の方向は長軸方向で、N6°55′24″Eを測り、周辺にて検出されている同時期と考えられる遺構群の建造方向に一致している。遺構内には灰茶色土がほぼ単一層として堆積しており、遺構北西部に土師器杯aが１点・小皿aが４点出土し、転落したような状況が看取できる。おそらく棺上に置かれていたものと考えられる。

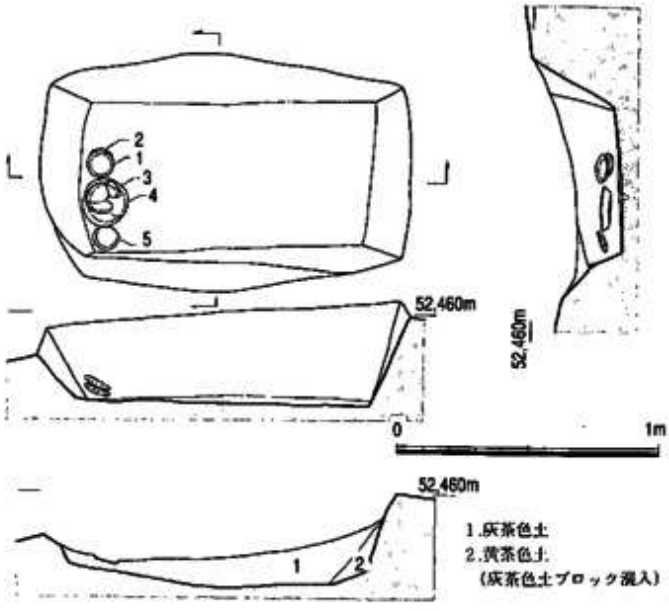


図115. 辻２ST001遺構実測図（S=1/30）

４）溝

1SD015（図116）

調査区南西部に堆積している茶褐色土を除去すると、下位に幅約1.4m、残存長約7.4mを測り、残存する深さは約0.35mを測る。溝の方向は、N2°39′47″Eを測り、国分寺外郭線で計測さ

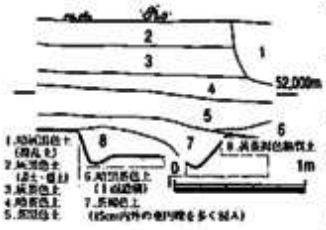


図116. 辻２SD015
土層実測図
(S=1/60)

れた振れとほぼ一致している。溝内には黄茶褐色粘質土が堆積しており、堆積土中から散在するかたちで瓦などが出土している。この遺物の出土状況は、国分寺外郭施設である溝に堆積していた遺物の出土状況とは異なっているが、出土した遺物から埋没年代はほぼ一致しており、筑前国分寺の講堂を除いた諸施設の建造方向に規制された溝であると考えられる。　（中島恒次郎）

4.遺物

墓出土遺物

２ST001出土遺物（図117）

土師器

小皿a（1～4）　口径8.5cm～9.9cm。器高1.0cm～1.3cm。底部はいずれも回転糸切りで、焼成も良好である。

坏a（5）　口径15.0cm、器高2.7cm、底径11.1cmを測り、底部は糸切りである。

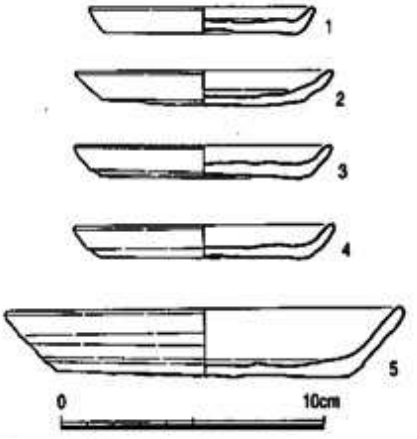


図117. 辻２ST001
出土遺物実測図（S=1/3）

井戸出土遺物

２SE010出土遺物（図118）

須恵器

鉢（1・2）　1は口縁部を丸く肥厚させ玉縁状につくる。口縁部は黒灰色を呈し、端部外面に重ね焼き時の粘土の付着が見られる。焼成は良好で須恵質である。篠窯系。2は胎土は暗灰色を呈し、白色砂粒を多めに含んでいる。焼成良好。片口鉢と考えられる。東播系。

白磁

椀（3・4）　推定高台径7.2cm。明灰色の緻密な胎土に淡い空色を帯びた灰白色の釉を施す。体部外面は回転ヘラ削りし、見込みは輪状に釉を掻き取っている。VIII 類。4は乳白色の胎土に淡く空色味をおびた光沢のある釉を施して、口縁部は釉を掻きとる。IX類。

皿（5）　高台径4.6cm。体部外面を回転ヘラ削りし、見込みの釉を輪状に掻き取っている。見込みの釉の上に白粘土が付着している。III-1 類。

龍泉窯系青磁

椀（6）　素地は明灰色を呈しキメは細かい。やや黄色味をおびた灰緑色の不透明釉を厚めに施す。I 類。

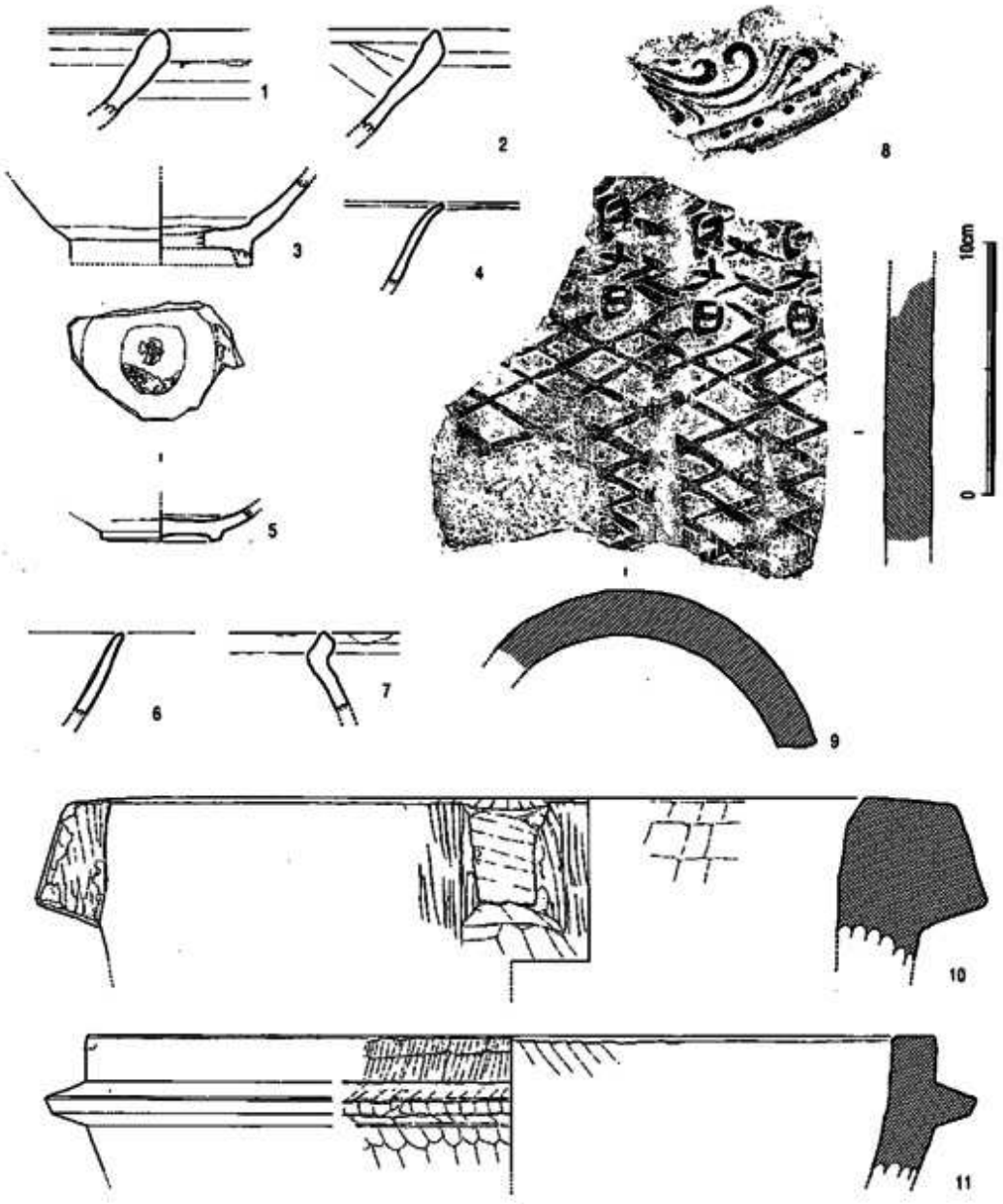


図118. 辻２SE010出土遺物実測図（１）（S=1/3）

中国陶器

壺類 (7)　素地は橙灰色から灰色を呈しキメ細かく、白色砂粒を少量含んでいる。釉は内面は黄灰色、外面は緑灰色を呈し不透明である。口縁端部の内外面に目跡がつく。焼成はやや軟質である。

瓦類

軒平瓦 (8)　瓦当面の一部が剥離したもの。下外区に珠文、内区に偏向唐草文をもつ。

丸瓦 (9)　大きめの斜格子に「……月七日」の文字の左字が陽刻されている。おそらく

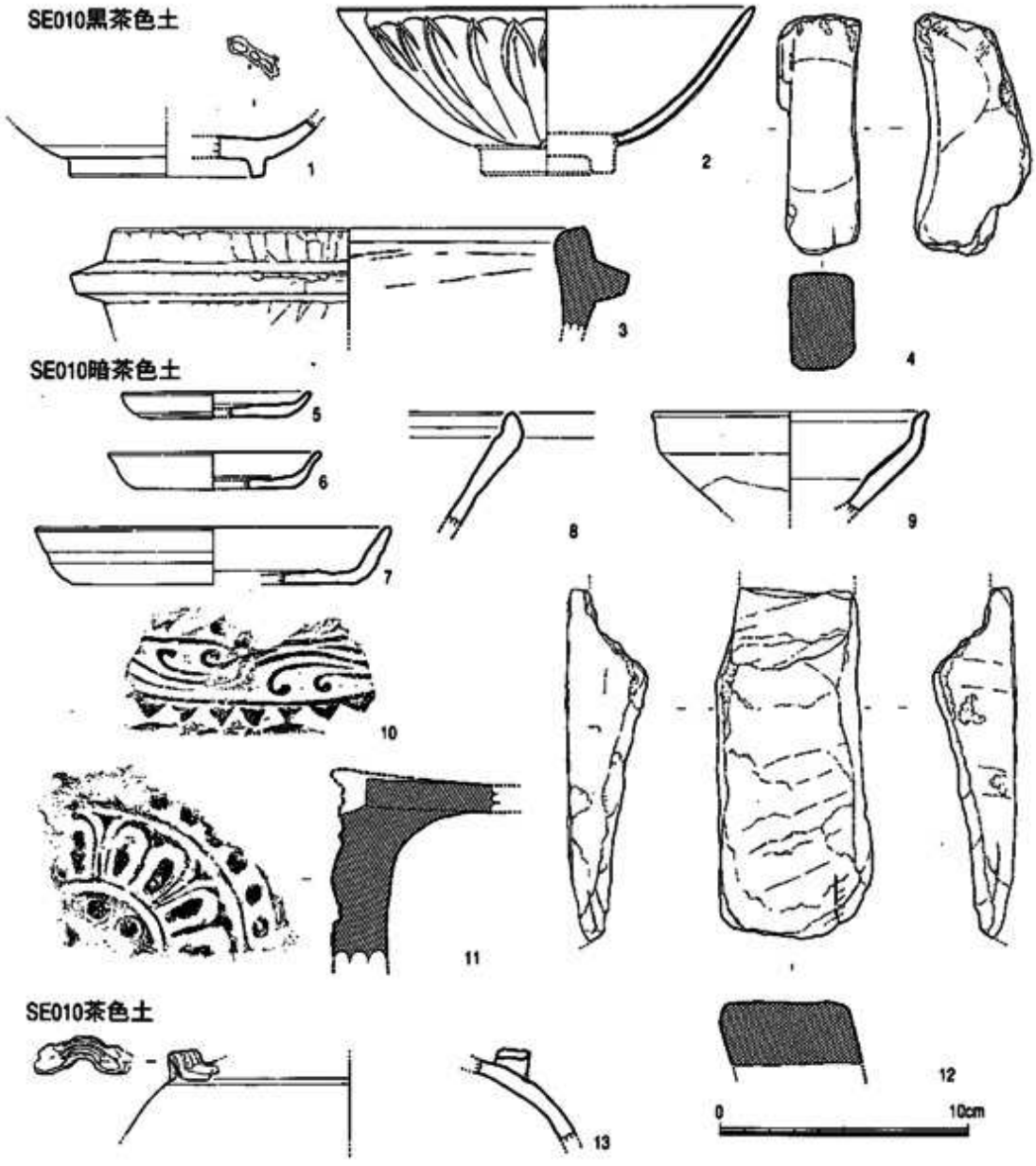


図119. 辻2SE010出土遺物実測図（2）（S=1/3）

「天延三年七月七日」と考えられる。XXI 類。

石製品

滑石石鍋（10・11） 口径 31.6cm・33.4cm に復原される。10 は大きな縦耳を削り出すタイプで削り目は粗い。A 群。11 は鍔を削り出し丁寧に調整されている。鍔の側面から下は全体に煤が付着している。B 群。

2 SE010黒茶色土出土遺物（図119）

辻２次

高麗青磁

椀 (1)　高台径7.8cmに復原される。素地は明灰色で白色砂粒を少量含み、灰緑色の不透明な釉を全面に施す。見込みと、釉を掻き取ったあとの高台底部に目跡がある。III-2 類。

龍泉窯系青磁

椀 (2)　口径16.8 cmに復原される。灰白色の緻密な胎土に暗灰緑色の透明釉を施す。鎬を削りだして割付け、その上から細い蓮弁を片切り彫りしいている。I-5b 類。

石製品

滑石石鍋 (3)　口径19.2cmに復原され、鍔を丁寧に削りだしている。B群。

砥石 (4)　現存9.4×3.4×3.8cm。石材は細粒砂岩で茶灰色。二面を使用している。

２SE010 暗茶色土出土遺物 (図119)

土師器

小皿a (5・6)　口径7.6cm・8.5cm 器高1.0cm・1.5cm。いずれも底部は回転糸切り。

坏a (7)　口径14.4cm、器高 2.3cmで底部は回転糸切りされ、板状圧痕が残る。

須恵器

鉢 (8)　胎土のキメはやや粗く砂粒を多めに含んでいる。内面は口縁部までナデて、焼成・還元はともに良好である。

黒釉陶器

椀 (9)　口径11.2cmに復原される。天目茶碗で、外に開いた体部は口縁部で内湾した後、端部をつまんで外反させている。素地は茶灰色から灰色を呈し、やや砂っぽい。　体部外面は回転ヘラ削りを行い、中位まで黒褐色の釉を厚めに施す。焼成はやや硬質である。中国産と考えられる。

瓦類

軒平瓦 (10)　外区に凸鋸歯文と珠文、内区に偏向唐草文を配する老司系の軒平瓦である。焼成・還元ともに良好。

軒丸瓦 (11)　複弁蓮華文である。丸瓦の端部に1.5cm 幅に切り込みが数本あり、瓦当面と丸瓦を接合する際に、軒丸瓦の円周と合わせたためと考えられる。

石製品

砥石 (12)　現存14.3×6.3×2.5cm。石材は細粒砂岩で、茶白色から明茶色を呈し割れ面は一部黒褐色に焼けている。

２SE010 茶色土出土遺物 (図119)

白磁

四耳壺 (13)　素地は灰白色を呈し精良、淡い灰緑色を呈した透明釉を施す。残存部は全面施釉で、耳は四個と考えられる。III 類。

溝出土遺物

２SD015 出土遺物 (図120)

土師器

椀c1 (1)　口径16.9cm、器高6.8cm、高台径8.9cmに復原される。胎土は橙灰色を呈し、見込みと体部内外面に回転ヘラ磨きを施す。底部はヘラ切り後回転ナデ。

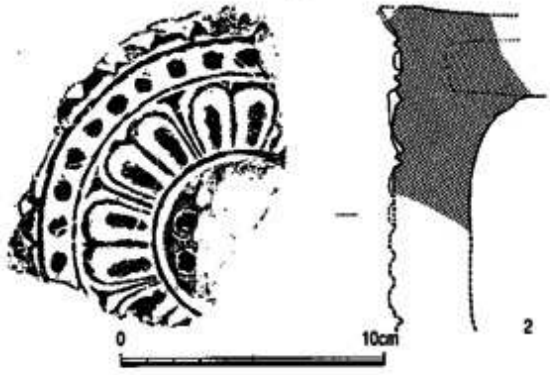


図120.　辻２SD015出土遺物実測図 (S=1/3)

瓦類

軒丸瓦 (2)　周縁に凸鋸歯文を巡らせ、内区に複弁蓮華文を配す。老司系。

その他の遺構出土遺物

２SX006 出土遺物 (図121)

土師器

小皿b (1)　口径7.9cm、器高2.2cm を測る。胎土は橙灰色、底部は回転糸切りである。板状圧痕あり。

２SX009 出土遺物 (図121)

須恵質土器

鉢 (2)　暗灰色でやや粗めの胎土に白色砂を少量含んでいる。体部を横ナデした後ナデを行っており、使用の際の痕跡をとどめている。底部は回転糸切りした後、粘土を補ってナデている。東播系。

白磁

椀 (3)　口径16.0cm に復原される。灰白色の緻密な素地に淡い空色を帯びた透明釉を施す。口縁部は外反させ体部外面に細い線を陰刻している。V-2b 類。

２SX024 出土遺物 (図121)

土師器

小皿a (4・5)　口径8.3cm・9.2cm。器高1.0cm・1.1cm。底部はいずれも回転糸切りされ、5には板状圧痕がある。

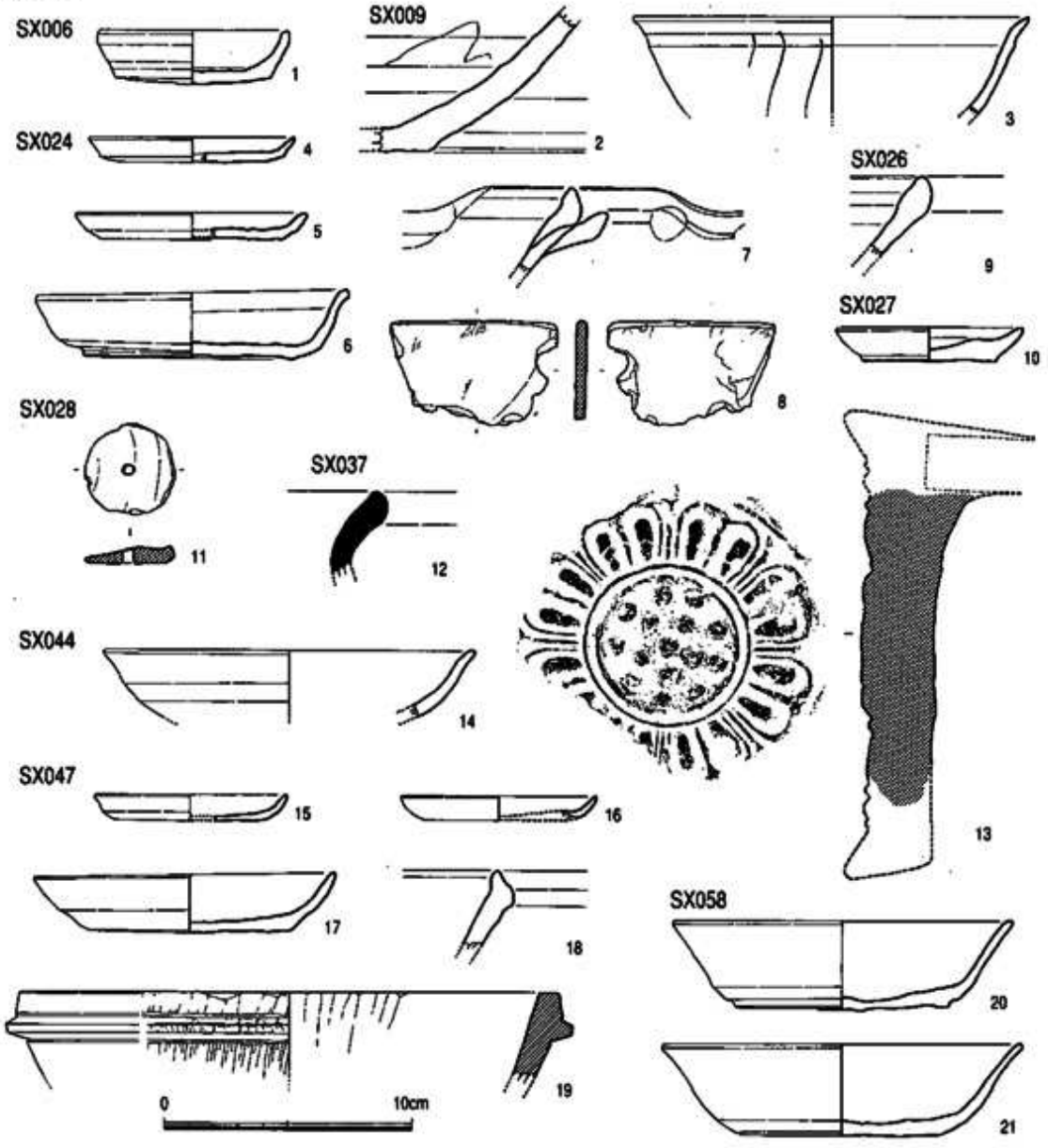


図121. 辻２その他の遺構出土遺物実測図（S=1/3）

坏a（6） 口径12.4cm、器高2.7cm。底部は回転糸切り。

須恵質土器

鉢（7） 胎土は暗灰色で白色砂粒を多めに含んでいる。口縁端部を断面三角形につくる。片口鉢で東播系。

石製品

砥石（8） 現存4.3×6.8×0.4cmを測る。一面を研ぎ面として使用。石材は粘板岩、緑色味をおびた茶灰色から灰色を呈す。

２SX026 出土遺物（図121）

須恵質土器

鉢 (9)　胎土はやや粗く暗灰色を呈し白色砂粒を少量含む。口縁端部を玉縁状につくっている。焼成・還元ともに良好。篠窯系。

2 SX027 出土遺物 (図121)

土師器

小皿a (10)　口径7.7cm。器高1.4cm。底部は回転糸切りされ、板状圧痕がある。

2 SX028出土遺物 (図121)

土製品

紡錘車 (11)　現存3.7×3.6×0.7cm。土師器坏aの再利用品で糸切りの痕が観察される。

2 SX037 出土遺物 (図121)

須恵器

甕 (12)　胎土は灰白色で砂粒を少量含みやや粗めである。口縁部を外反させ端部を丸く納めている。

瓦類

軒丸瓦 (13)　内房の蓮子が1+5+9個に8個の複弁蓮華文をもつ。老司II式。

2 SX044 出土遺物 (図121)

土師器

丸底坏a (14)　口径15.0cm。内面はミガキb、外面は回転ナデを行う。口縁端部がやや外反気味である。

2 SX047 出土遺物 (図121)

土師器

小皿a (15・16)　口径7.8cm・8.0cm。器高1.0cm・1.1cm。底部はいずれも磨耗し、切り離しは不明。

坏a (17)　口径12.2cm、器高2.3cmを測り、底部は回転糸切りされる。

鉢 (18)　胎土は明茶灰色を呈し砂粒を少量含んでキメが粗い。口縁端部を断面三角形につくり、形状は東播系の鉢の口縁に酷似している。焼成が土師質なのでここでは土師器とした。

石製品

滑石製石鍋 (19)　口径22.0cmに復原され、小さな鍔を削りだしている。体部の傾きからC群と考えられる。

2 SX058 出土遺物 (図121)

土師器

坏a (20・21)　口径13.8cm・14.6cm。器高3.6cm・3.7cmに復原される。胎土は橙茶色で、

辻２次
底部は回転糸切りされる。板状圧痕あり。

土層出土遺物

茶褐色土出土遺物（図122）

土師器

鍋（1）体部内面は細かいハケ目で調整、外面は回転ナデである。口縁部を外反させ体部との境に緩やかな稜をなす。外面は口縁端部まで煤が付着している。

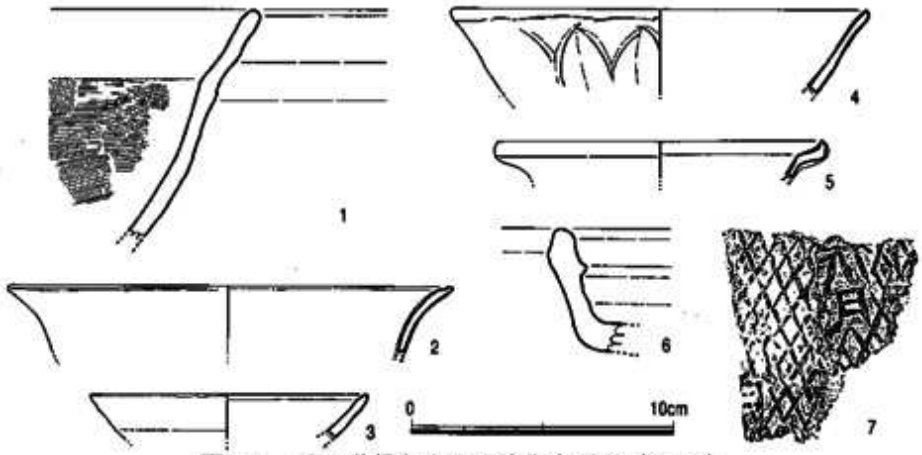


図122. 辻２茶褐色土出土遺物実測図（S=1/3）

白磁

椀（2）　口径17.0cmに復原される。乳白色の素地はやや砂っぽい。淡い黄緑色の釉を厚めに施している。口縁端部は釉が掻き取られ、赤茶色を呈す。IX 類。

皿（3）　口径10.6cmに復原される。素地は灰白色を呈し緻密で、淡い空色をおびた透明釉を施す。口縁端部の釉を掻き取っている。体部外面は口縁部下位まで回転ヘラ削りしている。IX-1a類。

龍泉窯系青磁

椀（4）　口径16.0cm。灰色の精良な素地で灰緑色の釉を施す。外面はヘラで鎬蓮弁を片切り彫りする。I-5b 類。

坏（5）　口径12.8cmに復原される。素地は灰白色を呈し精良、灰緑色の釉を厚く施している。口縁端部を折り縁にして端部を摘む。III-3 類。

中国陶器

双耳壺（6）　素地は黄灰色でキメが粗く、黒色粒、白色砂粒を含んでいる。明茶色の釉は薄く不透明。頸部は下方に広がり、口縁端部は丸く肥厚する。XII-2 類。

瓦類

丸瓦（7）　縦長の細かい格子叩きに「佐瓦」の左字が陽刻されている。II-7b 類。

（森田レイ子）

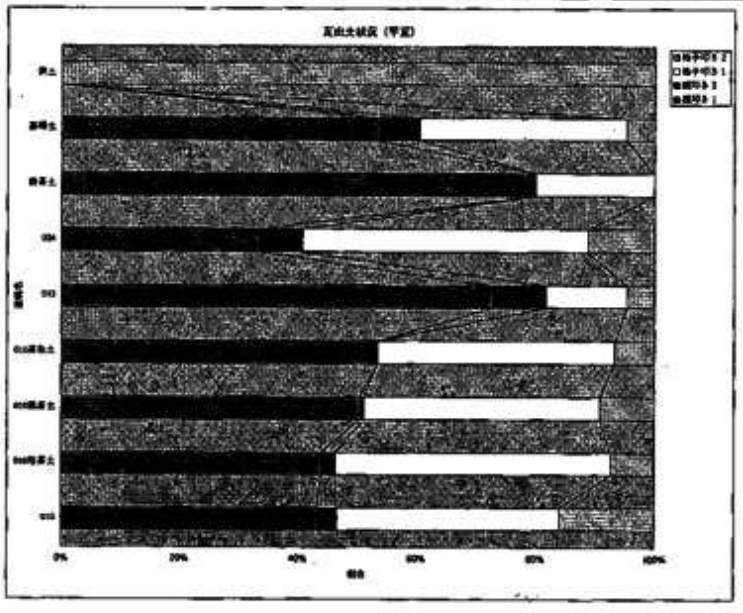
5．小結

筑前国分寺東域に展開する中世期の遺構が、今次調査でも検出することができた。また当該調査区の西に隣接する国分寺跡23次調査地にて、国分寺東外郭施設が確認されたこともあって、当初国分寺外縁の状況把握という意味あいも含めての調査であった。その結果、推定中軸方向に一致する溝および標高落差のある段を検出した。この溝2SD015は、下層遺構として検出したもので、N2°39′47″Eを測り、最終埋没時期は、出土遺物からみて平安前期頃と考えられる。またこの溝の北側延長線に沿って段が形成されており、国分寺外縁を区画する何らかの痕跡であった可能性は高い。この溝の南側延長線に沿って、現況地形でやはり段落ちが観察でき、さらに南へ行くと国分寺跡10次調査にて検出した10SD001が存在している。この10SD001の任意中点と2SD015の任意中点から算出できる座標北に対する方向は、N2°33′20″Eを測り、これら国分寺の外縁を区画する施設が、辻遺跡２次調査地から南北に埋没している可能性が高くなった。

一方中世期の遺構は、掘立柱建物、井戸などと共に墓を検出しており、辻遺跡１次調査によって明らかになった、筑前国分寺東域の中世集落として考えられる。この国分寺東域に展開す

表23. 辻２出土瓦傾向（丸瓦については、資料数に偏りがあるため割愛した。）

遺構名	平瓦					丸瓦					丸瓦×平瓦					小計
	縄叩き１	縄叩き２	格子叩き１	格子叩き２	叩き平明	縄叩き１	縄叩き２	格子叩き１	格子叩き２	叩き平明	縄叩き１	縄叩き２	格子叩き１	格子叩き２	叩き平明	
009	38	3	30	14	81			12	1	25					17	204
010暗茶土	18	1	10	3	18			6	1	5					15	86
010黒茶土	66	1	52	12	59	3		22	1	22					17	255
010茶色土	8		6	1				3			15					33
015	16	2	3	1	7	1		1	1	1	1		1	1	3	41
014	9	2	13	3	10	1	1	6		9					20	74
淡茶土	12		3		8					1					3	36
茶褐土	23	3	15	2	35	1		3		5					11	100
黄土				2	5											7
小計	190	12	144	38	200	6	1	55	4	68	16		1	1	90	826
合計	594					134					108					



辻２次

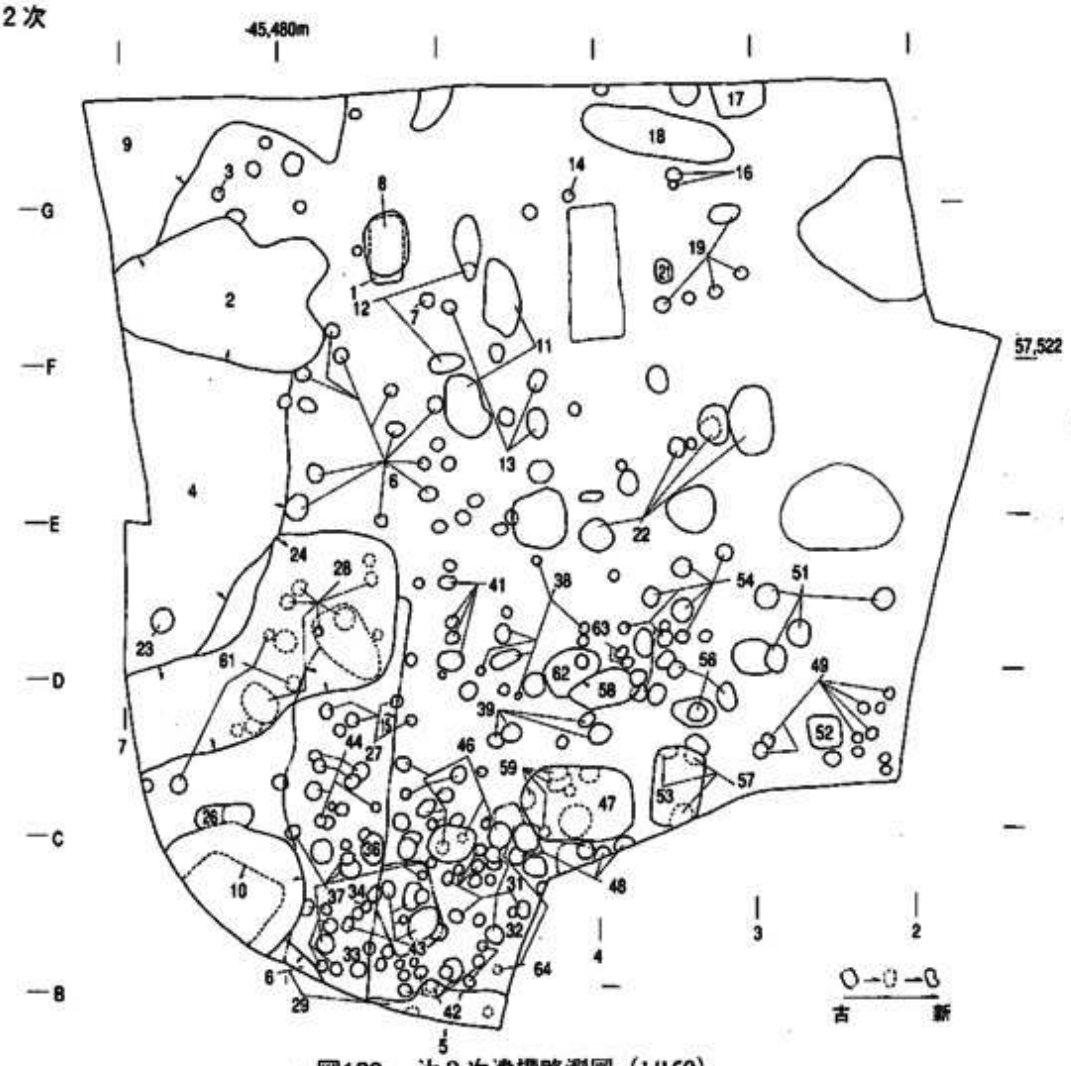


図123. 辻２次遺構略測図（1/150）

る中世期の遺構群の全体像については、調査が進展していないこともあって、具体化できないものの、筑前国分寺が有していた中心軸方向とは一致せず座標北から５°前後東へ振れる建造方向を持っている。ただし問題があり、現況地割の方向は古代の方向すなわち国分寺の建造方向とほぼ一致する方向を有しているにも関わらず、古代的地割を有する地域にも中世期の遺構が展開しているということである。何故、新規の地割が残らず、古来の地割が残存したのかについての問題を残すことになった。換言するならば、現況地形から推察される開発史の分析限界が、国分寺周辺の地形には存在しているということになる。　（中島恒次郎）

表24. 辻２次調査　遺構番号一覧

S-番号	遺構番号	種　別	地区
1	2ST001	木棺墓　S-1→S-8	F5
2		凹み　黒色土　礫混じりか？	F6他
3		ピット　灰色粘質土	G6
4		凹み　茶黒色土（礫混じり）　S-4→S-2	E6
5	2SB005	建物	E4
6	2SX006	ピット　灰色粘質土	E5
7		ピット　灰色粘質土	F5
8		土坑（凹み状）茶灰色土　S-1→S-8	F5
9	2SX009	凹み　茶黒色土	G6
10	2SE010	円形プラン　井戸	B6
11		凹み　灰茶色土	E4
12	2SB005	ピット　（建物、ピット）	F4
13		ピット	E4
14		ピット　灰茶色土	G4
15	2SD015	溝　茶色土　下層	5ライン
16		ピット　灰茶色土	G3
17		凹み　茶黒色土	G3
18		土坑　茶黒色土	G3
19		ピット群	F3
20	2SB020	建物	S5他
21	2SB005	ピット	F3
22		ピット	E3
23		ピット　灰茶色土	D6
24	2SX024	凹み　灰茶色土	D6
26	2SX026	凹み　S-26→S-10	B6
27	2SX027	ピット群　茶灰色土	C5
28	2SX028	ピット群　茶灰色土　S-28→S-24	D5
29		包含層　茶褐色土	A5
31		ピット群	B4
32		ピット群	B4
33		ピット　(建物、柵か？)	B5
34		ピット　(建物、柵か？)	B5
36		ピット　(建物、柵か？)	B5
37	2SX037	ピット群	B5
38		ピット群	D4
39		ピット群　一部2SB020のピットあり	C4
41		ピット群	D4
42		ピット群	A5
43		ピット群	B5
44	2SX044	ピット群	C5
46		ピット群　一部2SB020のピットあり	C5

辻２次

47	2SX047	土坑　　礫、炭化物多く混入	C4
48		ピット群	B4
49		ピット群	C2
51		ピット群	D2
52		ピット	C2
53		凹み	C3
54		ピット群	D3
56		ピット群	C3
57		ピット群　S-57→S-53　一部2SB020のピットあり	C3
58	2SX058	凹み	C3
59		ピット群　S-59→S-47	C4
61		ピット群	D6
62		凹み	D3
63		ピット群	D4
64		ピット群　黄茶色土　　下層	B4

表25.　辻２次調査　土器計測表

S-1

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小国a(イト)	1	001	1	8.6	1.0	7.5	—	—
〃	2	002	2	9.8	1.3	7.7	○	○
〃	3	003	3	9.8	1.2	8.0	—	○
〃	4	004	4	10.0	1.3	8.0	—	○
土・坏a(イト)	1	005	5	15.3	2.7	11.1	—	○

S-6

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小国b(イト)	1	001	1	7.9	2.2	6.3	○	○

S-10暗茶色土

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a(イト)	1	002	7	14.4	2.3	11.4	—	○
土・小国a(イト)	1	003	5	7.6	1.0	6.2	○	—
〃	2	004	6	8.5	1.5	6.6	—	—

S-15

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・椀c1	1	001	1	17.0	6.8	8.9	—	—

S-24

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小国a(イト)	1	001	4	8.3	1.0	7.4	○	—
〃	2	002	5	9.4	1.1	7.4	—	○
〃	3	003	6	12.6	2.7	8.7	—	—

S-27

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小国a(イト)	1	001	10	7.6	1.4	5.4	—	○

S-44

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・丸底坏a	1	001	14	15.0	2.7+		—	—

S-47

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・小国a(不明)	1	002	15	7.8	1.1	6.2	—	—
〃	2	001	17	8.0	1.0	6.9	—	○
土・坏a(イト)	1	003	16	12.2	2.3	8.2	○	—

S-58

器種	番号	R-	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土・坏a(イト)	1	002	20	13.8	3.6	8.2	—	○
〃	2	001	21	14.6	3.7	8.2	○	○

表26. 辻２次調査　出土遺物一覧

S-1

土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)

S-2

土師器	供膳具
瓦類	平瓦(縄目-細)

S-3

土師器	破片
瓦類	丸瓦(叩き不明)

S-4

土師器	供膳具
白磁	椀；破片(1)
瓦類	平瓦(縄目-細)、破片(縄目-細)

S-6

土師器	小皿b(イト)、坏a(イト)、甕×鍋
瓦類	平瓦(格子-小)、破片

S-7

須恵器	甕
土師器	破片

S-8

須恵器	坏、甕
土師器	椀c、坏a(イト)、煮沸具
同安窯系青磁	椀；I-1b(1)
白磁	椀；破片(1)
瓦類	平瓦(格子-小、大)、破片(縄目-細、叩き不明)

S-9

須恵器	甕
土師器	椀c、坏
土師質土器	鍋
須恵質土器	こね鉢、鉢
白磁	椀；V-2b(1)、破片(1)
瓦類	平瓦(格子-小、縄目-細、粗、叩き不明)、破片

S-10

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、鍋、小皿a(イト)
黒色土器B	椀c
瓦器	椀c
龍泉窯系青磁	椀；I-5b(2)、I-5(1)、I(1)
同安窯系青磁	椀；I-1b(1)、I-1a(1)
須恵質土器	鉢
国産陶器	甕(常滑)
白磁	椀；IX(2)、VIII(1)、V-4×VIII-3(1)、V～VIII(1) クシ目(1)
	皿；III-1(2)、IX-1d(1)
中国陶器	壺；口縁片(1)、A'b(3)
	鉢；G(1)
	その他；Ca(1)、破片(1)
石製品	滑石石鍋B、滑石石鍋A
瓦類	軒丸瓦、丸瓦(文字「・・七日」XXI) 平瓦(縄目-細、粗、格子-小、大、叩き不明) 丸瓦(格子-小、大、叩き不明)、破片

S-10 暗茶色土

須恵器	甕
土師器	鍋、坏a(イト)、小皿a(イト)、煮沸具、供膳具
瓦器	椀c、破片
龍泉窯系青磁	椀；I-5b(1)
同安窯系青磁	椀；I-1b(1)
須恵質土器	こね鉢(東播系)
灰釉陶器	椀(1)
黒釉陶器	椀(天目椀)(1)
白磁	椀；破片(1)
	皿；輪花(1)
中国陶器	その他；Da(1)
石製品	砥石、石鍋
瓦類	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦(格子-小、大、叩き不明) 平瓦(縄目-細、粗、格子-小、大、叩き不明)、破片

S-10 黒茶色土

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、小皿a
黒色土器B	椀c
龍泉窯系青磁	椀；I-5-b(1)
高麗青磁	椀；III-2(1)
須恵質土器	こね鉢
国産陶器	甕(常滑)
白磁	椀；II-1(1)
中国陶器	甕；Ca(3)
	その他；破片(3)
石製品	砥石、滑石石鍋B群、C-1
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小、大、叩き不明)、軒平瓦 丸瓦(縄目-細、格子-小、大、叩き不明)、破片

S-10 茶色土

白磁	椀；IV-1(1)、破片(1)
	その他；四耳壺III(1)
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小、大)、丸瓦(縄目-細、格子-小) 破片

S-11

土師器	椀c、坏
石製品	黒曜石
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小、叩き不明)

S-12

土師器	煮沸具、坏a
瓦類	平瓦(縄目-細、叩き不明)

S-13

須恵器	甕I
土師器	煮沸具
越州窯系青磁	椀；I(1)
瓦類	平瓦(叩き不明)

S-14

土師質土器	鍋
瓦類	破片

S-15

須恵器	甕
土師器	坏c、坏a(ヘラ、イト)、椀c1、甕
瓦類	平瓦(格子-小、大、縄目-細、粗、叩き不明)、軒丸瓦 丸瓦(格子-小、大、縄目-細、粗、叩き不明)、破片

辻2次

S-16

土師器	坏
黒色土器B	破片

S-17

土師器	破片
瓦類	破片

S-18

土師器	破片
黒色土器A	椀c

S-19

土師器	椀c、小皿a、煮沸具
瓦類	丸瓦(叩き不明)

S-21

黒色土器A	破片

S-22

土師器	椀c、煮沸具
土師質土器	こね鉢
白磁	壺；破片(1)
瓦類	丸瓦(縄目)、平瓦(格子-小)、破片

S-23

土師器	小皿

S-24

土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、甕×鍋
黒色土器B	破片
瓦器	椀c
越州窯系青磁	その他；水注I(1)
龍泉窯系青磁	椀；I(1)
同安窯系青磁	椀；I-1b(1)、I-1a(1)
土師質土器	鍋
須恵質土器	こね鉢、片口鉢
瓦質土器	こね鉢
白磁	椀；V-1×VIII-2(1)、タシ目(1)
中国陶器	その他；壺(2)、破片(1)、A'b(1)、Bb(1)
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目-細、粗、格子-小、大、叩き不明) 丸瓦(縄目-細、粗、格子-小、叩き不明)、破片

S-26

土師器	供膳具
須恵質土器	こね鉢、鉢
瓦類	平瓦(格子-小)、破片

S-27

土師器	小皿a(イト)、煮沸具
黒色土器B	椀
瓦類	平瓦(縄目)、破片

S-28

土師器	小皿a(イト)、坏a、甕
土製品	紡錘車
瓦類	丸瓦(叩き不明)、平瓦(格子-大)

S-29

土師器	煮沸具、坏

S-31

土師器	小皿
土師質土器	鍋
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(格子-大、小)、破片

S-32

須恵器	甕
土師器	煮沸具、坏a(イト)
白磁	椀；破片(1)
	皿；II×III(1)

S-33

土師器	煮沸具
瓦類	平瓦(縄-細)、破片

S-34

土師器	供膳具
同安窯系青磁	椀；破片(1)
白磁	椀；破片(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(格子-小)

S-36

土師器	小皿a、椀c、坏a(イト)、煮沸具
須恵質土器	こね鉢
白磁	皿；IX(1)
瓦類	平瓦(縄目-細)、軒平瓦

S-37

須恵器	甕
土師器	甕、小皿、坏
瓦質土器	すり鉢
瓦類	軒丸瓦、平瓦(格子-大、縄目-細)、破片

S-38

土師器	小皿a(イト)、煮沸具
龍泉窯系青磁	皿；I(1)
瓦質土器	こね鉢
石製品	砥石

S-39

土師器	坏a(イト)
中国陶器	その他；Cb(1)
金属製品	鉱滓、焼土塊
瓦類	破片(格子-小、叩き不明)

S-41

土師器	甕×鍋、椀c2、坏a×皿a(イト)
瓦類	破片(縄目-粗)

S-42

土師器	破片
瓦類	破片

S-43

土師器	椀c
瓦類	丸瓦(叩き不明)

S-44

土師器	坏a(ヘラ)、丸底坏、煮沸具
黒色土器A	破片
瓦器	椀c
白磁	椀；V～VIII(1)
	壺；III(1)
土製品	不明土製品
瓦類	平瓦(格子-大、縄目、叩き不明)、破片

S-46

土師器	坏a、小皿、煮沸具
黒色土器B	破片
瓦器	破片
白磁	椀；破片(2)
	皿；II×III(1)
金属製品	銅製品
瓦類	平瓦(格子-小)、破片

S-47

土師器	坏a(イト)、甕×鍋、小皿a(不明)、鉢(東播模倣)
龍泉窯系青磁	椀；I-5b(1)
白磁	椀；破片(1)
石製品	滑石石鍋B群、滑石石鍋C群
瓦類	平瓦(格子-小、大、縄目、叩き不明)、破片

S-48

土師器	小皿a(イト)、煮沸具
瓦器	破片
瓦類	平瓦(格子-小、縄目)、丸瓦(叩き不明)

S-49

土師器	煮沸具、供膳具
瓦質土器	こね鉢
瓦類	平瓦(叩き不明)、破片

S-51

土師器	坏a
土師質土器	鍋
中国陶器	その他；破片(1)
瓦類	破片

S-52

土師器	破片

S-53

土師器	供膳具
土製品	焼土塊

S-54

土師器	小皿a(イト)
土師質土器	鍋
中国陶器	その他；Cb(1)
石製品	安山岩
瓦類	破片

S-56

土師器	椀c、甕a
瓦器	椀c
白磁	椀；IX(1)

S-57

土師器	供膳具

S-58

土師器	坏a(イト)、甕×鍋
黒色土器A	破片
瓦器	破片

S-59

土師器	坏a(イト)
石製品	サヌカイト
瓦類	丸瓦(叩き不明)

S-61

土師器	小皿a1、小皿a2
中国陶器	その他；破片(1)
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小)

S-62

土師器	坏

S-63

土師器	坏a(イト)
土製品	焼土塊
瓦類	破片

S-64

土師器	破片
石製品	サヌカイト

表土

土師器	坏a、小皿a
石製品	黒曜石
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小)

茶褐色土

須恵器	坏c、皿×壺
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、椀c、甕a、鍋
黒色土器B	椀c2
龍泉窯系青磁	椀；I-5b(4)、I-5(2)、I(1)
	その他；坏III-3b(1)
同安窯系青磁	椀；I-1b(1)
黒釉陶器	天目茶椀
国産陶器	甕
白磁	椀；IX(1)、破片(3)、クシ目(1)
	皿；IX-a(1)
中国陶器	壺；XII-2(1)
	その他；Cb(1)、破片（1）
瓦類	平瓦(文字「佐瓦」II-7b、縄目-細、粗、格子-小、大、叩き不明)、丸瓦(縄目-細、粗、格子-小）、軒丸瓦、破片

黄茶色土

須恵器	坏a
土師器	椀c1、煮沸具、坏a(イト)
土師質土器	こね鉢
石製品	滑石
瓦類	平瓦(縄目-細、格子-小)、丸瓦(縄目-細)、破片

IV.転写土層の保管・展示パネル製作

1.はじめに

遺構はその多くが埋め戻されるが、場合により樹脂などを用いて遺構そのものあるいは一部を検出時の状態のま保存することがある。良く知られている方法として土層の剥ぎ取りがあり、国分寺の調査でも第13次調査（『筑前国分寺跡I』　太宰府市の文化財第32集）の際に検出した築地遺構を剥ぎ取って保管していた。ところがそのまま折りたたんで放置していたために折り皺や裂けが生じ、資料として使える状態ではなかったため、合板に貼り付けて保管と展示が出来るように処置を施した。ここにその作業過程を記録として留めておく。

2.作業工程

A..準備

剥ぎ取った土層（以下、土層）のサイズが約4m×2mと非常に大きい為、これを1枚の合板に貼り付けるとなると板材を特別に用意しなければならず、規格の合板パネルを繋ぎ合わせて貼り付けたとしても保管時に広いスペースが必要となるため、今回は4枚の連続する合板に張り合わせ、後で合板ごとに切断する事とした。また、礫や土器片など突出した部分がある為4cmの厚みで外枠を設け、合板を重ねて省スペースでの保管と簡易な展示ができるようにした。(写真1)

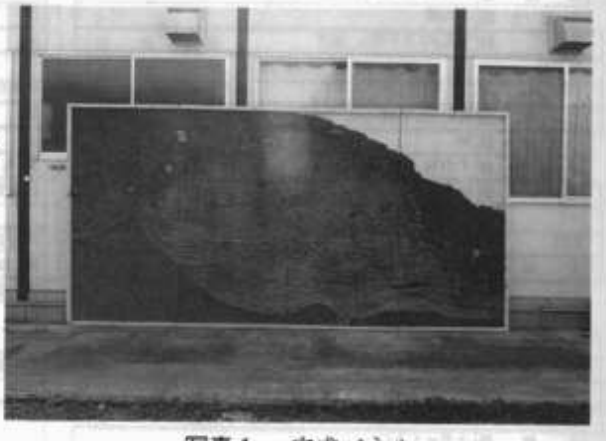


写真1．完成パネル

製作には以下のものを用いた。

(1) パネル材料

合板パネル（タテ180×ヨコ90×厚0.9cm）、角材（3×4×400cm）

(2) 整形材料

土層接着剤　エポキシ樹脂アラルダイトAER-2400（日本チバガイギー（株）製）　ハードナーHY837（日本チバガイギー（株）製）

土層転写用樹脂　OH（東邦化学工業（株）製）

土層表面処理剤　サンコールSK50（ミクニペイント（株）製）

サンコールシンナー（ミクニペイント（株）製）

接着剤　セメダインC、セメダインハイスーパー（セメダイン（株）製）

樹脂増量材　ガラスマイクロバルーン

(3) 用具・その他

電動鋸、鋸、金槌、天秤、軍手、防毒マスク、防護メガネ、プラスチック手袋、新聞紙、さらし、ガーゼ、ディスポカップ、竹べら、刷毛、絵筆、洗濯ばさみ、大型クリップ、押しピン、サンドペーパー

B.パネル製作

a.接着する土層のサイズを決める。

剥ぎ取る際に裏打ち布に印を付けたレベルマークを基準に土層裏面に水平線を引く。この時、土層は若干の縮みや歪みがあったので遺構図面で土層表面上のレベルを確認した。レベルライン上の任意の数点に押しピンを表から裏までさし込み、そこにマジックで印を付けて端から端まで結んで裏にレベルラインを引いた。それから遺構図面を元に必要部分以外はハサミやカッターで切り取った。

b.合板パネルのサイズを決める。

4枚の合板を長辺が隣り合うように隙間なく並べた状態で、外枠となる角材を打ちつけるためのスペース（外側から3cm内側の部分）を残し、それ以外の空白部分とのバランスを整えて合板上にレベルラインを入れる。また、土層の輪郭線も書いておく。

c.土層の補修をする

（1）裏面の補修

裏打ち布に樹脂が充分に塗布されてない箇所は貼付の際に接着剤が表面にしみだしてくるのでガーゼを数枚重ねて再度裏打ちした。裂けてしまった部分は細かく切ったガーゼで裏打ちして閉じていく。（写真2）

（2）表面の補修

①土層を剥ぎ取れずに、裏布だけになっている部分はエポキシ樹脂（アラルダイトAER-2400とハードナーHY-837を重量比で5：2の割合で混合）とマイクロバルーンを加えて硬めのパテ状にしたもの（以下、エポキシパテとする）を塗り、補修用の土を埋め込んだ。（写真3）

②裂けた箇所は裏打ちの後、セメダインC等で補修用の土を埋め込むように接着し目立たないようにした。

写真２．裏面の補修

写真３．表面の補修

d.土層と合板の接着

（1）合板に接着する。

①エポキシ樹脂を300g調合する。（混合比は同じ）一度に広い面積を貼ると未接着部分ができたりしわがよったりしたので作業の進行状況からして200g～300gの量が適当であった。

②合板4枚の内、左端の1枚目から300gで貼れる面積ずつ貼っていく。合板上に樹脂を流し、輪郭線の少し内側まで筆や竹べらでのばして双方のレベルラインが合うように静かに合板上に土層を置いていく。表面を保護するためさらしを置いてから土層と合板の間に隙間ができないようにおもしをし、半日して充分に乾燥したら次の部分を同様に接着していく。連続する合板同士のつなぎ目からはお互いに3～5cmの部分は、後で切断する際に接着後では樹脂が硬くて切りにくいのでこの段階では接着しなかった。

（2）2枚が土層でつながったら合板のつなぎ目に合わせて土層を切っていく。（写真4）合板と合板の間のライン上に石や土器片があったので予め取っておき後から接合した。

（3）各合板の未接着部分を貼る。

①土層中央部に空間ができてしまったので端から樹脂を流し込んだり目立たない所で切って樹脂を流し込み、表面を整えた。

②端部の接着

a.土層上部は合板の空白部分を汚さないように全面マスキングしてから樹脂がはみ出ないように貼った。

写真4．土層を接着後、切断。

b.左右の端は片方ずつ貼っていく。樹脂が奥まで流れていきやすいように少し板を傾けて刷毛やしぼり袋等を使って樹脂を流し込み、貼りつけた。

c.剥落した石や土器片等、セメダインハイスーパーやエポキシ樹脂で貼り付けた。

（4）土層外部分の処置

今回は土層下部が自然な感じに仕上がるように、現場で採取したを充分に乾燥させてOHを用いて板に貼った。OHを空白部分に15×15cm程の広さずつ筆で塗って、乾燥させた土を多めに盛り軽く押さえる作業を繰り返し、空白を埋めた。

e.表面処理（屋外作業）

スプレーガンで土層や貼り付けた土の上を空吹きして余分な土や埃を落とした後、重量比でサンコールSK50とサンコールシンナーを1：4に調合したものをむら無く吹き付ける。（写真5）その後風通しの良いところで乾燥させる。

写真5．表面処理

f.角材打ちつけ

板のマスキングを取り去り、汚れた部分をサンドペーパーで磨いてきれいにし、裏側から角材を打ちつける。

g.完成

裏面に遺跡名、遺構、作成日、現場担当者名、レベルマークを記入して完成とした。作業時間の制約もあり、これ以上の作業は行っていない。

C.保管

現在、エアーキャップでパネル1枚ごとに包み、自重でひずまないように長辺を横にして、壁に立てかけて保管している。湿気を嫌う等といった条件があるので、現在の保管状況で良いのか定期的に点検していくことにしている。

3.おわりに

今回のパネル製作において剥ぎ取り後の処置としては最も一般的でシンプルな方法をとったにもかかわらず、要領を得ず作業は決してスムーズには進まなかった。その理由の一つには剥ぎ取り段階において樹脂塗布時のむらやレベル位置の未確認、布地の貼り方等の問題があったと考えられる。また何よりも、活用するはずの資料を長い間放置しておく事自体に問題があり、どのような活用をするのか、その為にはどのような方法で、どのような形態にすれば良いのか早い段階で決定しておかなくてはならない。現在では遺構の保存方法も様々で選択の幅が広がっているので、もっと現場の生きた情報が伝わる資料づくりと活用を考えていきたい。

(下川可容子)

V.調査のまとめ

1．概要

寺域を他の地域と画する施設として、現在確認されている遺構は、溝、築地、塀と考えられるものである。溝については、7次調査にて可能性を指摘され、東外郭施設は溝であるとされていた。しかしこの時点では、トレンチ調査であるにも関わらず、溝の東側に寺に関わる遺構は存在していないとして、寺東を画する施設と判断された。次に南を画すると考えられる遺構が13次調査によって検出され、築地が国分寺前面に築かれていたことが判明した。現況地形においても標高落差が残存しており、当時の景観を保持しているとすれば、築地塀が極めて高く印象付けられていたものと考えられる。この築地塀の構造については後述するように、築地そのものではなく、基礎となる土壇である可能性が高い。ついでこの7次調査によって確認された溝遺構を推定中軸線で西に折り返した所にある、西外郭施設が残存する可能性が強いとされた南北道路周辺において、20次調査を実施した。現存する道路付近に外郭施設検出の可能性があったため、調査区を道路付近まで拡張したが、後世の掘削によるためか、基盤層が検出されたのみで遺構は検出できなかった。したがって、南北に通る道路直下もしくは、この道路東側に標高落差が顕著であることから、道路西側よりも東側に外郭施設残存の可能性が高くなった。その後道路東側において宅地造成の計画が上がり、外郭施設検出の可能性を求めて21次調査を実施し、また北側延長部分の解明のため21-2次調査を実施した。結果として南面築地土壇を切るように南北に溝が確認され、この溝の北側延長線上に掘立柱列を検出している。同様に北側延長線上にあたる21-2次調査によっても検出でき、南面における築地とは異なり、板塀による外郭施設であることが判明した。またこの板塀遺構の東側、寺内側には幅3.0m弱の排水施設をも兼ね得る溝が検出され、この溝の堆積土中から多量の瓦が出土した。21-2次調査で検出したこの溝からは、板塀に葺いてあったと考えられる瓦が倒壊を想定させるように堆積しており、中枢伽藍から検出された瓦より小振りな形を有していた。この寺域内にある溝に対して、板塀の西側、つまり寺域外に位置する箇所に小規模な溝を検出したが、寺域内の溝に比べ、浅く凹み状を呈しており、人為性を認めるにはやや躊躇するほどの規模である。遺構の残存状況によるため即断することはできないが、西側外郭施設は、溝と板塀によって構成され、板塀の外側（西側）については、地山成形による段構造のみをもって寺域の内外を画していた可能性がある。

一方7次調査によって検出された東外郭施設は、その後14次調査によって掘立柱列を検出し、この時点で築地ではなく板塀構造の外郭施設である可能性を見い出していた。西外郭施設の溝ー板塀ー溝の関係を、現状で検出されている遺構に照らし合わせた時、寺域内の溝に相当する位置に22次調査にて検出された不整形の溝がある。この溝に関しては、埋没時期が奈良期で

はないという点から検討を要するとされており、外郭施設に伴う溝とするには懸念されていた。しかしこの溝と東側に隣接する７次調査で検出された溝の位置関係は、21－2次調査にて検出した寺域内の溝と寺域外の溝との関係に適合し、かつ調査区内からは溝遺構のみが検出されている事などから考えて寺域内の溝の残存である可能性がある。つまり７次調査および23次調査で検出した溝が寺域外の溝であり、22次調査で検出した溝が寺域内の溝であると考えられる。したがって、７次調査と22次調査地の境界部分に寺域を画する構造物が埋没している可能性が出てきた。

２．推定中軸線からの設計距離

以上これまでに検出された外郭施設の概要について記述してきた。

さて、これら諸施設の中軸線からの距離はどのようになっているだろうか。この問いに対して検討を加える前に、設計中心軸の座標北からの振れについて検討を加える必要がある。

筑前国分寺跡の中軸方向は、これまで中枢伽藍の建造方向から、N2°Eとして報告されてきた。しかし外郭施設の確認および、再度中枢伽藍の建造方向を国土座標に基づき算出すると、N2°Eを前後する数値が得られる。これらの数値がどこまで真実の値に近似しているのかは、座標側点の抽出状況が異なっているため定かではない。したがって、ここでは抽出地点から導き出される一般傾向としての建造方向を算出し、今後の検討課題としたい。

１）まず設計中心点として森田によって推定されていた金堂中点を求める（森田、1983)。

推定金堂中点は、金堂規模が未だ明らかになっておらず、推定の域を出ないが、以下の諸過程に沿って導き出した。しかし、各地の国分寺の金堂と回廊の取り付き状況を見た場合、今回求めた中点よりやや北側になる可能性は否めない（文化庁文化財保護部史跡研究会、1991)。この点は、将来金堂跡の詳細な調査に委ねるしかなく、現状での作業仮説として捉えておいていただきたい。

a）東回廊北辺雨落溝の北雨落溝任意中点（東端および西端）を東西方向へ直線で延長する。この　直線を基準東西線とする。

b）２次調査によって検出された東・西・南の石列を、a）によって求めた東西方向を基準として、　金堂規模を推定する。

c）b）によって範囲を推定した金堂四隅を互いに直線で結び、その交点を中点とする。

これらの過程によって導き出される金堂中点の座標は、X＝57,467.920、Y=-45,596.480となる。

２）先述した建造方向の算出を行なう。算出の過程は、同一遺構の任意中点を２箇所抽出し、国土座標上での振れを求め、各遺構から導き出された振れの平均値を算出する【推定中軸線１】。

また別の方法として、中軸線上に立地する金堂と講堂の中点を結んだ線を、推定中軸線と仮定しこれら２点の中点から算出される方向を、いま一つの中軸方向とした【推定中軸線２】。各推定中軸線の座標北からの振れは以下のようになる。

【推定中軸線１】：N2° 35′ 15″ E

【推定中軸線２】：N2° 11′ 28″ E

これら２つの中軸線を導き出した理由としては、S=1/500図上にて各検出遺構の中軸線からの距離を記載する作業を行なっていた際、中枢伽藍と外郭施設の建造方向に差があるのではないかと考えたことにある。結果として後述するように可能性の段階でしかないが、２種の中軸線を想定することで中枢伽藍と外郭施設の別で中軸線からの距離が整数値に近い値を算出することができた。これら２種の中軸線から導き出される各施設への距離は、表26に記載している。なお算出に用いた情報処理システムは、狭川によって作成された情報処理システムを用いた（狭川、1997）。

結果として導き出された設計中心線からの各施設の距離は、表26のようになる。

この値を天平尺（１尺＝0.297m±0.001m）で計算すると表26のようになる。求められた各値を図化したのが図124になり、結果としてやや西に狭い略方形の寺域が復原できる。

天平尺で計算した場合の、整数値からの開きを「整数誤差」として算出した。この目的としては、設計尺を導き出すことと、算出するための根拠となる金堂中点ならびに中軸線の座標北からの振れがいづれも作業仮説上に立脚しているため、蓋然性を確認する目的であった。しかし、先述したように推定中軸線の二者を用いて算出した場合、この整数誤差が少なくなる場合とそうでない場合の二者に分かれることが明らかになった。端的に述べると、【推定中軸線１】：N2° 35′ 15″ Eを用いて計算した場合には、全ての施設に対して整数誤差が0.3尺～0.4尺前後（8.9cm～11.9cm前後）になるのに対し、【推定中軸線２】：N2° 11′ 28″ Eで計算した場合は、中枢伽藍遺構の設計尺の整数誤差が前者よりも縮小するが、外郭施設の設計尺の整数誤差が増大するという結果になった。特に【推定中軸線２】にて計算した場合、外郭施設外の道路や寺周辺に広がる地割遺構の数値に散在傾向があり、導き出される数値に安定性を欠くという結果が見て取れる。これは、図124に表現されるように、中枢伽藍の建造方向と外郭施設の建造方向とに微妙な擦れが生じていることからも看取できる。したがって、設計方向に二者存在している可能性が指摘できる。しかし、その差は分単位（N0° 23′ 47″ E）の出来事なので、実際に現地での目視による弁別は不可能に近いものと言える。また今後の調査によって、検出される各種遺構の築造時期がどの段階においてなされたのかの検討にも、巨視的な視野での比較は可能であろうが、一調査区内での建造方向から導き出すのは至難の技であろう。ではこの設計方向の二者が何を意味しているのであろうか。これら二者は、中枢伽藍を構成する施

設と外郭施設の二者に分けることができる。したがって最も考えやすい時期差を想定することは可能であろう。しかし具体的にどの程度の時間幅で時期差を想定できるのかは、各施設から出土する遺物の持つ時間幅で考えることが可能であろうが、現状の遺物解釈の尺度から弁別できるのかは甚だ疑問である。これとて試みなければ解決の糸口は見い出せないため、今後の検討課題としたい。なお比較資料として従来の方法である講堂中点を基点とし、中軸線の座標北からの振れN2°Eで計算した値を、表26下に記載している。また中軸方向1および2同様に整数誤差の値も掲載している。表26に見るように、従来の方法では整数誤差の値が中軸方向1によって求められた値よりいづれも大きくなる傾向が読みとれる。また中軸方向2によって求められた値に対しては、中枢伽藍の値のみが大きく、他の施設に関しては下回る傾向がある。

3．残された課題

外郭施設に関する所見から、寺域の範囲について巨視的には次第に明らかになりつつある。しかし、具体的な構造については、不確定な要素が多く今後の検討課題とせざるを得ない。また従来より説かれている付帯施設（僧房、経蔵、鐘楼、中門、南門）の位置と構造など国分寺中枢施設に関しても、まだ未解明の部分がある。また外郭範囲に関しても、北外郭施設位置が明らかになっていない等、残された課題が山積していることも事実である。今後は面的な調査もさることながら、外郭施設の確認等、線の確認には試掘調査で行なえる場合があり、この際に遺構確認と座標付与が必要となってこよう。（中島恒次郎）

文献
森田勉（1983）「筑前国分寺」『佛教藝術』146号　毎日新聞社
文化庁文化財保護課史跡研究会（1991）『図説日本の史跡　第5巻　古代2』同朋舎

遺跡名	次数	遺構	性格	座標			抽出点	中軸方向1 実数距離 (m)		中軸方向1 小尺距離 (尺)			整数誤差	中軸方向2 実数距離		中軸方向2 小尺距離			整数誤差	備考
				X座標	Y座標			X方向	Y方向	0.296m	0.297m	0.298m		X方向	Y方向	0.296m	0.297m	0.298m		
筑前国分寺跡	006	礎石建物跡	講堂跡	中軸線	57514.1800	-45594.7100	任意中点	46.2927	0.3203	156.3944	155.8678	155.3448	0.3448	46.2938	0.0001	156.3981	155.8715	155.3485	0.3485	
筑前国分寺跡	004	礎石建物跡	塔跡	中軸線	57436.9500	-45572.2500	心礎中心	29.8445	25.6035	86.4983	86.3071	85.9178	0.9178	30.0210	25.3964	85.7985	85.5096	85.2227	0.2227	Y方向
筑前国分寺跡	004	礎石建物跡	塔跡	中軸線	57436.9500	-45572.2500	心礎中心	29.8445	25.6035	100.8260	100.4866	100.1493	0.1493	30.0210	25.3964	101.4222	101.0807	100.7415	0.7415	X方向
筑前国分寺跡	006	塀	東回廊西面落塀	中軸線	57453.0000	-45555.1500	任意中心（南端）	13.0389	41.9615	141.7617	141.2843	140.8102	0.8102	13.3289	41.8702	141.4534	140.9772	140.5041	0.5041	
筑前国分寺跡	006	塀	東回廊東面落塀	中軸線	57465.3400	-45547.7100	任意中心（北端）	0.3756	48.8367	164.9890	164.4335	163.8817	0.0110	0.7135	48.8330	164.9763	164.4208	163.8691	0.0237	
筑前国分寺跡	006	塀	東回廊東面落塀	中軸線	57434.6700	-45548.7000	任意中心（南端）	31.0590	49.2324	166.3257	165.7657	165.2095	0.2095	31.3989	49.0163	165.5956	165.0381	164.4842	0.0381	
筑前国分寺跡	006	塀	北回廊北面落塀	中軸線	57466.8200	-45562.2500	任意中心（西端）	0.4465	34.2448	1.5085	1.5034	1.4983	0.4915	0.3095	34.2470	0.7078	0.7054	0.7031	0.2922	
筑前国分寺跡	006	塀	北回廊北面落塀	中軸線	57466.3900	-45548.2800	任意中心（東端）	0.6476	48.2200	2.1880	2.1806	2.1733	0.1733	0.3139	48.2232	1.0606	1.0570	1.0535	0.0535	
筑前国分寺跡	021	21SD009	西外郭塀	外郭施設	57400.0000	-45693.5000	任意中心	72.2309	93.8547	317.0767	316.0091	314.9486	0.0514	71.5797	94.3523	318.7578	317.6845	316.6184	1.6184	
筑前国分寺跡	021	21SD065	西外郭塀	外郭施設	57426.2000	-45692.1800	任意中心	45.9980	-93.7189	316.6179	315.5518	314.4929	0.5518	45.3484	94.0350	317.6857	316.6160	315.5536	0.5536	
筑前国分寺跡	021	21SD080	西外郭塀	外郭施設	57431.6000	-45686.3500	任意中心（北端）	40.3403	88.1386	297.7656	296.7631	295.7672	0.7672	39.7294	88.4157	298.7016	297.6959	296.6969	1.6969	
筑前国分寺跡	021	21SD080	西外郭塀	外郭施設	57420.4100	-45686.6800	任意中心（南端）	51.5338	87.9631	297.1726	296.1720	295.1782	0.1782	50.9239	88.3176	298.3703	297.3657	296.3678	1.3678	
筑前国分寺跡	021	21SA020d	西外郭板塀	外郭施設	57404.0000	-45691.2500	任意中心	68.1334	91.7876	310.0932	309.0491	308.0120	0.0932	67.4966	92.2569	311.6786	310.6292	309.5868	0.4132	
筑前国分寺跡	021	21SA020b	西外郭板塀	外郭施設	57401.0000	-45691.4000	任意中心	71.1371	91.8020	310.1418	309.0976	308.0603	0.1418	70.5001	92.2921	311.7975	310.7477	309.7049	0.2951	
筑前国分寺跡	021	21SA075c	西外郭板塀	外郭施設	57430.3000	-45689.9200	任意中心	41.8002	91.6463	309.6159	308.5734	307.5379	0.3841	41.1650	91.9334	310.5857	309.5399	308.5012	0.4601	
筑前国分寺跡	023	23SD015	東外郭塀	外郭施設	57520.0000	-45498.7000	任意中心	56.4414	95.3290	322.0576	320.9732	319.8961	0.1039	55.7803	95.7173	323.3694	322.2806	321.1991	1.1991	
筑前国分寺跡	007	7SD090	東外郭南北溝	外郭施設	57418.5000	-45503.9200	任意中心（北端）	45.1908	94.6968	319.9216	318.8444	317.7744	0.0784	45.8450	94.3818	318.8574	317.7838	316.7174	1.1426	
筑前国分寺跡	007	7SD090	東外郭南北溝	外郭施設	57408.7100	-45503.8800	任意中心（南端）	54.9690	95.1787	321.5498	320.4671	319.3917	0.4671	55.6264	94.7961	320.2570	319.1787	318.1076	0.2570	
筑前国分寺跡	014	14SA070a	東外郭板塀	外郭施設	57496.4700	-45501.4500	柱痕中心	32.8112	93.6442	316.3654	315.3002	314.2421	0.3002	32.1624	93.8690	317.1250	316.0572	314.9996	0.0034	
筑前国分寺跡	013	13SA010	南辺築地塀	外郭施設	57392.9000	-45652.9500	任意中心（東端）	77.4930	53.0255	261.8005	260.9190	260.0435	0.0435	77.1242	53.5605	260.5546	259.6773	258.8059	0.3227	
筑前国分寺跡	013	13SA010	南辺築地塀	外郭施設	57393.7500	-45677.8300	任意中心（西端）	77.7671	77.9185	262.7266	261.8420	260.9634	0.9634	77.2260	78.4548	260.8987	260.0202	259.1477	0.0202	
筑前国分寺跡	010	10SD010	寺域外南北溝	その他	57311.7000	-45487.9500	任意中心	151.1609	115.4722	390.1088	388.7953	387.4906	0.1088	151.9564	114.4234	386.5655	385.2639	383.9711	0.2639	
筑前国分寺跡	011	11SD001	寺域外南北溝	その他	57572.6100	-45679.9600	任意中心	100.8144	88.1213	297.7072	296.7048	295.7091	0.7091	101.4218	87.4216	295.3431	294.3487	293.3609	0.3431	
筑前国分寺跡	011	11SD020	寺域外南北溝	その他	57562.9600	-45699.0600	任意中心	90.3119	106.7662	360.6965	359.4821	358.2758	0.5179	91.0486	106.1386	358.5765	357.3692	356.1700	1.4235	
辻遺跡	002	2SD015	寺域外南北溝	その他	57513.1200	-45478.9600	任意中心	50.4596	115.3600	389.7281	388.4159	387.1125	0.2719	49.6601	115.7060	390.8985	389.5623	388.2752	0.4177	
筑前国分寺跡	017	17SD030	東西道路側溝	その他	57382.8500	-45742.0000	任意中心（東端）	91.5530	141.5396	309.3008	308.2594	307.2250	0.6992	90.5714	142.1611	305.9846	304.9543	303.9310	0.9846	
筑前国分寺跡	017	17SD030	東西道路側溝	その他	57382.5200	-45757.0000	任意中心（西端）	92.5600	156.5008	312.7024	311.6500	310.6037	0.6037	91.4747	157.1376	309.0361	307.9956	306.9620	1.9620	

※座標の方法で算出

ゴチック体数字：最新基準尺の算出根拠値

遺跡名	次数	遺構	性格	座標			抽出点	実数距離 (m)		小尺距離 (尺)			整数誤差
				X座標	Y座標			X方向	Y方向	0.296m	0.297m	0.298m	
筑前国分寺跡	006	礎石建物跡	講堂跡	中軸線	57514.1800	-45594.7100	任意中点	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
筑前国分寺跡	004	礎石建物跡	塔跡	中軸線	57436.9500	-45572.2500	心礎中心	76.3991	25.1416	84.9379	84.6519	84.3678	0.0621
筑前国分寺跡	004	礎石建物跡	塔跡	中軸線	57436.9500	-45572.2500	心礎中心	76.3991	25.1416	258.1051	257.2361	256.3729	1.3729
筑前国分寺跡	006	塀	東回廊西面落塀	中軸線	57453.0000	-45555.1500	任意中心（南端）	59.7621	41.6711	140.7806	140.3066	139.8357	0.1643
筑前国分寺跡	006	塀	東回廊東面落塀	中軸線	57465.3400	-45547.7100	任意中心（北端）	47.1700	48.6759	164.4455	163.8918	163.3418	0.5545
筑前国分寺跡	006	塀	東回廊東面落塀	中軸線	57434.6700	-45548.7000	任意中心（南端）	77.8559	48.7568	164.7190	164.1644	163.6135	0.2810
筑前国分寺跡	006	塀	北回廊北面落塀	中軸線	57466.8200	-45562.2500	任意中心（西端）	46.1983	34.0931	156.0754	155.5499	155.0279	0.0279
筑前国分寺跡	006	塀	北回廊北面落塀	中軸線	57466.3900	-45548.2800	任意中心（東端）	46.1405	48.0696	155.8801	155.3552	154.8339	0.1661
筑前国分寺跡	021	21SD009	西外郭塀	外郭施設	57400.0000	-45693.5000	任意中心	117.5582	94.7450	320.0844	319.0067	317.9362	0.0844
筑前国分寺跡	021	21SD065	西外郭塀	外郭施設	57426.2000	-45692.1800	任意中心	91.3281	94.3402	318.7168	317.6437	316.5778	1.5778
筑前国分寺跡	021	21SD080	西外郭塀	外郭施設	57431.6000	-45686.3500	任意中心（北端）	85.7279	88.7022	299.8695	298.6605	297.6583	0.3305
筑前国分寺跡	021	21SD080	西外郭塀	外郭施設	57420.4100	-45686.6800	任意中心（南端）	96.9226	88.6414	299.4644	298.4561	297.4545	0.5356
筑前国分寺跡	021	21SA020d	西外郭板塀	外郭施設	57404.0000	-45691.2500	任意中心	113.4821	92.6360	312.9593	311.9056	310.8589	0.8589
筑前国分寺跡	021	21SA020b	西外郭板塀	外郭施設	57401.0000	-45691.4000	任意中心	116.4855	92.6812	313.1121	312.0578	311.0107	1.0107
筑前国分寺跡	021	21SA075c	西外郭板塀	外郭施設	57430.3000	-45689.9200	任意中心	87.1517	92.2246	311.5697	310.5206	309.4786	0.5206
筑前国分寺跡	023	23SD015	東外郭塀	外郭施設	57520.0000	-45498.7000	任意中心	9.1672	95.7484	323.4743	322.3852	321.3033	1.3033
筑前国分寺跡	007	7SD090	東外郭南北溝	外郭施設	57418.5000	-45503.9200	任意中心（北端）	92.4532	94.0739	317.8172	316.7471	315.6842	0.6842
筑前国分寺跡	007	7SD090	東外郭南北溝	外郭施設	57408.7100	-45503.8800	任意中心（南端）	102.2358	94.4555	319.1065	318.0325	316.9648	0.8935
筑前国分寺跡	014	14SA070a	東外郭板塀	外郭施設	57496.4700	-45501.4500	柱痕中心	14.4445	93.8213	316.9637	315.8965	314.8364	0.1636
筑前国分寺跡	013	13SA010	南辺築地塀	外郭施設	57392.9000	-45652.9500	任意中心（東端）	123.2387	53.9719	416.3468	414.9450	413.5526	0.0550
筑前国分寺跡	013	13SA010	南辺築地塀	外郭施設	57393.7500	-45677.8300	任意中心（西端）	123.2575	78.8664	416.4104	415.0084	413.6157	0.0084
筑前国分寺跡	010	10SD010	寺域外南北溝	その他	57311.7000	-45487.9500	任意中心	198.6308	113.7614	384.3291	383.0351	381.7497	0.6709
筑前国分寺跡	011	11SD001	寺域外南北溝	その他	57572.6100	-45679.9600	任意中心	45.1085	105.9888	358.0704	356.8647	355.6672	0.6672
筑前国分寺跡	011	11SD020	寺域外南北溝	その他	57562.9600	-45699.0600	任意中心	90.3119	106.7662	360.6965	359.4821	358.2758	0.5179
辻遺跡	002	2SD015	寺域外南北溝	その他	57513.1200	-45478.9600	任意中心	2.9803	115.7165	390.9341	389.6178	388.3103	0.3822
筑前国分寺跡	017	17SD030	東西道路側溝	その他	57382.8500	-45742.0000	任意中心（東端）	136.3903	142.6169	460.7782	459.2267	457.6857	0.7733
筑前国分寺跡	017	17SD030	東西道路側溝	その他	57382.5200	-45757.0000	任意中心（西端）	137.2436	157.5963	463.6609	462.0998	460.5491	0.5491

表26. 各施設の推定中軸線からの距離

整数誤差	中軸方向1	中軸方向2	従来の方法
中軸線設	0.3884	0.2780	0.4105
外郭施設	0.3172	0.7192	0.6174
その他	0.4851	0.8991	0.5934
全体傾向	0.3756	0.6285	0.5468

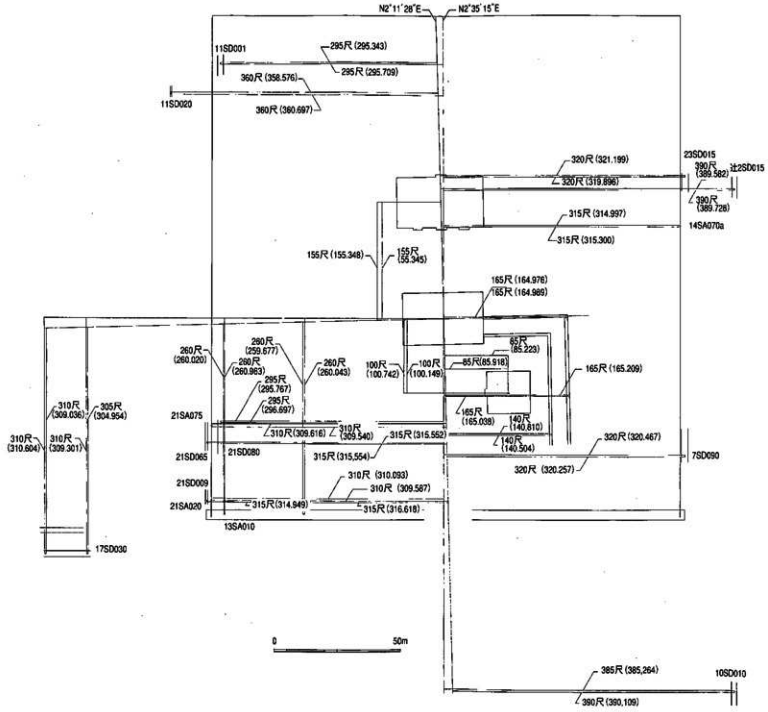


図124. 各施設の推定中軸線からの距離（概念図）

付編

筑前国分寺跡　第17次調査報告の補足

筑前国分寺跡第17次調査は、『筑前国分寺跡I』（太宰府市の文化財第32集）1997年　太宰府市教育委員会（以下前集とする）において報告済みであるが、遺物洗浄段階での不注意によって先頃いくつかの資料が見つかった。主要な遺物はすでに前集ですべて掲載されているが、ここでは今回見つかった表土出土の瓦1点と、不足分を追加した出土遺物一覧表を提示し追加報告としたい。

表土出土瓦（図121、写70）

軒平瓦

均整唐草文を配する鴻臚館式で、瓦当厚5.5cmを測る。平瓦部凹面には幅2.7～3.6cmの模骨痕が連続して残るが、先端付近は横方向のヘラケズリで擦り消される。瓦当先端近くまで模骨痕が観察されることから、桶に巻かれた状態で瓦当が取り付けられた可能性も残る。（狭川真一）

図125.　第17次　表土出土軒平瓦（1/4）

表27.　第17次　出土遺物一覧（追加分）

S-5 (17SE005) 暗茶色土

須恵器	甕、壺(耳付)
土師器	椀c、坏a、甕、鉢
黒色土器A	椀c、破片
越州窯系青磁	椀：I (3)、I-1 (1)、I-2 (1)、II-2 (1)、II-2 c (1)、II-3 a (1)
石製品	滑石製権
瓦類	文字瓦(介XII)、破片(縄目叩、格子叩)

S-5 (17SE005) 茶色粘土

須恵器	甕
土師器	甕、椀c、坏a
越州窯系青磁	椀：II (1)、I-2ア (1)
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)、丸瓦、文字瓦

S-6

須恵器	鉢、坏
土師器	甕、椀c、皿c
	前期土器(玄界灘式)
瓦類	平瓦(縄目叩)

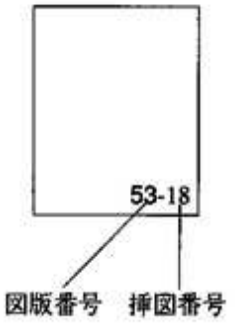
S-20 (17SK020) 上層

須恵器	壺
土師器	甕a、椀c、高坏、鉢
瓦類	軒丸瓦、平瓦、丸瓦(縄目叩、格子叩)

写　真　図　版

凡　例

写真図版右下の番号は、
以下の要領で理解できる。



筑前国分寺跡近景（西より）

東方より国分寺を見る

国21-1次調査地全景（上が西）

国21-1次調査地全景（上が南）

外郭施設近景（南より）

外郭施設近景（北より）

21-1SA020b完掘状況（東から）

21-1SA020c完掘状況（東から）

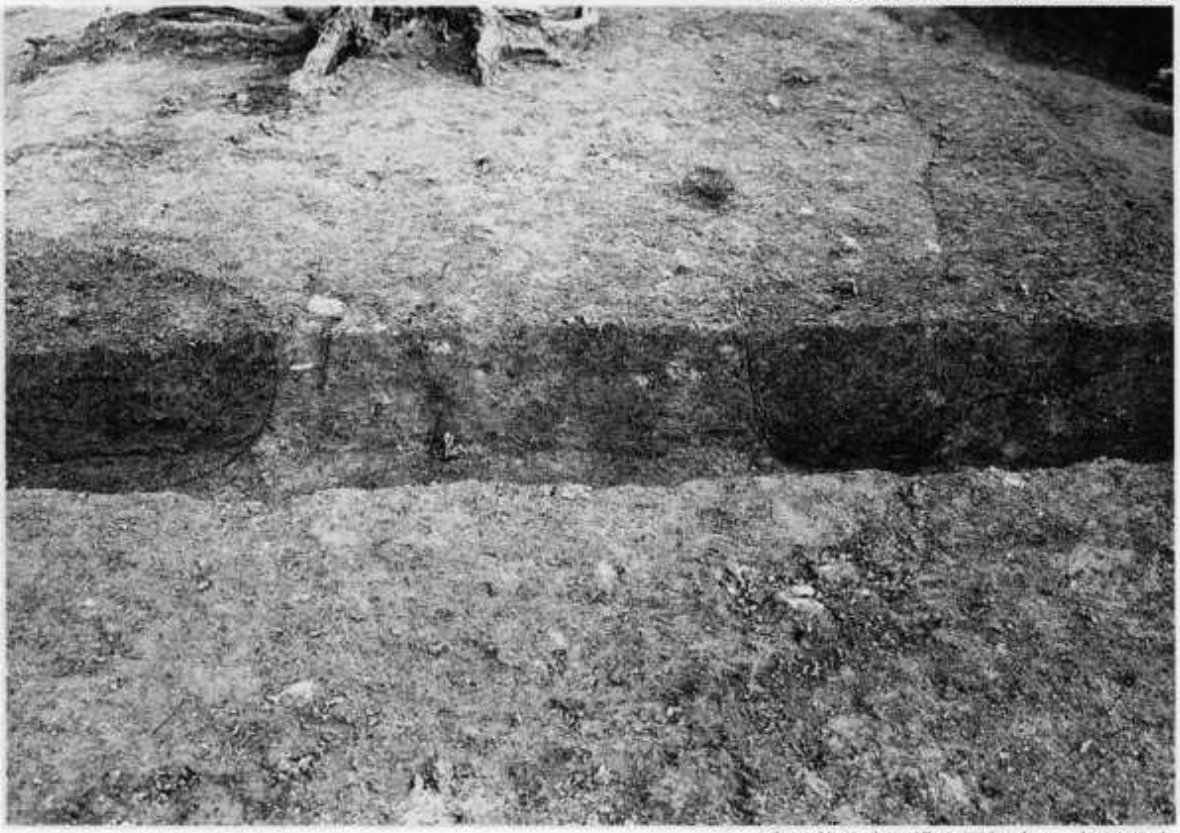
21-1SA020d完掘状況（東から）

21-1SA020e完掘状況（東から）

南辺築地検出状況（西から）

21-1次

南辺築地南側溝土層観察１（西から）



南辺築地南側溝土層観察２（西から）

南辺築地南側溝土層観察３（西から）

南辺築地南側溝土層観察４（西から

21-1SD015完掘状況（東から）

21-1SX001土層観察（西から）

21-1SD015検出状況（北から）

調査区西側遺構検出状況（南から）

21-1SD004土層観察（南から）

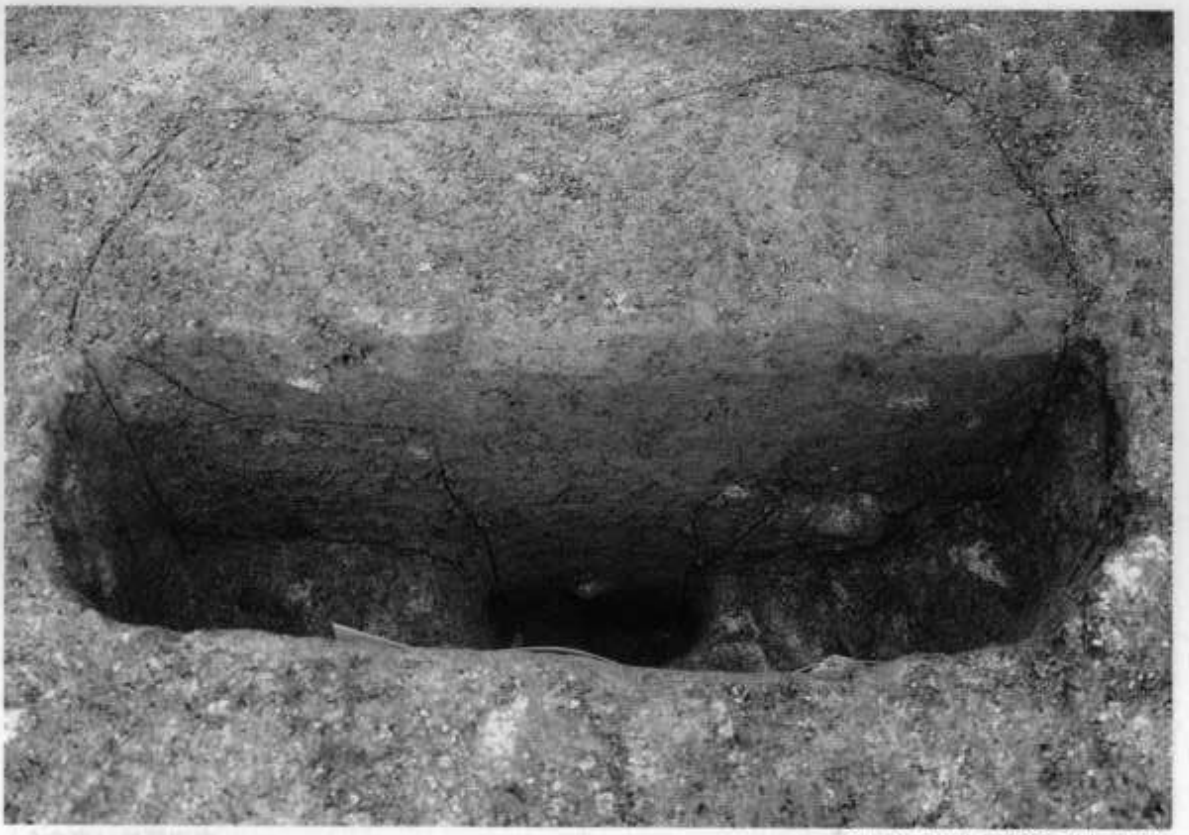
21-1SX001南北土層壁面（東から）

21-1SD004完掘（南から）

21-1SD004完掘（西から）

南辺築地（東から）

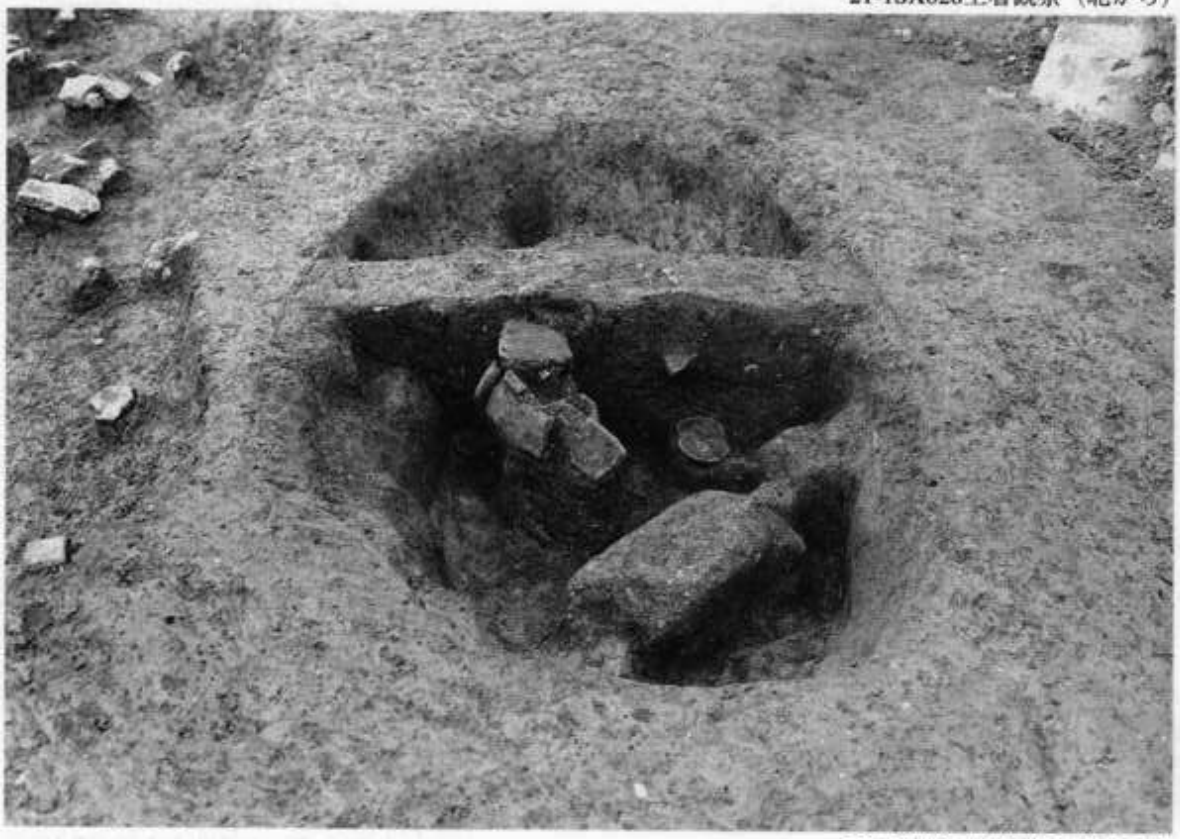
21-1SX025完掘（東から）



21-1SX019土層観察（南から）

21-1SX009土層観察（北から）

21-1SX028土層観察（北から）

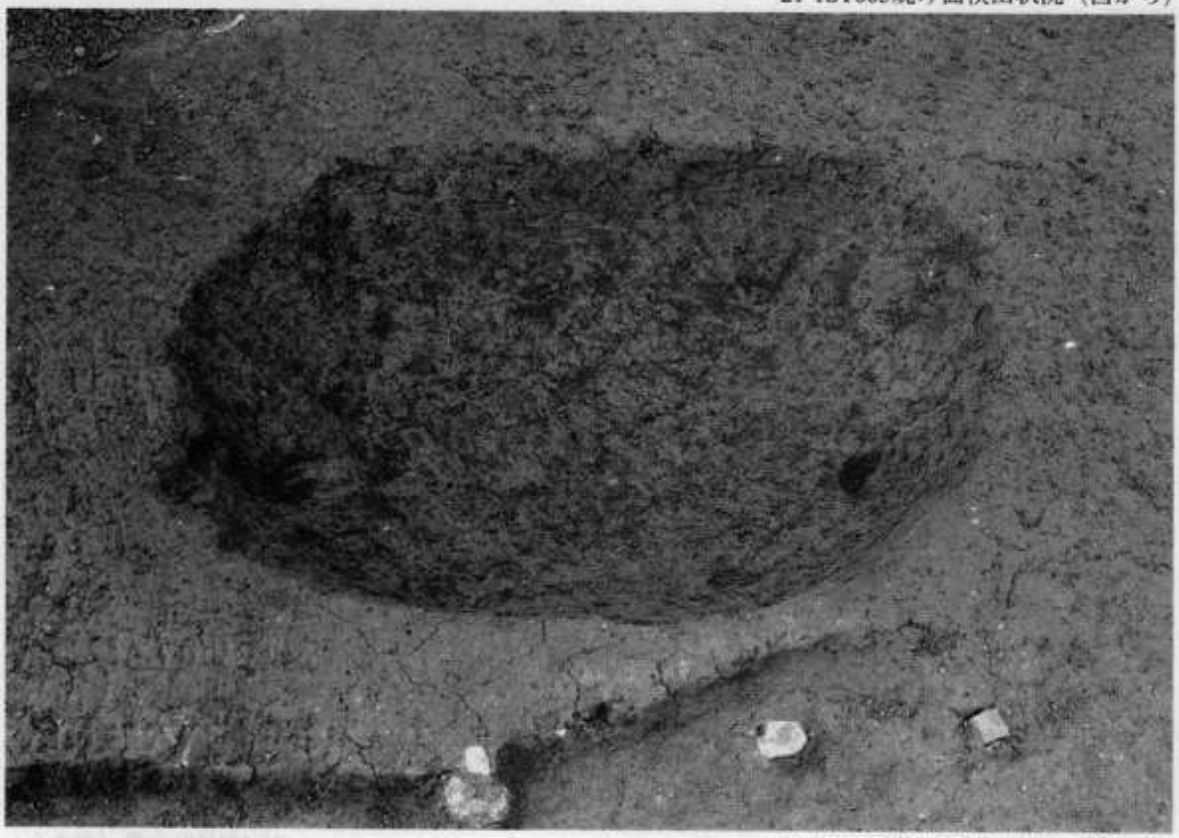


21-1ST005土層観察（北から）

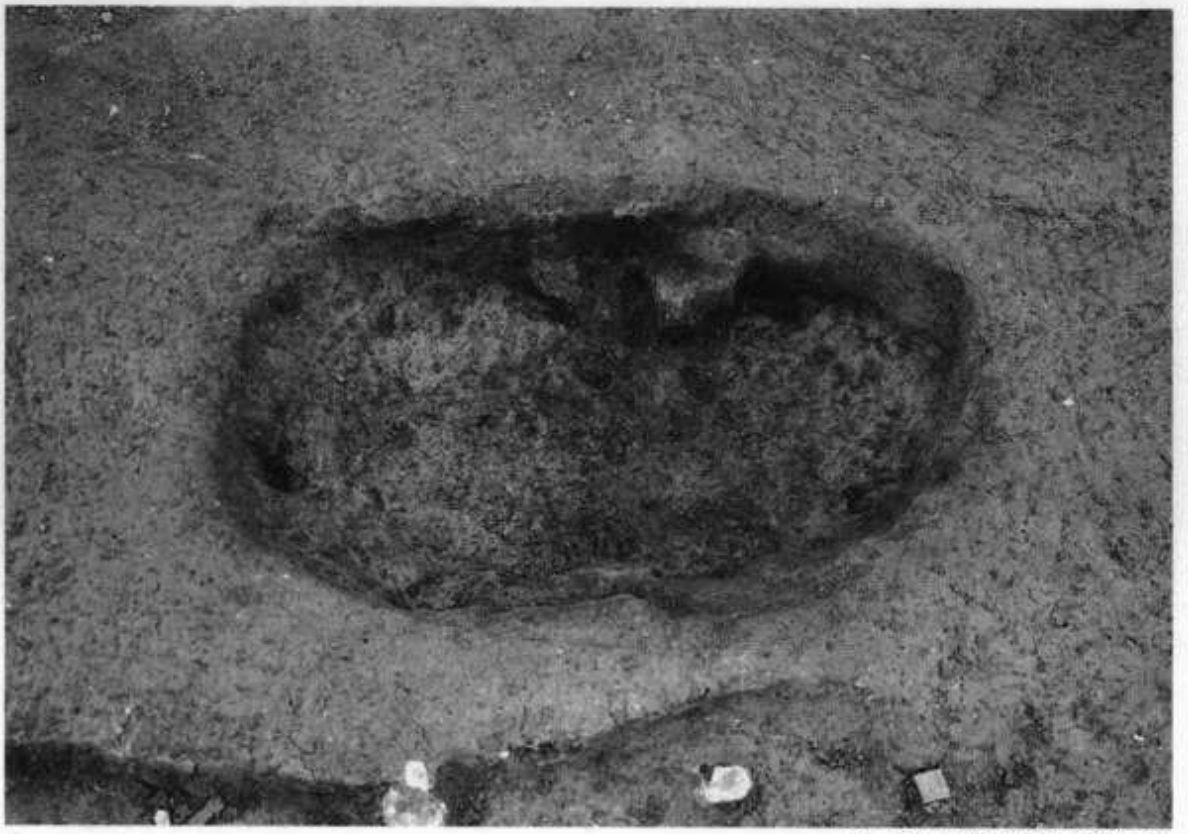
21-1ST005土層観察（南から）

21-1ST005礫・土器出土状況（東から）

21-1ST005焼け面検出状況（西から）



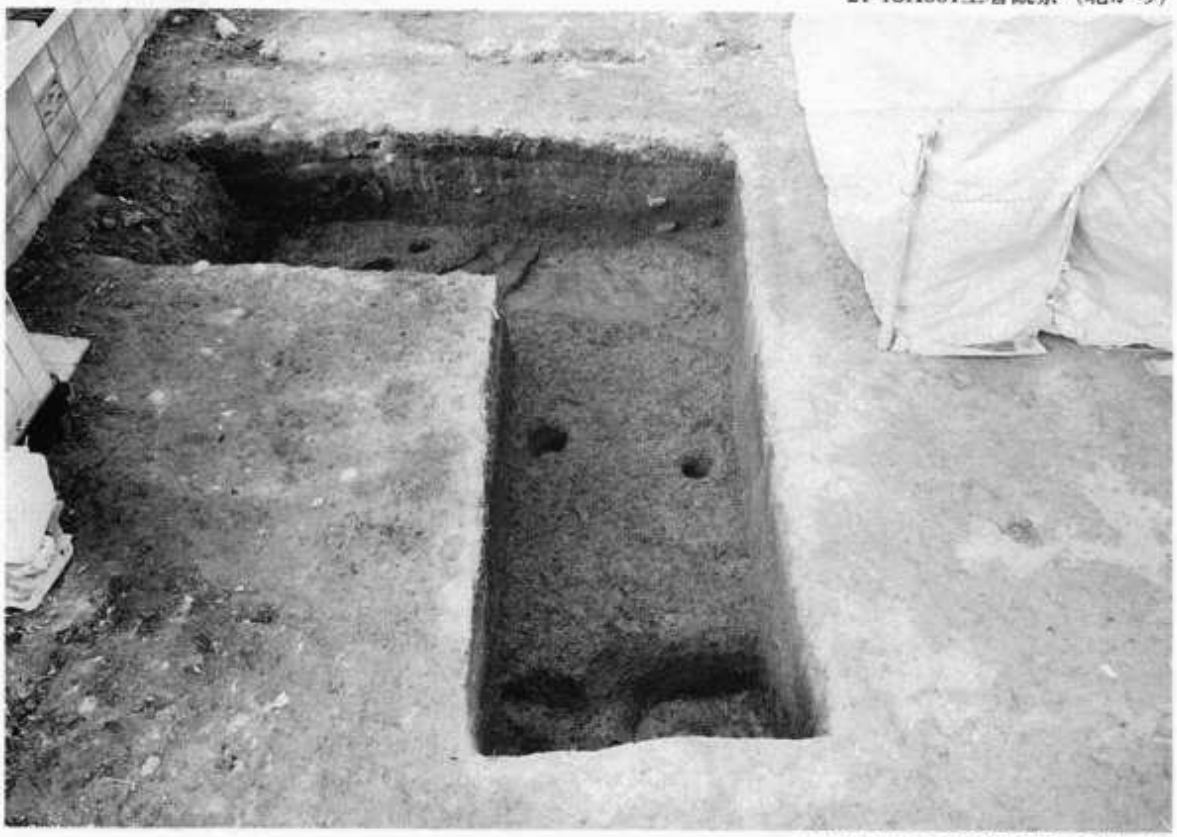
21-1ST005焼土面出土状況（東から）



21-1ST005完掘状況（東から）

21-1SX001全景（北から）

21-1SX001土層観察（北から）

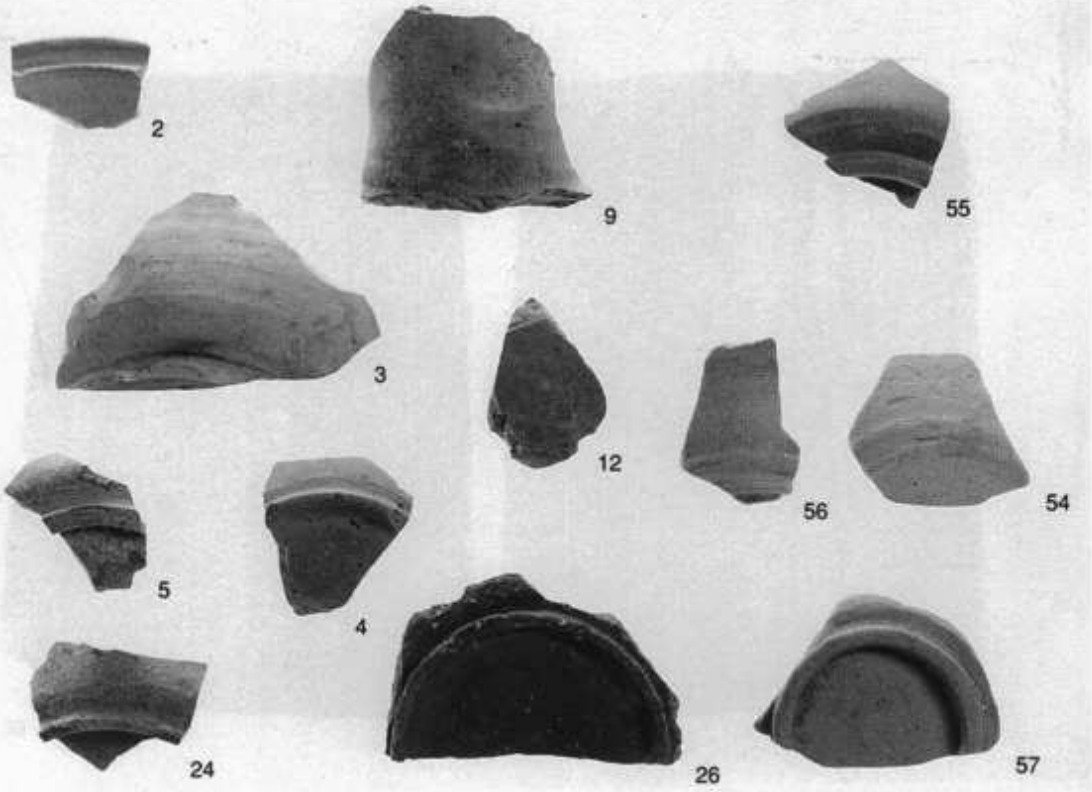


21-1Aトレンチ完掘状況（南から）

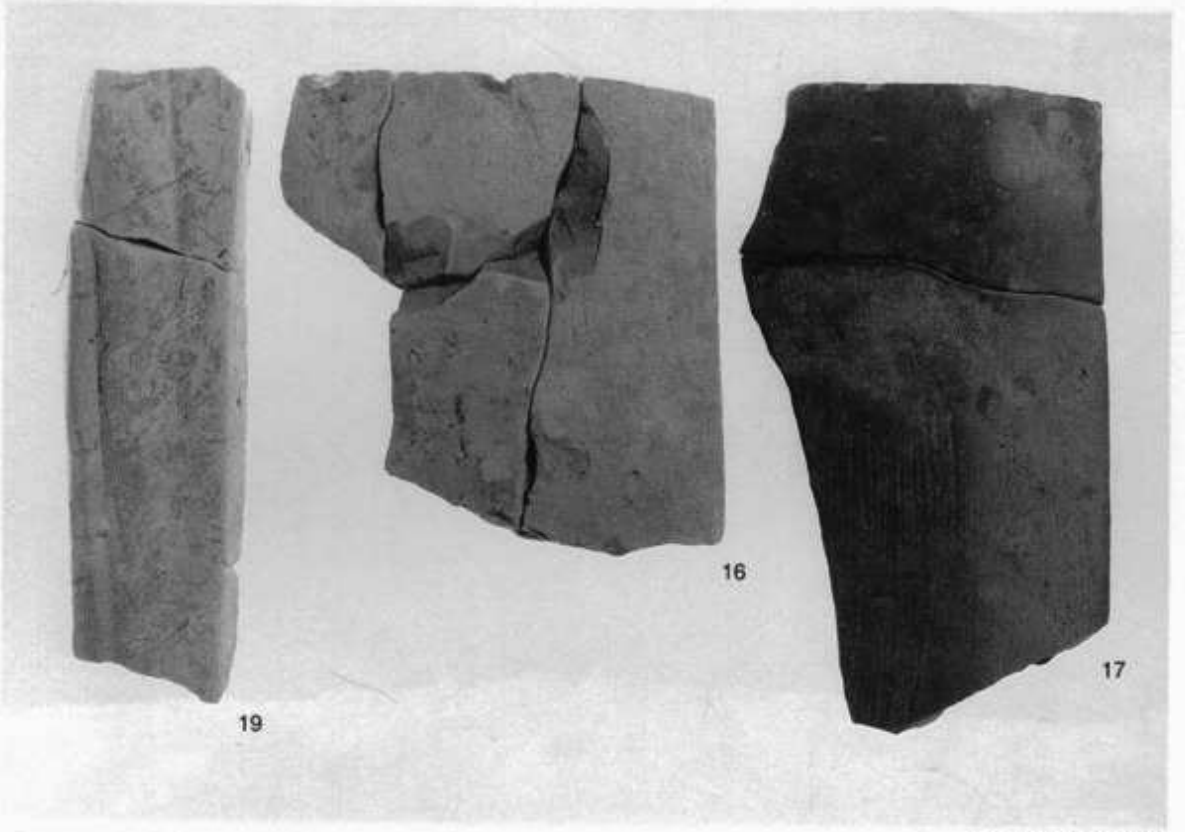
21-1Aトレンチ完掘状況（北から）

21-1Aトレンチ東側壁土層観察１（西から）

21-1Aトレンチ東側壁土層観察２（西から）

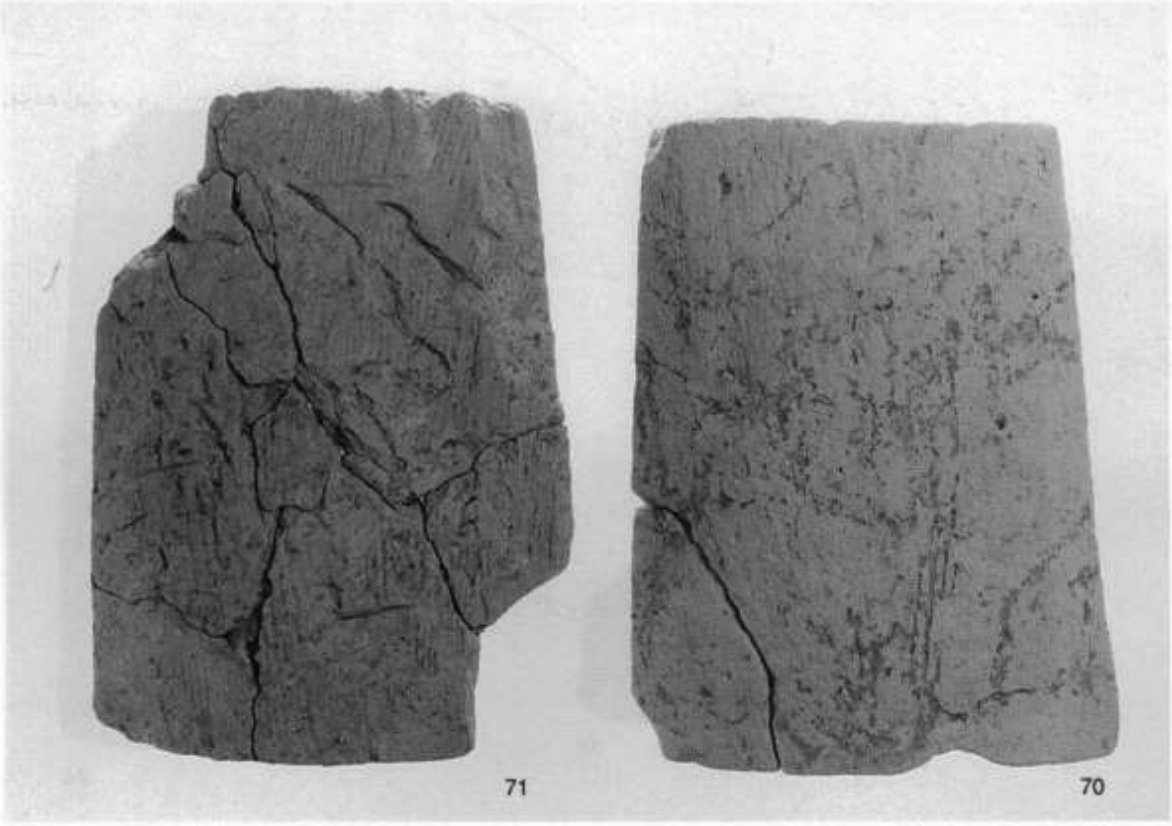


21-1SD004・SD023出土遺物

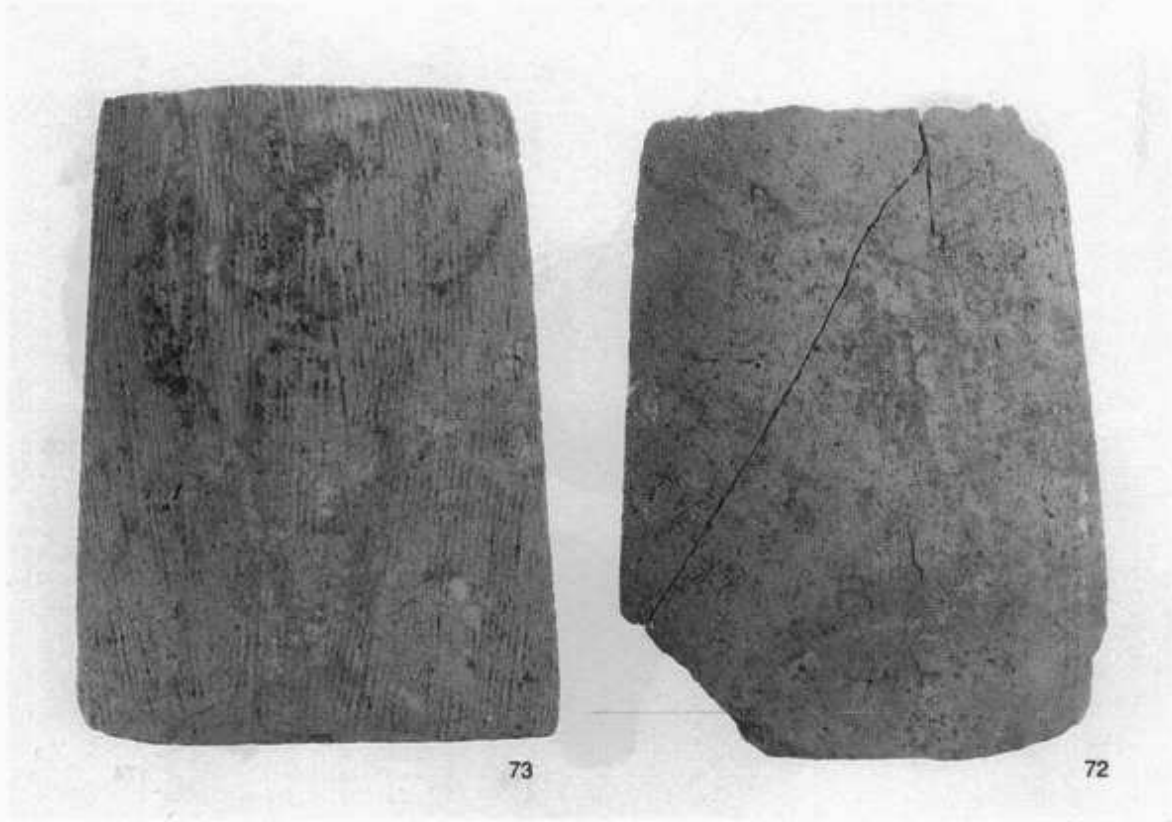


21-1SD004出土瓦

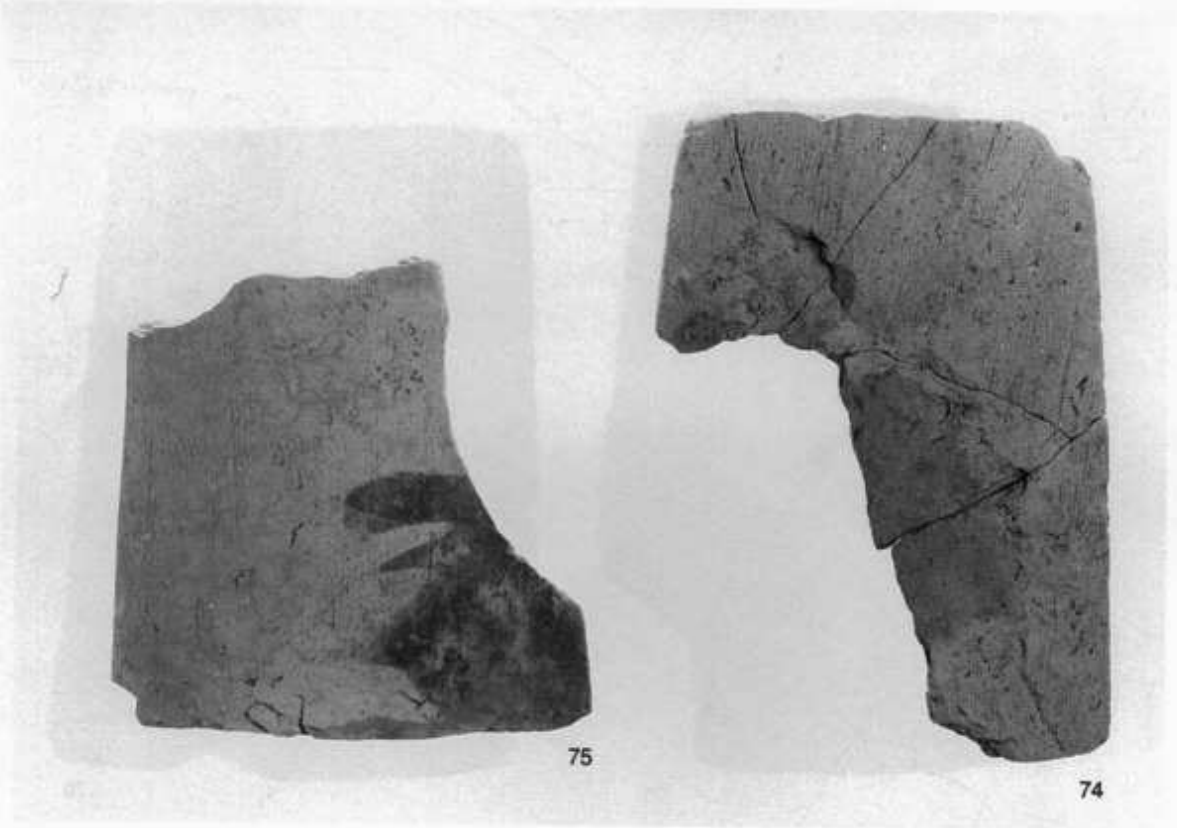
21-1SD015出土瓦 1　凸面



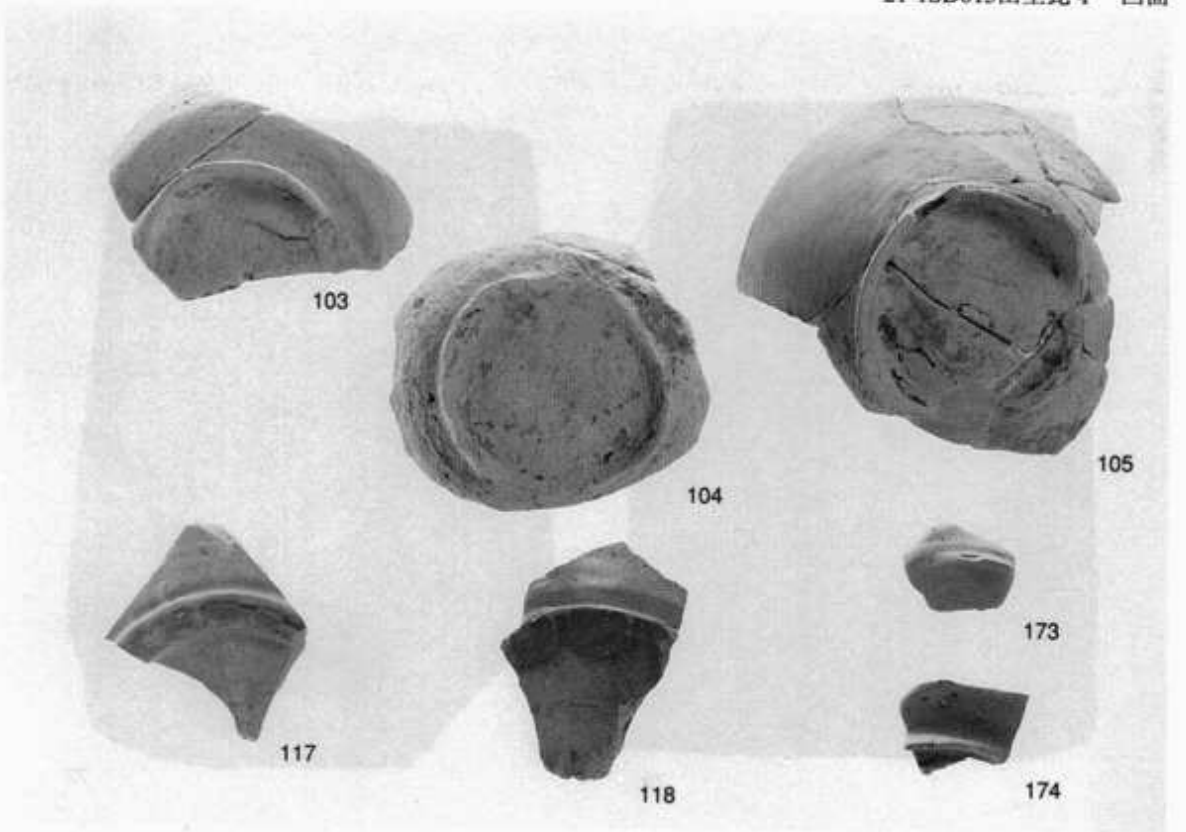
21-1SD015出土瓦２　凹面



21-1SD015出土瓦３　凸面



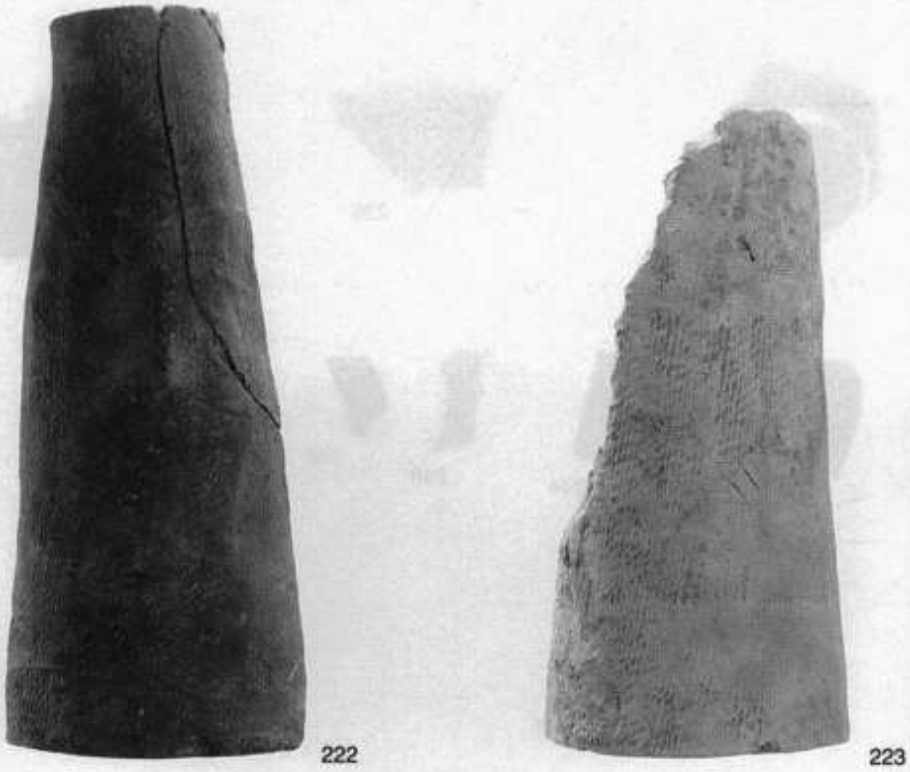
21-1SD015出土瓦４　凹面



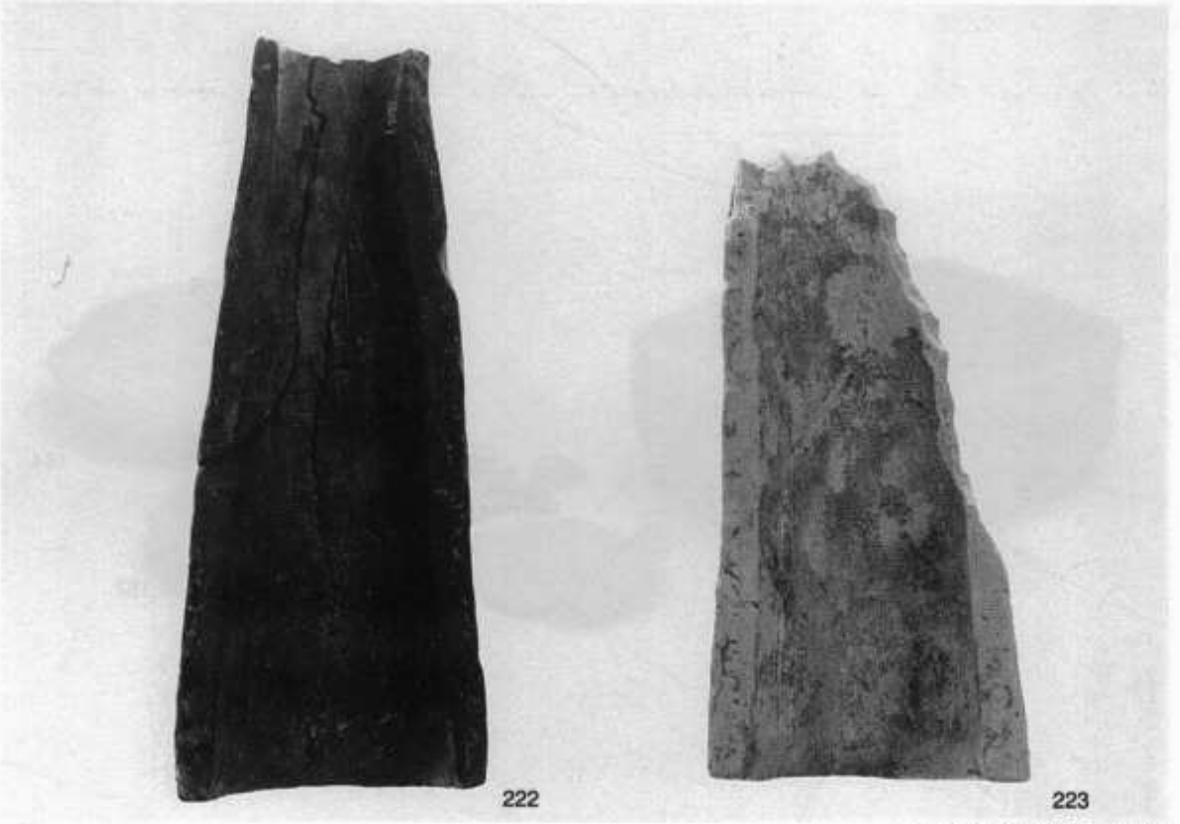
21-1SX001茶褐色土・SX009出土遺物

21-1次

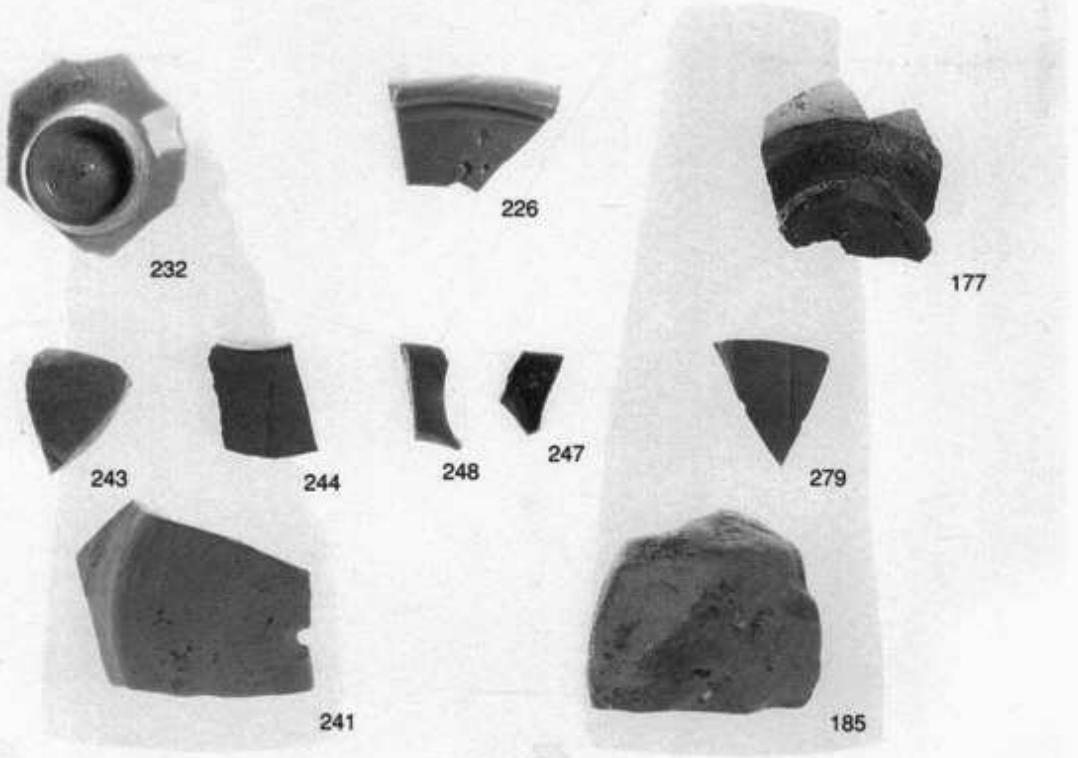
21-1SX005出土遺物



21-1SX038出土瓦　凸面

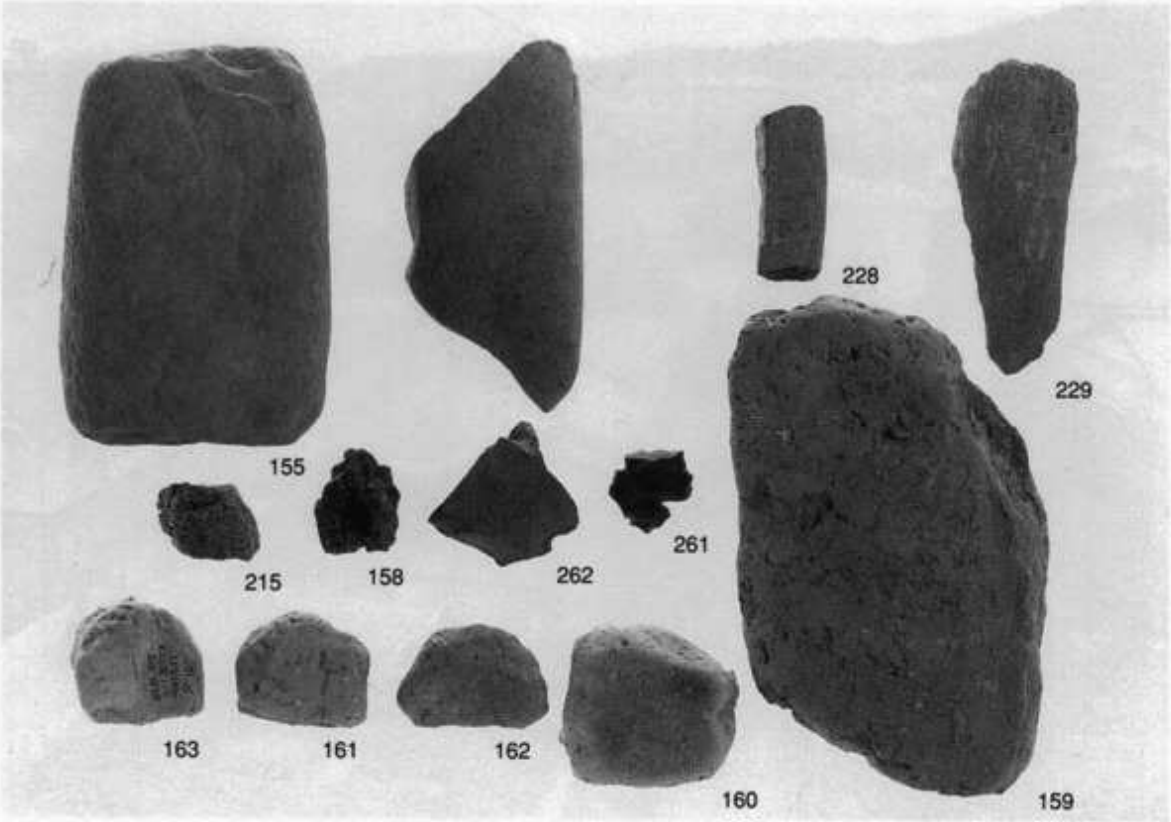


21-1SX038出土瓦　凹面



21-1茶褐色土他出土遺物

21-1次



21-1出土石製品・土製品・鉱滓

21-2次調査地から国分寺を望む（西から）

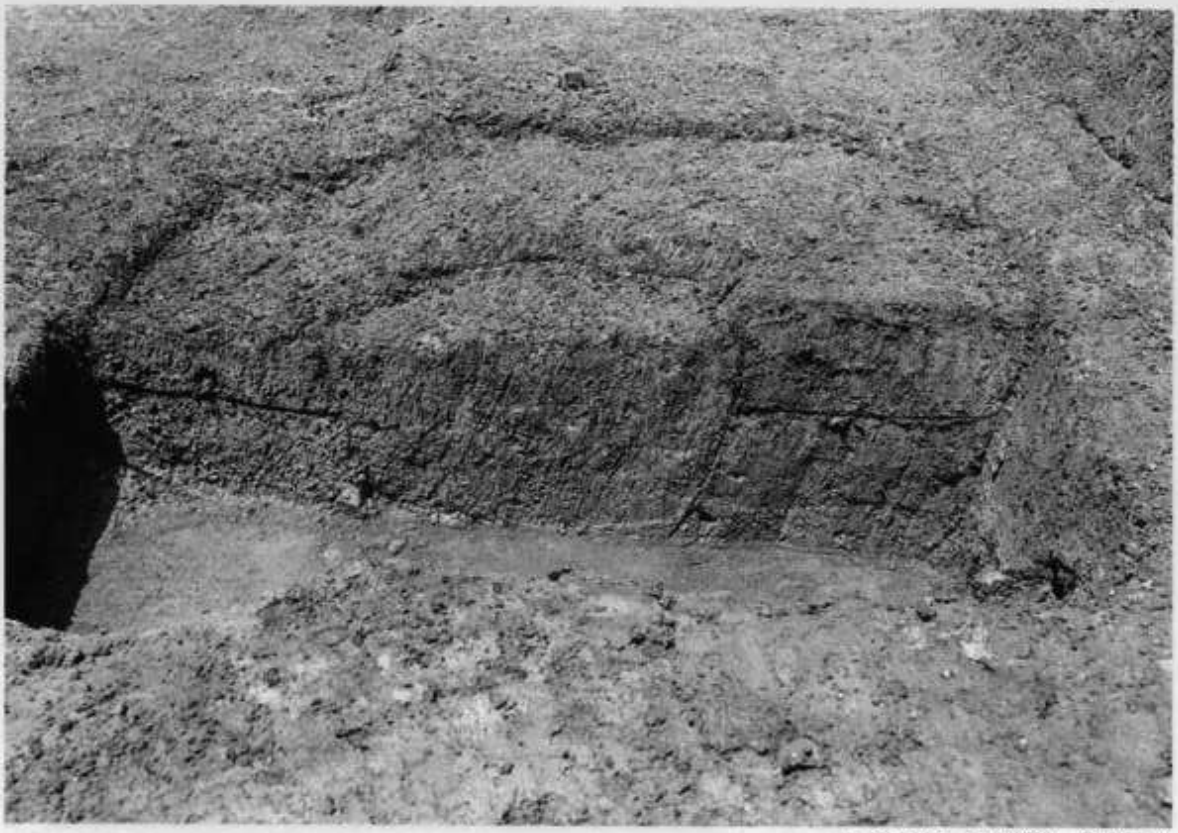
21-2次調査区西半部全景（上が東）

21-2SX055完掘状況（南から）

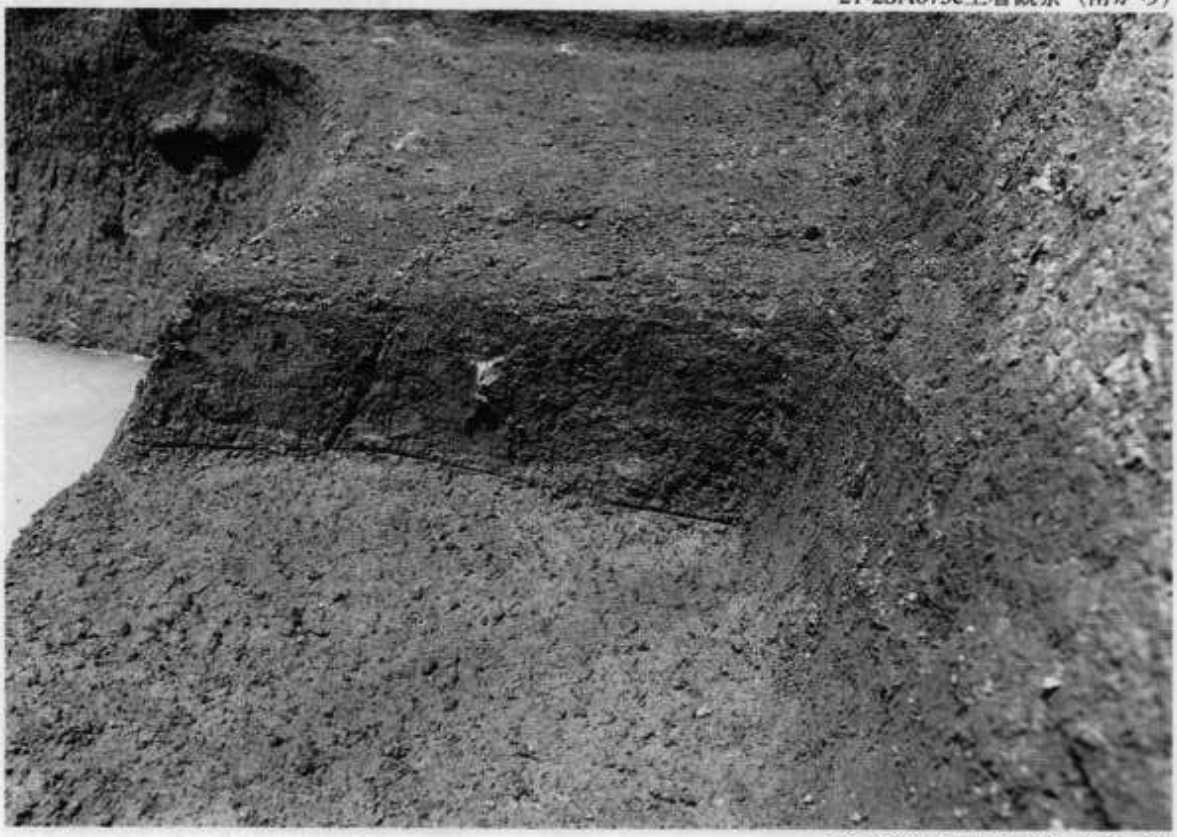
21-2SD060・065完掘状況（南から）

21-2次西半部北壁土層観察（南から）

21-2SD070・060土層観察（南から）



21-2SA075c土層観察（南から）



21-2SA075b土層観察（南から）

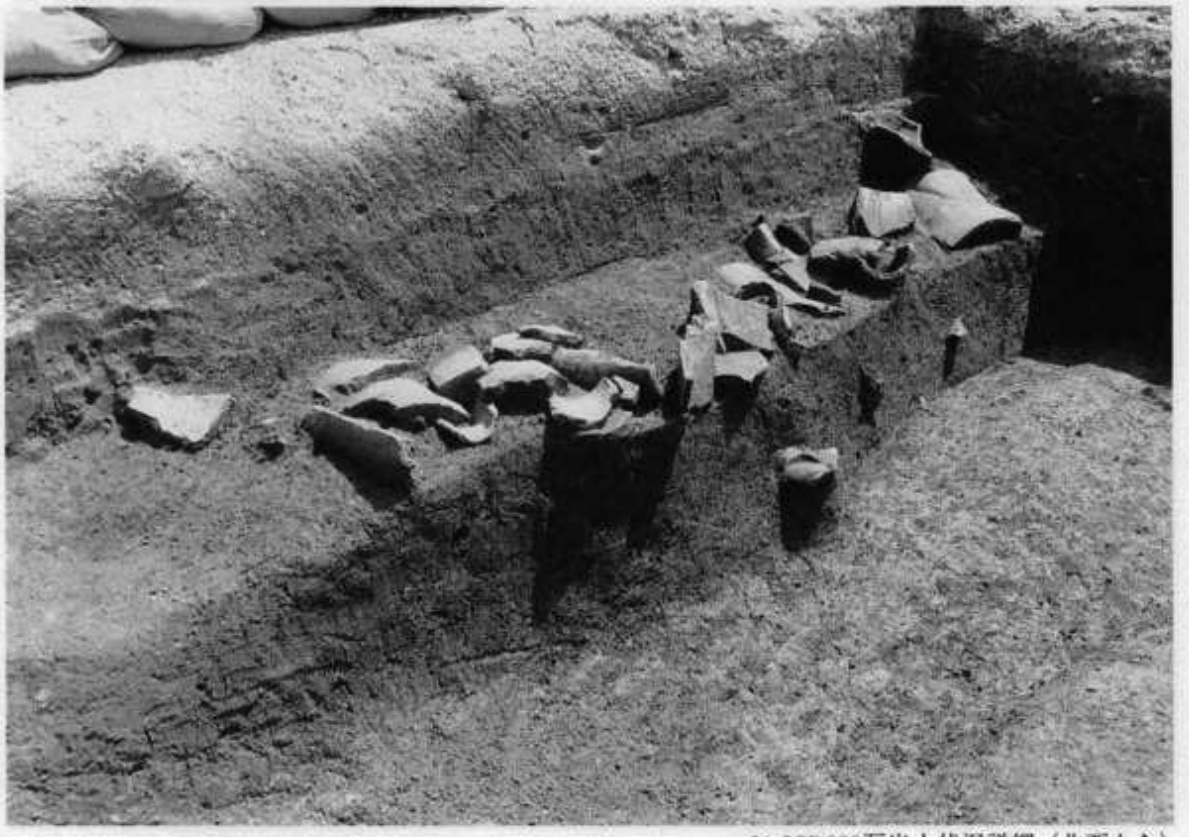
21-2次調査区東半部全景（上が東）

21-2次調査区東半部全景（南西から）

21-2次東半部北壁土層観察（南から）

21-2SD080瓦出土状況（西から）

21-2SD080瓦出土状況詳細（西から）



21-2SD080瓦出土状況詳細（北西から）

21-2SD080出土瓦

46-1（凸）

46-1（凹）

46-2（凸）

46-2（凹）

48-8（凸）

48-8（凹）

48-9（凸）

48-9（凹）

48-10（凸）

48-10（凹）

49-1

49-2

49-3

49-3（凹）

49-5

49-6

49-7

49-8

図版無

49-9（凸）

49-9（凹）

50-10（凸）

50-10（凹）

50-11（凸）

50-11（凹）

50-12（凸）

50-12（凹）

51-13（凸）

51-13（凹）

53-18（凸）

53-18（凹）

21-2次

21-2SD080黄茶色土出土瓦

54-1（凸）

54-1（凹）

21-2SD060

55-13

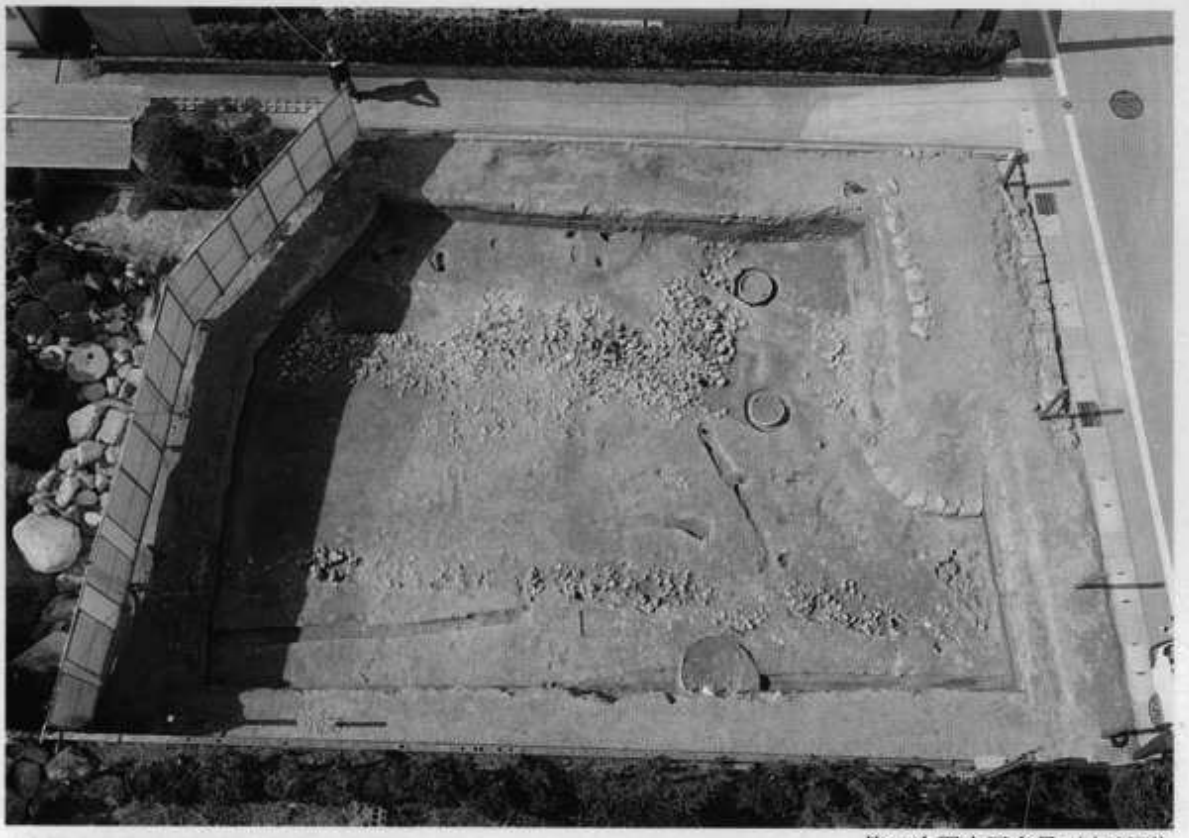
56-2

21-2SX055出土瓦

56-6

第22次調査地遠景（塔跡より南東を望む）

第22次調査地調査後遠景（北から）



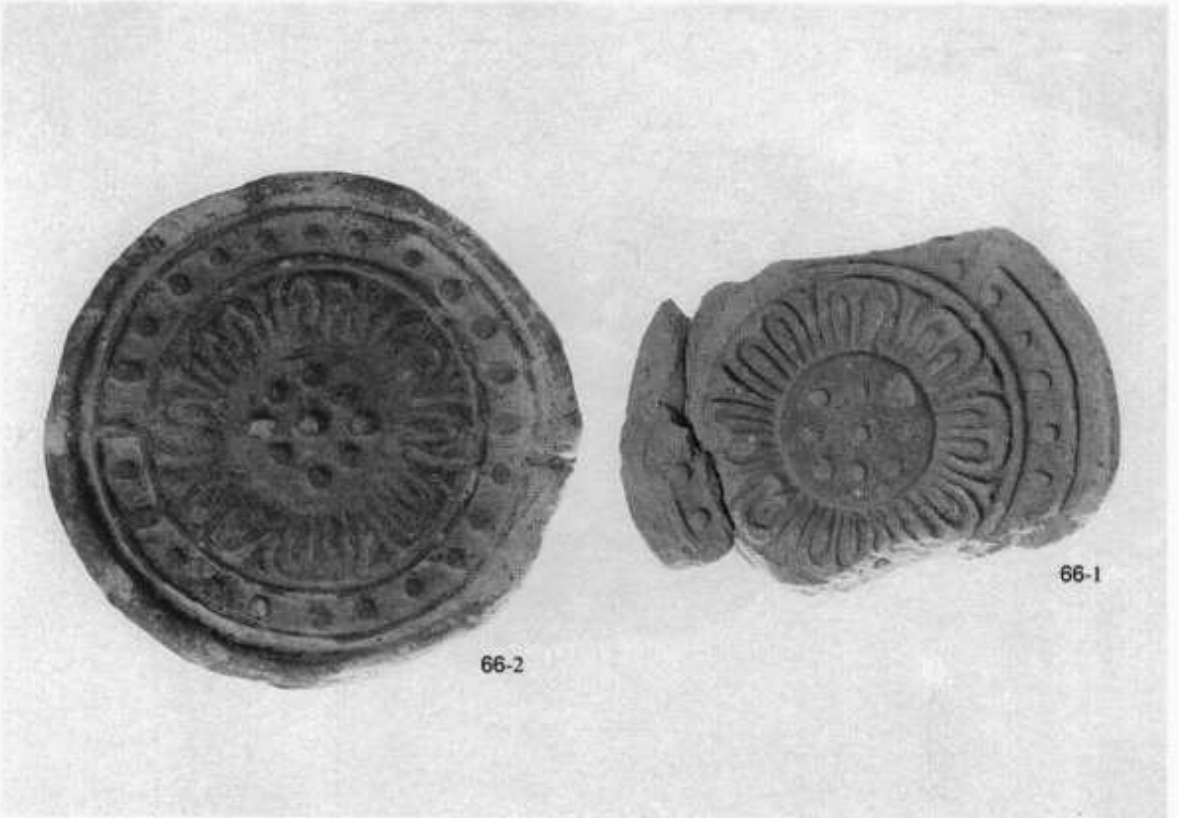
第22次調査区全景（上が西）

22SD004遺物出土状況（北西から）

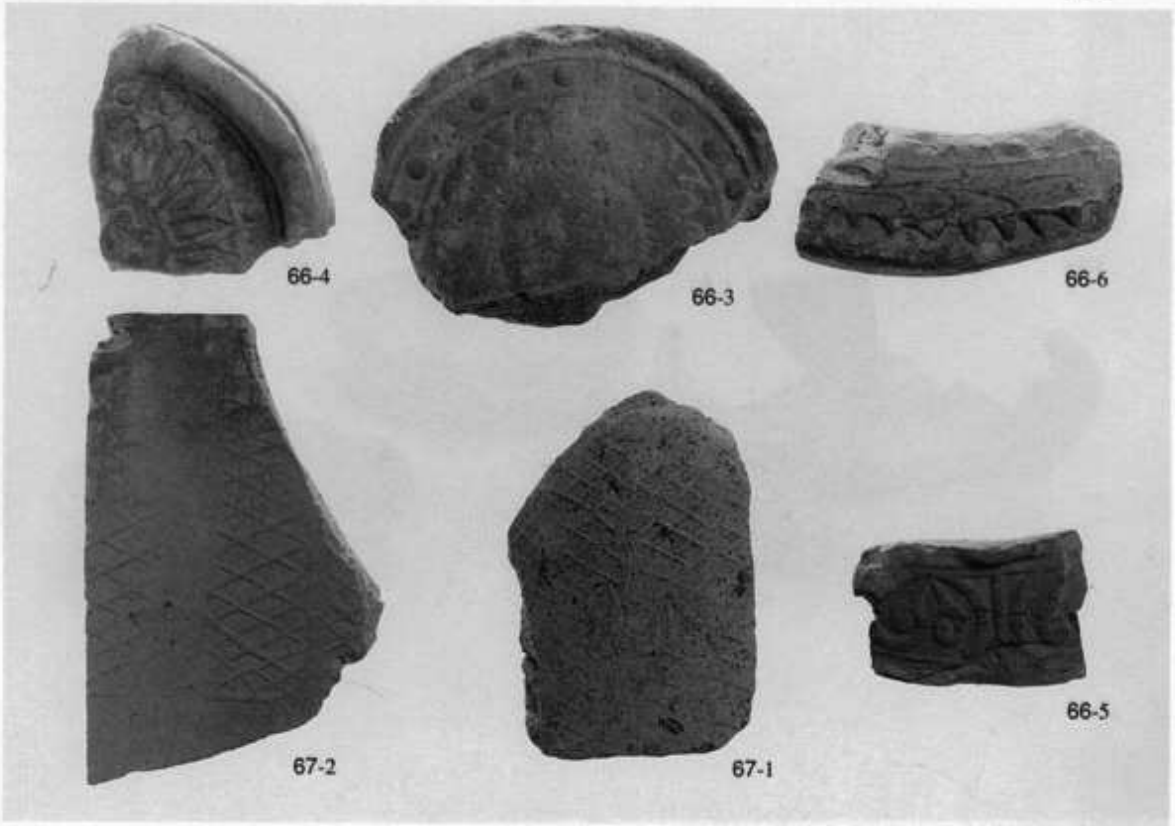
22SX005遺物出土状況（北から）

22SK017遺物出土状況（南から）

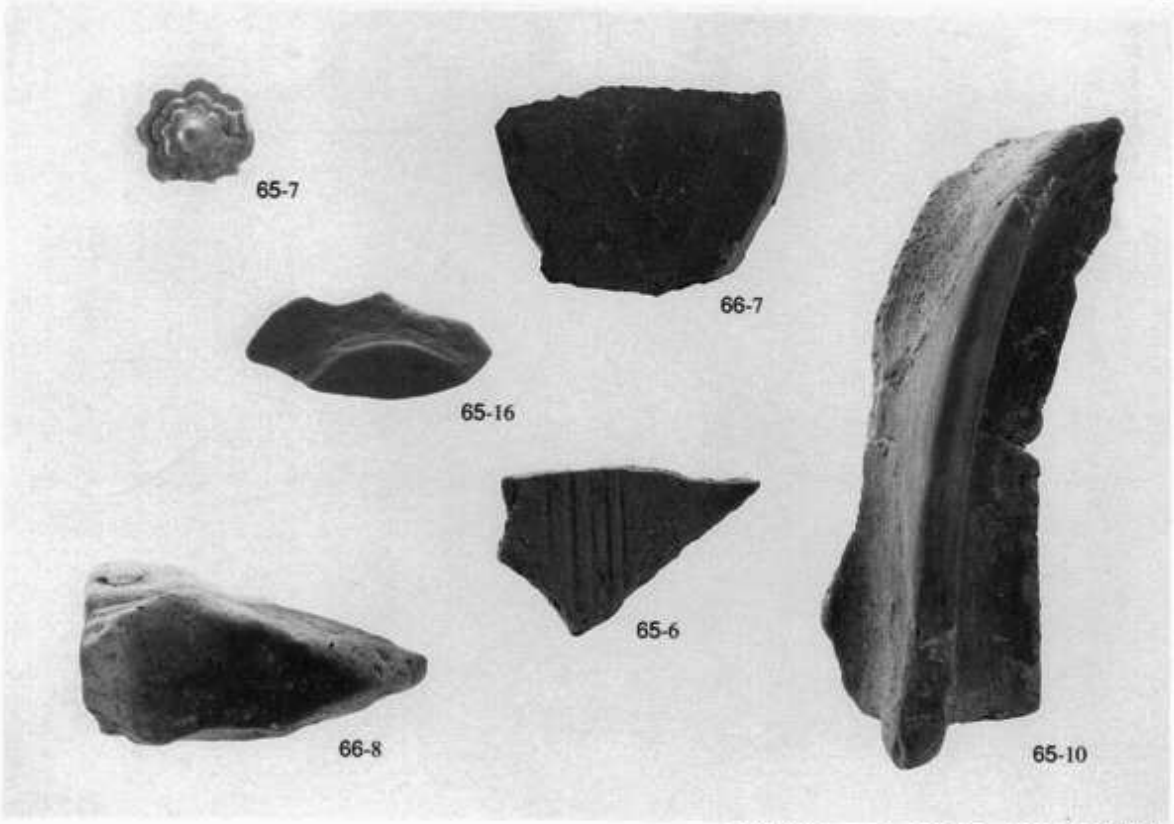
西壁土層観察（東から）



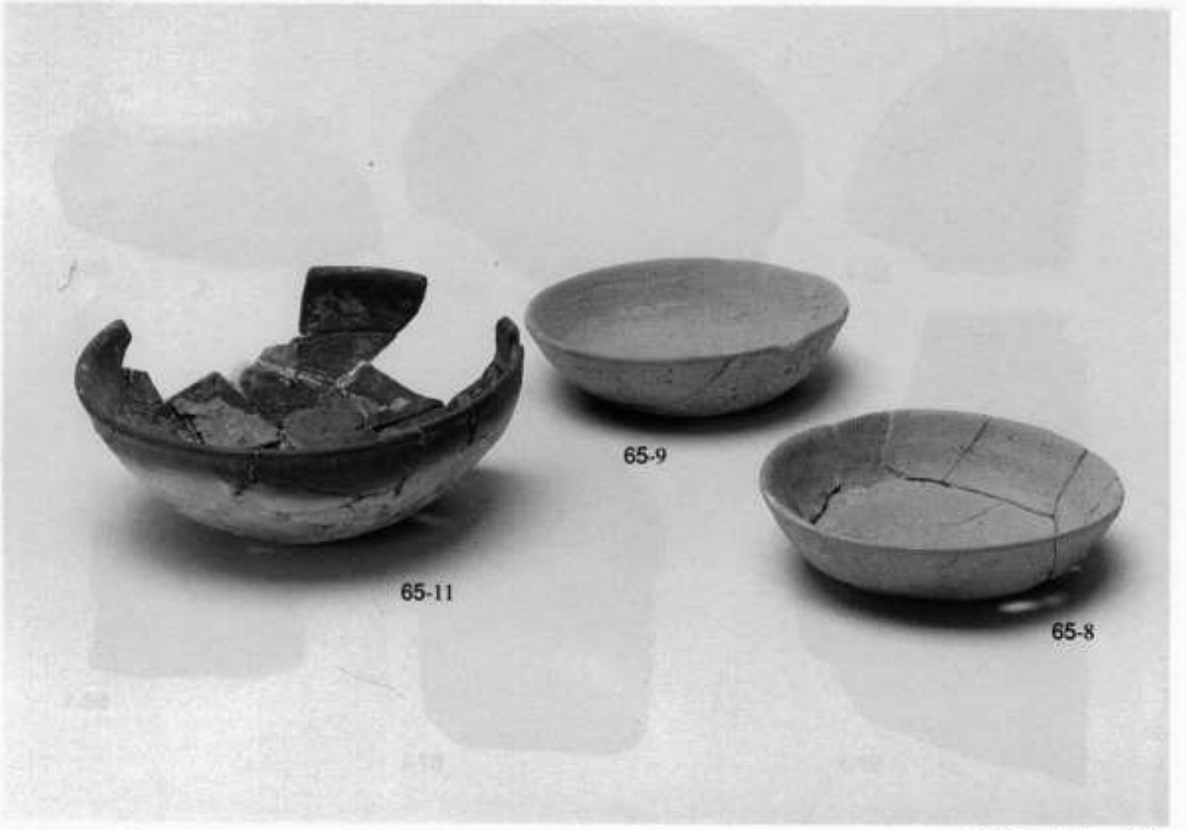
22SD003・004出土瓦



22SD002・003・004、SK017、SX005出土瓦



22SD003・004、SK017、SX005出土遺物



22SK017出土遺物

第23次調査地遠景（北西から）

調査区全景（I面）（上が北）

I面遺構完掘状況（西から）

I面遺構完掘状況（東から）

II面遺構完掘状況（上が北）

23SD015完掘状況（南から）

23次

南壁土層観察（北から）

23SD010

77-5（凸）

77-5（凹）

23SD010

74-14

23黄茶色土

76-11

76-12

23茶褐色土

78-4（表）

78-4（裏）

23暗灰茶色土

図版無（凸）

図版無（凹）

79-10（凸）

79-10（凹）

図版無（凸）

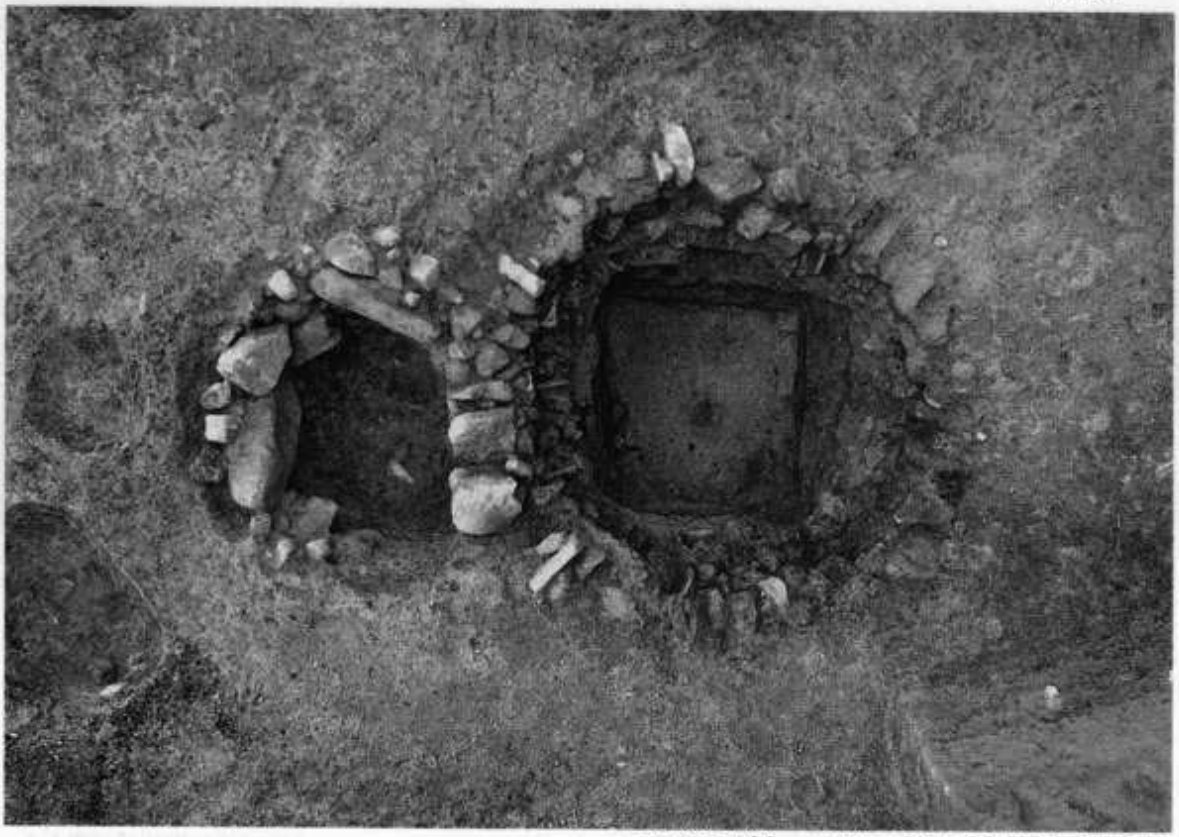
図版無（凹）

尼第14次調査地遠景（西から、中央上煙の出ている所が国分寺）

尼第14次調査地全景（上が南）

尼第14次調査区東半部上層遺構群（西から）

14SB010完掘状況（上が西）



14SE005（右）・SK015（左）完掘状況（上が南）

14SE005・SK015先後関係状況（北から）

14SE005完掘状況（西から）

第14次調査区西壁土層（東から）

第14次調査区東北部基盤検出状況（西から）

14SE005

85-4

85-6

85-5

88-1

14SK015

88-2

88-6

88-4

89-8a

88-5

89-8b

89-8c

89-8d

川第1次南調査区全景（上が東）

川1次

川第1次北調査区全景（上が南）

川1SE004

95-2

97-4

川1SE005暗茶色土

97-1

97-6

97-3

97-12

97-11

97-14a

97-8

97-14b

98-13

97-14c

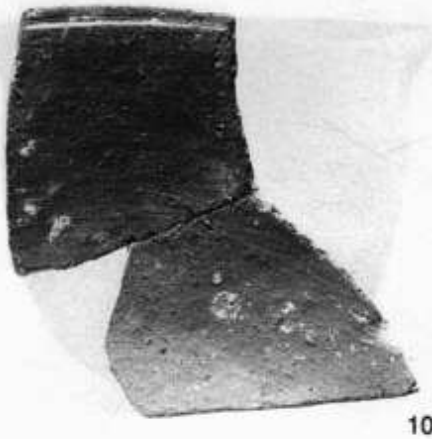
99-17

99-18

川1SE005黒茶色土

101-9

100-1



102-13

100-2

100-6

102-14

101-8

102-15

川1SE005黒色砂土

102-16

102-17a

102-17b

102-25

104-1

104-2

104-4

川1SE005茶灰色粘土

106-1

川1次

106-2a

106-6

106-2b

106-7（凸）

106-3

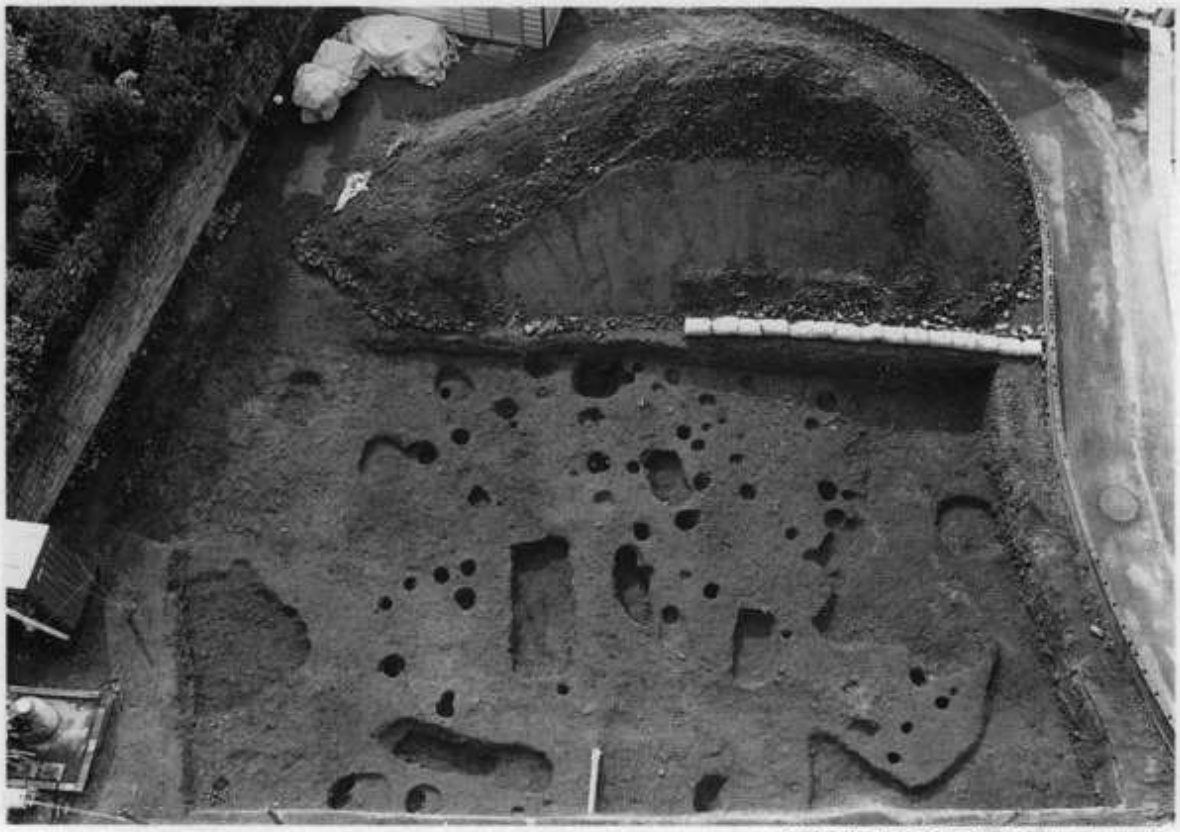
106-7（凹）

106-4

川1SE005茶褐色土

106-5

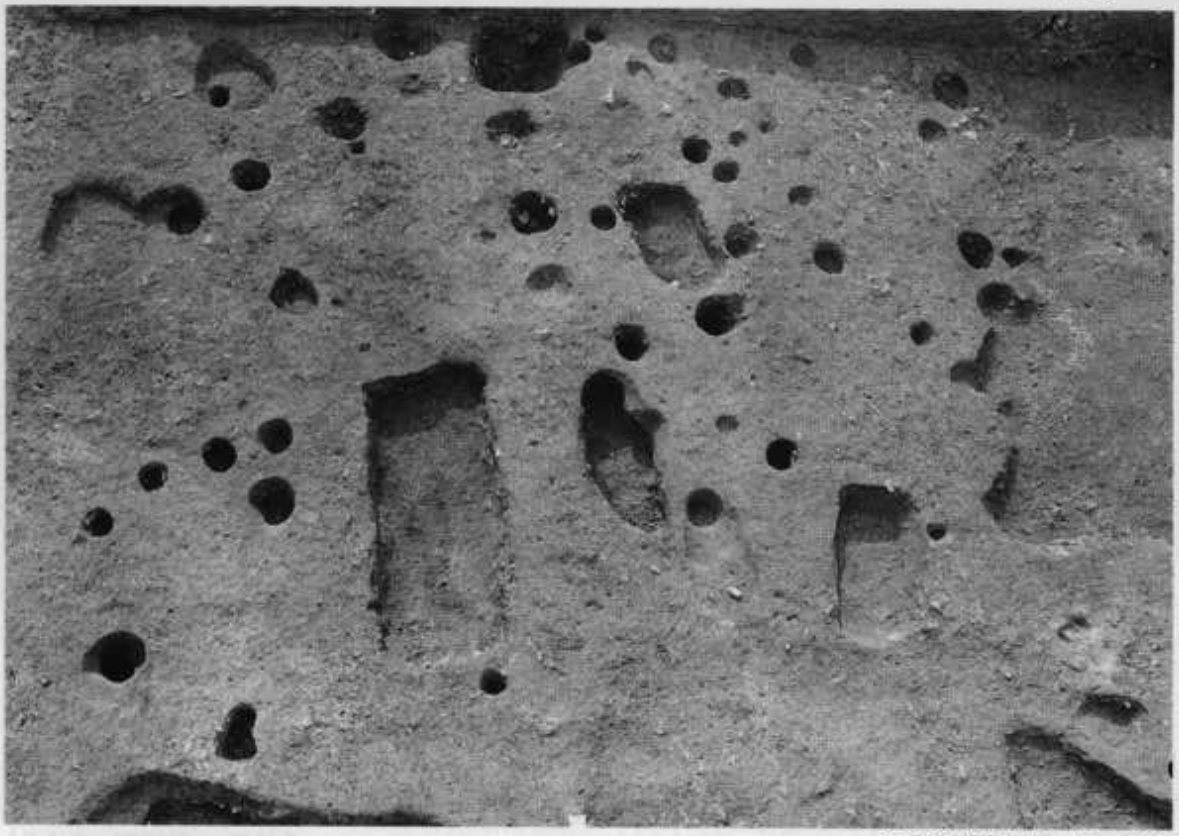
辻第２次調査対象区全景（上が南）



辻第2次調査区北半部全景（上が南）

2ST001土層観察（西から）

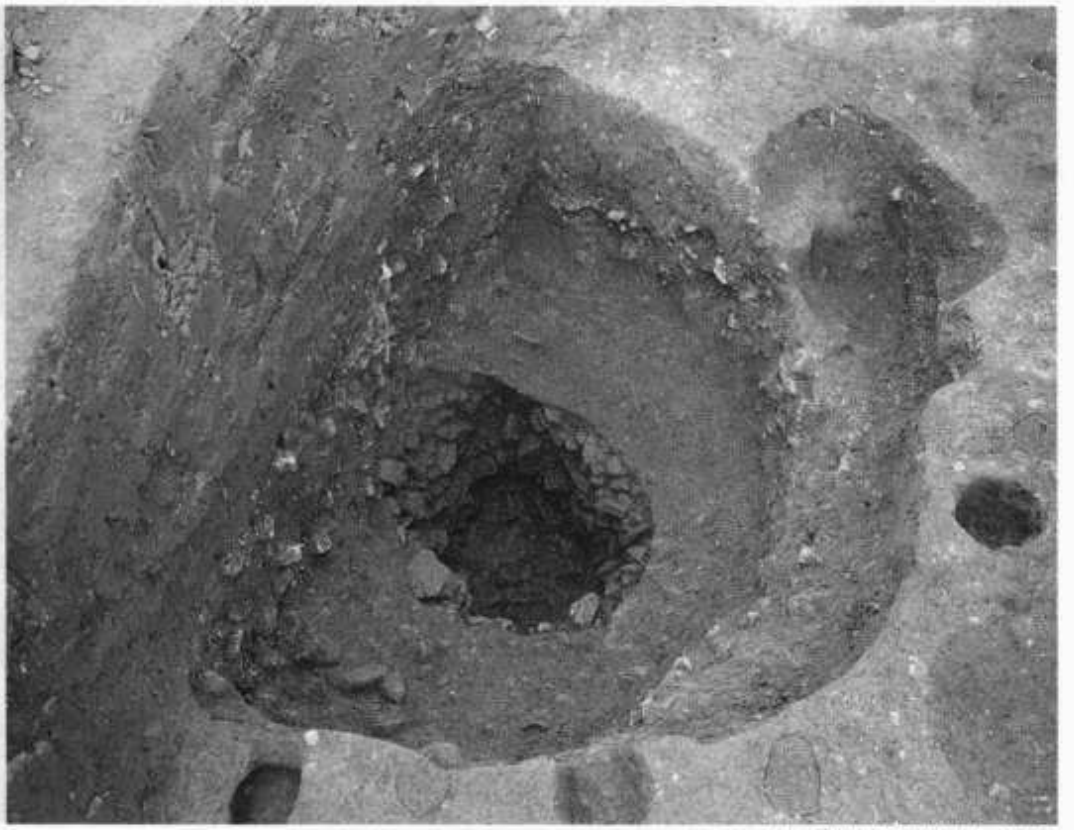
2ST001遺物出土状況（東から）



2SB005完掘状況（上が南）

辻第2次調査南半部全景（上が南）

2SD015土層観察（北から）



2SE010枠内礫検出状況（上が西）

辻2次

2SE010付帯遺構完掘状況（南から）

2SE010暗茶色土

118-11a

118-11b

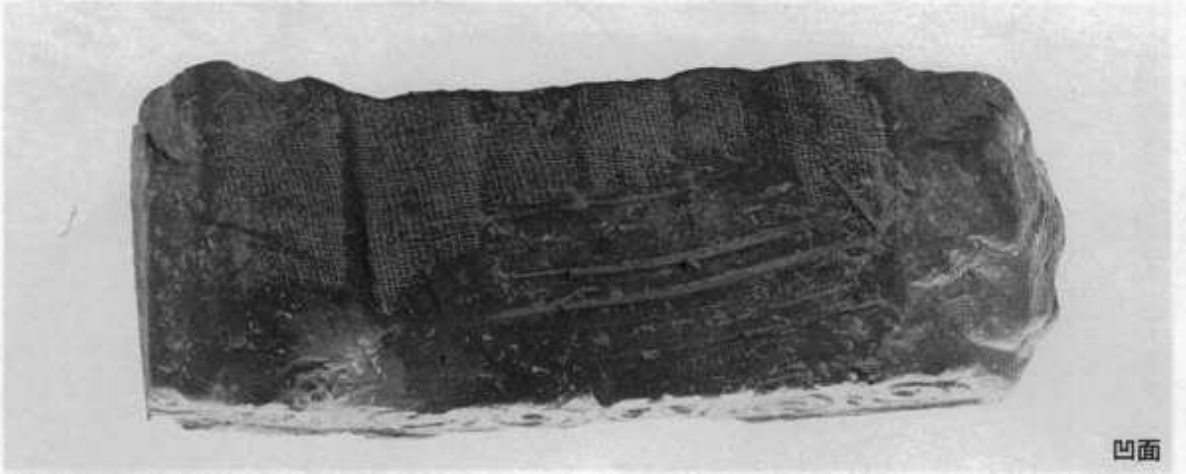
2SX058

120-20

120-21

17次

国分寺跡第17次調査表土出土軒平瓦



凹面

瓦当面

太宰府市の文化財　第40集
筑前国分寺跡　II

平成11（1999）年3月

編集　太宰府市教育委員会
発行　〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1
印刷　福岡印刷
〒810-0001 福岡市中央区天神3丁目4番3号

『筑前国分寺跡Ⅱ』付図

57,274940